



(財) 日本学校体育研究連合会

第58回全国学校体育研究大会

埼玉大会研究紀要

大会主題

『新学習指導要領を踏まえた体育・保健体育学習の具現化に向けて』

～生涯にわたって心身の健康を保持増進し、
豊かなスポーツライフを継続できる資質・能力を育成するために～



埼玉スタジアム2002(さいたま市)



蔵造りの町並み(川越市)



秩父夜祭(秩父市)



長瀬溪谷岩畳(長瀬町)

令和元年

10月31日(木)・11月1日(金)



(財)日本学校体育研究連合会

第58回全国学校体育研究大会埼玉大会

研究紀要

大会主題

「新学習指導要領を踏まえた体育・保健体育学習の具現化に向けて」

～生涯にわたって心身の健康を保持増進し、

豊かなスポーツライフを継続できる資質・能力を育成するために～



御 挨 拶

(公財) 日本学校体育研究連合会

会長 本 村 清 人

第58回全国学校体育研究大会埼玉大会を、ここ大宮ソニックシティ大ホールで全体会を、そして、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校合わせて12の学校で分科会を盛大に開催できますことをご参会の皆様方と共に喜びたいと存じます。

日本学校体育研究連合会（通称、学体連）は、お陰をもちまして、来年、設立70周年を迎えることができます。5月に記念式典と祝賀会を開催し、あわせて記念誌の発行を予定しております。関係各位のこれまでのご尽力に対し心からの敬意と感謝を申し上げます。昭和25(1950)年、前身の日本体育指導者連盟が財団法人として認可されて以来、改組・名称変更しつつ、現在の「公益財団法人日本学校体育研究連合会」として確かな歩みをしているところです。

公益目的事業として、①全国学校体育研究大会の開催・支援、②指導資料作成・配布、③実技指導者講習会の開催、④全国学校体育研究最優秀校・優良校・功労者の表彰、⑤広報等を大きな柱としております。その表彰事業に、一昨年度から「体育授業優秀教員」を位置付けました。学体連として3年越しの懸案でした。35歳以上45歳以下で、教職経験10年以上の現職教員を対象とし、優れた体育授業の実践並びに体育の授業研究を継続し、顕著な成果をあげている中堅教員を表彰することによって、我が国の学校体育研究・実践の一層の発展に寄与することを目的としております。

埼玉大会は大会主題を、「新学習指導要領を踏まえた体育・保健体育学習の具現化に向けて」～生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを継続できる資質・能力を育成するために～とし、さらには各学校種に応じた校種別主題を掲げています。新学習指導要領及び幼稚園教育要領の趣旨とこれまでの埼玉県における体育研究の成果と課題を踏まえ、「指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成」、「主体的・対話的で深い学びを目指した教材・教具、学習過程、学習形態の工夫」の2つを視点に授業研究を進めてこられた一端をご提案いただけることになっております。

さて、学習指導要領改訂公示に伴い、「育成を目指す資質・能力の三つの柱」、そのための授業改善の視点として「主体的・対話的で深い学び」、そして「カリキュラム・マネジメント」等が強調され、新たな授業づくりが効果的に進められているところです。その一方で、各教科等横並びの視点にとらわれすぎて教科固有の特性を見失ってはいないか。体育の教えるべき中心的内容・課題は「知識・技能」であり、運動欲求の充足、技術の習得・向上、結果としての体力向上にあるのではないか。作戦会議や映像の前に座して話し合っている時間が1単位時間の4割、実際に運動した時間は3割、移動や水飲みで2割、教師の指導時間はたったの1割。これが果たして今後推奨される体育の授業づくりか。学校体育の果たす役割は何か、改めて問わなければならないのではないのでしょうか。

埼玉大会を契機に新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくりの具現化に向けて一層の充実を図っていききたいと存じます。

終わりになりますが、文部科学省はもとより、共催である埼玉県教育委員会、さいたま市教育委員会、川口市教育委員会、主管である第58回全国学校体育研究大会埼玉大会実行委員会の皆様方に衷心よりお礼を申し上げます。



御 挨 拶

第58回全国学校体育研究大会
埼玉大会実行委員会

会長 品 川 秀 人

第58回全国学校体育研究大会埼玉大会を、全国からたくさんの学校体育研究に携わる皆様に御参会いただき、ここ埼玉県において開催できますことに厚くお礼を申し上げます。

埼玉県では、運動の特性や魅力に触れる楽しさや喜びを味わわせ、資質・能力をバランスよく育成することが重要であることから、「学習規律を確立させ、力いっぱい運動し、思いっきり汗をかく『楽しい』体育授業」を日々実践していくことで、運動好きな児童生徒の育成に取り組んできました。また、さいたま市においては「子どものための体力向上サポートプラン」に基づき、心と体を一体として捉え、児童生徒一人ひとりを伸ばす学習指導等の実践から、主体的に運動に取り組む児童生徒の育成に取り組んできたところです。

平成26年度に本大会の開催が決定されて以来、埼玉の子供たちが生き生きと活動する姿を全国の先生方に御覧いただきたいという思いで、大会に向けた準備を進めてまいりました。

御案内のとおり、幼稚園においては昨年度から新しい幼稚園教育要領が全面实施されました。他の校種においても、全面实施に向けた移行期間の中で新学習指導要領の改訂の趣旨や様々な改善点などの理解が求められているところです。

本大会では、新学習指導要領及び幼稚園教育要領の趣旨と、これまでの埼玉県における体育研究の成果と課題を踏まえ、大会主題を「新学習指導要領を踏まえた体育・保健体育学習の具現化に向けて」と設定し、副題を～生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを継続できる資質・能力を育成するために～と決めました。この主題のもと、「指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成」「主体的・対話的で深い学びを目指した指導の工夫」の2つを視点に研究を重ねてまいりました。

県内の幼稚園1園、小学校4校、中学校4校、高等学校2校、特別支援学校1校の計12校園で大会主題の具現化に向けた取組の成果を発表いたします。なお、中学校2校、高等学校1校、特別支援学校1校の4校においては、体育授業と併せて保健授業も発表いたします。

この2日間の大会を通して、御参会の皆様に埼玉県が取り組んできました「未来を拓く子供たちを育てる体育・保健体育学習の在り方」を御覧いただき、御意見や御指導を賜りますようお願いいたします。そして、その成果が、今後の全国の体育・保健体育授業の一助となるよう願っております。

最後になりましたが、本大会の開催に当たり、御指導・御支援を賜りましたスポーツ庁、公益財団法人日本学校体育研究連合会をはじめ、関係大学等の指導助言者の皆様、埼玉県教育委員会、さいたま市及び川口市教育委員会の皆様方に厚く御礼申し上げます。また、この度表彰を受けられます学校や指導者の皆様にも心よりお祝いと敬意を表し、挨拶とさせていただきます。

目 次

1	御 挨 拶	（公財）日本学校体育研究連合会会長 本 村 清 人	
2	御 挨 拶	埼玉大会実行委員会会長 品 川 秀 人	
3	開催要項		1
4	開会式次第		10
5	主催・共催団体関係		11
6	実行委員会役員等		12
7	分科会一覧		16
8	分科会の運営担当		17
9	基調報告		21
10	解 説		37
11	シンポジウム		41
12	特別講演		49
13	分科会研究発表資料		63
	（幼稚園）		
	第1分科会 埼玉大学教育学部附属幼稚園		65
	（小学校）		
	第2分科会 さいたま市立芝川小学校		79
	第3分科会 さいたま市立常盤小学校		91
	第4分科会 川口市立並木小学校		103
	第5分科会 埼玉大学教育学部附属小学校		115
	（中学校）		
	第6分科会 さいたま市立原山中学校		129
	第7分科会 さいたま市立与野西中学校		141
	第8分科会 川口市立南中学校		153
	第9分科会 埼玉大学教育学部附属中学校		165
	（高等学校）		
	第10分科会 埼玉県立大宮東高等学校		179
	第11分科会 埼玉県立上尾南高等学校		191
	（特別支援学校）		
	第12分科会 埼玉大学教育学部附属特別支援学校		205
14	分科会指導助言者紹介		217
15	広告協賛		229

第58回全国学校体育研究大会埼玉大会 開催要項

1 趣 旨

これからの時代を生きる子供たちにとって、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することは、明るく豊かで活力ある生活を営むために重要である。そのためには幼児期から、多様で適切な運動経験により運動の楽しさや喜びを味わい、学習したことを実生活、実社会において生かし、運動の習慣化につなげることが大切である。新学習指導要領では、指導内容を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の三つの柱で整理した。また、これらの指導内容を確実に身に付けるための授業改善の視点として「主体的・対話的で深い学びの実現」についても示している。幼稚園においては既に全面実施となり、他の校種においても、全面実施に向けた移行期間における体育・保健体育学習の提案やその共有が求められている。

そこで本大会では、新学習指導要領及び幼稚園教育要領の趣旨とこれまでの埼玉県における体育研究の成果と課題を踏まえ、大会主題を『新学習指導要領を踏まえた体育・保健体育学習の具現化に向けて』と設定した。

この主題のもと、埼玉県では、「指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成」「主体的・対話的で深い学びを目指した教材・教具、学習過程、学習形態の工夫」の2つを視点に授業研究を進めてきた。

本大会は、大会主題を踏まえ、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の12分科会で保育・授業を公開する。そして、各分科会において、主題に掲げる体育・保健体育学習の在り方について提案し、研究協議を行うものである。

2 大会主題

「新学習指導要領を踏まえた体育・保健体育学習の具現化に向けて」
～生涯にわたって心身の健康を保持増進し、
豊かなスポーツライフを継続できる資質・能力を育成するために～

3 主 催

スポーツ庁 公益財団法人日本学校体育研究連合会

4 共 催

埼玉県教育委員会 さいたま市教育委員会 川口市教育委員会

5 主 管

第58回全国学校体育研究大会埼玉大会実行委員会

6 期 日

令和元年10月31日（木）～11月1日（金）

7 会 場

(1) 全体会会場 (第1日) 大宮ソニックシティ 大ホール
さいたま市大宮区桜木町 1-7-5

(2) 分科会会場 (第2日) 埼玉県内12会場

<u>幼稚園</u>	第1分科会	埼玉大学教育学部附属幼稚園
<u>小学校</u>	第2分科会	さいたま市立芝川小学校
	第3分科会	さいたま市立常盤小学校
	第4分科会	川口市立並木小学校
	第5分科会	埼玉大学教育学部附属小学校
<u>中学校</u>	第6分科会	さいたま市立原山中学校
	第7分科会	さいたま市立与野西中学校
	第8分科会	川口市立南中学校
	第9分科会	埼玉大学教育学部附属中学校
<u>高等学校</u>	第10分科会	埼玉県立大宮東高等学校
	第11分科会	埼玉県立上尾南高等学校
<u>特別支援学校</u>	第12分科会	埼玉大学教育学部附属特別支援学校

8 参加対象

- (1) 全国の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校の教職員及び教育行政関係者
- (2) 社会体育等の指導者及び大学等の研究者
- (3) 一般参加者

9 内 容

(1) 全体会 (第1日)

ア 開 会 式

イ 表 彰 式

ウ 基調報告

エ 解 説

「新学習指導要領に基づく体育・保健体育学習の推進」

横嶋 剛 (スポーツ庁政策課教科調査官)

オ シンポジウム

「体育と保健を関連付けた体育・保健体育学習の推進」

コーディネーター 森 良一 (東海大学 教授)

シンポジスト 奥藺みどり (大阪市立銅座幼稚園 園長)

佐藤 泰弘 (越谷市立大沢北小学校 教頭)

前島 光 (横須賀市立追浜中学校 校長)

内海 久 (北海道教育庁学校教育局健康・体育課主査)

渡辺 敏明 (信州大学 准教授)

カ 特別講演

「木の上に立って見ましょう

～選手の自立を引き出すコーチング～」

講 師

阿久根 謙司 (東京ガスケミカル株式会社取締役常務執行役員)

(2) 分科会 (第2日)

ア 公開授業・公開保育

イ 研究発表・研究協議

ウ 指導講評

エ 閉 会 式

10 日 程

10月31日（木）全体会（大宮ソニックシティ 大ホール）

9:30	10:00	10:40	11:40	12:10	13:10	14:00	15:50	17:00
受付	開会式	表彰式	基調 報告	昼食	解説	シンポジウム	特別講演	

11月1日（金）分科会（各分科会会場園・学校）

第1分科会 【埼玉大学教育学部附属幼稚園】

8:30	9:00		11:20		12:30		14:30
受付	公開保育			昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式

第2分科会 【さいたま市立芝川小学校】

8:45	9:15	10:00	10:15	11:00	11:15	12:00	13:00		15:00
受付	公開 授業①	休憩	公開 授業②	休憩	公開 授業③	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式

第3分科会 【さいたま市立常盤小学校】

9:00	9:25	10:10	10:20	11:05	11:15	12:00	13:00		15:00
受付	公開 授業①	休憩	公開 授業②	休憩	公開 授業③	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式

第4分科会 【川口市立並木小学校】

9:00	9:25	10:10	10:20	11:05	11:15	12:00	13:00		15:00
受付	公開 授業①	休憩	公開 授業②	休憩	公開 授業③	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式

第5分科会 【埼玉大学教育学部附属小学校】

9:00	9:45	10:30	10:50	11:35	13:00		15:00
受付	公開 授業①②	休憩	公開 授業③	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式

第6分科会 【さいたま市立原山中学校】

9:00 9:40 10:30 10:50 11:40 13:00 15:00

受付	公開 授業①	休憩	公開 授業②	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
----	-----------	----	-----------	----	-----	----------------------	-----

第7分科会 【さいたま市立与野西中学校】

9:15 10:00 10:50 11:00 11:50 13:00 15:00

受付	公開 授業①	休憩	公開 授業②	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
----	-----------	----	-----------	----	-----	----------------------	-----

第8分科会 【川口市立南中学校】

8:50 9:40 10:30 10:45 11:35 13:00 15:00

受付	公開 授業①②	休憩	公開 授業③	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
----	------------	----	-----------	----	-----	----------------------	-----

第9分科会 【埼玉大学教育学部附属中学校】

9:00 9:40 10:30 10:50 11:40 13:00 15:00

受付	公開 授業①	休憩	公開 授業②	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
----	-----------	----	-----------	----	-----	----------------------	-----

第10分科会 【埼玉県立大宮東高等学校】

9:00 9:50 10:40 10:50 11:40 13:00 15:00

受付	公開 授業①	休憩	公開 授業②	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
----	-----------	----	-----------	----	-----	----------------------	-----

第11分科会 【埼玉県立上尾南高等学校】

9:00 10:00 10:50 11:05 11:55 13:00 15:00

受付	公開 授業①	休憩	公開 授業②	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
----	-----------	----	-----------	----	-----	----------------------	-----

第12分科会 【埼玉大学教育学部附属特別支援学校】

9:00 9:40 10:20 10:30 11:10 11:20 12:00 13:00 15:00

受付	公開 授業①	休憩	公開 授業②	休憩	公開 授業③	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
----	-----------	----	-----------	----	-----------	----	-----	----------------------	-----

11 参加費 5,000円

12 参加申込み・宿泊手続き

(1) 電子申込み（8月16日接続開始予定）

「学体連HP」の「全国大会（埼玉）参加申込」アイコンから入力する。

- ① 「学体連HP」の検索は「ガクタイレン」で。（<http://www.gakutairen.jp/>）
- ② 申込み取扱業者HP（指定代理店：東武トップツアーズ）にリンクします。
- ③ 運営全体の効率化のため、できる限り、各都道府県事務局や学校単位で参加者を取りまとめてお申し込みください。

(2) 紙面等による申込み

FAX 申込先 「東武トップツアーズさいたま支店」全国学校体育研究大会係

FAX 048-642-3680 TEL 048-640-1009（緊急連絡に限る）

(3) 申込み締切

令和元年9月13日（金）

※大会当日は、全体会も分科会も「ネームプレート」の提示がないと入場できません。

※おすすめ：大会参加申込みは「指定代理店経由」が便利です。

（本大会は指定代理店方大会運営に協力を得ています）

- 当日の参加手続きは、受付窓口要員が少ないため、かなりの時間を要します。
- 宿泊予約や分科会申込み、昼食弁当の分科会会場配達の予約、領収書の受け取りが円滑に行えます。
- 研究紀要や公開授業指導案、研究参考資料、表彰者名簿等の受け取りも一括して円滑に行えます。

13 問合せ先 埼玉大会実行委員会事務局（埼玉県教育局県立学校部保健体育課）

〒330-9301 埼玉県さいたま市浦和区高砂3-15-1

TEL048-830-6929 FAX048-830-4971

公益財団法人 日本学校体育研究連合会

TEL03-3465-3954 FAX03-3465-7464

e-mail gakutairen@msb.biglobe.ne.jp

14 その他

(1) 全体会場及び各分科会場には駐車場は御用意できないので、公共交通機関を御利用ください。

(2) 公益財団法人日本学校体育研究連合会評議員会は、10月30日（水）13時30分から「ベルヴィ武蔵野」で実施されます。

(3) 第58回全国学校体育研究大会埼玉大会レセプションは、10月30日（水）17時30分から「ベルヴィ武蔵野」で実施されます。

（〒333-0857 川口市小谷場38 TEL048-265-1165

JR南浦和駅東口より徒歩10分。JR南浦和駅東口より無料シャトルバスあり。）

各会場案内

全体会

大宮ソニックシティ JR大宮駅西口下車、徒歩3分



分科会

第2分科会：さいたま市立芝川小学校 ※無料送迎バスあり

JR大宮駅東口(3番乗り場)より東武バス 天沼循環 に乗車
「観音前」バス停下車徒歩5分



分科会

第4分科会：川口市立並木小学校 JR西川口駅下車 徒歩10分

第8分科会：川口市立南中学校 JR川口駅東口(17番乗り場)より
国際興業バス「荒川大橋」下車徒歩5分
(JR川口駅下車徒歩20分)



第10分科会：埼玉県立大宮東高等学校 ※無料送迎バスあり

JR北浦和駅より東武バス 宮下 行 または 岩槻駅 行に乗車
「宮下」バス停下車徒歩10分(東武野田線七里駅下車徒歩30分)



分科会

第11分科会：埼玉県立上尾南高等学校 ※無料送迎バスあり

JR大宮駅西口(8番乗り場)より東武バスに乗車
「運輸支局前」バス停下車徒歩22分



第12分科会：埼玉大学教育学部附属特別支援学校

JR日進駅下車徒歩12分



開会式次第

1 開会の言葉

埼玉大会実行委員会副会長

山下 誠二

2 国歌斉唱

3 開会挨拶

埼玉大会実行委員会会長

品川 秀人

4 主催者挨拶

スポーツ庁審議官

藤江 陽子

公益財団法人日本学校体育研究連合会会長

本村 清人

5 来賓祝辞

埼玉県知事

大野 元裕

6 歓迎の言葉

埼玉県教育委員会教育長

小松 弥生

7 次期開催県挨拶

第59回全国学校体育研究大会福井大会

推進委員会会長

木本 健

8 閉会の言葉

埼玉大会実行委員会副会長

関 克則

主催・共催・後援

スポーツ庁

スポーツ庁長官	鈴木 大地
スポーツ庁次長	瀧本 寛
スポーツ庁審議官	藤江 陽子
スポーツ庁スポーツ総括官	齋藤 福栄
スポーツ庁政策課長	茂里 毅
スポーツ庁政策課学校体育室長	伊藤 賢
スポーツ庁政策課教科調査官	塩見 英樹
スポーツ庁政策課教科調査官	関 伸夫
スポーツ庁政策課教科調査官	横嶋 剛

公益財団法人日本学校体育研究連合会

会 長	本村 清人	副会長	池田 延行
副会長	友添 秀則		
理事長	岡出 美則		
理事・事務局長	菅原 健次	理 事	村上みな子
理 事	細越 淳二	理 事	近藤 智靖
理 事	吉原 昌子	理 事	古家 眞
監 事	奈尾 力	監 事	関 毅彦
参 与	加藤 正克	参 与	田中美智子
参 与	手打 和明	参 与	古川 浩洋
参 与	吉永 武史	参 与	深見英一郎
参 与	吉野 聡	参 与	杉本眞智子
事務局次長	石塚 吉之		
事務局主任	山崎壽美子	事務局員	三木さとみ

開催県・市教育委員会

埼玉県教育委員会教育長	小松 弥生
さいたま市教育委員会教育長	細田眞由美
川口市教育委員会教育長	茂呂 修平

埼玉大会実行委員会

顧問	小松 弥生	埼玉県教育委員会教育長
	細田眞由美	さいたま市教育委員会教育長
参与	茂呂 修平	川口市教育委員会教育長
	久保島康正	埼玉県国公立幼稚園・こども園長会 会長 (副会長兼任)
	山田 晋治	埼玉県公立小学校校長会 会長
	並木 昌和	さいたま市立小学校長会 会長
	小林 晃	埼玉県中学校長会 会長
	大谷 慎也	さいたま市中学校長会 会長
	小島 克也	埼玉県高等学校長協会 会長 (副会長兼任)
	佐野 貴仁	埼玉県特別支援学校長会 会長
会長	品川 秀人	埼玉県立ふじみ野高等学校 校長
副会長	久保島康正	神川町立神川幼稚園 園長
	関 克則	蕨市立南小学校 校長
	石川 信和	さいたま市立桜木小学校 校長
	山下 誠二	さいたま市立常盤中学校 校長
	高橋 利明	新座市立新座中学校 校長
	桑原 智子	埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園 校長
	小島 克也	埼玉県立浦和高等学校 校長
	福島 正男	鴻巣市立鴻巣東小学校 校長
	文屋 芳浩	川越市立福原中学校 校長
監事		
会場校	飯泉 健司	埼玉大学教育学部附属幼稚園 園長
	佐藤 利春	さいたま市立芝川小学校 校長
	宮原 孝	さいたま市立常盤小学校 校長
	佐野 隆之	川口市立並木小学校 校長
	川端 博子	埼玉大学教育学部附属小学校 校長
	森角由希子	さいたま市立原山中学校 校長
	松井 秀史	さいたま市立与野西中学校 校長
	戸谷 弘幸	川口市立南中学校 校長
	道工 勇	埼玉大学教育学部附属中学校 校長
	加賀谷貴彦	埼玉県立大宮東高等学校 校長
	橋本 淳	埼玉県立上尾南高等学校 校長
	戸部 秀之	埼玉大学教育学部附属特別支援学校 校長

【総務部】

部長	荻原 篤大	埼玉県学校体育協会 理事長
	笹木 祐子	滑川町立滑川幼稚園 園長
	河野 裕一	埼玉大学教育学部附属小学校 副校長
	根本 和彦	埼玉県中学校体育連盟 理事長
	大迫 朋子	埼玉県立熊谷商業高等学校 教諭
	伏見 千春	埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園 教諭

【編集部】

部長	野口 修男	戸田市立笹目東小学校 主幹教諭
	坂巻 宏幸	上尾市立東小学校 教諭
	首藤祐太郎	埼玉大学教育学部附属小学校 教諭
	岩崎真之介	さいたま市立指扇北小学校 教諭
	小宮 一敏	さいたま市立与野八幡小学校 教諭
	井原亜季子	さいたま市立上木崎小学校 教諭
	長谷部佑太	さいたま市立沼影小学校 教諭
	西川 裕真	さいたま市立大宮北小学校 教諭
	山本 秀	さいたま市立仲町小学校 教諭
	遠藤 雄也	蕨市立中央東小学校 教諭
	蛭原 康平	朝霞市立朝霞第三小学校 教諭
	佐佐木達哉	志木市立宗岡小学校 教諭

【式典部】

部長	三浦 史生	新座市立第四中学校 教諭
	石随 佳明	さいたま市立大宮北中学校 教諭
	米倉 孝輔	川口市立南中学校 教諭
	大野 優	上尾市立西中学校 教諭
	上原 育子	さいたま市立宮原中学校 教諭
	山田 将来	上尾市立上平中学校 教諭
	中平 晃成	新座市立新座中学校 教諭
	屋代 邦彦	川越市立初雁中学校 教諭
	大貫 雅幸	本庄市立本庄南中学校 教諭
	下村 武	川越市立寺尾中学校 教諭
	持田 智史	熊谷市立大里中学校 教諭
	山下 智矢	越谷市立富士中学校 教諭

【事業部】

部長

岩田 晃広	埼玉県立深谷はばたき特別支援学校	教諭
佐枝久美子	埼玉県立春日部女子高等学校	教諭
藤間真美子	埼玉県立熊谷西高等学校	教諭
益子 倫行	埼玉県立久喜高等学校	教諭
大屋 将人	埼玉県立新座高等学校	教諭
豊田喜美子	埼玉県立杉戸高等学校	教諭
梅田 直希	埼玉県立飯能高等学校	教諭
高山 智裕	埼玉県立皆野高等学校	教諭
石川 貴子	埼玉県立与野高等学校	教諭
廣瀬 道代	埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園	教諭
野地 貴史	埼玉県立上尾特別支援学校	教諭
中村 亮太	埼玉県立三郷特別支援学校	教諭

【研究部】

部長

森田 哲史	埼玉大学教育学部附属小学校	教諭
清水 愛子	埼玉大学教育学部附属幼稚園	副園長
長谷川百合矢	さいたま市立常盤中学校	教諭
志村 里美	埼玉県立熊谷女子高等学校	教諭
田上 智明	埼玉大学教育学部附属特別支援学校	教諭
吉岡 正憲	さいたま市立芝川小学校	教諭
大澤 諭	さいたま市立常盤小学校	教諭
諏訪 真宣	川口市立並木小学校	教諭
千葉 啓太	さいたま市立大谷場中学校	教諭
加藤 梨紗	さいたま市立大原中学校	教諭
佐野 秀行	川口市立北中学校	教諭
若林 暢子	草加市立川柳中学校	教諭
飯野幸一朗	埼玉県立大宮東高等学校	教諭
戸井田 健	埼玉県立上尾南高等学校	教諭

【分科会部】

小谷 宜路	埼玉大学教育学部附属幼稚園	教諭
神保 敏久	さいたま市立芝川小学校	教諭
小坂 浩士	さいたま市立常盤小学校	教諭
江口 竜太	川口市立原町小学校	教諭
浅間 聖也	埼玉大学教育学部附属小学校	教諭
小椋 恵	さいたま市立原山中学校	教諭

小番 康平	さいたま市立与野西中学校	教諭
猿橋 一代	川口市立南中学校	教諭
小澤 幸康	埼玉大学教育学部附属中学校	教諭
福田 光弘	埼玉県立大宮東高等学校	教諭
永田 真也	埼玉県立上尾南高等学校	教諭
柳澤 真美	埼玉大学教育学部附属特別支援学校	教諭

【事務局】

事務局長	伊藤 治也	埼玉県教育局県立学校部保健体育課	課長
事務局次長	駒崎 弘匡	埼玉県教育局県立学校部保健体育課	
			主席指導主事
	山田 恵	埼玉県教育局県立学校部保健体育課	副課長
事務局員	齋藤 明博	埼玉県教育局県立学校部保健体育課	
			主幹兼主任指導主事
	藤井 邦之	埼玉県教育局県立学校部保健体育課	指導主事
	金杉 博美	埼玉県教育局県立学校部保健体育課	指導主事
	伊藤 隆行	埼玉県教育局県立学校部保健体育課	指導主事
	小川 哲	埼玉県教育局県立学校部保健体育課	指導主事
	薬師寺將二	埼玉県教育局県立学校部保健体育課	指導主事
	天野 祐太	埼玉県教育局県立学校部保健体育課	主査
	柳田 勇	埼玉県教育局南部教育事務所	指導主事
	葛西 耕輔	さいたま市教育委員会学校教育部指導1課	
			主任指導主事
	黒岩 保宏	さいたま市教育委員会学校教育部指導1課	
			指導主事
	石田 智久	川口市教育局学校教育部指導課	指導主事
	猿橋 武司	川口市教育局学校教育部指導課	指導主事

【分科会一覧】

分科会	会場校園	公開①			公開②			公開③			指導助言者	
		領域（内容）	学年	授業者	領域（内容）	学年	授業者	領域（内容）	学年	授業者	体育（分野）	保健（分野）
幼稚園	埼玉大学 教育学部 附属幼稚園	体つくりの運動遊び （多様な動きを つくる運動遊び）	2年	荒巻 洸典	ゲーム （ネット型ゲーム）	3年	神保 敏久	陸上運動 （投の運動）	6年	吉岡 正憲	埼玉県立総合教育センター 指導主事 山本 三環	
			2年	関根 千明	ゲーム （たからはこびおに）	4年	柳橋 一希	ボール運動 （フライング フットボール）	6年	大澤 諭		
小学校	さいたま市立 芝川小学校	体つくりの運動遊び （多様な動きを つくる運動遊び）	2年	荒巻 洸典	ゲーム （ネット型ゲーム）	3年	神保 敏久	陸上運動 （投の運動）	6年	吉岡 正憲	国士舘大学 教授 細越 淳二	
	さいたま市立 常盤小学校	ゲーム （たからはこびおに）	2年	関根 千明	ゲーム （フライング フットボール）	4年	柳橋 一希	ボール運動 （フライング フットボール）	6年	大澤 諭	東京学芸大学 教授 鈴木 聡	
	川口市立 並木小学校	器械運動 （マット運動）	3年	竹中 陽子	ゲーム （鬼遊び）	1年	富澤 雅敏	器械運動 （跳び箱運動）	6年	渡邊 武士	筑波大学 准教授 三田部 勇	
中学校	埼玉大学 教育学部 附属小学校	ゲーム （鬼遊び）	2年	首藤祐太郎	陸上運動 （走り幅跳び）	5年	浅間 聖也	ゲーム （ハンドボール）	4年	首藤祐太郎	信州大学 教授 岩田 靖	
	さいたま市立 原山中学校	保健 （応急手当）	2年	島田 雄太	球技 （バスケットボール）	3年	小原 恵				茨城大学 教授 岩野 聡	さいたま市立 大宮南中学校 校長 坂田 真澄
高等学校	さいたま市立 与野西中学校	球技 （バドミントン）	3年	小番 康平	陸上競技 （混成競技）	2年	朝倉 李江				岩手県二戸市立金田一中学校 校長 十田 幸喜	
	川口市立 南中学校	器械運動 （マット運動）	3年	勝田 寛子	保健 （がんの予防）	2年	國分 智博	ダンス （創作ダンス）	3年	猿橋 一代	埼玉大学 教授 細川江利子	春日部市立川辺小学校 校長 鈴木 美江
	埼玉大学 教育学部 附属中学校	武道 （柔道）	1年	小澤 幸康	球技 （バレーボール）	2年	内田 敦子				鹿児島大学 講師 呉権 幸朝	
特別支援学校	埼玉県立 大宮東高等学校	球技 （バスケットボール）	2年	中島 孝男	体育理論 （スポーツの文化的特性や 現代のスポーツの発展）	2年	斎藤 優気				宮崎県教育委員会スポーツ振興課 課長 萩尾 英司	
	埼玉県立 上尾南高等学校	保健 （健康を支える 環境づくり）	2年	戸井田 健	球技 （ハンドボール）	2年	永田 真也				秋田市立広面小学校 校長 星野 和貴	埼玉県立大学 教授 高橋 宏至
特別支援学校	埼玉大学 教育学部 附属特別支援学校	体つくり運動 表現運動 （リズムうんどう）	小学部	仙石大吾 他	保健 （運動の大切さを 考えよう）	高等部	佐藤容亮 関根真博 安藤剛史 他	球技 （タグラグビー）	中学部	木皿優 他	東海大学 教授 内田 匡輔	

【分科会の運営担当】

係	埼玉大学教育学部 附属幼稚園	さいたま市立 芝川小学校	さいたま市立 常盤小学校	川口市立 並木小学校
分科会会長	飯泉 健司	佐藤 利春	宮原 孝	佐野 隆之
運営委員長	清水 愛子	小松 伸弘	中野 緑	高橋 義樹
会場責任者	小谷 宜路	神保 敏久	小坂 浩士	江口 竜太 谷平 祐介
研究発表者	小谷 宜路	吉岡 正憲	大澤 諭	諏訪 真宣
研究推進委員	清水 愛子	吉岡 正憲	大澤 諭	諏訪 真宣
授業者	平柳 舞 高瀬 ますみ 小谷 宜路	荒巻 洸典 神保 敏久 吉岡 正憲	関根 千明 柳橋 一希 大澤 諭	富澤 雅敏 竹中 陽子 渡邊 武士
司会・進行	小川 哲	後藤 正憲	葛西 耕輔	大野 拓也 石田 智久
記録係	小宮 豊隆 五月女 雅行	藤井 諒紀 遠藤晋一郎 澤野 直人 千葉 大樹	棟方 幸夫 鈴木 瑞央 須田 恵子	倉光 大 森岡 翔平
受付・弁当係	稲葉 紀子 三和 のぞみ	会田 理紗 本郷 慧 萩澤 竜之 桐越 謙志朗 長沢 恭太 大草 遼介 宮崎 大樹 中丸 裕人 諸岡 幸太郎	吉富 怜 大橋 和茂 井原 亜季子 清世 翼 島崎 優希 伊藤 雄一郎 永原 陵司 山本 秀 松下 和美 水落 健太	西原 拓 山内 智皓 川上 暁久 川城 一平 舟戸 希公郎 星野 航希 吉田 裕太郎 岩崎 潤 新道 正人
授業・分科会補助 (受付係兼務)	簗輪 進司 鈴木 秀太郎	難波 巧 大熊 祐貴		伊達 匠 永田 拓輝
接待係	野上 芽理	徳永 恵子 西片 隆晴 中村 香奈 本校PTA(5名)	前島 浩美 本校PTA(12名)	高田 マリ 小泉 恵 藤木 隆介 神山 友紀 柳下 岬 安田 道桜 弓削 武蔵 真中 壮太 石島 将也
救護係	小澤 真希	横山 久枝	浜田 香里	小池 菜月 高見 勇太 中村 祐太
荷物係	笹木 祐子 野澤 弘光	白川 優人 林田 仁志 田代 健一	新井 通高 武井 健二 中村 拓也 高木 裕文 鈴木 祥太 北原 碧 押田 晃利 田中 佑典	阿部 樹 久保田 寛士
誘導係	岡部 玲子 北原 理香	木戸 龍太 川津 匡史 橋本 貴大 小渡 圭一郎 辻本 成弥 石崎 皓大 山田 将揮 柴田 亮 山本 洋章 増山 剛志 緒方 義仁 本校PTA(5名)	菅 真也 郡司 祐輔 青木 傑 山本 祐大 栗和田 敏男 土屋 英彰 山本 優里 小泉 佑太 井上 勝 千々和 龍之介 小林 克吉 関口 文樹	高橋 淳 古川 二郎 落合 由之紀 高橋 純 佐藤 稔彦 五十嵐 琢朗 佐藤 文永 金山 邦明

係	埼玉大学教育学部 附属小学校	さいたま市立 原山中学校	さいたま市立 与野西中学校	川口市立 南中学校
分科会会長	川端 博子	森角 由希子	松井 秀史	戸谷 弘幸
運営委員長	河野 裕一	原島 茂雄	生田 淳子	片倉 有紀
会場責任者	森田 哲史	千葉 啓太	小番 康平	猿橋 一代
研究発表者	森田 哲史	山崎 匠	小番 康平	米倉 孝輔
研究推進委員	森田 哲史	小椋 恵	加藤 梨紗	佐野 秀行
授業者	首藤 祐太郎 浅間 聖也	島田 雄太 小椋 恵	小番 康平 朝倉 李江 白石 剣 町田 博美	猿橋 一代 勝田 寛子 國分 智博
司会・進行	藤井 邦之	黒岩 保宏	沼 良	柳田 勇 猿橋 武司
記録係	山内 裕貴 岡本 有加 川原 拓郎 石田 裕之	佐藤 拓哉 森尻 悠太	田熊 秀行 松井 啓祐	村上 淳哉 水谷 啓人
受付・弁当係	三宅 穰世 廣戸 理伸 松川 奈美子 平川 真利江 長嶺 成泰 齊藤 勇海 星 佳佑 大久保 雄樹 加藤 大博 永島 桃子 片桐 友作 榮 将太郎 神田 実 高岡 宏文	小島かおり 志村 萌々 川浪 夢姫 佐藤 香織 齊藤 遥香	小原 浩美 堀 風子 岡本 千草 坂田 朱音	半村 俊勝 妹尾 真
授業・分科会補助 (受付係兼務)	高谷 将吾 伊藤 一希 阿部 渉	井上 仁美 九里 亜紀 畑田 美優	村上 成美 湯澤 ひとみ	高波 勇斗 中里友理子
接待係	黒澤 誠 松本 博 金丸 泰典	丸山 世津	和田 仁美	岩崎 竜太
救護係	山科 圭子	栗原 真理子	林田 景子	原田 嘉子
荷物係	三浦 侑人 皆川 拓也	村上 大輔 角田 充弘	橋爪 恵利 赤田美菜子	森田 順啓 加藤 達也 蒲澤 孝明 梅内 智彰 石井 卓哉 眞通 宏太郎
誘導係	飯塚 健太 平澤 太基 村山 優 安達 順大 佐藤 祐亮 山口 孝介 佐藤 淳 小野田 峻 笠井 遼太郎 高橋 友平 馬場 真之 白岩 智哉 杉田 義典 石井 貴憲	生田目宗典 齊藤 優奈 小松 由来 古澤由香里 横山宗一郎	平野 大樹 本郷伸太郎 竹野 恵美 榎本 薫 黒須慎太郎	菅原 甚一 大野 堯之 白倉 雄三 徳田 一樹 鈴木 真琴 蔵前 亜理佐 小宮 朋史 赤木 昂介 森嶋 悠太 岡野 航

係	埼玉大学教育学部 附属中学校	埼玉県立 大宮東高等学校	埼玉県立 上尾南高等学校	埼玉大学教育学部 附属特別支援学校
分科会会長	道工 勇	加賀谷 貴彦	橋本 淳	戸部 秀之
運営委員長	二瓶 剛	山之内 正隆	横瀬 元応	神田 佳明
会場責任者	小澤 幸康	津坂 宗秀	永田 真也	柳澤 真美
研究発表者	小澤 幸康	福田 光弘	古平 智彦	田上 智明
研究推進委員	若林 暢子	飯野 幸一朗	戸井田 健	田上 智明
授業者	小澤 幸康 内田 敦子	中島 孝男 齋藤 勇気	永田 真也 戸井田 健	(小学部)仙石 大悟 他 (中学部)木皿 優 他 (高等部)佐藤 容亮 他
司会・進行	金杉 博美	伊藤 隆行	松崎 裕二	中山 浩一
記録係	齋藤 速 松吉 杏佳	森 智美 吉川 清彦	梅田 直希 高山 智裕	三浦 駿介 綿谷 衛
受付・弁当係	高橋真貴子 吉野 純美 宇井 美咲 川鍋 寛実 上田 香純	川崎 知美 川田 友博	豊田 喜美子 石川 貴子	岩田 晃広 遠山 秀雄
授業・分科会補助 (受付係兼務)	六沢 恵太 杉浦 佑	南 佳孝 若林 美生	佐枝 久美子 藤間 真美子	廣瀬 道代 加藤 和子
接待係	星 操 今野 めぐみ	広瀬 亮子	中本 泰代	新井 真由
救護係	内田貴美子	加藤 真由美	三原 亜美	岡田 将子
荷物係	神代 諒輔 中井 直穂 佐藤 秀一 内田 峻介 森尻 庸介	小田川 功	益子 倫行	安藤 剛史
誘導係	田中 有美 尾形友里江 若松 裕太 釘田 圭介 江口 行雄 秋山 祐介 高橋 紀子 小林 里菜	上田 敏之 二見 元	大屋 将人 箱石 拓也	野地 貴史 中村 亮太

基調報告

研究主題

「新学習指導要領を踏まえた体育・保健体育学習の具現化に向けて」

～生涯にわたって心身の健康を保持増進し、

豊かなスポーツライフを継続できる資質・能力を育成するために～

1 研究主題について

これからの時代を生きる子供たちにとって、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することは、明るく豊かで活力ある生活を営むために重要である。そのためには幼児期から、多様で適切な運動経験により運動の楽しさや喜びを味わい、学習したことを実生活、実社会において生かし、運動の習慣化につなげることが大切である。

各校種の新学習指導要領及び幼稚園教育要領では、これまでの我が国の学校教育の実践や蓄積を生かし、子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することを目指している。そして、知識及び技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成のバランスを重視する現行の枠組みや教育内容を維持した上で、知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成することを示している。そのため、新学習指導要領の全面実施に向けた体育・保健体育学習の提案やその共有が求められている。

そこで本大会では、新学習指導要領及び幼稚園教育要領の趣旨とこれまでの埼玉県における体育・保健体育研究の成果と課題を踏まえ、大会主題を『新学習指導要領を踏まえた体育・保健体育学習の具現化に向けて』と設定した。

(1) 研究主題設定の理由と研究の視点の設定

ア 新学習指導要領の趣旨

新学習指導要領では、知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むため、指導内容を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の三つの柱で再整理している。また、これらの指導内容を確実に身に付けるための授業改善の視点として「主体的・対話的で深い学びの実現」についても示している。その充実のためには、単元等授業のまとまりの中で、習得・活用・探究のバランスを工夫することが重要となってくる。

- ①心と体を一体として捉え、生涯にわたる心身の健康の保持増進や豊かなスポーツライフの実現を重視すること。
- ②体験的な活動を重視して、「する・みる・支える・知る」のスポーツとの多様な関わり方や保健の技能について内容を改善すること。
- ③体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無等にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方が共有できるよう配慮すること。
- ④体育分野（運動領域）と保健分野（保健領域）との相互の関連が図られるよう内容を改善すること。

体育・保健体育における新学習指導要領改訂のポイントとしては、上記の四つが挙げられる。特に、①の「生涯にわたる心身の健康の保持増進や豊かなスポーツライフの実現」のためには、育成すべき資質・能力を明確にした系統的な指導を行い、多様で適切な運動経験を通して、運動の楽しさや喜びを味わわせることが大切である。

そこで本大会では、幼稚園から高等学校までを見通した系統的な指導、特別支援学校における発達の段階や障害の特性に応じた指導を通して、資質・能力の三つの柱をバランスよく育成することを重点とした。そのために、各校種における発達の段階を捉えた指導内容の明確化、評価の工夫をし、指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成をすることとした。

指導内容の三つの柱を適切に配置した単元案・単元計画を作成することで、資質・能力の三つの柱をバランスよく育成していきたい。

研究の視点 1

イ 埼玉県における体育・保健体育研究の成果と課題

本県では、昭和 35 年度から「学校体育必携」が埼玉県教育委員会より毎年発刊されている。多くの教師が拠り所にしており、「埼玉の学校体育指導者の必携書」ともいえる冊子である。「学校体育必携第 1 号」の巻頭言には、以下のような記述がある。

体育研究委嘱校の発表を見るたびに、県内のどの学校の体育経営もこのようであってくれたらと願わずにはいられない。運動場が広く、コートの数も多く、運動場にラインがよく引かれ、固定施設も数多く揃えられ、ボールなどの用具も多く、先生方の指導も徹底している。児童生徒の技能もよく、自主的積極的に活動しており、児童生徒の顔も明るく楽しそうである。このような姿が県下の各学校に再現されたと願い、祈ってもいるわけである。(下線部筆者)

前記のような体育経営をしたいと努力してみても各学校の現場ではいろいろな事情があってそうもいかないということがあろう。

しかし、出来るだけの努力を教育委員会もするし、各学校の現場でもしなければ、いつになっても障害は取り除かれれないし、体育の振興は期し得られない。

上記のような「埼玉体育の指導方針」は、埼玉県教育委員会とさいたま市教育委員会のいずれも今も変わらずに脈々と受け継がれ、それぞれの取組を推進している。以下、その具体的な取組を示す。

○ 埼玉県の取組

埼玉県では、児童生徒一人一人がもつ体力課題には違いがあることを捉え、平成 29 年度から「児童生徒一人一人の課題に応じた取組」に重点を置き、総合的な体力の向上を目指している。各学校では、児童生徒一人一人が自己の課題をもち、その解決に取り組む中で「自己記録の更新」ができるような指導の工夫をし、「学習規律を確立させ、力いっぱい運動し、思いっきり汗をかく『楽しい』体育授業」の実践をしている。さらに、「コツコツときたえた体はたからもの」を体力向上に向けた合い言葉に、主に下記の事業に取り組んでいる。

①「生活習慣診断シート」を活用した家庭との連携を推進

- ②「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果を活用した体力向上支援策
- ③「体力プロフィールシート」等の活用の推進
- ④体力課題解決研究指定校における研究実践の推進
- ⑤小学校・中学校授業研究会、高等学校地区研究協議会の実施
- ⑥小学校体育研究協議会、中学校・高等学校保健体育研究協議会の実施
- ⑦学習指導要領の適切な実施に向けた実践

また、埼玉県教育委員会より「学校健康教育必携」が毎年発刊され、「学校健康教育推進の道しるべ」として活用されている。主に下記の重点事項に取り組んでいる。

- ①学校保健の充実、妊娠・出産・不妊に関する知識の普及啓発と性に関する指導の推進、薬物乱用防止教育の推進
- ②食育の推進
- ③基本的な生活習慣の確立に向けた支援
- ④学校における耐震化の推進
- ⑤安全教育の推進
- ⑥学校と教職員の危機管理能力の向上、自然災害から児童生徒の命を守る防災体制の強化
- ⑦家庭、地域と連携した防犯・交通安全教育の推進

○ さいたま市の取組

さいたま市では、平成 19 年度から「子どものための体力向上サポートプラン」「子どものための体力向上サポートプラン（改訂版）」に基づき、児童生徒の体力向上に努めてきた。豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を重視し、バランスのよい体力を児童生徒に身に付けさせることを基本方針として、本プランの改定を行った。「子どものための体力向上サポートプラン 2018」の趣旨を踏まえ、児童生徒が主体的に運動に取り組む授業や体育的活動の工夫改善を図るとともに、家庭、地域社会との連携を深め、児童生徒の望ましい生活習慣を形成するなど健康の保持増進に努め、主に下記の点に取り組んでいる。

- ①「さいたま市小・中一貫教育」を踏まえた指導の充実
- ②心と体を一体としてとらえ、児童生徒一人ひとりを伸ばす学習指導の工夫
- ③体育活動時における安全指導と安全管理の徹底
 - ・「体育活動時等における事故対応テキスト～A S U K A モデル～」などを参考とした緊急体制の確立
 - ・「保健学習における心肺蘇生法実習の指導の手引き」を活用した系統的な心肺蘇生法実習を全ての小・中・高等学校にて実施
- ④子どものための体力向上サポートプラン 2018 等の推進
 - ・にぎなげプロジェクトの推進
 - ・新体力アップメニューを活用した授業づくり
 - ・体力アップキャンペーンの推進

○ 埼玉県学校体育協会の取組

埼玉県学校体育協会は、埼玉県における学校体育・スポーツを振興し、体力の向

上を図り、スポーツの精神を涵養することを目的とし、昭和 23 年 4 月に発足した。小学校体育連盟、中学校体育連盟、高等学校体育連盟をもって組織しており、その目的を達成するために下記の事業を行っている。

- ①学校総合体育大会の開催
- ②講習会の開催
- ③学校体育の授業に関する研究
- ④学校体育・スポーツに関する調査研究

上記のような取組を実践してきたことは、全国体力・運動能力、運動習慣等調査や新体力テストの結果にも現れている。以下、本県の成果と課題を児童生徒の実態から示していく。

【成果】

- ◎平成 20 年度から実施されている「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果の推移を見ると、「体力合計点」については、小学校 5 年生、中学校 2 年生の男女ともに平成 30 年度が最も高い結果となった（図 1）。

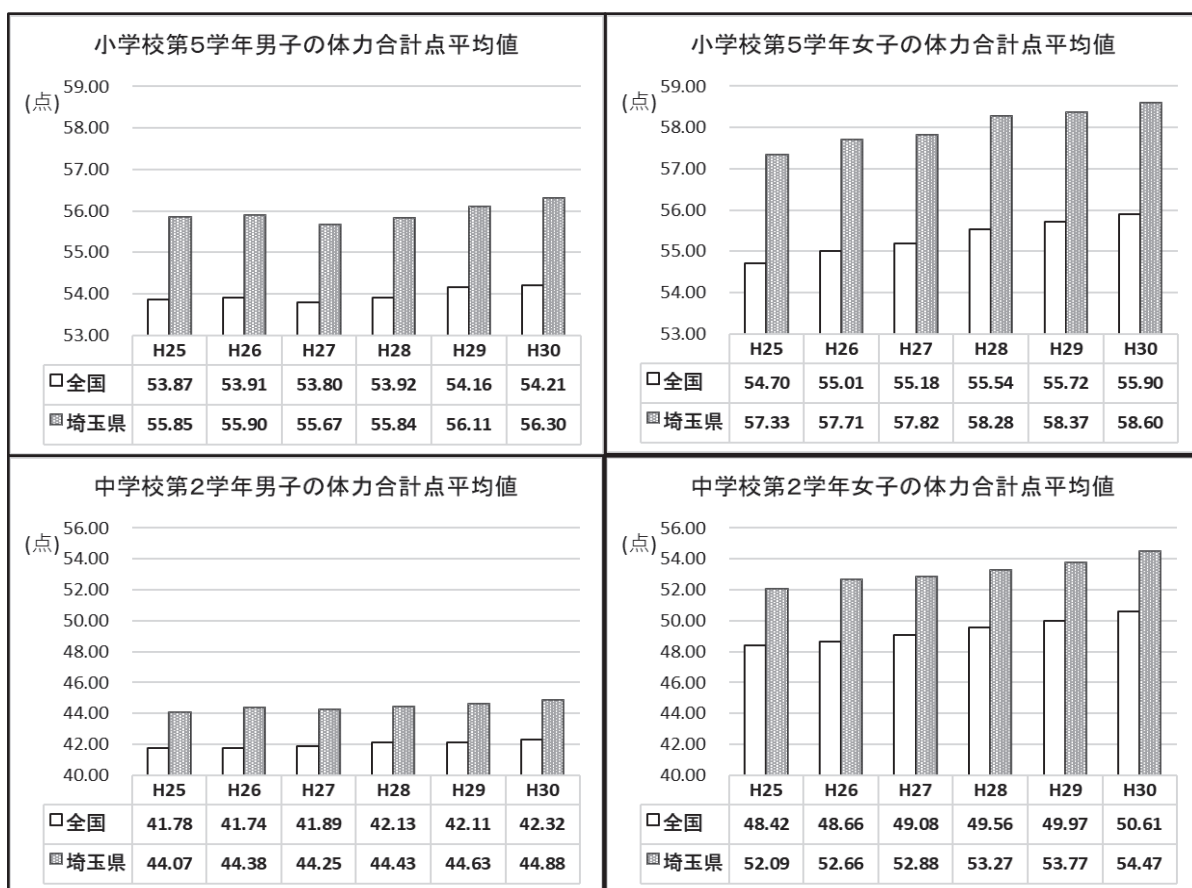


図 1 体力合計点平均値の推移

- ◎「各学校における新体力テストの体力合計点による 5 段階評価で上位 3 ランク（A＋B＋C）の児童生徒の割合」では、全校種とも平成 20 年度から着実に向上している（図 2）。平成 30 年度は小学校 83.7%、中学校 86.4%、高等学校 89.5%と平成

20 年度以降最高の結果となっており、全体的に体力が向上している。

※体力合計点とは、スポーツ庁が示す基準に従って、年齢と項目別の記録に応じて点数化した 8 項目の点数の合計点のことである。

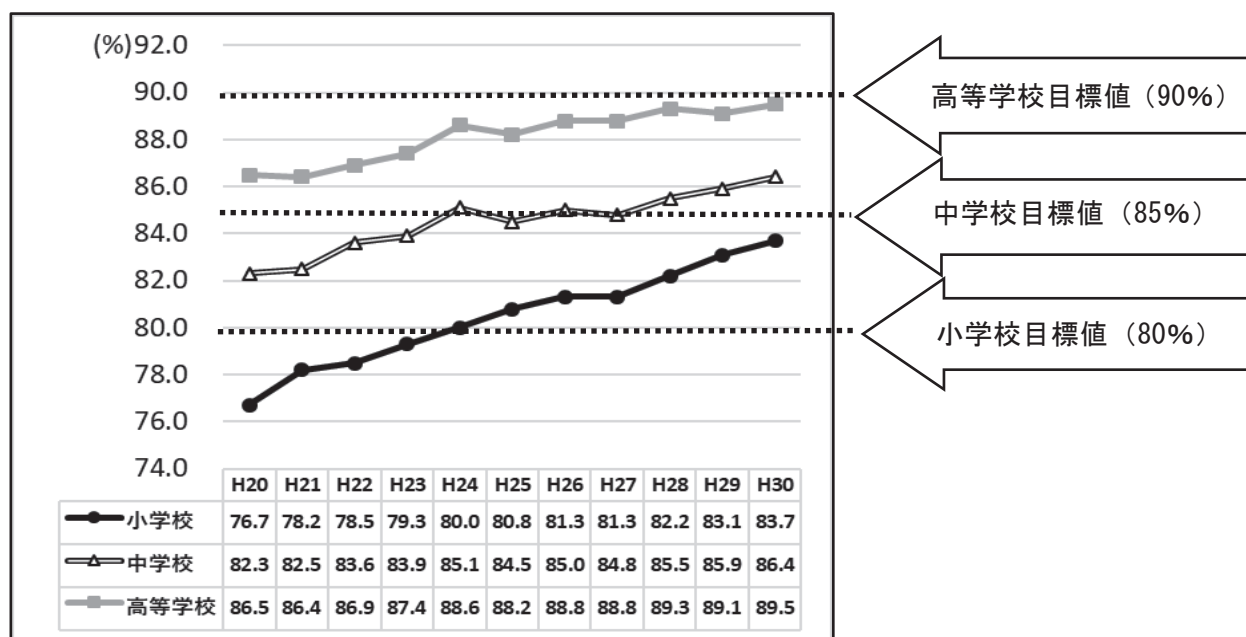


図 2 新体力テストの体力合計点による 5 段階評価で上位 3 ランクの児童生徒の割合

◎「平成 30 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の中学校第 2 学年女子の質問紙調査から、普段の授業が改善されてきていることが分かった（表 1）。上記の体力向上という結果も、県内各校での授業改善の成果の一つと考えられる。

表 1 全国体力・運動能力、運動習慣等調査の質問紙への回答（中学校第 2 学年女子）

質問項目	埼玉県 (%)	全国 (%)
保健体育の授業では、授業の始めに授業の目標（目当て・ねらい）が示されていますか。	70.9	60.3
保健体育の授業では、授業の最後に今日学んだ内容を振り返る活動を行っていますか。	59.3	44.0
保健体育の授業では、十分に体を動かしていると思いますか。〔保健領域を除く〕	62.0	53.5

【課題】

△一方、「運動やスポーツが好きな児童生徒の割合」については、小学校第 5 学年、中学校第 2 学年の男女とも全国平均と比較してやや低い結果となった。図 3 は、「平成 30 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の中学校第 2 学年女子の質問紙調査から「運動やスポーツが好きな生徒の割合」を縦軸に、「体力合計点」を横軸として 47 都道府県の結果を示したものである。ここ数年、体力合計点については全国平均を上回るが、運動やスポーツが好きな生徒の割合は全国平均を下回るといった傾向が継続している。この傾向は、小学校第 5 学年男女、中学校第 2 学年男子も同様となっている。

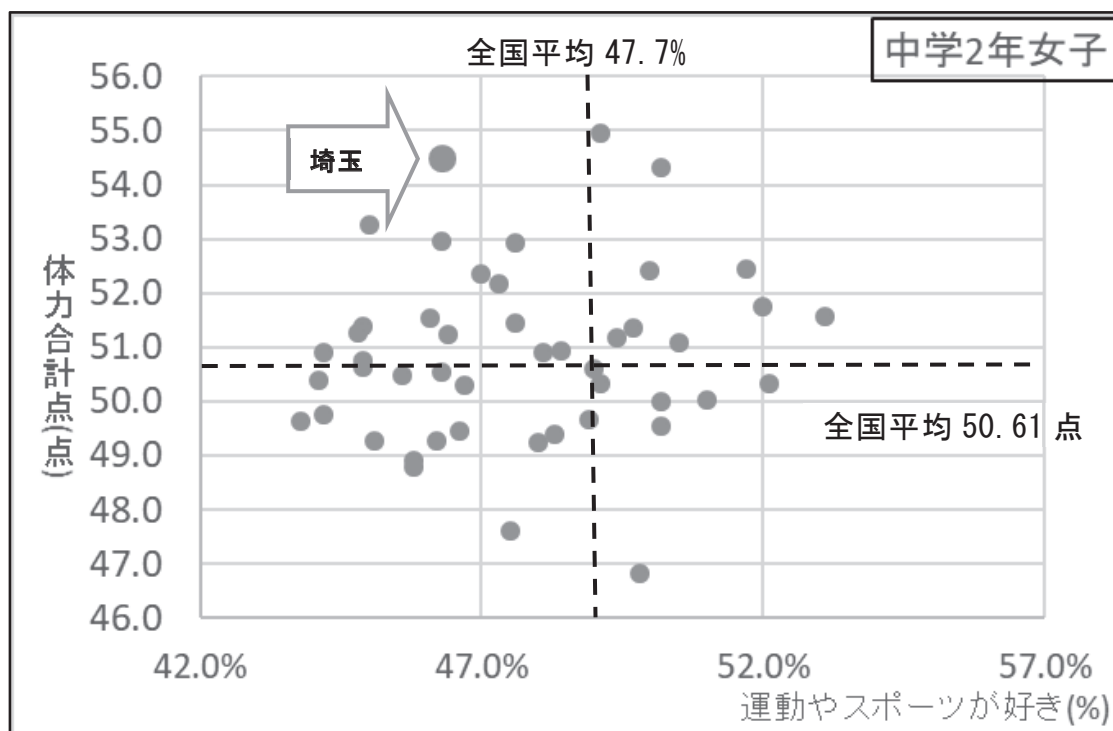


図3 運動やスポーツの好きな児童生徒の割合（中学校第2学年女子）

これらの結果から、体力・運動能力は高いが「運動やスポーツが好きな児童生徒」の割合は少ないという埼玉県の問題が見られる。

前出の「学校体育必携第1号」には、「児童生徒の技能もよく、自主的積極的に活動しており、児童生徒の顔も明るく楽しそうである。」とある。この一文は、我々の先輩方が築きあげてきた授業実践は間違っていなかったことを表すとともに、このような姿が県下だけでなく、全国の各学校においても再現されたと期待せずにはいられない。

明るく楽しそうに体育・保健体育学習に取り組む子供たちは、生活の中で運動を習慣化し、それが豊かなスポーツライフの実現・継続につながっていくであろう。そのような子供たちを増やすためには、体育・保健体育の授業の中で、運動の楽しさや喜びを味わえることが大切であると考えた。

そこで本大会では、体育授業の充実や運動習慣の確立をはじめ、運動に関する情意面にも目を向け、運動やスポーツが好きな子供たちの育成を視点とした取組を推進することを重点とした。そのために、「主体的・対話的で深い学び」を目指し、教材・教具、学習過程、学習形態を工夫することとした。このような視点をもって授業改善をすることで、運動の楽しさや喜びを味わわせるようにしていきたい

研究の視点2

（2）分科会別主題

大会研究主題を受け、各分科会会場の実態を踏まえて、以下のように設定した。

第1分科会：埼玉大学教育学部附属幼稚園

「しなやかな心と体を育む ～多様な動きの経験を引き出すための遊びの充実～」

第2分科会：さいたま市立芝川小学校

「個の力と集団の力を共に高め、
自己肯定感や自己有用感の育成を目指した体育科指導の工夫」

第3分科会：さいたま市立常盤小学校

「『わかった』『できた』を味わうことができる
ユニバーサルデザインを重視した授業の工夫」

第4分科会：川口市立並木小学校

「運動の楽しさや喜びを味わい続ける児童の育成
～思考力、判断力、表現力を高める体育授業を通して～」

第5分科会：埼玉大学教育学部附属小学校

「『わかる』と『できる』をつなぐ思考力、判断力、表現力等を高め、
運動への自信をもてる指導の工夫」

第6分科会：さいたま市立原山中学校

「主体的・対話的な学習を図る指導の工夫
～『見つける』『考える』『実践する』学びをつなげる～」

第7分科会：さいたま市立与野西中学校

「豊かな『思考力、判断力、表現力等』を育むことで技能向上を目指す授業づくり」

第8分科会：川口市立南中学校

「主体的・対話的で深い学びを実現する保健体育学習
～単元の特性に応じた効果的な学習指導の工夫～」

第9分科会：埼玉大学教育学部附属中学校

「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善
～自己の思考を深め、課題をより良く解決することができる生徒の育成～」

第10分科会：埼玉県立大宮東高等学校

「主体的・対話的で深い学びの実現を目指した体育授業の実践
～実技と理論の相互作用とICTの活用～」

第11分科会：埼玉県立上尾南高等学校

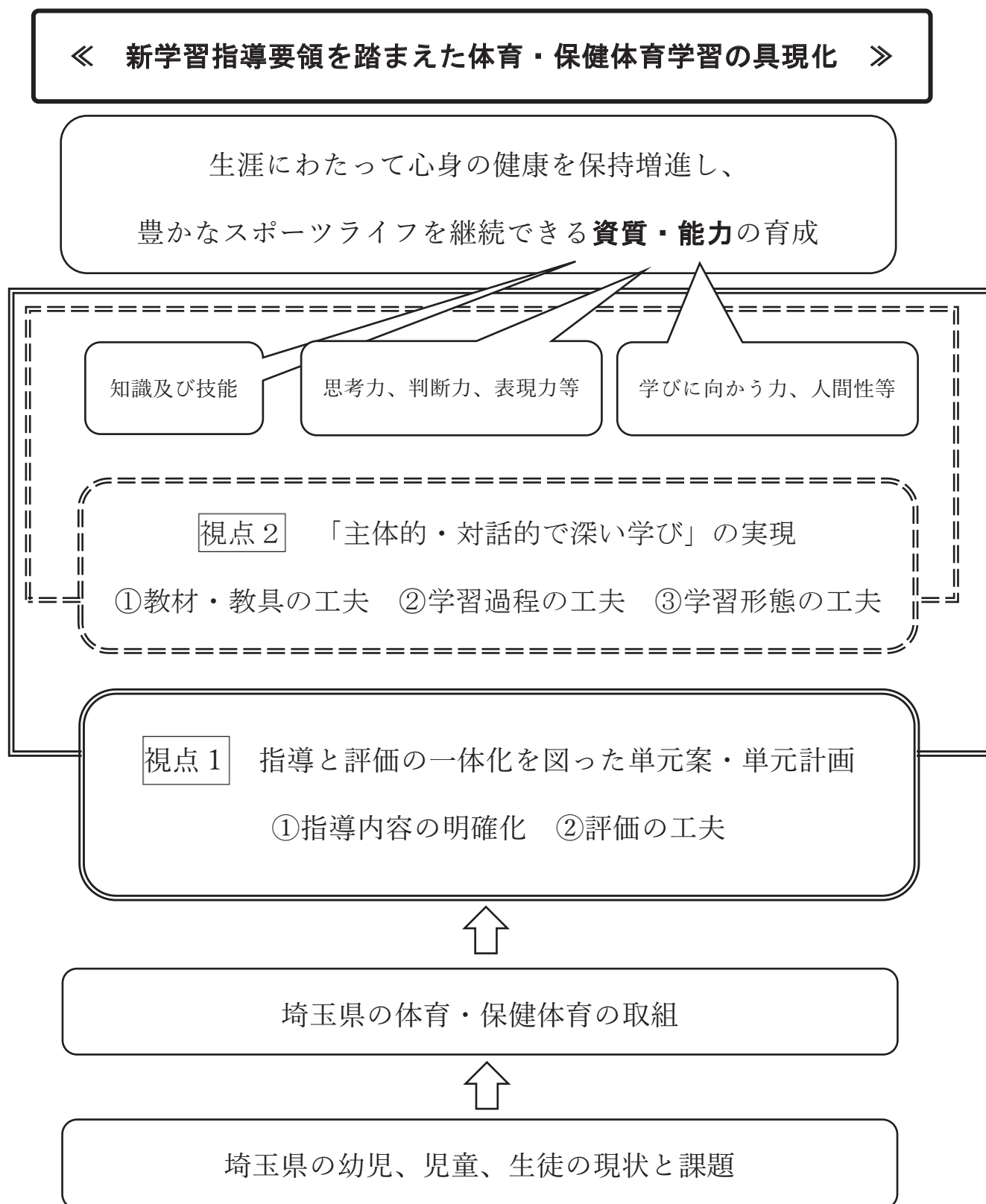
「主体的・対話的で深い学びを目指した体育・保健授業
～運動に積極的に取り組む生徒育成に向けて～」

第12分科会：埼玉大学教育学部附属特別支援学校

「自らの健康を考え、卒業後も運動に親しむ態度を育成する体育・保健体育学習」

2 研究内容

(1) 研究の概要（研究構想図）



(2) 研究の視点

視点1 指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成

学習指導要領改訂を見据え、平成28年度より指導案形式を刷新した。特に、「7 単元の計画 (3) 評価と指導の計画」を一覧表形式とすることで、指導と評価の一体化を図ることとした(図4)。また、この単元計画の形式は、各校で作成する年間指導計画にも転用しやすい形式となっており、指導案を作成して実践することが、次の年間指導計画に反映できるようになっている。これは、カリキュラム・マネジメントの一つとなっている。

なお、埼玉県教育委員会では「埼玉県学校体育必携」を、さいたま市教育委員会では「さいたま市の学校体育」を毎年春に発刊しており、「学習指導計画作成上の留意点」を示している。これにより、県内各地で共有できる指導案作成ができるようになっている(図4)。

本大会では、指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成をするために、以下の2観点による手立てを講じることとした。

①指導内容の明確化

いつどこで何を指導するのかを明確にするために、単元案・単元計画の中に、「指導内容」と「ねらい」を明記することにした(図4-2)。「指導内容」には、単元の目標に即して、1時間毎に子供たちが身に付けることを明確に記している。「ねらい」は、「指導内容」と「評価規準」にリンクしたねらいとし、どんな活動ができればよいのか、学習の進捗状況を考慮して具体的に記している。

指導内容を明確にするために、以下の点に留意している。

- 発達の段階を踏まえているか。
- 2年間のまとまりを考慮して(小・中学校)、学年間の見通しをもっているか。
- 資質・能力の三つの柱のバランスの取れた指導内容となっているか。

②評価の工夫

指導した内容を、いつどこで何をもちて評価するのかを、単元案・単元計画の中に、「評価計画」として明記することとした(図4-2)。「評価計画」には、「6 単元及び学習活動に即した評価規準(図4-1)」の番号と評価方法を記している。また、評価する場面を学習過程の番号で記している。1時間の評価の観点は、原則一つとすることで、指導と評価が一体となるようにした。ここでいう評価とは、本時のねらいに正対して振り返りをし、それを受けて次時につなげていく評価のことである。

また、評価場面以降は、その観点について評価をしないということではない。特に、「技能」「主体的に学習に取り組む態度」については、指導後すぐに身に付くものではないため、学習の進捗状況に合わせて、個別にフィードバックをする等その都度評価をしていく。一方で、「知識」「思考・判断・表現」については、その日のうちに評価することが好ましい。そのため、観察だけに頼らず学習カード、学習ノート、ワークシート、レポート等の多面的な評価方法を選択していく。

学習指導計画作成上の留意点

(第○学年○組) 体 育 科 学習指導案

↑

保健体育科

※ 小学校の場合の「学年・学級名」記入位置

平成○年○月○日 (○) 第○校時 活動場所

※ 中・高等学校の場合の「学年・学級名」記入位置 → (第○学年○組) 男子○○名 女子○○名 計○○名

指 導 者

1 単 元 名……主として指導する種目や運動の内容をまとめたものを記入する。

※ 小学校の場合 ・教材名 (領域の内容名)

※ 中・高等学校の場合 ・領域選択の場合「選択させる領域名」(自分が担当する運動種目等)

・運動種目等選択の場合「領域名」 (自分が担当する運動種目等)

2 運 動 の 特 性……具体的な単元の目標と内容とを導き出す手がかりとする。

(1) 一般的特性

欲求の充足あるいは必要を充足する機能を中心にとらえ、児童生徒にとっての種目の一般的な魅力 (機能的特性) を明らかにする。

(2) 児童生徒から見た特性

児童生徒の実態を踏まえ、学習する児童生徒にとって、どこが楽しいか、遠ざける要因は何か、どんな楽しみ方ができる運動かを明らかにする。

3 児童生徒の実態

(1) 知識及び技能

(2) 思考力、判断力、表現力等

(3) 学びに向かう力、人間性等

4 教師の指導観

(1) 知識及び技能

(2) 思考力、判断力、表現力等

(3) 学びに向かう力、人間性等

5 単 元 の 目 標

単元の学習を通して学習指導要領に示されている目標及び内容 [知識及び技能] [思考力、判断力、表現力等] [学びに向かう力、人間性等] から児童生徒をどのように変容させるか、目指していることを箇条書きで示す。

6 単元及び学習活動に即した評価規準

国立教育政策研究所教育課程研究センター「学習評価の在り方ハンドブック」, 「評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料」, 「埼玉県小学校・中学校教育課程指導・評価資料」等を参考に各学校で作成した単元の評価規準を示す。(3つの観点【知識・技能】【思考・判断・表現】【主体的に学習に取り組む態度】の「おおむね満足できる」状況を評価規準として示す)

(例)	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準			
学習活動に即した評価規準	① ② ③ ④	① ②	① ②

7 単 元 の 計 画 ※ 書き方の詳細は、各校種の指導案例を参照。

(1) 領域の取り上げ方

※ 中・高等学校は3年間、小学校は4年間又は6年間で示す。

(例)	運動 / 学年	3年	4年	5年	6年
	小型ハードル走・ハードル走	6時間	6時間	8時間	8時間

(2) 運動種目

(例)	学年	教材	目指す動き
	5	チーム対抗 40mハードル走(低)	高さのある第1ハードルを決めた足で踏み切って走り越えること
	6	チーム対抗 40mハードル走(高)	高さのあるハードルを自分に合ったインターバルで、3～5歩のリズムで走り越えること

図 4 - 1 学習指導計画作成上の留意点

(3) 指導と評価の計画 (8時間扱い) 本時は○印 4/8時

時間	1	2	3	④	5	6	7	8
ねらい	※ 指導と評価にリンクしたねらいを記入する。							
指導内容	※ 各時間における指導内容を記入する。							
0分	オリエンテーション	1 集合、挨拶、健康観察 2 本時のねらいや学習内容の確認 3 準備運動 4 学習の場づくり、用具の準備						
学習過程	(例) 5 感覚づくりの運動 6 練習 7 練習の成果の確認(記録会、発表会等) 8 自己評価、相互評価 9 整理運動、片付け 10 学習の振り返り	※ 授業で教えるべきことを明記する。 ・技能だけでなく、他の指導内容についても明記する。 ・「共通に学ばせること」と「児童生徒が自主的・主体的に学ぶこと」を明確にする。					5 感覚づくりの運動 6 練習 7 記録会、発表会 8 自己評価、相互評価 9 整理運動、片付け 10 単元の振り返り	
45(50)分								
評価計画	知・技	①					②	②
	思・判・表 態	③ ④	①	①	②			
	方法	観察	観察、カード	観察	観察、カード	観察、カード	観察、カード	観察、カード
	場面	6 7 8 10	5 6 7 8	6 7	6 7 8 10	5 6 7 8	6 7	6 7

※ 1時間の評価の観点、原則1つとする。

※ 評価計画には、「6 単元及び学習活動に即した評価規準」の番号と評価方法を記す。また、評価する場面の番号も記す。

8 本時の学習と指導（4／8時）

(1) **ねらい**……単元の目標に即して、本時で児童生徒に身に付けさせたいことを明確にし、どんな活動ができればよいか、学習の進展状況を踏まえて具体的に示す。(「◆評価規準」とリンクさせる)

(2) 準備……本時に使用する教具、用具、資料等を示す。

(3) 展 開……導入から展開・整理へと、児童生徒の楽しさを追求する活動を中心に書く。その楽しさを「本時のねらいの達成」という確かなものにするために、教師が個人・グループやチーム・全体等に何を指導し、どのような点に留意していくかをより具体的に明確に示す。

段階	学習内容・活動	指導上の留意点 (○指導 ◆評価規準)
導入 ○分	(例) 1 集合、挨拶、健康観察 2 本時のねらいや学習内容の確認 3 準備運動 4 学習の場づくり、用具の準備 ※ 本時のねらい、活動の見通し、準備等を示す。 ・前時の学習を振り返り、学習ノートの記述等から本時の学習の意欲付けを図る。	※ 本時の学習を円滑に進めるための留意事項を具体的に示す。 ・健康上注意を要する児童生徒の健康状況と指導上の留意事項 ・準備運動で特に注意を要する運動とそのやり方、配慮する児童生徒、学習集団等の特徴等
展開 ○分	(例) 5 感覚づくりの運動 6 練習 ・課題やめあてでの解決に取り組む 7 練習の成果の確認 ・記録会、発表会等 8 自己評価、相互評価 ※ 児童生徒が、本時のねらいの達成のために、各自(グループやチーム)の課題の解決に向け、どのように学習活動を展開するかを、図や絵等も入れ具体的に示す。	※ 全ての児童生徒に指導する内容を明確にし、指導上の留意点を示す。 ※ 一人一人の児童生徒が、本時のねらいを達成することができるように、教師が指導、助言、配慮することを具体的に示す。 ・各自(グループやチーム)の課題のめあて、確認の仕方、解決の仕方、修正の仕方 ・全員(グループやチーム、個人)に、気付かせ理解させるべきこと、指導すべきこと ・役割や活動の仕方について、各場面で指導するポイント ・活動中の個人、グループやチームに対する働きかけについての留意点 ・技能のつまづきを予想し、それに対する指導のポイント ◆学習活動に即した評価規準【観点】 「6 単元及び学習活動に即した評価規準」で示したものをそのまま記す。 指導と評価が一体となるように、 「△努力を要すると判断される状況 (C) の児童生徒への指導の手立て」 「△十分満足できると判断される状況 (A) の児童生徒の具体的な姿」 を示し、評価を次の指導に生かす。
整理 ○分	(例) 9 整理運動、片付け 10 学習の振り返り ※ 各自の学習を振り返る。 ・成果や課題、気付きを発表する ※ 本時の評価をもとに次時の学習への意欲に結びつくよう、教師が振り返りの評価をする。	※ 本時の学習を振り返るに当たっての留意事項を具体的に示す。 ・整理運動、用具を片付ける上での留意点 ・本時のねらいに正対した振り返り、それを受けた評価の仕方、まとめ方についての要点 ・本時の学習の成果と課題を踏まえ、次時の予告や今後の見通し

9 資 料……本単元（本時）で使用する学習資料、学習カード等を添付する。

図 4-2 学習指導計画作成上の留意点

視点2 主体的・対話的で深い学びを目指した指導の工夫

「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、以下の3観点による手立てを講じることにとした。

①教材・教具の工夫

子供たちが、「主体的・対話的で深い学び」を実現できるよう、以下の点に留意して教材・教具の工夫をしている。

- 興味・関心の喚起、持続ができる教材・教具であるか。
- 誰でも楽しさを味わえる教材・教具であるか。
- 安心して夢中になれる場となっているか。

②学習過程の工夫

子供たちが、「主体的・対話的で深い学び」を実現できるよう、以下の点に留意して学習過程の工夫をしている。

- 既習の内容等、易しい課題から取り組めるようになっているか。
- 自己の思いや願い、能力に応じて、目標をもてるようになっているか。
- 目標達成に向け、課題とその解決方法を知る場面が設定されているか。
- 自己の能力やチームの特徴に応じて課題を選び、課題解決のための活動を決める場面が設定されているか。
- 課題解決のために、必要性のある対話場面が設定されているか。
- 成果を確認し、振り返る場面が設定されているか。
- 全体を通して、子供たちの思考の流れを考慮しているか。

③学習形態の工夫

子供たちが、「主体的・対話的で深い学び」を実現できるよう、学習内容、学習過程に応じて以下の学習形態の工夫をしている。

○一斉学習

教師が学級全員に対して一斉に指導を行い、学習を進めていく形態のことである。

主に、学習経験が浅い段階や単元や授業の導入部分等で行っている。

○グループ学習（ペア学習、トリオ学習、チーム学習）

学級をいくつかのグループに分け、子供たち同士で学習を進めていく形態のことである。グループは、技能の観点から等質集団（技能差がない）と異質集団（技能差がある）に分かれることがある。指導内容に合わせて、グループ人数や質を工夫している。

○個別学習

一人一人に対して教師が個別に指導を行い、学習を進めていく形態のことである。

一斉学習やグループ学習の形態の中で、つまずきのある子に個別に対応するといった形で部分的に取り入れていくようにしている。

<引用・参考文献>

- ・幼稚園教育要領（平成 20 年 3 月 文部科学省）
- ・幼稚園教育要領（平成 29 年 3 月 文部科学省）
- ・幼稚園教育要領解説（平成 20 年 7 月 文部科学省）
- ・幼稚園教育要領解説（平成 30 年 3 月 文部科学省）
- ・小学校学習指導要領解説 体育編（平成 20 年 6 月 文部科学省）
- ・小学校学習指導要領解説 体育編（平成 29 年 7 月 文部科学省）
- ・中学校学習指導要領解説 保健体育編（平成 20 年 7 月 文部科学省）
- ・中学校学習指導要領解説 保健体育編（平成 29 年 7 月 文部科学省）
- ・高等学校学習指導要領解説 保健体育編（平成 21 年 7 月 文部科学省）
- ・高等学校学習指導要領解説 保健体育編（平成 30 年 7 月 文部科学省）
- ・特別支援学校小学部・中学部学習指導要領解説（平成 21 年 6 月 文部科学省）
- ・特別支援学校幼稚部教育要領小学部・中学部学習指導要領（平成 29 年 4 月 文部科学省）
- ・特別支援学校高等部学習指導要領解説（平成 21 年 12 月 文部科学省）
- ・特別支援学校高等部学習指導要領解説（平成 29 年 12 月 文部科学省）
- ・幼児期運動指針ガイドブック（平成 24 年 3 月 文部科学省）
- ・評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 体育】（平成 23 年 11 月 国立教育政策研究所）
- ・評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校 保健体育】（平成 23 年 11 月 国立教育政策研究所）
- ・評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校 保健体育】（平成 24 年 7 月 国立教育政策研究所）
- ・平成 28 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書（平成 28 年 12 月 スポーツ庁）
- ・平成 29 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書（平成 30 年 2 月 スポーツ庁）
- ・平成 30 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書（平成 30 年 12 月 スポーツ庁）
- ・昭和 35 年度埼玉県学校体育必携 第 1 号（昭和 35 年 埼玉県教育委員会）
- ・平成 28 年度埼玉県学校体育必携 第 57 号（平成 28 年 4 月 埼玉県教育委員会）
- ・平成 29 年度埼玉県学校体育必携 第 58 号（平成 29 年 4 月 埼玉県教育委員会）
- ・平成 30 年度埼玉県学校体育必携 第 59 号（平成 30 年 4 月 埼玉県教育委員会）
- ・平成 31 年度埼玉県学校体育必携 第 60 号（平成 31 年 4 月 埼玉県教育委員会）
- ・平成 29 年度さいたま市の学校体育（平成 29 年 4 月 さいたま市教育委員会）
- ・平成 30 年度さいたま市の学校体育（平成 30 年 4 月 さいたま市教育委員会）
- ・平成 31 年度さいたま市の学校体育（平成 31 年 4 月 さいたま市教育委員会）
- ・平成 29 年度埼玉県学校健康教育必携 第 17 号（平成 29 年 3 月 埼玉県教育委員会）
- ・平成 30 年度埼玉県学校健康教育必携 第 18 号（平成 30 年 3 月 埼玉県教育委員会）
- ・平成 31 年度埼玉県学校健康教育必携 第 19 号（平成 31 年 3 月 埼玉県教育委員会）

解 説

シンポジウム



テーマ

「体育と保健を関連付けた体育・保健体育学習の推進」

コーディネーター 東海大学体育学部体育学科

教授 森 良一

■略 歴

昭和 60 年 3 月 埼玉大学教育学部卒業
昭和 60 年 4 月 栃木県小学校 教諭
平成 10 年 3 月 宇都宮大学大学院修了(教育学修士)
平成 15 年 4 月 栃木県教育委員会事務局保健体育課 指導主事
平成 19 年 同 健康福利課副主幹 (保健給食担当)
平成 20 年 4 月 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官
(併任)文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課 教科調査官
平成 27 年 10 月 (併任)スポーツ庁政策課 教科調査官
(併任)文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課 健康教育調査官
平成 30 年 4 月 東海大学体育学部体育学科 教授

■主な著書

平成 24 年 観点別学習状況の評価規準と判定基準 中学校保健体育 (共著 図書文化)
平成 26 年 小・中学校の先生のための「健康教育」実践ガイドブック (編著 東洋館出版社)
平成 28 年 中・高等学校保健科教育法 (編著 東洋館出版社)

■主な業績

平成 30 年 小学校における保健教育の指導参考資料の作成検討会 作成協力者 (文部科学省)
平成 30 年 体育・保健体育指導力向上研修(東部ブロック 西部ブロック)
G 保健 講師(スポーツ庁)
平成 30 年 全国学校保健・安全研究大会 現代的健康課題 講師 (文部科学省)
平成 30 年～保健教育推進委員会 委員(公益財団法人日本学校保健会)
令和 元年 精神疾患に関する指導の手引作成委員会 委員長(公益財団法人日本学校保健会)



提言テーマ

『幼児期の遊びや生活を通して、健康な心と体を育む』

シンポジスト 大阪市立銅座幼稚園 園長 奥 蘭 みどり

□略歴

昭和 58 年 大阪教育大学教育学部幼稚園教員養成課程卒業
 昭和 58 年 大阪市立常盤幼稚園教諭
 平成 4 年 大阪市立真田山幼稚園教諭
 平成 11 年 大阪市立泉尾幼稚園教諭
 平成 18 年 大阪市立泉尾幼稚園長
 平成 21 年 大阪市立城東幼稚園長
 平成 24 年 大阪市立味原幼稚園長
 平成 30 年より現在まで
 大阪市立銅座幼稚園長

□主な著書・研究業績・委員等

- ・国立教育政策研究所 教育課程研究センター研究指定校事業
- ・就学前教育カリキュラム作成協力
(平成 25・26 年度、大阪市教育委員会)
- ・就学前教育カリキュラム研究発表
(平成 27 年度、大阪市教育委員会)
- ・就学前教育カリキュラム改訂版作成協力
(平成 29 年度、大阪市教育委員会)

□発表要旨

(1) 幼稚園教育要領等の改訂について

平成 29 年度、新学習指導要領等が告示され、今年度、新幼稚園教育要領は全面実施となって 2 年目を迎える。幼稚園では、幼稚園生活全体を通して「生きる力の基礎」を育む。環境を通して行う教育を基本とし、遊びを通して総合的な指導を行うことは、今回の改訂においても変わらない。新幼稚園教育要領に示された幼児期に育みたい資質・能力の 3 つの柱を見ても、幼稚園教育は小学校以降の教育の基礎を培う教育と言える。この 3 つの柱は幼稚園から高等学校まで一貫している。

今回の改訂では、領域「健康」の「内容の取扱い」で「多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること」「食の大切さに気付き、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること」等が追加された。幼稚園での遊びを通して、体を動かす気持ちよさを味わい様々な活動に意欲的に取り組んだり、多様な動きを身につけたりして、自ら健康な生活をつくり出す土台づくりをすることが大切であるとする。

(2) 遊びや生活を通して健康な心と体を育む

①心と体を動かして遊ぶ

体を動かす遊びを中心とした身体活動を十分行う中で、様々な学びの姿が見られる。友達と一緒に体を動かすことを楽しむためには、その中で相談したりルールを守って活動したりすることが必要となり、コミュニケーション能力や規範意識の芽生えを培うことにもつながる。遊びや生活のつながりを考え、子どもたちの「楽しかった!」という思いを大切にし、「頑張った」「明日もしよう」「もっと楽しくなるようにしよう」等と、主体的・継続的に体を動かしていくように、活動を工夫することが必要である。日々の楽しい遊びの積み重ねを通して、「体を動かすことが大好き」「友達と一緒に頑張るって気持ちいい」「少し難しくても最後まで頑張ろう」と心も体を弾ませて活動することが、健康な心と体を育む基盤となる。遊びの中で、状況に応じて機敏に体を動かしたり、何度も取り組む中で多様な動きを引き出したり運動量を増やしたりするように、環境構成や援助の在り方を工夫することが大切である。

一方で、社会状況の変化により、体を動かして遊ぶ環境づくりが困難になっている。幼児期に体を動かす経験の大切さを保護者と共有し、家庭でも日常的に体を動かす遊びを知らせ、親子でふれあい、体を動かして楽しく遊ぶ機会をつくるように働きかけることも大切にしたい。

②自ら健康な生活をつくる

幼児期に、食べることへの意欲や関心をもたせることが、健康な生活をおくるための食習慣を形成することにつながる。幼稚園では、栽培活動という直接体験を通して食べ物や栄養に関心をもたせるようにしている。教師や友達と一緒に楽しい雰囲気の中で食べることで、食べることに意欲をもち、自分の健康に対する関心も高まると考える。また、幼稚園での指導だけではなく、家庭と連携して自ら健康な生活をつくり出していくように家庭への啓発の在り方を工夫したい。



提言テーマ

『運動領域と保健領域の関連を踏まえた指導』

～どの小学校においても実現可能な指導を目指して～

シンポジスト 越谷市立大沢北小学校 教頭 佐藤 泰弘

□略歴

平成 6 年 文教大学教育学部卒業
平成 6 年 岩槻市立柏崎小学校 教諭
平成 11 年 岩槻市立岩槻小学校 教諭
平成 15 年 越谷市立大間野小学校 教諭
平成 18 年 越谷市立大沢北小学校 教諭
平成 21 年 越谷市教育委員会指導課 指導主事
平成 25 年 埼玉県教育局東部教育事務所 指導主事
平成 29 年 埼玉県教育局保健体育課 指導主事
平成 31 年 越谷市立大沢北小学校 教頭

□主な著書・研究業績・委員等

平成 19 年 埼玉県長期研修教員
平成 30 年 埼玉県教育課程編成要領編集
(埼玉県教育委員会)
平成 30、31 年 学校体育必携編集
(埼玉県教育委員会)

□発表要旨

小学校体育科では、平成 10 年度の学習指導要領から、心と体を一体として捉えることが目標として掲げられ、運動領域と保健領域の関連を踏まえた指導が継続して求められてきた。そして、新学習指導要領では、「内容の取扱い」において、低学年では「運動と健康が関わっていることについての具体的な考えがもてるよう指導すること」、中学年では「運動と健康が密接に関連していることについての具体的な考えがもてるよう指導すること」、高学年では「運動領域と保健領域との関連を図る指導に留意すること」が示され、一層の関連を図るように改善されている。新学習指導要領を受け、運動領域と保健領域の関連を踏まえた指導を、どの小学校においても実現可能なものにするために、以下の提案をしたい。

(1) 運動領域と保健領域の双方向のアプローチ

○運動領域と保健領域の関連については、保健領域の学習がある 3 年生以上は、特に保健領域の学習を受けて運動領域にアプローチするケースが多い。一層の関連を図っていくためには、運動領域から保健領域へのアプローチも行い、双方向に関連することが大事である。その際、新学習指導要領解説の各学年段階における「内容の取扱い」に着目したい。

- ・低学年…体は、活発に運動をしたり、長く運動をしたりすると、汗が出たり、心臓の鼓動や呼吸が速くなったりすること、体を使って元気に運動をすることは、体を丈夫にし、健康によいことなどを、各領域において行う。
- ・中学年…特に、保健領域の「体の発育・発達」については、児童が「運動については、生涯を通じて骨や筋肉などを丈夫にする効果が期待されること」の知識を習得したことを、運動領域の「A 体づくり運動」の「跳ぶ、はねるなどの動きで構成される運動」を通じて行う。
- ・高学年…特に、児童が保健領域の病気の予防について、全身を使った運動を日常的に行うことが、現在のみならず大人になってからの病気の予防の方法としても重要であることを理解することと、各運動領域において学習したことを基に日常的に運動に親しむことを関連付ける。

(2) 教科内カリキュラム・マネジメントの推進

○体育主任や体育部が中心となり、運動領域と保健領域の内容がより関連付くように、単元を配置する。また、その意図を教員間で共有することができるようにする。

※教育課程全体におけるカリキュラム・マネジメントについては、教科等横断的な指導を視野に入れ、関連の深い理科、家庭科、特別活動、総合的な学習の時間等、また、健康教育推進のための「〇〇週間」「健康チェックシート」といった取組と関連付くように単元を配置する。教科等横断的な指導は、容易にできるものではないが、単元配列表がそれを実行しやすい単元の配置になっていることで取り組みやすくなる。

(3) 教員間の情報共有の推進

○互いの実践を共有できる時間と場が必要である。また、授業イメージをもてない教員にとっては、実践例が容易に手に入り、ゼロではなく真似するところから始められると心強い。校内及び教育委員会で、研修等の充実、風通しよく OJT が日常的に行われる人間関係及び職場環境の醸成、そして実践例のデータベース化とその利活用の推進を図る。



提言テーマ

『体育分野と保健分野を関連づけた指導の工夫』

～カリキュラムマネジメントの観点を持った指導計画～

シンポジスト 横須賀市立追浜中学校 校長 前島 光

□略歴

昭和60年 日本女子体育短期大学卒業
平成 元年 横須賀市立養護学校 教諭
平成 4年 横須賀市立神明中学校 教諭
平成11年 横須賀市立池上中学校 教諭
平成19年 横須賀市立常葉中学校 教諭
平成22年 横須賀市教育委員会スポーツ課指導主事
平成25年 横須賀市教育委員会スポーツ課主査指導主事
平成27年 横須賀市立追浜中学校 教頭
平成29年 横須賀市立神明中学校 教頭
平成30年 横須賀市立追浜中学校 校長
平成31年 筑波大学大学院人間総合科学研究科博士課程修了

□主な著書・研究業績・委員等

平成16年～平成17年 国立特別支援教育総合研究所
「特別支援教育コーディネーターに関する実践的研究」協力者
平成18年～平成21年 中央教育審議会教育課程部会
特別支援教育専門部委員
平成23年 学校体育実技指導資料第7集
「体づくり運動」作成協力者
平成25年 全国体力・運動能力、運動習慣等調査
事例検討委員会委員
平成31年 国立教育政策研究所「評価規準、評価方法等
の工夫改善に関する調査研究」協力者

□発表要旨

学校のカリキュラムを編成するにあたり、学校や地域の実態を適切に把握し、教育活動の質を高め学習の効果の向上を図るカリキュラムマネジメントの観点から、他教科や学校行事との関連を図り、生徒や学校の実態にあったカリキュラムを作成することが大切である。

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育編において保健体育科改訂の要点の中でも『『カリキュラムマネジメント』の実現及び『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善を推進する観点から、発達の段階のまとまりを考慮し、各領域で身に付けさせたい具体的な内容の系統性を踏まえた指導内容の一層の充実を図るとともに、保健分野との一層の関連を図った指導の充実を図ること。』と示されている。このことから、中学校保健体育科において年間指導計画を作成するにあたり、カリキュラムマネジメントの観点を持って計画を立てることが大切であり、より効果的、効率的な指導に繋げるために、体育分野と保健分野の関連を図る工夫が重要である。体育分野と保健分野の関連の例として次のものが挙げられる。

- (1) 体育分野「A 体づくりの運動」ア「体ほぐしの運動」と保健分野 (2) 「心身の機能の発達と心の健康」のア(エ)「欲求やストレスへの対処と心の健康」。
- (2) 体育分野「D 水泳」と保健分野 (3) 「傷害の防止」の指導内容ア(エ)「応急手当」。
- (3) 体育分野「G 体育理論」2「運動やスポーツの意義や効果と学び方や安全な行い方」と保健分野(1)「健康な生活と疾病の予防」。
- (4) 体育分野の「A 体づくりの運動」から「G ダンス」の学びに向かう力、人間性等の「健康・安全」に関する指導内容と保健分野の(1)「健康な生活と疾病の予防」。

保健体育科の年間指導計画を作成するにあたり、体育分野と保健分野で関連する指導事項を取り上げ、体育分野の単元と単元の間に関連する保健分野の指導内容を配置したり、体育分野の単元の時間を前半と後半に分けて、前半と後半の間に保健分野の授業を実施したりするなどの年間指導計画の工夫が考えられる。しかしながら、体育分野と保健分野の関連を図った指導は、年間指導計画通りに授業を実施することのみならず、体育分野、保健分野での具体的な指導内容に着目して、教師の指導や支援の中で関連づける工夫が必要となる。その1つの方法として、生徒の行動や心身の変化などの具体的な場面を捉えて、保健分野や体育分野で指導した内容を取り上げ説明したり、発問によって学習内容を確認したりするなどして関連付けていくことが考えられる。



提言テーマ

『体育と保健の関連を図った効果的な学びに向けて』

シンポジスト 北海道教育庁学校教育局健康・体育課 主査 内海 久

□略歴

平成 7 年 筑波大学体育専門学群卒業
平成 7 年 北海道豊富高等学校教諭
平成 12 年 北海道北広島高等学校教諭
平成 26 年 北海道教育庁後志教育局指導主事
平成 27 年 北海道教育庁留萌教育局指導主事
平成 29 年 北海道教育庁留萌教育局主査
平成 30 年 北海道教育庁学校教育局健康・体育課主査

□主な著書・研究業績・委員等

・平成 24 年度全国学校体育研究大会北海道大会
第 10 分科会研究主任
・北海道高等学校教育課程編成・実施の手引 作成委員
(平成 26 年～平成 30 年 北海道教育委員会)
・令和元年度体育・保健体育指導力向上研修 講師

□発表要旨

新高等学校学習指導要領保健体育編では、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを継続する資質・能力の育成を重視する観点から、健康な生活と運動やスポーツとの関わりを深く理解したり、心と体が密接につながっていることを実感したりできるようにすることの重要性が改めて示された。

学校における体育・健康に関する指導は、生徒の発達段階を考慮して、学校の教育活動全体を通じて適切に行うこととなっていることに加え、今回の学習指導要領改訂により、体育と保健の関連を図る工夫の例やカリキュラム・マネジメントの重要性が新たに示されたことから、より一層の関連を図った授業改善を進めることが求められている。

各学校において、体育・健康に関する指導を効果的に進めるためには、生徒の体力や健康状態等を的確に把握し、学校や地域の実態を踏まえて、それにふさわしい学校の全体計画を作成し、地域の医療機関・団体の協力を得つつ、計画的、継続的に指導することが重要である。

また、高等学校は小学校からの学習の体系で最後の学習段階となることから、生徒が社会に出てからの健康課題の解決や豊かなスポーツライフの実現に向けた実践力を身に付けさせる必要があると考える。

これらのことを踏まえ、シンポジウムでは、新学習指導要領に示された事例の中から、「体づくり運動」と「生活習慣病などの予防と回復」、「応急処置法」と「水泳」の関連を図った授業実践を紹介した上で、授業づくりを進めるための手順や視点について提案する。

(1) 系統性を踏まえた指導と単元配置の工夫

① 生徒の学習状況の把握

年度初めに、生徒の中学校段階での学習状況を調査することで、学び直しに要する時間や単元に配当する時間が明確になり、実態に合わせた指導を計画することができる。

② 健康安全、体育的行事等との関連

学校行事との関連の見直しを図ることにより、科目「体育」及び「保健」の望ましい指導時期を考えることができる。

③ 指導の関連を図る単元の配置

学習指導要領解説に示された事例を基に年間指導計画を見直し、「体育」及び「保健」の関連を図ることができるよう配置する。「保健」は学習指導要領の記載が指導の順序を示しているものではなく、学校や生徒の実態に即し弾力的に取り扱うことができることに留意する必要がある。

(2) 科目の指導内容を踏まえた指導と評価の計画

各科目の内容を確認することにより、授業のねらいと評価規準を明確にすることができるとともに、指導の重複を防ぐことができる。

(3) 効果的な学び

体育と保健の関連を図ることにより、課題への気付き、学習に対する意欲の高揚、実生活での活用イメージの具体化などの期待できる効果を教員がイメージすることにより、どの知識とどの知識をネットワーク化する必要があるかデザインすることができる。



提言テーマ

『体育と保健を関連付けて指導するための大学の教員養成』

シンポジスト 信州大学教育学部 准教授 渡辺 敏明

□略歴

昭和 60 年 筑波大学体育専門学群卒業
昭和 63 年 筑波大学大学院体育研究科
修士課程修了
昭和 63 年 筑波大学体育センター 文部技官
平成 元年 信州大学教育学部 助手
平成 8 年 文部省在外研究員 独テュービンゲン大学
平成 9 年 信州大学教育学部 講師
平成 17 年 信州大学教育学部 助教授
(現 准教授)

□主な著書・研究業績・委員等

平成 17～30 年「基本の運動で使える楽しい運動遊び(連載 36 回)」小学校体育ジャーナル、学研教育みらい
平成 21、23、28、29 年 全国学校体育研究大会
指導助言者
平成 25 年 子どもの体力向上指導者養成研修 講師
平成 30 年・令和元年 体育・保健体育指導力向上研修
講師
日本スポーツ運動学会理事

□発表要旨

大学の教員養成課程においては、将来教員を目指す学生に新しい幼稚園教育要領・学習指導要領の改訂情報を明確に伝えることが大切である。加えて、各校種における体育と保健の連携を図った授業内容の理解と、教員として教える立場への認識の転換を図ることが重要だと考える。そのためには、養成を行う大学教員自身が、新学習指導要領における体育と保健を関連付けた内容から授業改善を図るだけでなく、養成すべき教員像とともに、新しく必要となる資質・能力をどのように育てていくのかについて、教員組織として検討することが大切になると考える。また、教員研修等を行う立場としても、各研修を通して新学習指導要領における体育と保健の見方・考え方について、現職教員の意識の転換についても働き掛けていかなければならない。

そこで、本シンポジウムでは、信州大学教育学部の教員養成の取り組みを紹介しながら、体育と保健の関連をより一層深めて指導するための授業の改善や工夫について提案する。

信州大学教育学部保健体育コースでは、小学校教諭一種免許状及び中学校教諭一種免許状(保健体育)の取得を必修として、高等学校(保健体育)に加え、幼稚園、特別支援学校等の教員を目指す学生が所属している。学生全員が子どもの運動の発育発達について学べる利点を生かしながら養成を展開しているところである。今回の学習指導要領の大きな改訂においては、各校種により体育と保健のそれぞれで関連付ける内容が存在するため、様々な授業場面においてより丁寧に保健に関する説明と実践が求められると考える。また、保健体育コースの授業は、教科の指導法に関する科目(体育科領域及び保健科領域)と教科に関する科目を、それぞれ専門とする教員が担当している。そのため、保健体育の教員養成カリキュラムの充実と、体育と保健を関連付けた授業内容の改善について検討することが大切であると考えます。現在養成段階の学生については、これまで経験してこなかった授業づくりについて学び、将来教員として指導を行わなければならないため、「学び続ける教員像」を確立し、大学で学ぶ授業だけでなく、卒後教育としても研修や勉強会等を重ねることで、授業の質的向上を目指すよう指導を行うことも大切である。

<担当する体育実技授業の改善や工夫について>

- (1)新しい幼稚園教育要領・学習指導要領に示された目標や内容を理解させ、校種や発達段階に応じた授業づくりの方法等について身に付けさせる。
- (2)教員養成におけるカリキュラムマネジメントの観点から、開講されている各授業内容を考慮した上で、授業配置を見直し、教員養成としてのカリキュラム全体を通した授業の質的向上を図る。
- (3)体育実技では、指導法の学修を目的とする中で、体育と保健を関連付けた具体的な指導内容や場面を取り上げて、実体験に基づいた学びの充実を目指す。

特別講演

講演題目

「木の上に立って見ましょう

～選手の自立を引き出すコーチング～」

講師：阿久根 謙司



現在の職名・委員名等

東京ガスケミカル株式会社

取締役常務執行役員

<略歴>

1961年埼玉県所沢市生まれ。

幼少期から野球選手。早稲田実業高校時代は甲子園に2度出場。

早稲田大学野球部では主将を務め、第13回日米大学野球日本代表、東京六大学野球ベストナインに2度選出される。

1984年東京ガス株式会社に入社。

社会人野球の東京ガスで7年間現役選手としてプレーし、その後東京ガス硬式野球部のコーチ・監督を歴任。

2011年2月よりJリーグF C東京社長に就任。J2に降格したチームを1年でJ1に復帰させ、天皇杯でも初の優勝に導く。

2015年1月末に退任。

現在、東京ガスケミカル株式会社取締役常務執行役員に就任。

FC TOKYO

木の上に立って見ましょう

～選手の自立を引き出すコーチング～

第58回全国学校体育研究大会埼玉大会

2019年10月31日
東京ガスケミカル 阿久根謙司



FC TOKYO

自己紹介 阿久根謙司(あくねけんじ)

- ・1984年早稲田大学商学部卒業。
自身は幼少期から野球選手。
早稲田実業高校時代は甲子園に2度出場。早稲田大学
野球部では主将を務め、第13回日米大学野球日本代表、
東京六大学野球ベストナインに2度選ばれる。
- ・1984年東京ガス株式会社入社。
社会人野球の東京ガスで活躍し、その後東京ガス硬式野球部
コーチ・監督を歴任。
- ・2011年2月よりFC東京社長。
- ・2015年1月末退任

現在東京ガスケミカル(株)取締役常務執行役員

FC TOKYO

1. 「自立」できない昨今の事情

3

FC TOKYO

都会は便利で満ち溢れている

交通網・エレベーター・送り迎え

遊園地・スポーツ・テレビゲーム

FC TOKYO

「都会の特徴」

少子化⇒過保護

お受験↓
リーダーシップなどを学ぶ機会の欠如

FC TOKYO

「教え込み」による「指示待ち族」の量産

教え込む監督・教師

カーリング型社員・指示待ち族

FC TOKYO

日本の風土・文化そして歴史的背景



島国・鎖国・農耕民族

戦後の経済成長の根幹
統一規格商品の大量生産

FC TOKYO

リーマンショック・東日本大震災

先の見えない時代の到来
自ら考え、変革していく人材が求められる

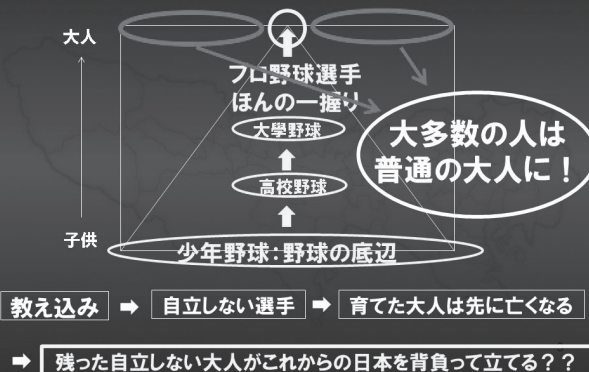


実際に入社してくるのは指示待ち族

このギャップ、どうすればいいのか？

FC TOKYO

野球界のピラミッド



大人

子供

プロ野球選手
ほんの一握り

大学野球

高校野球

少年野球・野球の底辺

大多数の人は普通の人だ！

教え込み → 自立しない選手 → 育てた大人は先に亡くなる

⇒ 残った自立しない大人がこれからの日本を背負って立てる??

FC東京

FC東京の状況

チーム状況

- ・ユルい・ヌルい＝甘え
- ・誰かがやってくれると思った＝他力本願
- ・こんなはずじゃない＝自己否定

スポーツ性 始まったら止まらない先が読めないスポーツ

↓

テーマは「自立」

10

FC東京

FC東京の行動指針 「自立」

⇒自分で見て、考えて、動け！

↓

武器＝「コーチング」

11

FC東京

一方的な指示命令型のマネジメント

- 相手とうまくコミュニケーションが取れない
- 相手のタイプや価値観を見分けられない
- 誰にでも同じ方法で教えてしまう
- 自分のやり方を押し付ける
- 過度の管理
 - 自発性・自立性・自律性を奪う
 - 失敗する権利を取り上げてしまう

12

FC TOKYO

スポーツ界＋企業不祥事

徹底的なトップダウン＋指示命令
自分の経験則を部下・選手にはめ込む

↓

不祥事勃発・連鎖・なくなる

↓

ミスを怒る→理由を隠す・嘘つく→真の再発防止にならず
指導者の言うとおりにやらせる→失敗から成長しない

手が打ててない

FC TOKYO

失敗を自分で取り戻して成功につなげると

- 逆境に強くなる
- メンタルタフになる
- 臨機応変が得意になる
- 想定外と言わなくなる

↓

怒って指導者の言うとおりにやらせると・・・
上記のチャンスを奪うことに

FC TOKYO

今の時代に求められるリーダーシップ

- 自由化
- 規制緩和
- デジタル化
- AI Iot

いつ・誰が
どのように攻めて
くるかわからない

↓

× ついてこい！＝言われた事しかできない部下に
○ 自ら考え行動できる部下に

FC TOKYO

「わかる」と「できる」は大違い

「わかる」 $\neq$ 「できる」

16

FC TOKYO

2. 「コーチング」とは

17

FC TOKYO

枝・葉 = want to
ビジョン達成の方法
coaching

幹 = have to
ビジョン・ミッション・ルール etc
⇒teaching

根 = 信頼関係(communication)

18

FC TOKYO

コーチングとは

考え工夫する環境を作り、
自発的な行動を起こさせるためのコミュニケーションマインド

19

FC TOKYO

自発性(やる気)を引き出すことの重要性

高い自発性からは、創造性・積極性・個性・多様性等が発揮される

『オペラント(自発性を高める)心理学』より

結果管理 ⇒ 怒る ⇒ 受動的
経過管理 ⇒ 承認 ⇒ 能動的

20

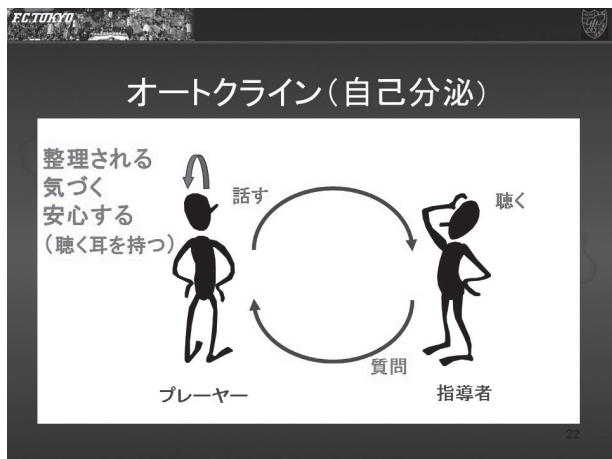
FC TOKYO

自発性(やる気)を引き出すには

高い自発性は、個人差(違った個性)を容認し、
立場(指導者⇄プレイヤー)を尊重する
指導者の管理態度から生まれる

指導者の管理態度とは
プレイヤーの話に根気よく耳を傾け、気持ちに共感し、否定せずに最後まで聴く

21



安心するとレセプターを開く

●レセプター(受容器)

動物体が外界からの刺激及び、体内で生じる刺激を受け入れる器官 (大辞林第2版より)

安心感 = 聴く耳(レセプター)を持つ

23

- 主なコーチングスキル
1. 質問
 - クローズドクエスチョン(Yes or No)
 - オープンクエスチョン(5W1H)
 2. ペーシング
 - ヴァーバル(言語) 例: あいつち・同じ言葉を繰り返す
 - ノンヴァーバル(非言語) 例: うなずき・声のトーン
 3. チャンクダウン・チャンクアップ
 4. 承認
 5. 沈黙
- 24

FC TOKYO

3. ワントゥワンセッション

26

FC TOKYO

ONE to ONE セッション

あなたがプレーヤーだった時、

- ・いつ一番伸びましたか？
- ・なぜ伸びたのでしょうか？
- ・その時指導者はどう関わっていましたか？

26

FC TOKYO

- Good Teacher ⇒ Good Coach
- 魔法の言葉「で、どう？」
- 成功のなぜ？
- 奥さま にチャレンジ！

27

FC TOKYO

「木」の上に「立って」「見ましょう」=「親」

枝・葉 = coaching = want to

自立

幹 = teaching = must (have to)

放任

過保護

根 = coaching = 信頼関係

FC TOKYO

トップチームの「自立」

監督がセットプレーについて選手にコーチング
マンツーマン・ゾーンに意見が二分
主将の意見を尊重、活きたマンツーマンに

FC TOKYO

みなさんのコーチングによって
子どもたちが自立していくことを
心より祈っています。

頑張ってください。

30

幼稚園部会

第1分科会

研究主題

しなやかな心と体を育む

～多様な動きの経験を引き出すための遊びの充実～

埼玉大学教育学部附属幼稚園

日 程

受付	公開保育	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
----	------	----	-----	----------------------	-----

8:30 9:00

11:20

12:30

14:30

公開保育案内

区分	内容	場所
公開保育①	好きな遊び (心と体をよく動かして遊ぶ)	1組(3歳児) 保育室、園庭
公開保育②		2組(4歳児) 保育室、園庭
公開保育③		3組(5歳児) 保育室、園庭、遊戯室

学校所在地

〒330-0061
埼玉県さいたま市浦和区常盤8-13-1

交通機関

J R 京浜東北線
・北浦和駅から徒歩15分

埼玉大学教育学部附属幼稚園



所在地：〒330-0061

埼玉県さいたま市浦和区常盤 8-13-1

連絡先：Tel 048-833-6288 Fax 048-831-2010

E-mail：ashimizu2@mail.saitama-u.ac.jp

H P：http://www.kinder.edu.saitama-u.ac.jp/

園長：飯泉 健司

幼児数：80 名

◎教育目標

子どもの「自らのびる力」を育てる

◎具体的目標

子どもの「やさしさ」を育てる

子どもの「かしこさ」を育てる

子どもの「たくましさ」を育てる

◎園紹介

本園は、昭和 7(1932)年に埼玉県女子師範学校附属幼稚園として開園した。その後、埼玉師範学校附属幼稚園、埼玉大学・埼玉師範学校附属幼稚園、埼玉大学教育学部附属幼稚園と改名しながら、85 年余りの歴史を刻んでいる。一般の幼稚園と同じように、学校教育法に基づいて幼児の教育を行っているが、国立学校設置法施行規則に基づき、教員養成学部の附属幼稚園としての役割と特色をもっている。具体的には、①幼稚園教諭を養成するための教育実習、②大学・学部との連携のもとでの幼児教育の理論的・実践的な研究の推進、③研究協議会の開催や研究紀要の刊行を通じた地域の幼児教育の発展への寄与、④他の附属学校との交流を通じた教育・保育内容の充実である。

1 研究の構想

(1) 研究主題

しなやかな心と体を育む

～多様な動きの経験を引き出すための遊びの充実～

(2) 研究主題設定の理由

ア 幼稚園教育要領から

幼稚園教育要領(平成 29 年 3 月)では、領域「健康」内容の取扱いとして、「自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと」と示されている。この記述は平成 10 年の改訂時より、今回の改訂に至るまで変更がなく、幼児の育ちを支える重要な視点であることがうかがえる。

また、同じく領域「健康」内容の取扱いには、「様々な遊びの中で、幼児が興味や関心、能力に応じて全身を使って活動することにより、体を動かす楽しさを味わい、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つようにすること」との記述があり、さらに今回の改訂では、「多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること」との記述が追加されている。なお、幼稚園は他の学校種に先行する形で、すでに平成 30 年度より新幼稚園教育要領が全面実施されている。

イ 埼玉県動向から

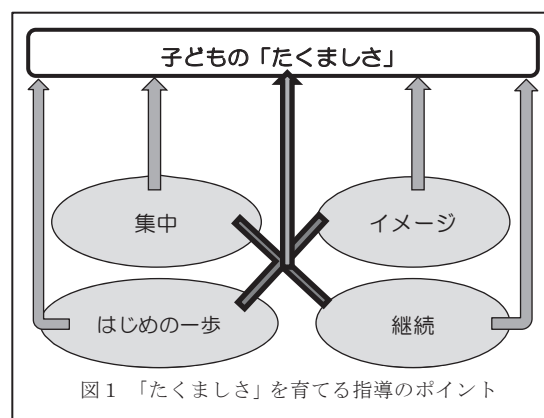
埼玉県では、県下幼稚園の教育課程編成、指導計画作成の拠り所となる「埼玉県幼稚園教育課程編成要領」(平成 30 年 3 月改訂)、「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」(平成 31 年 3 月改訂)を作成している。これらは、昭和 39 年の幼稚園教育要領改訂時より作成されているもので、幼稚園教育要領改訂の趣旨を踏まえて、その都度改訂されてきたものである。今回の改訂では、教育課程編成や指導計画作成の例の一つとして「多様な動きを経験すること」も視点として取り上げられている。

ウ 本園のこれまでの研究から

平成 28～30 年度の研究では、本園の教育目標、具体的目標を踏まえ、子どもの「やさしさ」「かしこさ」「たくましさ」を育てる保育について検討した。特に 30 年度は、子どもの「たくましさ」に焦点を当て、その指導の在り方を明らかにした。

まず、子どもの「たくましさ」を、「健康な体をもつ」「最後まで粘り強くがんばる」「難しいことにも挑戦する」「自分なりの目的をもって意欲的に取り組む」「自分の気持ちを整え、乗り越える」の 5 つに整理した。

次に、「たくましさ」を育てるためにどのような保育が必要か、指導のポイントを図 1 のように整理した。「たくましさ」を育てるためには、幼児が遊びや生活にじっくりと取り組み、「集中」できる環境を整えることが大切であると考えた。また、幼児が自分の動きなどに「イメージ」をもてるようにすることや、様々なことに勇気をもって「はじめての一步」を踏み出せるきっかけを作ることも指導のポイントと捉えた。さらに、幼児が自信や



自己肯定感をもち、時に葛藤するなどの体験ができるよう、「継続」できる過程を大切にすることが基盤として重要であると考えた。

以上のような幼稚園教育要領等の改訂の動向や、本園における実践研究を踏まえ、上記の研究主題を設定した。いかにして、幼児の「多様な動き」の経験を引き出すか、そのための環境の在り方について、特に園庭での遊びを充実させる環境を検討したい。

(3) 研究の仮説

計画的な環境の構成に関連して教材を工夫したり、幼児の動線に配慮して園庭や遊具の配置を工夫したりすることで、幼児の多様な動きの経験を引き出すことができるであろう。

また、特定の活動に偏ることなく、幼児が自発的に取り組めるような様々な遊びを保障することで、幼児のしなやかな心と体の発達を促すことができるであろう。

文部科学省より幼児期運動指針(平成 24 年 3 月)が示されている。同指針では「幼児期に経験する基本的な動きの例」として、体のバランスをとる動き、体を移動する動き、用具などを操作する動きの 3 つに大別し、さらに計 28 の動きの例を整理している。本研究では、この例を参考にし、具体的な遊びの場面から「多様な動き」という視点で幼児理解を深めると共に、充実が必要と思われる動きの要素を見出していく。

また、幼稚園教育要領に、計画的な環境の構成に関連して教材を工夫することが新たに示され、領域「健康」の「内容の取扱い」に、幼児の動線に配慮した園庭や遊具の配置等を工夫することが示されている。それらを受け、園庭の教材及び物的・空間的環境の工夫によって、幼児の「多様な動き」を引き出すことができるものとする。

幼児期運動指針では、「幼児にとっての遊びは、特定の運動(スポーツ)のみを続けるよりも、動きの多様性があり、運動を調整する力を身に付けやすくなる。幼児期には体を動かす遊びなどを通して多様な動きを十分経験しておくことが大切である。」とも示されている。本園ではこれまでも、幼稚園教育の基本である「幼児の自発的な活動としての遊び」を重視して保育を展開してきた。本研究では、幼児の「多様な動き」の姿を基に、幼児のしなやかな心と体の発達を一体的に促すという側面から、「遊び」の重要性を検討する。

なお、本研究のテーマにある「しなやかな心と体」の示す「しなやかさ」について、「柔らかさ」と「強さ」の両面を合わせもつものと定義した。「柔らかさ」を、温かな人間関係と豊かな環境の中で育まれる安心感や意欲をもって動くことのできる力、「強さ」をたとえ困難な状況であっても乗り越えていける力と捉えた。その「しなやかさ」は、洗練された体の動きや心の在り方といった「美しさ」にも通じるものとする。

(4) 本園において重点としている研究の視点

本園では、本大会における研究の視点 1「指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成」の①指導内容の明確化、視点 2「主体的・対話的で深い学びを目指した指導の工夫」の①教材・教具の工夫を重点としている。

※なお、本園の研究は、埼玉大学教育学部の有川秀之教授と共同で行っている。

2 研究の内容

(1) 遊びの中で見られる幼児の多様な動きの整理

視点1 ①指導内容の明確化

幼児期運動指針に示されている「幼児期に経験する基本的な動きの例」は、体のバランスをとる動き(8の動き)、体を移動する動き(9の動き)、用具などを操作する動き(11の動き)の計28の動きである。日常の保育場面のうち、これらの動きが見られている場面について、写真記録した。その3歳児、4歳児、5歳児の写真記録を、上記の「動きの例」によって分類し、次頁のように一覧表にして整理した。

室内でも様々な遊びが展開し、その中で多様な動きが見られるが、今回は主に園庭での遊びに焦点を当てた。一年間の遊びとそこで見られる幼児の多様な動きを整理することで、幼児期運動指針に示された「基本的な動きの例」はほぼ網羅されていることが明らかになった。一方で、「登る」動き、「ぶら下がる」動きは、経験しにくい遊び環境であることも分かった。

(2) 幼児の体の動きに関わる実態調査

視点1 ①指導内容の明確化

保育中の具体的な遊び場面に加え、より多角的に幼児理解を図るために、「運動能力調査」と「保健室統計調査」の2つの調査による実態把握を行った。

ア 運動能力調査

走る、跳ぶ、投げるといった基本的な動きに基づく運動能力がどのくらいなのかを客観的に知るため、25m走、立ち幅跳び、テニスボール投げに関する調査を実施した。その結果と「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」(文部科学省)で示された結果と比較し、本園の幼児の発達水準を確認した。

イ 保健室統計調査

本園の園庭は現在、全面芝生化を実現している。そこで、全面芝生化される前の平成27年度と全面芝生化された後の平成30年度の保健室で対応したけがの実態を取りまとめ、比較した。その結果を検討することで、園庭が芝生化されたことにより、幼児が遊びの中でいかに「多様な動き」の経験をし、また、けがにつながりにくい体の動きを身に付けているかを考察した。

(3) 多様な動きの経験を引き出す環境の工夫

視点2 ①教材・教具の工夫

上記の(1)(2)を踏まえ、さらに多様な動きの体験を引き出す遊び環境を検討した。園庭の「教材・教具の工夫」という視点から、以下の4つの具体的な工夫点を見出し、実践事例を考察した。

ア 園庭を芝生にすることで動きを引き出す

イ 不足している動きを引き出す

ウ テーマをもつことで動きを引き出す

エ 複数の動きを組み合わせる

3 研究の実際

(1) 遊びの中で見られる幼児の多様な動きの整理

ア 「バランスをとる動き」の一例

※丸数字は学年(③→3歳児)

立つ ⑤	座る ④	寝転ぶ ③	転がる ③
			
渡る ④ ⑤		ぶら下がる ④ ⑤	
			

イ 「体を移動する動き」の一例

歩く ③	走る ③ ⑤		跳ぶ ⑤
			
登る ⑤	下りる ③	這う ④	すべる ③
			

ウ 「用具などを操作する動き」の一例

持つ ④	運ぶ ⑤	投げる ④	蹴る ⑤
			
積む ④	漕ぐ ③	掘る ⑤	押す ③
			

(2) 幼児の体の動きに関わる実態調査

ア 運動能力調査

(ア) 調査の目的

今回の幼稚園教育要領の改訂では、新たに「幼稚園教育において育みたい資質・能力」が明確化された。幼稚園教育において育みたい資質・能力とは、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力の基礎」「学びに向かう力、人間性等」である。小学校以降の教育との違いとして、これらの資質・能力は、個別に取り出して指導するのではなく、遊びを通した総合的な指導の中で一体的に育むことが重要とされている。

これまでの幼稚園教育要領では、「ねらい」を、幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる「心情、意欲、態度など」と定義されていたが、今回の改訂では、幼稚園教育において育みたい「資質・能力」を幼児の生活する姿から捉えたものと定義された。これまで「心情、意欲、態度」と示されていたものは「学びに向かう力、人間性等」に改められ、「など」と示されていたものが「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力の基礎」の二つとして明示された。

体の動きを「資質・能力」として捉える際、その一つの視点として、教師が「知識及び技能の基礎」、つまり「豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりすること」を明確に捉えていく必要がある。そのために本研究では、「幼児期運動指針ガイドブック」にも参考資料として示されている運動能力調査のうち、25m 走、立ち幅跳び、テニスボール投げを抜粋して実施し、本園の幼児の運動能力に係る実態の一端を明らかにした。

(イ) 調査の方法

対象者は、運動能力調査3種類の全てのデータが揃った男児37名、女児39名、合計76名を対象とした。全国値データが、同じ年齢層の中で半年刻みとしているため、各学年の4月から9月生まれを「前半生まれ」、10月から3月生まれを「後半生まれ」とした。つまり、3歳児前半を、3歳児学級で生年月日が4月から9月までの幼児、3歳児後半を、10月から3月までの幼児と区分した。同様に、4歳児前半、4歳児後半、5歳児前半、5歳児後半に区分し、6つのグループで検討した。調査は、芝生の園庭及び遊戯室で令和元年5月に行った。

なお、全国値のデータは、4歳前半とは4歳0カ月から6カ月、4歳後半とは4歳7カ月から11カ月と規定している。さらに平成20年の9月から11月以降に測定を始めたことにより、運動能力調査を行った時期が本研究と比べ約半年遅いため、本園の3歳児前半は、全国値グループの4歳後半と比較した方が適切であると判断し、5歳児前半まで同様に比較した。

(ウ) 結果と考察

a 25m 走

男児は3歳児前半(8.4秒)から5歳児前半(6.1秒)まで徐々に速くなっており、全国値データ(8.11秒から6.19秒)との差は見られなかった。女児は、3歳児前半(9.1秒)から5歳児前半(6.6秒)まで徐々に速くなっており、全国値データ(8.44秒から6.38秒)と差は見られなかった(図2)。

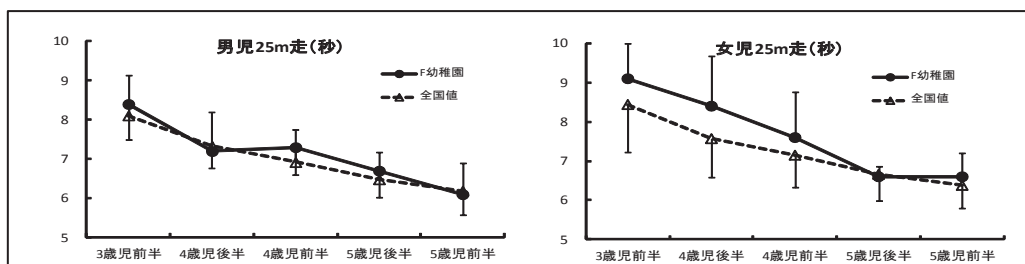


図2 25m 走の実質的な全国値データとの比較

b 立ち幅跳び

男児は、3歳児前半(72.5cm)から5歳児前半(110.6cm)まで多少凸凹はあるものの跳躍距離が徐々に長くなっており、全国値データ(76.3cm から 111.4cm)と大きな差は見られなかった。女児は、3歳児前半(65.0cm)から5歳児前半(95.8cm)まで、4歳児後半で全国値と逆転が見られるが、跳躍距離が徐々に長くなっている。

c テニスボール投げ

男児は、3歳児前半(3.7m)から5歳児前半(6.6m)まで飛距離が徐々に長くなっており、全国値データ(4.1m から 8.8m)と同様な傾向であった。女児は、3歳児前半(2.8m)から5歳児前半(5.8m)まで停滞時期はあるものの徐々に飛距離が長くなっており、全国値データ(3.1m から 5.7m)と同様な傾向であった。

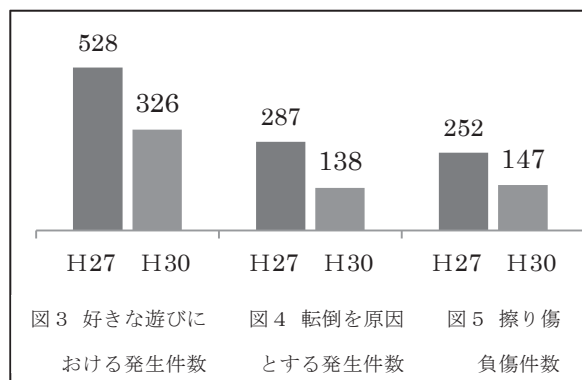
以上の結果から、本園の幼児の運動能力は、平均的な全国標準と比べ同様の傾向が見られることを確認できた。

イ 保健室統計調査

本園における平成27年度(芝生化前、27年4月～28年1月)と平成30年度(芝生化後、30年4月～31年1月)のけがの実態調査について、結果を比較して示す。27年度も30年度も「好きな遊びの時間」に最も多く発生しているが、発生件数は、27年度は528件で、30年度は326件と約4割の減少が見られる(図3)。転倒を原因とする発生件数は、27年度は287件で、30年度は138件と約半数になっている(図4)。さらに、擦り傷の負傷件数は、27年度は252件で、30年度は147件と約6割強の減少となっている(図5)。

このような結果から、園庭の芝生化は、幼児のけがを減らす効果があると考えられる。また実際、けがそのものについても、土やコンクリート、タイルの上で負傷した場合に比べ、芝生の上で負傷した方が軽微な状態で、傷の大きさや出血量に大きな違いがあると実感している。

安全に楽しく遊べる環境は、幼児が多様な動きを経験する上で不可欠なものであり、本園の芝生化は、その環境を作り出す大きな要素となった。転倒しても痛くない、大きなけがをしないという「安心感」を幼児がもてることは、自分のしたい動きに臆することなく挑戦する「意欲」の向上にも寄与すると推察する。



(3) 多様な動きの経験を引き出す環境の工夫

ア 園庭を芝生にすることで動きを引き出す

平成 24 年に園庭の一部を芝生化した後、27 年に全面芝生化を実施した。さらに、28～30 年度にかけては、芝生のスペースを拡張してきた。その際、土に触れて遊ぶ経験が継続してできるように、築山周辺は土の部分を残すこととした。それ以前の土の園庭と異なり、転がっても芝生の柔らかさで痛くないという感覚が幼児の中にあるようで、難しいと感じる動きにも積極的に挑戦する姿があった。また、裸足になったり、全身を使って動く遊びに取り組んだりする姿も増えた。

【事例ア－１】芝生に跳び下りる（３歳児）

6月から新しく入った固定遊具に登ったり潜ったりして繰り返し遊んでいる。



慣れてくると、上から跳び下りようになるが、中には高さに慣れず、恐がる幼児もいる。周りが芝生なので、跳び下りた際に衝撃が和らぎ、着地時にバランスを崩しても痛がることはない。



初めは恐がっていた幼児も、動きに慣れ、自分から跳び下りられるようになる。



また、着地の目安にしていたケンステップを長く並べ、コースを作って遊ぶようになる。

【事例ア－２】相撲ごっこをする（５歳児）

鬼遊び（助け鬼）で使っている円形のラインを、土俵に見立てて、A、Bが「相撲しよう」と、遊び始める。Cも加わり「はっけよい、のこった！」と、行司役をしている。



翌日も、朝から遊びの続きをする。Cは裸足になり、Aと体を組む。新たに加わったDが行司役である。教師がトイレットペーパーの芯と空き箱で軍配を作ると「あ、それ知っている」と嬉しそうに手に持つ。



芝生があることで、大きく転がったり倒れたりしても、「もう一回」「今度は僕」と、笑顔ですぐに立ち上がっている。

イ 不足している動きを引き出す

研究内容(1)で整理したように、本園で展開される日常の遊びの中には、幼児期運動指針に示されている「幼児期に経験する基本的な動きの例」の多くが網羅されていた。ただ、平坦な立地の園庭であること、倒木の恐れから複数の木の伐採が必要になったことなどの理由から、「ぶら下がる」動き、「登る」動きは、経験しにくい遊び環境であることも明らかになった。そこで、新たに雲梯と登り棒を園庭に設置した。これらの遊具は、年間を通じて固定するのではなく、自由に配置を検討できるよう、可動式のものを選択した。

【事例イ－１】雲梯にぶら下がる（４歳児）

5月に新しく雲梯が設置された。初めは黄色や赤に「触る」ことを楽しみ、周囲を「走る」ことや足掛け棒を「またぐ」などを楽しむことで安心して雲梯で遊ぶようになった。



「ぶらさがる」ことを試すと、痛い、届かない、できないなど、難しいと感じる姿が見られた。「忍者だからできるんだ」とヒーローになりきり中で、少し難しいことにも挑戦してみようという気持ちが出てきた。繰り返しすることで、「あれ？できた…！」気付いたらできるようになっていた。



「よし今度は10までできるよ！見ててね」と保育者に見守られながら少しずつ「できた」が増えていく。

【事例イ－２】登り棒に登る（５歳児）

雲梯と同時期に、登り棒も設置した。

周囲のジム部分から足をかけて登り、中央の登り棒部分にまずは全身で掴まって滑り下りてくることから、繰り返している。



どんどんと勢いよく取り組む幼児がいる一方で、ジム部分から棒に掴まるところで、躊躇する幼児もいる。



それでもやってみようという気持ちを持ち続け、掴まって下りられるようになった幼児は、その後何度も試している。

ウ テーマをもつことで動きを引き出す

幼児が何かのイメージをもって遊ぶことで、新たな動きが生まれることがある。幼児にとって少し難しいと感じるような動きでも、何かになりきってみることで、できるかもしれないという意欲が芽生える。事例の4歳児学級では、数人の幼児がもち始めた「忍者」のイメージを引き出し、学級共通のものとしていくことで、多様な動きを経験できるように、環境を整えた。「忍者」には、本研究の主題とした「しなやかさ」、つまり「柔らかさ」と「強さ」の両面をもつイメージがある。忍者を環境作りの一つのテーマとして大切にした。また、動きを引き出す要素の一つとして、音、音楽、リズムも捉えた。

【事例ウー１】忍者になりきる（４歳児）

サーキット遊びをしている時、「これって忍者になれそうだね」という言葉をきっかけに忍者の修行が始まった。

友達と同じ手裏剣のアームバンドを身に付け、なりきって動くことを楽しんでいる。

忍者のイメージを膨らませ、自分達でコースを作り、「忍法飛び石の術」「鉄棒横渡りの術」「棒登りの術」などを繰り返す。



敵が来たら手裏剣でやっつけるため手裏剣を「投げる」、マットの上を「すばやく転がる」など体を様々に使って遊ぶ姿が見られる。



【事例ウー２】音を感じながら動く（４歳児）

幼児が親しんでいる音楽に合わせてラバーフープを「跳ぶ」ことを4月から、よくしていた。
リズムに合わせて両足跳びをすることが楽しくなったので、今度は縄を置いてみることにした。

縄を踏まずに「またぐ」「跳ぶ」「進む」「リズムに合わせて跳ぶ」ことをしてみると、ラバーフープと違って、歩幅を自由に決められる心地よさを味わっていた。教師がモデルになり、縄を「またいで跳ぶ」に加えて「回転する」ことをして見せると、「私もできる」と挑戦する姿が見られた。



エ 複数の動きを組み合わせる

幼児期運動指針や同ハンドブックにおいても、組み合わせた動きが含まれる遊びに取り組むことによって、それぞれの動きの滑らかさが期待できること、そのために、遊具を用いた複雑な動きが含まれる遊びや、様々なルールでの鬼遊びなどが望まれることが示されている。そこで、幼児の興味が湧くような遊具を用意したり、様々なルールのある遊びを紹介したりした。特にルールのある遊び、鬼遊び、童歌遊びなどは、大勢で取り組む面白さもあるので、学級全員で遊ぶ機会を作っている。

【事例エー１】ボール送りをする（５歳児）

学級みんなでボール送りの遊びをした。2チームに分かれ、それぞれ一列になって、後ろの幼児にボールを受け渡していくゲームである。

「また、やりたい」という声があったので、数日にわたり、チームを変えたり渡す物を変えたりして取り組んだ。



その後、ボールを受け渡すだけでなく、渡した後に列の最後尾まで走って移動し、ゴールまで早く着いたほうが勝ちというルールを加える。



同じチームの中で「次、次」「こっち」「後ろ」「私の前」などと声を掛け合って、いかにまっすぐの列を保ったまま、移動していくかを試している。

【事例エー２】自分たちでコースを作る（５歳児）

園庭で使えるように、巧技台、古タイヤ、ログセット、マット、ビールケースなどを用意している。
自由に持ち運んでコースを作る遊びが数日継続してあった。



運んだ物を並べていき、実際にスタートからゴールを決めて、渡ってみている。より難しさを感じられるように、組み替えていく。
「よーい、ピー」と合図を出す幼児がおり、「1、2、3…」とゴールまでの時間を数えている。後から「やらせて」と来た幼児が渡り始めると、その周りで、「がんばれ、がんばれ」と応援している。



4 研究のまとめ

(1) 成果

ア 多様な動きを視点とした幼児理解

幼児期運動指針にある 28 の動きが、遊びの中で実際に見られるのか、また、どのような環境や遊びがあることで、それらの動きが引き出されるかについて捉える機会となった。また、遊びの中での姿と、調査で捉えた姿を合わせて見ることで、多角的な幼児理解に繋がった。幼稚園教育は、幼児理解に始まるものであり、これまでも様々な実態把握に努めてきたが、新たな視点で幼児理解を進めることができた。

イ 多様な動きの経験を引き出す工夫

幼児理解と並んで「環境の構成」「環境を通した教育」も、幼稚園教育の重要な側面である。本研究では、これまでに築いてきた本園の遊び環境に加え、「多様な動き」を引き出すという視点で、物的・空間的な環境の工夫を検討できた。特定の運動に焦点を当てた非日常的な場面ではなく、日常的な場面で引き出される動きに幼児期の運動の意味を見出し、新たな教材、遊具、配置などの工夫を考える機会となった。

ウ しなやかな心と体の発達を促す「遊び」の意味

幼稚園教育要領に新たに記載された「多様な動きを経験する中で、体の動きを調節するようになること」は、体の動きの調節だけでなく、心の動きを調節することにも通じていることを再認識した。例えば、自分からやってみようという意欲、諦めずにやってみようという持続力、周囲の友達に動きを合わせていく感覚など、体と心の動きは密接であり、同時に育てることが重要である。そのために今後も、幼稚園教育の核となる「幼児の自発的な活動としての遊び」を第一に、実践と研究を進めたい。

(2) 課題

小学校学習指導要領では、高等学校までの 12 年間を見通し、発達の段階を踏まえること、幼稚園との接続を重視することが示されている。幼稚園教育では、遊びを通した総合的な指導の中で体育教育も実施するが、そのことをどのように小学校以上の教科教育に繋げるか、具体的な方策を検討することが課題である。指導内容及び方法の系統性をいかに担保するか、教育課程上の接続を今後も目指していきたいと考える。

共同研究者 紹介	有川 秀之 埼玉大学教育学部身体文化講座 教授
学歴・職歴：筑波大学大学院修了(体育学修士)、福岡県立福岡中央高等学校教諭付福岡県教育庁指導第一部体育課、埼玉大学講師、同助教授を経て、現職(2004 年 4 月～)、文部省在外研究員として英国(セントメリー大学)にて研究(1996 年 3 月～97 年 1 月)、埼玉大学教育学部附属小学校校長併任(2014 年 4 月～17 年 3 月)	
専門分野：運動学、トレーニング学、陸上競技	
競技：第 10 回アジア大会陸上競技 400m リレー準優勝 他	
指導：オリンピック競技大会陸上競技日本代表役員(シドニー、アテネ、ロンドン)他	
業績：「北京オリンピック男子 4×100m リレー銅メダル獲得までの取り組み」『スプリント&ハードル』, 陸上競技社, 第 9 章-1, 169-174 頁. 2012	
「子どもの走力の発達」『子どもと発育発達』(日本発育発達学会)Vol112(1), 8-15 頁. 2014	

小学校部会

第2分科会

研究主題

個の力と集団の力を共に高め、
自己肯定感や自己有用感の育成を目指した体育科指導の工夫
さいたま市立芝川小学校

日 程

受付	公開授業 ①	休憩	公開授業 ②	休憩	公開授業 ③	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
8:45	9:15	10:00	10:15	11:00	11:15	12:00	13:00		15:00

公開授業案内

区分	内容	場所
公開授業①	第2学年 「多様な動きをつくる運動遊び」(体づくりの運動遊び)	体育館
公開授業②	第3学年 「ネット型ゲーム」(ゲーム)	体育館
公開授業③	第6学年 「投の運動」(陸上運動)	運動場

学校所在地

〒330-0834
埼玉県さいたま市大宮区天沼2-1077

交通機関

J R 京浜東北線
J R 湘南新宿ライン
J R 埼京線 等
・大宮駅からバスで15分
・さいたま新都心駅からタクシーで約15分
※無料送迎バスあり

さいたま市立芝川小学校



所在地：〒330-0834

埼玉県さいたま市大宮区天沼 2-1077

連絡先：Tel 048-644-7544 Fax 048-644-5604

E-mail：shibakawa-e@saitama-city.ed.jp

H P：http://shibakawa-e.saitama-city.ed.jp/

校長：佐藤利春

児童数：671 名

◎教育目標

かしこく（知） ただしく（徳） たくましく（体） ゆたかに（コミュニケーション）

◎学校紹介

本校の目指す学校像は、「輝く笑顔 学ぶ意欲 あふれる学校」である。今年度で 46 周年を迎える、児童数 671 名の学校である。大宮駅やさいたま新都心の近くでありながらも、芝川と見沼代用水にはさまれ、眼前に大きな公園と畑が広がる自然豊かな立地となっている。毎年 6 月には数百のホタルを放つ「夜のホタル観賞会」が開催され、子供だけでなく地域の人々の目も楽しませている。

1 研究の構想

(1) 研究主題

個の力と集団の力を共に高め、
自己肯定感や自己有用感の育成を目指した体育科指導の工夫

(2) 研修主題設定の理由

ア 今日の課題から

平成 28 年 8 月「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」が示された。その中で、新しい時代を担う子供たちに育成すべき資質・能力が、「何を理解しているか、何ができるか(生きて働く『知識・理解』の習得)」、「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成)」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養)」の 3 つの柱で整理された。こうした資質・能力を育成するためには、学習内容が重要なだけでなく、その内容をどのように学ぶかが大切である。その実現に向けて、課題の発見と解決に向けた主体的・対話的で深い学びが注目されているが、その基盤となるのは間違いなく子供たちの学びの単位となる学級や学校生活における様々な集団である。そのため、それぞれが、一人一人のよさや違いを認め合ったり、互いに高め合ったりできる集団の育成が求められる。

イ 本校の子供の実態

本校の子供は、明るく素直な子たちが多い。校庭が広く、元気に外遊びをしている子や社会体育で様々な運動やスポーツに取り組んでいる子も多い。一方で、さいたま市の質問紙調査である「心と生活のアンケート」を見ると、自分に自信をもてない子や他者への信頼が薄い子が少なくはないという課題が見られる。また、体力・運動能力調査結果から、全国平均と比べると、立ち幅跳びやソフトボール投げに大きな課題が見られる。

ウ 本校のこれまでの研究の流れから

本校では、互いに学び合い、認め合い、高め合う子供の育成を目指し、9 か年計画で研究を進めている。平成 25 年度から 27 年度にかけて、第 1 次として、副題を「『やったね』『できたね』『がんばったね』互いに認め合う集団づくりを目指して」とし、体育授業を核とした肯定的集団^{注1)}の育成に関する研究に取り組んできた。そこでは、体育授業において、子供たちが互いに認め合い、高め合う様子が見られただけでなく、質問紙調査からも一定の成果を出すことができた。

また、認め合う集団をつくるには、自分は大切な存在、価値ある存在だと感じる自己肯定感^{注2)}や自分は学級や学校の役に立っている必要な人間だと感じる自己有用感^{注3)}を高める指導が重要であることがわかってきた。さらに、体育授業だけでなく、様々な教育活動の場面において個を大切にしながら集団をより一層高めていく指導と集団を高めながら個を大切にしていける指導の双方を繰り返し意識的に行っていくことが、大きな研究成果を得るためには必要であることもわかってきた。

そこで、平成 28 年度から平成 31 年度(令和元年度)にかけて、第 2 次として、副題を「～個から集団へ、集団から個へ～」とし、体育科の他に特別の教科道徳を研究の対象に加え、子供たち個々の自己有用感や自己肯定感をどうしたら効果的に高めることができるのか、様々な教育活動で計画的に子供たちを肯定的集団へと導くにはどうしたらよいのか、これらの指導方法などを明らかにする研究を行っている。

注 1) 肯定的集団とは、一人一人のよさや違いを互いに認め、互いに高め合う集団。肯定的なかかわりのある人間関係が築かれた一定数の集団。

注 2) 本校が目指す自己肯定感とは、自己有用感に裏付けられた自尊感情。自分は大切な存在、価値ある存在だと感じる心。

注 3) 自己有用感とは、他人の役に立った、他人に喜んでもらえた等、相手の存在なしには生まれてこない感情。人とかかわったり、集団活動に参加したりするなどのかかわりを通して、協力できた、自分から働

きかけができた、だれかの役に立つことができたという集団の一員としての自信や誇り。
【参考文献】「自尊感情」？それとも、「自己有用感」？

文部科学省国立教育政策研究所 生徒指導・新指導研究センター編(2015. 8)

エ 小学校学習指導要領(体育科)から

第9節体育の目標は、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見つけ、その解決に向けた学習活動を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成を目指す」とされている。

従って、学校教育における日々の体育授業において、様々な運動の特性に触れながら、できることや集う喜び、共に認め合い、高め合う楽しさを経験することで、体育科の究極の目標である「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成」を目指すことが重要だと考える。

以上のことから、本校では、個の力と集団の力を共に高め、自己肯定感や自己有用感の育成を目指した体育科指導の工夫に重点を置き、本研究主題を設定した。

(3) 研究の仮説

一人一人のできた喜びと共に仲間とできた喜びを味わうことができれば、自分への自信や集団の一員としての誇りを持ち、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することができるだろう。

(4) 本校において重点としている研究の視点

本校では、本大会における研究の視点1「指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成」の①指導内容の明確化、②評価の工夫、視点2「主体的・対話的で深い学びを目指した指導の工夫」の①教材・教具の工夫、②学習過程の工夫、③学習形態の工夫をバランスよく重点化している。

2 研究の内容

(1) 子供一人一人が自分やチームの課題を主体的に捉える工夫

視点1 ①指導内容の明確化

子供に提示する学習課題と指導内容、発問計画の一貫性を大切にすることで、子供一人一人が自分の課題やチームの課題などを主体的に捉えることができるようにする。また、学習のテーマやストーリー性を工夫することで、子供たちが主体的に楽しみながら学習に取り組むことができるようにする。

【学習課題と指導内容、発問計画例】

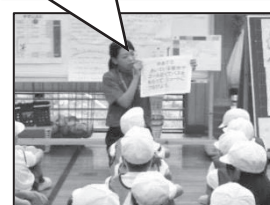
	学習のねらい	指導内容	発問
4	○パスが通りやすい場所を考えよう。	・空いている場所へのパス	T：どこにパスを出すと、通りやすいのでしょうか？ C：敵がいらないところ。 空いているところ T：敵がいらない、空いている場所にパスを出すと通りやすいですね。
5	○空いている場所や、ゴール近くでパスをもらって、シュートにつなげよう。	・空いている場所への移動 ・ゴール近くでパスをもらう。	T：得点を取るためには、どのように動けばよいのでしょうか。 C：空いている場所、敵がいらない場所に移動する。 C：ゴール近くでパスをもらう。 T：今日は、ゴールにつながるように、空いている場所やゴール近くでパスがもらえるようにしましょう。

学習課題、指導内容、発問計画の一貫性

学習のテーマやストーリーがすぐにわかる単元名

みんなでつないで、
ナイスシュート！
ハンドボール

前時までに空いている場所への移動やパスについて学んできましたね。今日は、シュートにつなげるには、どこでパスをもらったらいかが考えましょう。



【テーマやストーリー例】

低 「〇〇ランド」や「△△の冒険」
中 「みんなで協力合って〇〇マスターを目指そう」
高 「スペースを見つけてパス&ラン 〇〇ボール」

(2) ゴールイメージの共有化

視点1 ②評価の工夫

各時間には、重点評価項目があり、その評価方法や場面の計画が設定してある。それをもとに各時間の授業を行うことで、指導と評価の一体化を目指す。また、ICTの活用や見合う活動、掲示や教師の声かけによって、どんな動きやどんな態度がよいのか共通理解を図ることで、子供たちがそれに従って行動しようとしたり、互いに評価し合ったりすることができるようにする。

【教師の評価計画例】

評価計画	知・技			
	思・判・表		①②	①②
	態	①②③		
	方法	行動観察・学習カード	行動観察・学習カード	行動観察・学習カード
	場面	4 5 6	4 6	4 6

【ICTの活用やよい動きを見合う活動例】

【態度面に関する掲示と教師の声かけ例】



ICTの活用

アドバイスができていて、素晴らしいですね。それをしっかりと聞いてできるようになった〇〇さんも素晴らしいし、それを見ていて気付いた△△くんもすごいよね。



よい動きを見合う



掲示物によって、技能面だけでなく、態度面においてもどんな行動がよいのかの共通理解を図る。

(3) 達成のラインが明確な課題、挑戦的な達成課題のある場の設定

視点2 ①教材・教具の工夫

子供たちが身に付けるべき動きを確実に習得できるように、それぞれの活動で達成のラインをわかりやすく設定する。また、子供たちが発展的に動きの質を向上させていけるように、場や条件(人数、回数、距離、記録、方向、用具の有無など)を工夫する。あるいは、子供がやってみたいと思えるような場を工夫して設定する。

【スモールステップの設定例】

- ・ 1つの動き(運動)に対しての3つ程度のスモールステップを設定

- ① どの子にも達成可能な課題(または1人で達成できる課題)
- ② 場や条件を変えて動きの質を高める課題(またはペアやグループで達成できる課題)
- ③ 自分(たち)で考えて工夫する発展的な課題(または集団で達成できる課題)

- ・ もう少しがんばればできそうな課題の設定
- ・ 「できた」「もう少し」がわかりやすい場や目標の設定

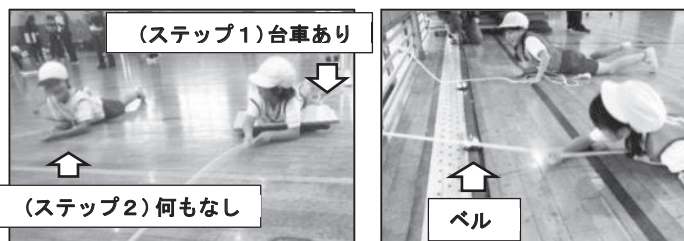
【学習課題や場の工夫例】「第2学年 体づくりの運動遊び(多様な動きをつくる運動遊び)」

課題

- ・ 大きく腕を動かすために、できる限り、回数を少なくしてゴールしよう。

場の工夫

- ・ ロープの長さ(長短を3段階程度設定する)
- ・ 用具(台車、バスタオル、何もなし等)
- ・ ロープの終着点にベルを置くことで、できた達成感を味わわせる。

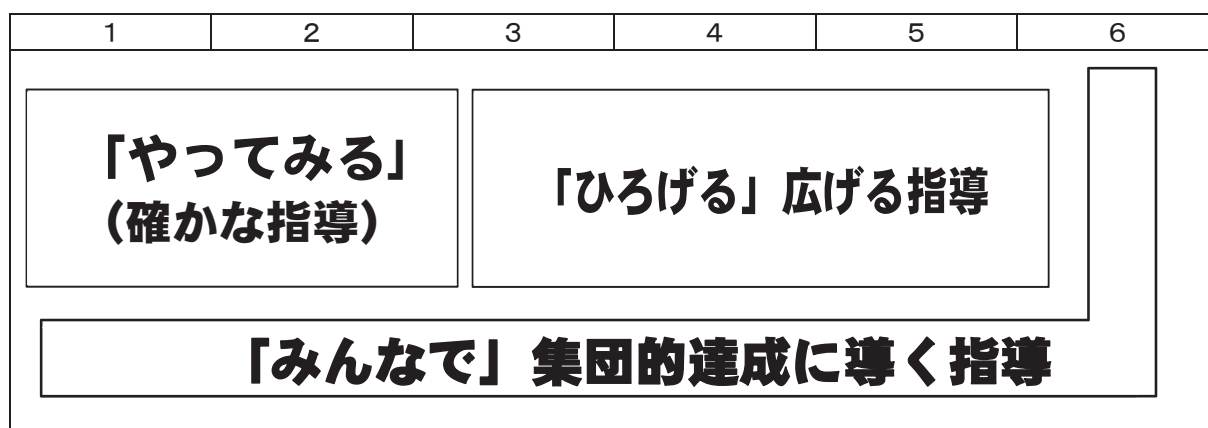


(4) 個と集団の達成感を味わわせる学習過程の工夫

視点2 ②学習過程の工夫

1時間の学習を「やってみる」から「ひろげる」そして「みんなで」という流れで組み立てる。「やってみる」では、教師が望ましい動きを伝え、子供たち一人一人(個)に段階的に「できる」を保証させることができるようにする。次の「ひろげる」では、運動の行い方を工夫したり、人数などの条件を変えたりして活動を広げることで、子供たちに「もっとできた」経験を味わわせられるようにする。こうした運動技能の習得を目指した学習を基盤に、「できた」という達成感を個でも集団でも味わわせることで、一人一人の動きだけでなく、みんなの動きも相互に高めることができると考える。一人一人の「できた、やった」がみんなへと広がることで、「学級の一員として学びに貢献できた」という自己有用感や、自分は「できる」という自己肯定感をもてるようにする。

【学習過程のモデル例】



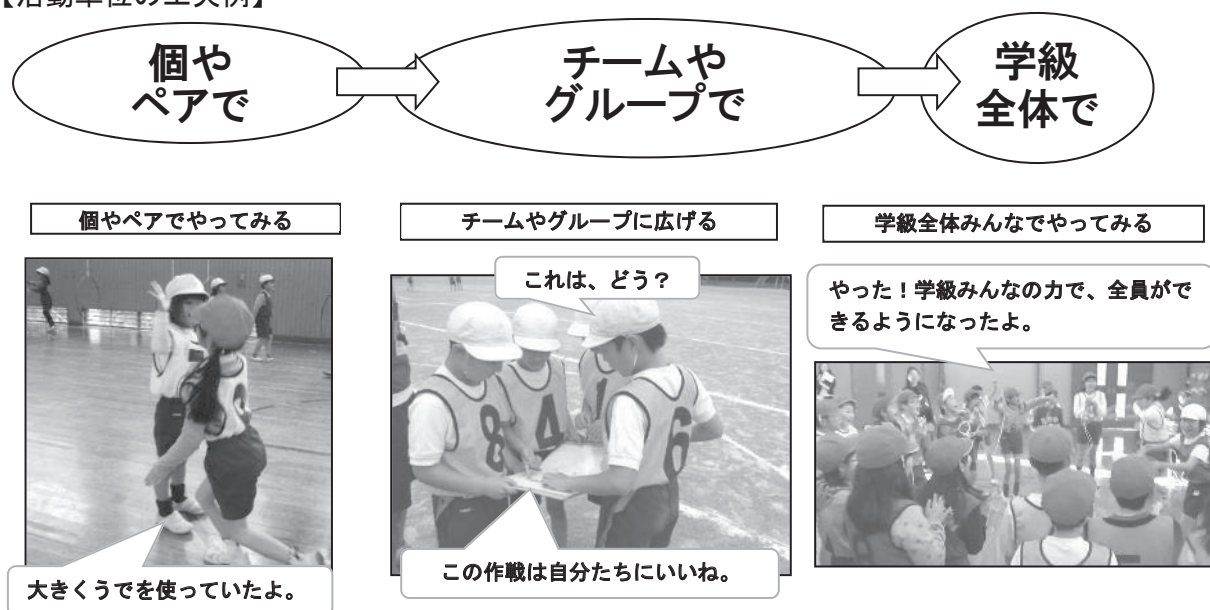
(5) 個も集団も大切にするための活動の工夫

視点2 ③学習形態の工夫

1単元もしくは1時間の授業の流れの中で、個も集団も大切にできるような活動を工夫するために、各活動の人数(活動単位)の工夫をする。

例えば、個からペア、チームやグループで、学級全体でと活動単位を意図的・段階的に広げていくことで、子供たちが「1人でできる」から「仲間とかかわりながらできる」へと学びの経験を積み重ねることができるようにする。

【活動単位の工夫例】



3 研究の実際

(1) 第5学年「体の動きを高める運動」の实践から

ア 達成ラインが明確な課題、挑戦的な達成課題のある場の設定

視点2 ①教材・教具の工夫

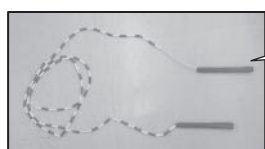
チャイニーズホイール(2名以上が人数と同数のなわを連鎖させて行なうなわとび)において、学級のみんなができる喜びを味わえるように、跳べるようになるまでのスモールステップを「チャイニーズホイールマスターへの道」として設定した。また、跳べるようになったあとは、STEP1～3のスモールステップを設定した。

【チャイニーズホイールの跳び方とスモールステップ】



チャイニーズホイールマスターへの道

- ①縄をもたずに両手を交互に回そう!
- ②たばねた縄を両手に持ってリズムよく回そう!
- ③ペアになって、縄を1本使い、一人は跳んで、もう一人は外側にたばねて持った縄を交互に回そう!
- ④スタート練習をしようⅠ! 1回ずつ交互にスタートし、跳ばずに足に引っ掛けておわる。
- ⑤スタート練習をしようⅡ! 1回ずつ交互にスタートし、1回跳んで足に引っ掛ける。



教具は、ビーズロープを使用すると技の達成を導きやすい。

STEP1 1回ずつ交互に跳ぼう! STEP2 ペアで8回跳ぼう! STEP3 技を発展させよう!



腕が交互に回すのが難しい場合は、一人が実際に跳び、もう一人は空回しするなど、個に応じた指導も大切。



ペアで練習し、8回を目指す。



できたら、発展技(インナーターン)に挑戦だ。

イ 個も集団も大切にするための活動の工夫

視点2 ③学習形態の工夫

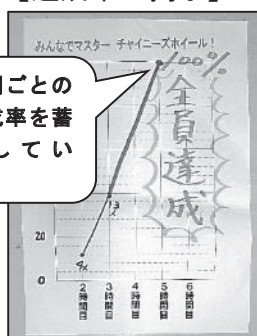
学級の仲間がいないと成功できないような条件を設定することで、個人が達成できた喜びを学級全員で共有し合えるようにした(集団的達成)。

【学級みんなで集団達成】

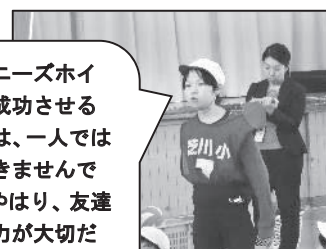


できた喜びをみんなで共有する。

【達成率の掲示】



【仲間がいる大切さの共有】



チャイニーズホイールを成功させるためには、一人では達成できませんでした。やはり、友達との協力が大切だと感じました。

(2) 第5学年「走り幅跳び」の実践から

ア 子供一人一人が自分やチームの課題を主体的に捉える工夫

視点1 ①指導内容の明確化

本単元では、単元名を「クラスみんなで新記録 リズムにのってナイスジャンプ」と設定した。技能面・態度面における本単元で目指す子供の姿を単元名に取り入れることで、子供が学習のゴールイメージをもって主体的に学習に取り組むことができるようにした。また、学習過程における子供の困り感に寄り沿った学習課題、指導内容、発問を設定することで、子供が毎時間の課題を主体的に捉え、課題解決に向けて意欲的に学習に取り組むことができるようにしようと考えた。

単元名「クラスみんなで新記録 リズムにのってナイスジャンプ」			
	学習のねらい	指導内容	発問
4	9歩で踏み切るにはどこから助走をすればよいのか見つけよう。	・9歩助走 ・9歩の助走距離	T:前の時間では、「きばれ4・5」のリズムで5歩助走から力強く跳ぶことができましたね。でも、もっと遠くに跳べるようになりたいですね。さらに、遠くに跳ぶためには、どうしたらよいと思いますか？ C:やっぱり、もう少し助走があったほうが遠くに跳べそうな気がします。 T:そうですね。では、今日の学習では5歩のリズムは残したまま、4歩伸ばして9歩で助走してみましょう。まず、9歩での自分の踏み切り位置はどこか調べてみましょう。
5	リズムにのって、力強く踏み切るための助走の仕方について知ろう。	・リズムアップ ・リズムカルな助走	T:前の時間では、助走が9歩になりましたが、みんなちょうどよいスタート位置がわかりましたね。その時に、上手な助走をしている子を見つけました。〇〇さんの助走のスピードに注目しながら、見てみましょう。 T:どうですか？ C:助走がだんだん速くなっています。 T:そうですね。はじめの「1・2・3・4」から「きばれ4・5」でスピードが上がっていましたね。この助走の仕方をリズムアップと言います。今日はリズムアップしながら力強く跳べるように練習しましょう。
6	より遠くに跳ぶために、チームで教え合って、記録を伸ばそう。	・自分の課題の把握 ・課題解決に向けた練習	T:これまで、フォームや助走の仕方、力強い踏み切りについて学んできました。自分の中でここをもう少し練習すると記録を伸ばせそうだなという自分の課題はありますか？ C:ぼくは、スピードに乗ってから上手に踏み切れなくて困っています。 C:わたしは、最後の2歩が大股になってしまいます。 T:そうですね。今日は、それぞれの課題を解決できるように友達と教え合って、クラスみんなで記録を伸ばせるようにしていきましょう。
7	今まで学習したことを生かして、自分やチームの最高記録を目指そう。	・記録会 ・今までの学習で学んだこと	T:これまでの学習でどんなことができるようになりましたか？ C:リズムカルな助走をして、跳ぶことができるようになりました。 C:力強く踏み切れるようになりました。 C:みんなでアドバイスし合いながら練習ができました。 T:そうですね。これらを生かして、今日は、最後の記録会です。力を発揮できるように、頑張りましょう。

図Ⅰ 走り幅跳びの学習における単元名、学習課題、指導内容と発問計画

- ◎助走から踏み切りまでの一連の動作に関する指導を中核とする。
- ・リズムカルな助走から踏み切りやすい助走
 - ・自分の諸相距離を測る。
 - ・最後の2歩、力強いアクセント。
 - ・「1・2・3・4、きばれ4・5」。

図Ⅱ 技能指導の重点事項

【6時間目の学習における教師の発問】



これまで、フォームや助走の仕方、力強い踏み切りについて学んできました。自分の中でここをもう少し練習すると記録を伸ばせそうだなという自分の課題はありますか？

イ 達成ラインが明確な課題、挑戦的な達成課題のある場の設定

視点2 ②教材・教具の工夫

本単元では、リズムカルな助走から力強く踏み切って跳ぶことを技能指導の重点に置いた。そのために、チームのみんなが互いに「リズムカルな助走から最後の2歩で力強く踏み切っていたかどうか分かる」よう4・5板^{し・ご}を作成した。「1・2・3・4きばれ、4・5」のリズムに乗って、最後の2歩で力強く踏み切れていたかどうか4・5板を踏むことで判断できるようにした。また、パワーアップタイムの場では、それぞれがどんな動きを身に付けたらよいのかを明確にした場を設定するようにした。さらに、最後の記録会では、子供一人一人が自己の記録が伸びた達成感が得られるように、目標記録を設定し、記録に挑戦できるようにした。

【走り幅跳びの場の設定】

パワーアップタイムの場

ケンステップ

45板 踏み切り板

ベット ボトル

跳び箱

跳び箱

踏み越し跳びの場

- ・3歩助走で踏み切る。
- ・最後の2歩で力強く踏み切る。
- ・滞空時間を長くする。

ふわっと着地の場

- ・5歩助走で踏み切る。
- ・上体をかがめる。
- ・体は『ん』の字。
- ・膝を曲げて両足で着地する。

ファイヤージャンプの場

- ・5歩助走で踏み切る。
- ・両腕を上げる。
- ・踏み切り足を胸に引き付ける。
- ・目線はななめ上。

僕に注目！ほたるの助

- ・跳ぶときに目線を下げないようにするための目印。

課題解決学習や記録会の場

4

5

4・5(し・ご)板

- ・最後の2歩で力強く跳踏み切れることを意識させるための板。

60cm 90cm

板2枚

計測トンボ(塩ビ管パイプで作成)

- ・土をならしながら、跳んだ距離を測ることができるトンボ。

例：50m走の記録が8.6秒の女兒が、257～263cm跳ぶと9点となる。

得点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
大会名	さいたま市大会					埼玉県大会						
ランク	5	4	3	銀	金	5	4	3	銀	金	5	4
8.0	210	215	221	227	233	245	259	266	273	281	288	296
8.1	207	213	218	224	230	243	256	263	270	278	286	293
8.2	204	210	215	221	227	240	253	260	268	275	283	290
8.3	201	207	213	219	225	237	251	258	265	273	280	287
8.4	199	204	210	216	222	234	248	255	262	270	277	285
8.5	196	202	207	213	219	232	245	252	260	267	275	282
8.6	193	199	204	210	216	229	242	249	257	264	272	279
8.7	190	196	202	208	214	226	240	247	254	262	269	276

※参考 走り幅跳びハンドブック（東京都小学校体育研究会 陸上運動領域部会）

図Ⅲ 個の力に応じた得点表

ウ 個と集団の達成感を味わわせる指導の工夫

視点2 ②学習過程の工夫

個でも集団でも達成感を味わえる学習とするために、学習過程を「確かな指導(やってみる)」から「広げる指導(ひろげる)」,そして「集団的達成に導く指導(みんなで)」という流れで構成した。「確かな指導」では、走り幅跳びの基本となるフォームや、力強い踏み切り、着地といった走り幅跳びに必要な基本的な技能を確実に身に付け、達成感を得られるようにした。単元の中盤の「広げる指導」では、これまでに身に付けた技能に加えて、リズムカルな助走からの力強い踏み切りが一連の動きとしてできるようにするために、チームの、みんなで互いに教え合い励まし合いながら、できる喜びを味わわせるようにした。また、毎時間の最後には記録会を行い、チームや学級全体の記録の伸びを共有することで、子供一人一人に記録が伸びたという達成感や、チームや学級全体の記録の伸びに貢献できたという気持ちを味わえるようにした。さらに、単元の最後には、学年での走り幅跳び大会を行うことで、個人やチーム、学級としての高まりを学年全体に広めることができるようにした。

時	1	2	3	4	5	6	7
学習過程	《オリエンテーション》 3 単元の学習内容と本時のねらいを確認する。 4 学習の仕方や進め方に見通しをもつ。 「やってみる」 確かな指導 ・背の測定 ・単元の学習目標 ・学習の進め方 ・学習カードの使い方 ・準備、片付け 5 始めの記録をとる。 7 本時のまとめをする。	3 動きの課題を知る 4 パフォーマンスの行い方を知る。	「やってみる」 確かな指導 1 集団・基がけのウォームアップ・健康観察をする。 2 バレーボールの準備運動をする。 3 本時のめあてを確認する。 4 課題解決学習 「ひろげる」 広げる指導 5 ミニ記録会 本気の2本 6 ミニ記録会 本気の2本 「みんなで」 集団的達成に導く指導 8 整理運動をする。	「やってみる」 確かな指導 1 集団・基がけのウォームアップ・健康観察をする。 2 バレーボールの準備運動をする。 3 本時のめあてを確認する。 4 課題解決学習 「ひろげる」 広げる指導 5 ミニ記録会 本気の2本 6 ミニ記録会 本気の2本 「みんなで」 集団的達成に導く指導 8 整理運動をする。	「やってみる」 確かな指導 1 集団・基がけのウォームアップ・健康観察をする。 2 バレーボールの準備運動をする。 3 本時のめあてを確認する。 4 課題解決学習 「ひろげる」 広げる指導 5 ミニ記録会 本気の2本 6 ミニ記録会 本気の2本 「みんなで」 集団的達成に導く指導 8 整理運動をする。	「やってみる」 確かな指導 1 集団・基がけのウォームアップ・健康観察をする。 2 バレーボールの準備運動をする。 3 本時のめあてを確認する。 4 課題解決学習 「ひろげる」 広げる指導 5 ミニ記録会 本気の2本 6 ミニ記録会 本気の2本 「みんなで」 集団的達成に導く指導 8 整理運動をする。	「やってみる」 確かな指導 1 集団・基がけのウォームアップ・健康観察をする。 2 バレーボールの準備運動をする。 3 本時のめあてを確認する。 4 課題解決学習 「ひろげる」 広げる指導 5 ミニ記録会 本気の2本 6 ミニ記録会 本気の2本 「みんなで」 集団的達成に導く指導 8 整理運動をする。

図Ⅳ 走り幅跳びにおける個でも集団でも達成感を味わえる学習過程

(3) 第4学年「フラッグフットボール」の実践から

ア ゴールイメージの共有化

視点1 ②評価の工夫

教師の指導計画をもとに、よい動きについてみんなで話し合う時間や「見て - わかる」活動の設定、技能ポイントのわかる掲示資料を活用し、子供がどんな動きがよいのかを共有し、技能面を互いに評価し合えるようにした。

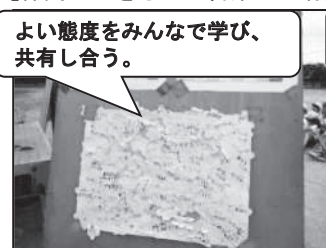
また、学習の中で、使ってほしい言葉「あったか言葉」や「グッドスポーツマンとは何か」を考えたり、ハイタッチなどの仲間同士の喜び方やファイトコールなどの団結力を高める行動様式の基礎を学んだりすることで、どんな学習態度がよいといえるのかを評価し合えるようにした。

さらに、タッチダウンできた人数を毎時間掲示して、「チームみんなでタッチダウン」「学級みんながタッチダウン」という目標を共有し合うことで、達成の喜びをチームや学級全体で認め合えるようにした。

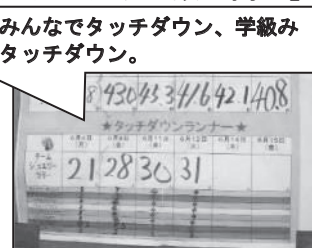
【見てわかる掲示とよい動きを話し合う時間】



【仲間に力を与える言葉の共有】



【タッチダウン数の掲示】



4 研究のまとめ

(1) 成果

ア 体育授業アンケート結果の変容

本校では、文献を参考にして作成した体育授業アンケート調査を研究授業対象学級に単元の前後に行っている。「はい4点、どちらかといえばそう思う3点、どちらかといえばそう思わない2点、いいえ1点」とし4点満点でアンケートを実施している。概ね全ての授業、多くの項目（情意面、技能面、思考面、態度面）で、成果を上げることができた。

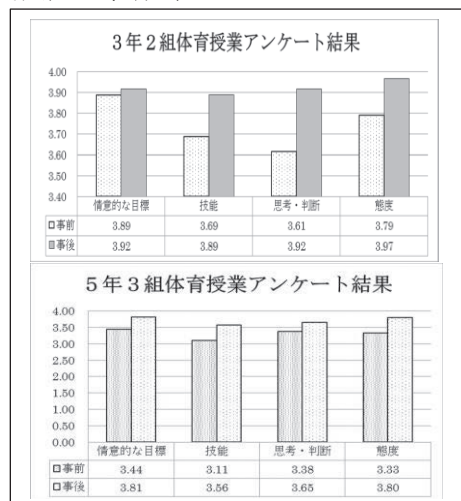
芝川小体育授業についての調査（高学年）（ 月 日）
芝川 小学校 年 組 男・女 番
名前（ ）

◎ これまでの体育の授業を思い出して、下の質問にこたえてください。
あなたの考えにもっとも当てはまるものに○をつけてください。

- 1 体育では、みんなが楽しく運動（学習）できます。
- 2 体育で体を動かすと、とても気持ちがいいです。
- 3 体育では、いろいろな運動が上手にできるようになります。
- 4 体育では、少しむずかしい運動でも練習するとできるようになります。
- 5 体育では、どうしたら上手にできるようになるか考えたり、工夫したりしながら運動（学習）しています。
- 6 体育では、わかったことや考えたことを友達に伝えるようにしています。
- 7 体育では、学習のめあてや自分のめあてに向かって進んで運動（学習）しています。
- 8 体育では、準備や片付けはみんなで協力しています。
- 9 体育では、安全に気を付けて運動（学習）しています。
- 10 体育では、友達のいいところを見ついたり、アドバイスしたりして運動（学習）しています。
- 11 体育では、ルールやマナーを守って運動（学習）しています。

【参考文献】体育授業を観察評価する（2003）明和図書

図V 調査用紙（高学年）



図VI 3年と5年の調査結果

※図Vの調査用紙は、新学習指導要領に合わせた内容で作成したものである。昨年度までは、現行の学習指導要領に合わせた調査用紙で行っていたため、図VIの調査結果は昨年度までの調査用紙によるものである。

イ 個の力と集団の力の高まり

子供が「できた」という実感を得る場面や友達のよいところを認め合ったり、互いに助け合ったりする場面が増えてきた。できた喜びや認められた喜び、助け合うよさを感じることで、子供一人一人の自己肯定感や自己有用感を育てることにつながった。また、友達のアドバイスで「～ができるようになった」という感想を言う子、友達の発言をしっかりと聞ける子が増えてきた。こうしたよさを全体に広めることで、みんなで認め合う集団や一人一人を大切にする気持ちが育ってきた。

【教師と子供が喜び合う姿】

【子供同士で認め合う姿】

【子供同士で助け合う姿】



(2) 課題

ア 自発的に課題を解決できる集団の育成

子供たちが進んで関わり合い、問題を解決する姿が見られてきている。引き続き、自分たちの課題を解決するために自発的に話し合える集団をつくりたい。そうすることで、一人一人の考えを大切にする集団や自分だけではなく集団のことを考えた行動のできる子供を育てていきたい。

イ 体育における確かな学力を身に付けさせる指導の継続と個に応じた指導の充実

体育における確かな学力（技能面、思考面、態度面）を身に付けさせることができこそ、子供たちの本質的な関わり合いや自己肯定感、自己有用感の向上が見られる。教師が毎授業・各場面で特に何を身に付けさせたいのかを明確にもち指導を継続して行うことで、子供たちの本質的な関わり合いや子供の自己肯定感や自己有用感のより一層の向上を目指したい。そして、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成へと繋げていきたい。また、自己肯定感や自己有用感の依然として低い子供には、個に応じた指導を充実させていきたい。

第3分科会

研究主題

『わかった』『できた』を味わうことができる
ユニバーサルデザインを重視した授業の工夫

さいたま市立常盤小学校

日 程

受付	公開授業 ①	休憩	公開授業 ②	休憩	公開授業 ③	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
9:00	9:25	10:10	10:20	11:05	11:15	12:00	13:00		15:00

公開授業案内

区分	内容	場所
公開授業①	第2学年 「たからはこびおに」(ゲーム 鬼遊び)	運動場
公開授業②	第4学年 「フラッグフットボール」(ゲーム ゴール型ゲーム)	運動場
公開授業③	第6学年 「フラッグフットボール」(ボール運動 ゴール型)	運動場

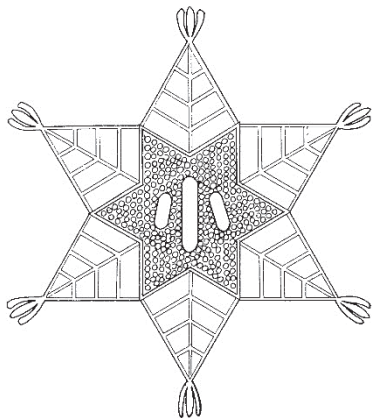
学校所在地

〒330-0061
埼玉県さいたま市浦和区常盤9-30-9

交通機関

J R 京浜東北線
・北浦和駅から徒歩8分

さいたま市立常盤小学校



所在地：〒330-0061

埼玉県さいたま市浦和区常盤 9-30-9

連絡先：Tel 048-831-2349 Fax 048-835-1354

E-mail：tokiwa-e@saitama-city.ed.jp

H P：http://tokiwa-e.saitama-city.ed.jp/

校長：宮原 孝

児童数：931 名

◎教育目標

心身ともに健康で 思いやりの心を持ち 主体的に学ぶ常盤っ子の育成

◎重点目標

よく考える子 思いやりのある子 たくましい子 かかわりあいを大切にする子

◎学校紹介

本校は昭和2年4月1日、浦和町立浦和尋常小学校分校として設置され、昭和5年4月1日に独立して、浦和尋常小学校となった。昭和22年、学制改革により浦和市立常盤小学校と改称、平成13年、旧浦和市・大宮市・与野市の合併により、さいたま市立常盤小学校と改称し、今年度創立90年目を迎える歴史と伝統ある学校である。全教職員が学校教育目標の実現に向け、一丸となって教育活動を進めている。

1 研究の構想

(1) 研究主題

「わかった」「できた」を味わうことができるユニバーサルデザインを重視した授業の工夫

(2) 研修主題設定の理由

全国体力・運動能力、運動習慣等調査（スポーツ庁）によると、体育の授業に対してマイナスイメージをもつ児童の多くは「小学校入学前から体を動かすことが好きではなかった。」と回答している。また、中学校の調査において、「中学校入学前から体を動かすことが好きではなかった。」と回答していることから、就学前に体を動かすことが嫌いな状況を小学校の体育授業で変えることができず、運動に対する肯定感が高まるような実践が十分に図られていないことが課題として考えられる。

また、小学校学習指導要領解説体育編（平成 29 年 7 月）においても、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成に向けて、運動が苦手な児童や運動に意欲的ではない児童への指導等の在り方について配慮する必要があることを挙げている。つまり、全ての児童が楽しく安心して運動に取り組み、成功体験を多く味わうことができる体育授業の実践がこれからの体育授業において必要不可欠であると言える。

これらを踏まえて、全ての児童が主体的・協働的な学習過程を通して「わかった」「できた」楽しさを味わい、運動に対する肯定感が高まる体育授業づくりを目指し、本研究主題を設定した。

(3) 研究仮説

「わかった」「できた」楽しさを味わう体育授業を行えば、運動に対する自信が高まり、進んで運動する児童が増えるだろう。

本校の実態調査では、体育授業に苦手意識をもつ児童にとって、「今、行われている体育授業は難しい」と感じている児童が多いことが分かった。中でもボールを使った授業への苦手意識が女子児童に強く、主な理由として教材の難しさや勝敗を巡る中での人間関係への不安を挙げている。

そこで、ボール運動系領域を中心に「やさしい設計」や「合理的な配慮」を軸としたユニバーサルの視点を踏まえた授業改善に取り組み、児童が「わかってできた」経験を十分に味わうことができるようにする。

なお、本校における「わかってできる」とは、「意図的な動きを繰り返しできること」と定義している。

(4) 本校において重点としている研究の視点

本校では、本大会における研究の視点 1 「指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画」の①指導内容の明確化、視点 2 「主体的・対話的で深い学びを目指した指導の工夫」の①教材・教具の工夫、②学習過程の工夫、③学習形態の工夫を重点としている。

2 研究内容

ユニバーサルデザインの考え方を体育の学習に当てはめる（表1）。ユニバーサルとは、最大限可能な範囲ですべての人が使用することができる製品、環境、計画及びサービスの設計で、アメリカの建築家であり工業デザイナーでもあったロナルド・メイスらにより提唱された「ユニバーサルデザイン7原則」を、さいたま市では独自に4つのプラス・ハートに読み替えている。

【表1 さいたま市4つのプラス・ハート】

プラス・ハート1	だれにでも「ちょうどいい」 (原則1：誰にでも公平に利用できる) (原則2：使う上で自由度が高い) (原則7：アクセスしやすいスペースと大きさ)
プラス・ハート2	だれにでも「無理なく楽に」 (原則3：使い方が簡単ですぐわかる) (原則6：無理な姿勢をとることなく、 少ない力でも利用できる)
プラス・ハート3	だれにでも「わかりやすい」 (原則3：使い方が簡単ですぐわかる) (原則4：必要な情報がすぐに理解できる)
プラス・ハート4	だれにでも「安心・安全」 (原則5：うっかりミスや危険につながらない)

また、年2回、運動有能感調査*¹（岡澤ら，1996）及び体育授業に関する意識調査を行い、苦手意識をもつ児童の実態や変容を見るために個票を作成する（図1）。

平成30年 4年 3組(3月)			平成30年 4年 3組(9月)		
設問	数値	所見	設問	数値	所見
13	2	X 冬は寒い 夏は暑い 泳がない	13	4	O 運動はあまり好きではないが、 楽しく教えてくれるから
14	2	X 運動が苦手	14	2	X 私には難しいことが多い
15	4	O 先生がわかりやすく教えてくれる	15	5	O 先生がたこえを使って話してくれるから
16	1	X トennis、バスケット、サッカーが好きでない	16	2	X ボールが当たったら嫌だから

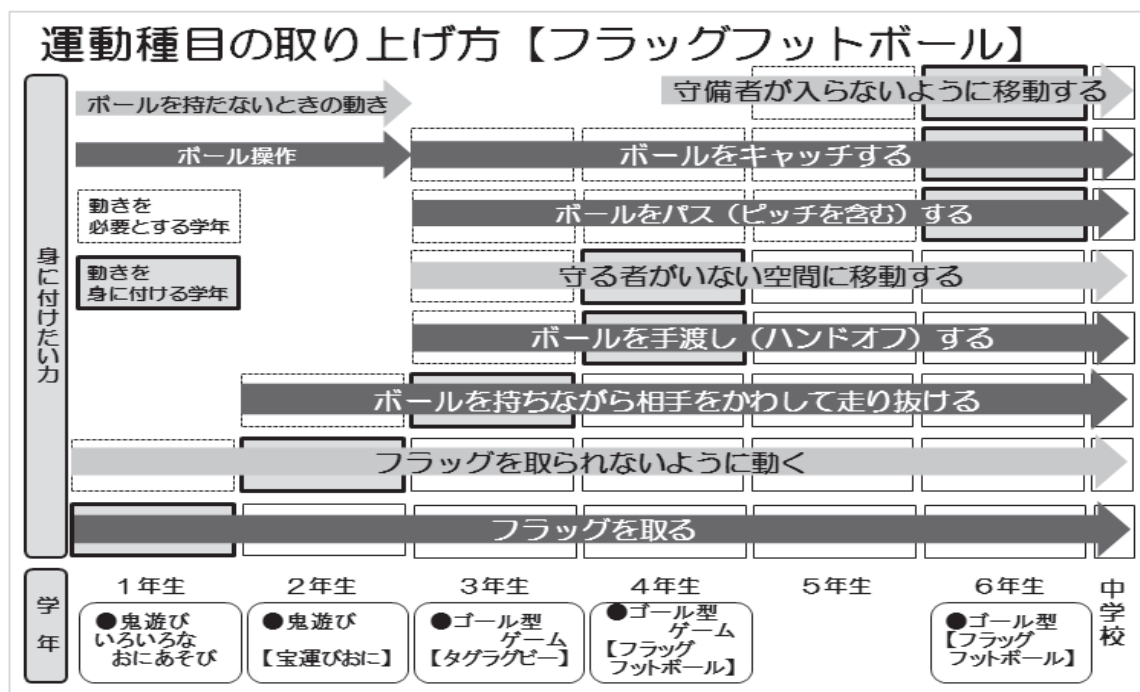
【図1 運動に苦手意識をもつ児童の意識調査結果】

体育授業では、意識調査をもとにした「合理的な配慮」に努める。まず、調査をもとに学習グループを編成する。さらに、実態調査から分かった個別の不安を軽減し、全ての児童が安心して運動できるように、実際の場面において次のような手立てを講じる。

(1)無理なくできる教材・教具の工夫

視点2 ①教材・教具の工夫

授業の構造やルールをシンプルにすることで、だれもが、単元導入時から「楽しそう」「やってみたい」「がんばればできそう」など、体育授業に肯定的な感情をもって参加できるようにする。そのために、小学校6年間の学習内容の系統性を見直す(図2)。



【図2 運動種目による学習内容の系統表】

さらに、系統をもとにした指導内容を明確にした単元計画を作成し(図3)、単元導入時には、運動のイメージをもつことができるように、自作の映像資料や副読本を活用する(図4)。

	1	2	3	4
10	<オリエンテーション> ①活動の目標→止める、蹴る、空いているグリッドを使う ②馬→ハーフコート2面 ③ルール→攻撃側フリーゾーンに1人 ゴールキーパーなし キックイン	<準備> 集合・整列 健康観察 場(準備体操、ボールタッチ)		
20	④チーム→兄弟で4チーム ⑤安全→足を振り回さない、シュートはフロントコート ⑥試し試合→失点後はフリーマンから	<基礎技能タイム> 目標の串打ち ★パスゲーム(のりコーンを周る) ★フリーゾーンからのシュートゲーム ⑦攻撃者がフリーゾーンからパスを出す時、どこでパスを受けるからシュートにつなげるだろうか?		
30	知識 プレーの優先順位 ①シュート ②パス ③キープ(ドリブル)	<ゲーム> ねらってシュートチャンスをつくって		
40	学習カード記入 どうだった? リスがつながらなかった・点が取れなかった? どうしたらパスがつながるか、得点が取れるか、考えながら取り組んでいこう。	★ゲーム① ★ゲームタイム ★ゲーム② 学習カード記入		
評価	(意図) A ルールを守って安全に授業し、仲間の良い形を認め、攻めながらゲームや練習を通して、サッカーに楽しんで取り組むことができる。	(意図) A フリーゾーンからのパスをかわしながらシュートにつなげることができる。 ・シュートにつなげるスペースにパスを出すことができる。		



【図3 指導内容を明確にした単元計画】

【図4 映像資料を活用した導入】

(2) 学びを深める資料の工夫

視点2 ②学習過程の工夫

学習に必要な資料の配置を決めた計画的な板書を行うことで、児童が学習の流れを理解し、学びに必要な情報を得ることができるようにする(図5)。

学習カードの内容も、児童にとって学びの足跡になること、教師にとって児童理解につながることを目的として内容を見直す(図6)。



【図5 学習の見通しをもつことができる板書】

動いて、見つけて、キャッチ！トス！アタック！

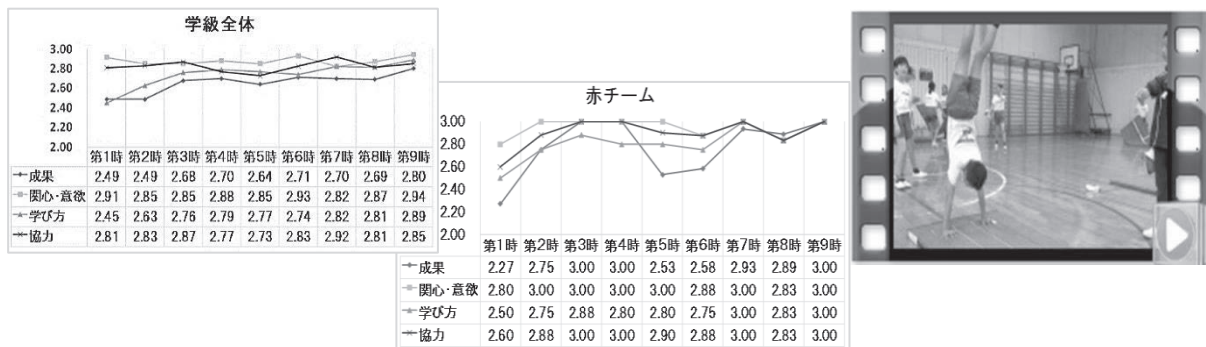
学習のはじめのかんそう		単元のふりかえり(わかったこと・できたこと・考えたこと)	
トスが思い通りの所に行かず、つなげられなかった。思い通りに行くために練習した。		最初の時はトスが低く、つなげられなかった。今は高く、つなげられた。アタックを人のいない所に行くと、点を取ることができた。トスを高く、アタックを人のいない所に行くと、点を取ることができた。	
学習のふりかえり		今日のわかったこと	
チームのめあてを達成するために自分ががんばること		めあての振り返り	今日のわかったこと
パスがつながるように空いているところに動く		よくできた でできた でできなかった	パスがつながるように空いているところに動いたが、うまくパスをつなげることができなかった。
トスをアタックしやすい所へ高く投げる		よくできた でできた でできなかった	高く投げることで、おぼろけをためて、パスが通った。高く投げてトスがしやすい。パスが通った。

【図6 書き方の例を入れた学習カード】

(3) 学習形態の工夫

視点2 ③学習形態の工夫

学習への困り感に対応するために、個や小集団に特化した指導に努める。学習の様子や学習カードの記述、形成的授業評価をもとに重点的に関わる児童やチームを授業前に決めておく(図7)。課題解決の支援に向けて、動きのイメージをつかみやすくするためにICTを活用したり、感覚的に捉えることができるように動きのこつをオノマトペを使って表現したりする。



【図7 形成的授業評価】

3 研究の実際

(1)理論研究

東京学芸大学 鈴木聡 教授をはじめとする指導者を招聘し、「よい体育授業とは？」をテーマに教材づくりや教師行動、学習カードの工夫などについて聴講した。

(2)実践研究 ～平成 30 年度実践から～

ア 1年「ねらってあてよう！ ドッカンゲーム（ボール投げゲーム）」 シュートが増えるラッキーゾーン（無理なくできる教材・教具の工夫）

守りに遮られずに、ねらって投げることができる「ラッキーゾーン」を設定した（図 8）。

ボール投げに苦手意識をもつ児童も、相手がいないタイミングでボールを投げ、全員得点することができた。



【図 8 ラッキーゾーン】

イ 2年「パトをかわして おたからゲット！ たからはこびおに（鬼遊び）」 フラッグをつけて何度でもトライ（無理なくできる教材・教具の工夫）

フラッグの使用で、取った・取られたを分かりやすくした。フラッグを 2 枚装着し、1 枚取られても得点できる規則を加えた。

仲間が走り込むことでできる、「コートの方側のすき間」をねらって思い切って走り、宝を運ぶことができた（図 9）。



【図 9 フラッグの使用】

ウ 3年「すばやくパスをつないでシュート！ 追っかけセストボール（ゴール型ゲーム）」 数的優位な攻守交替型のハーフコートゲーム（無理なくできる教材・教具の工夫）

攻撃の数的優位な攻守交替型のハーフコートゲームを行った。

ディフェンスを後追いにしたことで、時間を意識した動きが増え、細かなパスにつながった。また、守備が少ないことで空いているスペースを有効に使い、シュートまでパスにつながる場面が増えた（図 10）。

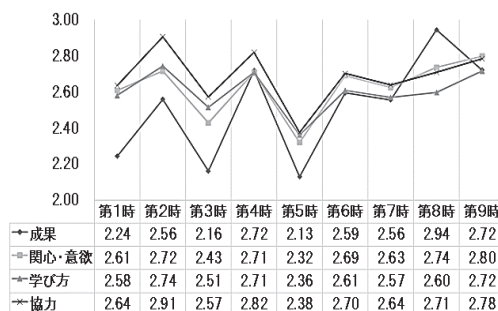


【図 10 攻撃優位なゲーム】

エ 4年「スペースをつくりだせ！ フラッグフットボール（ゴール型ゲーム）」
学習カード・ゲーム分析で重点的に関わるチームの決定（学習形態の工夫）

教師の意図的な支援に役立てることを目的とした学習カードを作成した。

ゲームでの様子と合わせて学習カードに教師が肯定的なコメントを記入したことで、単元の後半になると児童が勝敗以外に目を向けることができるようになり、授業評価も安定した（図 11）。



【図 11 形成的授業評価の推移】

オ 5年「チャンスをつくれ！ フリーゾーンバスケットボール（ゴール型）」
プレー中の課題を見付ける自作の映像資料（学びを深める資料の工夫）

「フリーシュートエリア」や「フリーパスゾーン」などの有効空間を活用して、シュートまでボールをつなぐプレーを教員が演じた映像資料を作成した。

映像を止めながら、スペースや動き方について確認したことで、児童がチーム課題に目を向け、解決を図ろうと主体的に運動に取り組む姿につながった（図 12）。



【図 12 自作の映像資料】

カ 6年「相手をかわしてタッチダウン！ フラッグフットボール（ゴール型）」
ゲームや作戦のイメージをつかむためのICTを活用した導入（教材・教具の工夫）

単元導入時に、ゲームの進め方やプレーの様子を動画で提示した。

実際に動画を見ることで、作戦の選択からプレー、振り返りまでの一連の流れをつかむことができ、イメージをもって運動に取り組むことができた（図 13）。



【図 13 ICTを活用した導入】

キ 特別支援学級「ドラゴンのすみかを かけぬけろ！（鬼遊び）」
児童の動きに合わせた支援（学習形態の工夫）

個別の支援計画を立てて、授業に臨んだ。
単元が進む中で、児童の課題に応じて声掛けを行ったり、一緒に動いて相手をかかわして走り込んだりすることで、空いているスペースに動く感覚を身に付けることができた（図 14）。



【図 14 個別の支援】

～令和元年度（平成 31 年度）実践から～

ク 2 年「体を大きくつかってピーチをたすけよう（投の運動遊び）」
主運動につながる 慣れの運動（教材・教具の工夫）

慣れの運動で、口伴奏をしながらタオルふりを行った（図 15）。

「投げ」の基本動作を体に覚えさせることで、「もっと遠くに飛ばすには、どうすればよいか」体の使い方を考えながら、繰り返し主運動に取り組むことができた。



【図 15 タオルふり】

ケ 3 年「走って走って走りぬけろ！ タグラグビー（ゴール型ゲーム）」
誰もが走り抜けて得点できる機会をつくる規則（教材・教具の工夫）

児童と合意形成し、全員がトライを決めるとボーナス得点が入る規則を取り入れた。

個の相手をかかわす動きに加え、ボールを持たないときの「サポートの動き」やボールをまわす順番などをチームで話し合い、意図的にスペースに向かって走り込む動きが増えた（図 16）。

結果として、全員がトライする喜びを味わうことにつながった。



【図 16 サポートの動き】

研究授業の他、平成 30 年度・令和元年度の 2 年間で、全ての学級で公開授業を行い、実践報告を行った。

(3) その他の取組

本校は、『「わかった」「できた」楽しさを味わうことができる体育授業の工夫』のほか、『運動に親しみながら、体力向上につなげる環境づくり』にも取り組んできた。以下、運動を「する・みる・支える・知る」につながる取組を紹介する。

ア すくすく体力アップカード「運動をする」

遊びながら体力を高め、また生活習慣にも気を付けていくことをねらいとしたカードを作成した。毎日の取組を保護者や担任だけでなく、健康委員会や運動委員会の児童が確認する見取り方の工夫を行うことで、継続的な取組につながるようにした。

イ 常盤サーキット「運動をする」

授業時や25分間の業間休みや朝・昼休みなど、日常的に楽しみながら体を動かすことをねらいとした、遊具を使った運動遊びを紹介した(図17)。体力アップカードに反映させたり、遊具の色を塗り替えたりすることで、意欲的かつ継続的な取組につながるようにした。



【図17 竹馬の貸し出し】

ウ 掲示物の作成「運動をみる・支える・知る」

運動への興味・関心を広げることをねらいとして、学習やラグビーワールドカップ、東京オリンピックを中心としたスポーツに関する掲示物を作成し、児童が見やすい場所に設置した(図18)。



【図18 スポーツクイズ】

4 研究のまとめ

(1) 成果

本校は、全ての児童が「わかった」「できた」楽しさを味わい、運動に対する肯定感が高まる体育授業を目指し、「やさしい設計」や「合理的な配慮」をキーワードにして、主体的・協働的な授業づくりの研究を進めてきた。

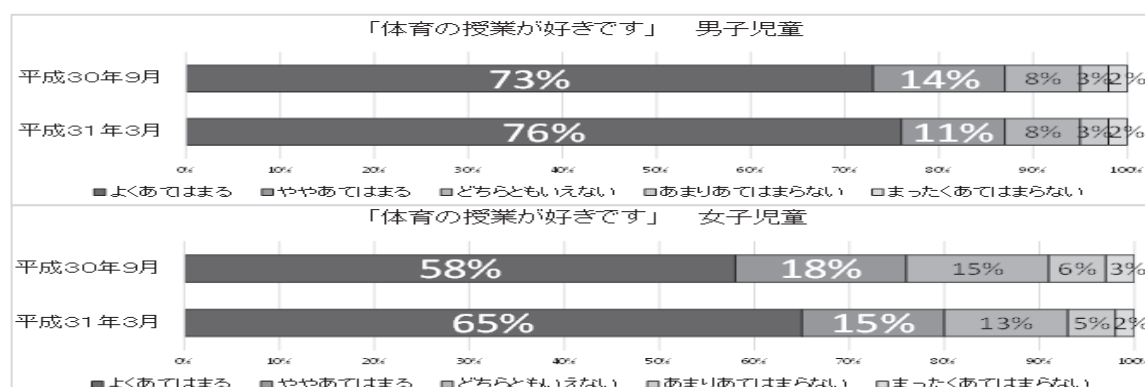
今年度から、東京学芸大学 鈴木聡教授に御指導いただく機会に恵まれ、積み重ねてきた体育の授業づくりの基本的な考え方に加えて、「これからの体育の授業づくり」に向けて理解を深めてきた。

教師効力感に関する調査^{*2}(白旗ら, 2018)においても、教師の体育授業における自信の高まりが見られ、それが以下の成果の要因にもつながったと考えられる。

ア 児童の体育授業に対する意識

全体的に、体育授業に前向きに取り組む児童が増えた。特に、運動への苦手意

識が強かった女子児童に変容が見られ、肯定的な回答をした児童が7%向上した(図19)。



【図19 体育授業に対する意識調査(学校全体)】

イ 児童の体力(新体力テスト総合評価)

新体力テスト結果の総合評価を見ても、AやBに比べてDやEが多かった昨年度と比較すると、 $(A+B)-(D+E)$ が男子2.88ポイント(表2)、女子47.89ポイント(表3)向上した。

【表2 新体力テスト総合評価(男子)】

	平成30年度	令和元年度	平成29年度 全国平均値
A	10.70%	14.10%	12.5%
B	29.85%	29.07%	25.5%
C	34.08%	31.72%	33.2%
D	18.16%	17.84%	20.1%
E	7.21%	7.27%	8.8%
$(A+B)-(D+E)$	+15.18	+18.06	+9.1

【表3 新体力テスト総合評価(女子)】

	平成30年度	令和元年度	平成29年度 全国平均値
A	2.43%	10.41%	16.0%
B	11.05%	28.33%	27.4%
C	40.16%	37.53%	33.6%
D	33.96%	18.16%	17.6%
E	12.40%	5.57%	5.5%
$(A+B)-(D+E)$	-32.88	+15.01	+20.3

これらの結果から、「やさしい設計」「合理的な配慮」を軸にしたユニバーサル
の視点を踏まえた授業改善が、体育授業や運動に対する肯定感の高まり、体力の
向上につながったと考えられる。

特に、運動に対する苦手意識が強かった女子児童において大幅な伸びが見られ
たことは、本校の取組の有効性を証明する大きな成果であると言える。

(2)課題

児童が、どの段階で何を「わかる」「できる」とよいか、教師が系統的な学習につ
いての理解と児童の実態把握を一層深め、共通理解を図っていく必要がある。また、
個別支援が必要な児童へのアプローチの仕方について、有効な手立てを組織的に検
討していく必要がある。

5 引用参考文献

- *₁ 岡澤祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎, 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究, スポーツ教育学研究 16(2), 1996, pp145-155
 *₂ 白旗和也, 原祐一, 大友智, 君和田雅子, 佐藤吉高, 学校教育における教師効力感に関する研究の動向, 日本体育学会大会予稿集第69回(2018)

第4分科会

研究主題

運動の楽しさや喜びを味わい続ける児童の育成
～思考力、判断力、表現力を高める体育授業を通して～

川口市立並木小学校

日 程

受付	公開授業 ①	休憩	公開授業 ②	休憩	公開授業 ③	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
9:00	9:25	10:10	10:20	11:05	11:15	12:00	13:00		15:00

公開授業案内

区分	内容	場所
公開授業①	第3学年 「マット運動」(器械運動)	体育館
公開授業②	第1学年 「鬼遊び」(ゲーム)	運動場
公開授業③	第6学年 「跳び箱運動」(器械運動)	体育館

学校所在地

〒332-0034
埼玉県川口市並木1-24-1

交通機関

JR京浜東北線
・西川口駅下車 東口より徒歩10分

川口市立並木小学校



所在地：〒 332-0034 埼玉県川口市並木1-24-1

連絡先：Tel 048-252-5407 Fax 048-254-2288

E-mail：310.15000@city.kawaguchi.saitama.jp

H P： <http://namikisho.jp/>

校長：佐野 隆之

児童数：587人

◎教育目標

知・徳・体の調和のとれた心豊かなたくましい児童の育成

◎校訓

健康・勤勉・敬愛

◎学校紹介

本校は、昭和57年に川口市教育委員会から「体力づくり」の研究を委嘱されて以来、30年以上にわたり、子供たちの体力向上や健康増進にかかわる健康教育の研究を継続的に進めている。「健康・勤勉・敬愛」の校訓のもと、知・徳・体のバランスのとれた児童の育成を目指している。今年度は「伝統の継承と発展のための挑戦」をテーマに、積み重ねてきた研修実績を引き継ぎながらもこれからの未来をたくましく生き抜く児童を育成するために教育活動に全力で取り組んでいる。

1 研究の構想

(1) 研究主題

運動の楽しさや喜びを味わい続ける児童の育成
～思考力、判断力、表現力を高める体育授業を通して～

(2) 研究主題設定の理由

平成 29 年 3 月に新学習指導要領が告示された。今を生きる子供たちが成人して社会で活躍する頃には、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっていく。このような社会に対応していくためには、子供たちが変化を主体的に捉え、人や物と進んで関わり合い、その中で自己のよさや可能性を発揮し、よりよい未来の創り手となる力を身に付ける必要がある。

現行学習指導要領体育科の課題としては「習得した知識及び技能を活用して課題解決すること」「学習したことを相手に分かりやすく伝えること」「運動する子供とそうでない子供の二極化傾向が見られること」「子供の体力について体力水準が高かった頃と比較すると依然として低い状況が見られること」「健康課題を発見し、主体的に課題解決に取り組む学習が不十分であり、社会の変化に伴う新たな健康課題に対応した教育が必要であること」等が挙げられている。

これらを踏まえ、本校では、豊かなスポーツライフの実現に向けて運動に関する課題を発見し、粘り強く意欲的に課題の解決に取り組むとともに、学習活動を振り返りつつ、課題を修正したり新たに設定したりして仲間と共に思考を深め、よりよく解決し、次の学びにつなげる学習が重要だと考えている。また、豊かなスポーツライフを実現するためにも、小学校段階では十分に運動の楽しさや喜びを味わわせることも重要であると考え。そこで、運動の楽しさや喜びを一過性のものとせず、児童がそれを味わい続けることができるようにするために、三つの資質・能力をバランスよく育みながらも思考力、判断力、表現力を高めることに重点を置いた研究を進めていくこととした。

本校の実態を把握するため、研究のスタート時に児童と教職員を対象として、体育授業についてのアンケート調査を行った。児童へのアンケート調査では、「体育が楽しい、好きと感じるのはどのような場面か」という質問に対し、「できたとき」「友達と協力してできたとき」という回答が多く見られた。一方、教職員へのアンケート調査では、「児童がどのようなときに体育が楽しいと感じているのか」という質問に対して「課題の解決に向けて友達と試行錯誤を重ねた結果うまくできたとき」との回答が多く見られた。ここで、児童、教職員共に共通している回答は「友達と協力して取り組んだ結果できた（課題解決した）とき」ということが把握できた。そこで、児童が運動の楽しさや喜びを味わい続けるためには、「友達と協力しながら試行錯誤を重ね、課題を解決する」学習を積み重ねることが必要であると考えた。

資料 1 は研究イメージである。本校では、運動の楽しさや喜びを「うごく」「かかわる」「わかる」「できる」「のびる」の 5 つと捉えた。「のびる」とは、楽しさや喜びの木が縦に伸び、木を増やし続け横に伸び、児童が運動の楽しさや喜びを味わい続けていく姿であると捉えた。木が成長し続けるためには、水は欠かすことのできない要素であり、それを教師や友達からの肯定的な言葉がけと考えた。

以上のことから、豊かなスポーツライフの実現に向けての研究主題を「運動の楽しさや喜びを味わい続ける児童の育成」とし、副題を「思考力、判断力、表現力を高める体育授業を通して」とした。



(3) 研究仮説

学ぶ必要感を感じる学習過程を工夫することで、児童が試行錯誤しながら主体的に課題解決に取り組むことができれば、「思考力、判断力、表現力」が高まり、運動の楽しさや喜びを味わい続けることができるであろう。

課題の解決に向かって試行錯誤するためには、「習得した知識や技能を活用しながら課題を解決する」学習過程が重要である。試行錯誤していく中で既得の知識や技能と新たな情報を活用しながら課題を解決したり、新たな価値を創造したりよりよい答えを見付け、考えたことを表現したりする力を「思考力、判断力、表現力」と捉え、思考力、判断力、表現力を高めることで本大会の研究主題に迫ることができるのではないかと考えた。

(4) 本校において重点としている研究の視点

本校では、本大会における研究の視点2「主体的・対話的で深い学びを目指した指導の工夫」の①教材・教具の工夫及び②学習過程の工夫を重点としている。

2 研究内容

(1) 運動の特性を十分に味わえる教材・教具の工夫

視点2 ①教材・教具の工夫

運動の楽しさや喜びを味わうことができ、児童を運動好きにするためにはその運動の持つ特性や魅力を十分に味わわせ、学習内容（目的）を効果的に習得するための教材・教具（手段）を工夫する必要がある。

(2) 学ぶ必要感を感じる学習過程の工夫

視点2 ②学習過程の工夫

児童が試行錯誤しながら課題解決に主体的に取り組むためには、学ぶことに必要感を感じることでできる学習過程の工夫が重要である。本校では次のような学習過程を設定し、研究していくこととした。

(序盤)	単元のゴールイメージを知る。
(前半～中盤)	学ぶ必要感を感じながら知識及び技能を身に付ける。
(中盤～後半)	知識及び技能を活用して課題を見付け、解決する。
※「思考力、判断力、表現力」は単元を通して育む（高める）。	

単元序盤では、その単元の目的の姿（ゴールイメージ）を知り、学習に見通しをもたせる。そこで重要なのが「運動との出会い」である。児童がその運動をしてみて、「楽しい」「もっとやりたい」「できるようになりたい」などの思いや必要感を感じられるようにすることである。

単元前半から中盤にかけては、運動に出会ったときの思いや必要感をもち、思考、判断、表現しながら知識及び技能を身に付けられるようにする。

単元中盤から後半にかけては、「もっとできるようになりたい」「自分やチームの課題を解決して勝ちたい」というような思いを生かし、これまでに習得した知識及び技能を活用して課題を見付け、課題に応じた運動の行い方や練習の仕方などを選び、試行錯誤を重ねながら課題を解決できるようにする。

(試行錯誤の捉え方)

「運動を試し、自分やチームの課題を見付け、その解決のために仲間と関わり合いながら練習方法や場を選んで運動に取り組むこと。」

「これまで習得してきた知識及び技能を活用し、また、新たな知識と関連づけながら、自分の動きやチームの動きを修正しようとする。」

また、運動領域ごとに「課題解決プラン（表１、表２）」として学習スタイルを統一することで、どの単元でも主題に迫ることができるようにした。

はじめ	中	まとめ
○オリエンテーション（実態によっては２時間行う。） ①本単元の中心技につながる技や今まで学習した易しい技に取り組む。 【運動との出会い】 ②本単元で学習する技に取り組む。（運動してみ、「できるようになりたい。」「どうやればできるのだろう。」等、願いや目標、課題意識をもつ。） ③主運動につながる感覚つくりの運動を行う。 ※実態に応じて場を易しくする。 ※学習の見通し、今の力の確認、広く何ができない、何ができたかを知る。 ・学習の流れ、約束の確認。	①行い方のポイントを知る。 ・映像や学習資料・教師の指導・動きを比較しての気づき ②ポイントを意識して技に取り組む。 ・スモールステップの場の設定 ・「できた」基準の明確化・具体化 ③技のポイントを知った上で、友達と見合いながら、自分やグループの課題を見付ける。 ※課題の発見に向けて思考し判断したことを言葉や動作で伝え合う。 【本時の課題の確認例】 ①「本時のめあては○○。どこを見ればいい？」◎「脚！」 ①「脚がどうなっていればいいの？（具体的に）」（ポイントは前時までに知識として習得させた上で、知識を活用しながら技に取り組み、課題を見付ける。） ④自分の課題に合った場や段階を選んで練習する。<u>（試行錯誤）</u> 課題が決まれば練習の場や段階、方法が決まる。課題を明確にさせることが必要！ 具体的に根拠を明確にして「○○だから△△が課題だ」と自分自身の課題を言えるように。 ※選択した場において試行錯誤しながら練習する。<u>（習得した知識をもとに見合い、見付けたことや分かったことを伝え合いながら運動に取り組むこと自体も試行錯誤）</u> ※課題の解決に向けて思考し判断したことを言葉や動作で伝え合う。 ※①～④の学習の流れは、１単位時間で行われる場合や、単元全体として行われる場合もある。	○課題の達成度を確認したり、その理由について振り返ったり、新たな技に挑戦したりする。
願い・目標をもつ	ポイントを知る	自分の課題を見付ける、知る
	練習の場、練習の仕方を選んだり工夫したりする	深める・挑戦する

表１ 器械運動系課題解決プラン

はじめ	中	まとめ
○オリエンテーション(実態に応じて２時間行う。) ①メインゲーム、メインゲームに近いゲームをやってみる。 「もっとやりたい」「勝ちたい」「うまくいかない」などの願いや課題意識をもつ。 ②ルールや授業の進め方を理解する。 ③ゲームをやってみて、問題を全体で共有する、困り感を感じる。 ※「知識・技能」が十分身に付いていない段階でも「どうしたらうまくいくだろう」等の発問をし、考えさせたり、教師側が提示した中から選ばせたりする。	○勝つためのチームの課題（目標）を見付けたり、選択したりして解決していく。 ※ある技能を身に付けたり、ある練習をしたりする必要性を感じさせた上で学習に取り組ませないと、主体的に取り組ませることができない。 ○勝つための作戦を立て・選び、練習（工夫、選択）する。（作戦を立てることは目的ではなく目標に近づくための手段。） ※教師主観の作戦の提示：× 子供主観の作戦の提示：○ ○作戦を実践してみて、振り返る。→修正する。 ※作戦を立てる必要性、問題意識（「チームのみんなで話し合えないと上手くないよ！」）を感じさせることが大切。 《必要感をもって学習に取り組ませるために》 ・（話し合い・練習）→ ゲーム → 話し合い・練習 → ゲーム（M・T・M） ・つまずき、上手くないことを教師が見取り、課題を焦点化・意識化する。	○課題の達成度を確認したり、その理由について振り返ったりする。 ○作戦を選択したり修正したりして楽しむ。
単元の前半から中盤段階で「知識・技能」を効果的に押さえていく。いい動き方、攻め方を知る。知らない、作戦で生かせない。（例：課題：やってみてシュートが入らない→技：「シュートの動きを身に付けよう」→課題：パスがつかない→知識・技能の習得→作戦に生かす）	（作戦についての捉え方） 児童：作戦を立てること（勝つための手段） 教師：作戦を立てさせること（学習内容としての目的）	
願いや目標をもち、課題を知る	個人、チームの目標のために作戦を立て、試行錯誤する	選択、修正する(深める)

表２ ボール運動系課題解決プラン

3 研究の実際

(1) 運動の特性を十分に味わえる教材・教具の工夫

視点2 ①教材・教具の工夫

ア 第2学年「ボールゲーム（ネット型ゲームに発展）」の実践から（資料2）

本単元では、「攻めと守りが分かれたコートで、相手コートにボールを投げ入れる簡単な規則で行われる易しいゲーム（ネット型ゲームに発展）」を行った。本ゲームの一般的特性は「集団対集団で、得点を取るために友達と協力して攻めたり、得点されないように友達と協力して守ったりしながら競い合う楽しさや喜びに触れることができる運動」である。そして、児童から見た特性（楽しさや喜びを感じる要因）としては「相手コートに上手く投げ入れることができたとき」「相手コートから投げ入れられるボールを上手く捕球できたとき」「仲間と協力（連携）して得点できたとき」の3点と捉えた。これらの特性を十分に味わわせるために教材の開発を行った。一人一人に運動の機会を十分に保障し、判断を易しく



（ルール）

- ・ コートの設定
（縦：10m 横：5m ネットの高さ：140cm）
- ・ ボール：ミニソフトバレーボール（モルテン 145g）
- ・ 2対2
- ・ ネットを越えて投げ入れる。
- ・ 2バウンドまでに捕る。
- ・ 全員がキャッチできたらボーナス得点。

資料2 メインゲームの概要

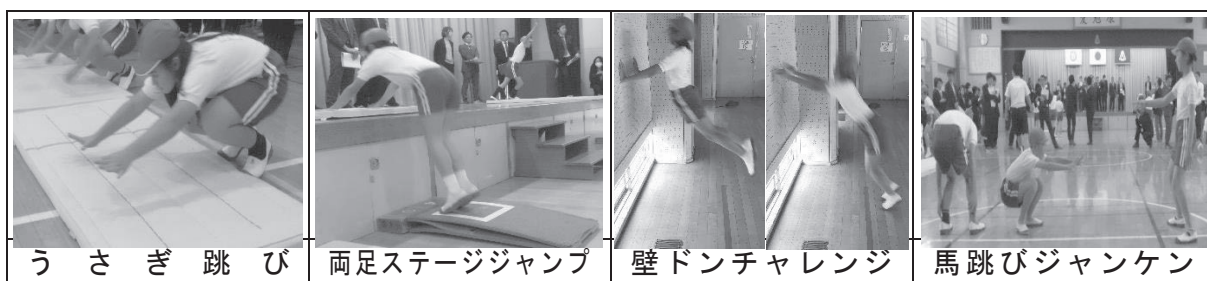
くするためにゲームに参加するのは2人とした。そうすることで相手コートから投げ入れられたボールを「誰が」捕球するのか、相手コートの「どこに」投げ入れるのかを判断しやすくした。また、少人数で行うことにより、全員が「仲間と協力して得点する」楽しさを味わうことができたようにした。

また、メインゲームをより簡単にしたゲーム「ねらってキャッチボール（ねらった場所に投げ入れる技能を身に付けることをねらいとした）」や「ふわっとドッジラリー（相手コートから投げ入れられたボールを落とさずにキャッチする技能を身に付けることをねらいとした）」の2つのゲームを、単元を通して毎時間行うことにより、基礎的なボール操作の技能の習得を全員に保障することができた。

イ 第5学年「跳び箱運動」の実践から

本単元では、習得させる技として「かかえ込み跳び」を扱った。跳び箱運動の一般的特性は「技を身に付けたり、新しい技に挑戦したりするときに楽しさや喜びに触れたり、味わったりすることができる運動」である。児童から見た特性としては「新しい技がより上手にできたとき」「技能の向上が感じられたとき」「友達と教え合い、励まし合って練習して技ができるようになったとき」楽しさを感じると捉えた。「かかえ込み跳び」の技能ポイントとしては助走と踏み切りをリズムカルに組み合わせること、膝を素早くかかえ込むこと、着手で上体を切り返すこと等があると考えた。これらの

技能ポイントを丁寧に理解させ、特性を十分に味わわせると共に、学習の成果を可視化できるような教材の開発を行った。かかえ込み跳びに必要な基礎的な技能を習得させるための感覚づくりの運動として4つの運動を、単元を通して毎時間行った（資料3）。1つ目は「うさぎ跳び」である。マット上の遠くに着手し、上体を切り返して床に着地する。着手時にマットを突き放して上体を起こす。マットを跳び越して上体を起こしてフロアに着地できるようにする。2つ目は「両足ステージジャンプ」である。リズムカルに助走と踏み切りを組み合わせ、素早く膝を抱え込んでステージ上に着地する。3つ目は「壁ドンチャレンジ」である。壁に向かって助走をし、踏み切りラインで両足で踏み切って壁に着手すると同時に強く突き放し、踏み切りラインよりも遠くに着地する。4つ目は「馬跳びジャンケン」である。ペアになり、「ジャンケン」のかけ声で馬跳びをし、「ポン」のタイミングで上体を起こして着地して指を出す。これらの4つの運動を毎時間行うことで、「かかえ込み跳び」に必要な基礎的な技能の習得を全員に保障することができた。

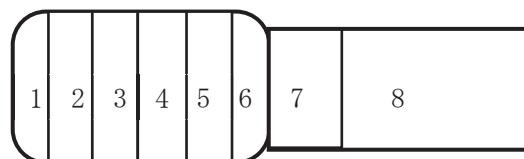


資料3 感覚づくりの運動

学習の成果を可視化するためにかかえ込み跳びの着地の足の位置によってポイントが得られる「ピタッと距離ゲーム」を行った（資料4）。このゲームを毎時間の成果を確認する場面で行うことにより、単元を通して自分とチームの「伸び」を児童が具体的に実感できるようにした。

ここでは、感覚づくりの運動や課題別練習で身に付けた知識及び技能を活用して、「できるだけ遠くに着地すること（本時のねらい）」を意識させた。それにより、着地位置が少しずつ遠くなり、多くの児童がかかえ込み跳びを習得することができた。

- ・4人～5人班で行う。
- ・跳び箱の上と、マットの上に得点ゾーンがある。
- ・手のひらを前に向け、両足を揃えて、足の裏で着地した得点ゾーンの合計を競う。



授業	自分	仲良	仲良	仲良	仲良	合計
4	+	+	+	+	=	
5	+	+	+	+	=	
6	+	+	+	+	=	
7	+	+	+	+	=	

資料4 ピタッと距離ゲームの概要

(2) 学ぶ必要感を感じる学習過程の工夫

視点2 ②学習過程の工夫

ア 第2学年「ボールゲーム（ネット型ゲームに発展）」の実践から

(ア) 学ぶ必要感を感じる学習過程の工夫

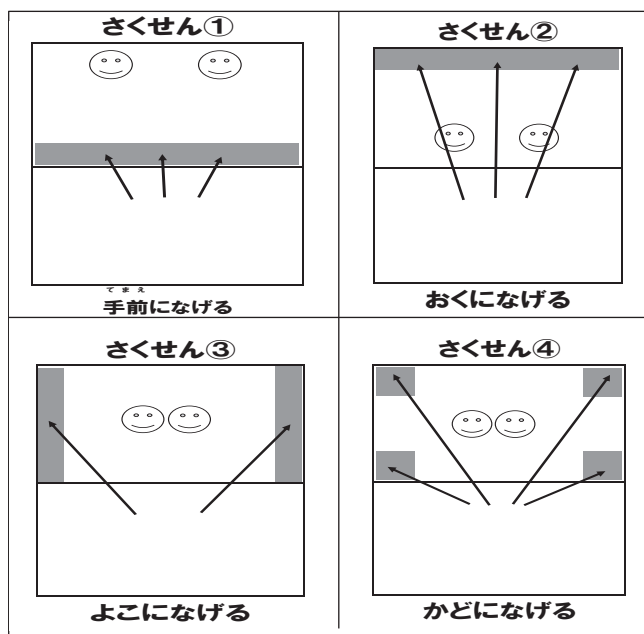
単元序盤では、その単元の目的の姿（ゴールイメージ）を知り、学習に見通しをもたせた。そうすることで、児童がその運動をしてみても、「楽しい」「もっとやりたい」「できるようになりたい」などの思いや必要感を感じながら単元を通して主体的に学習に取り組むことができるようにした（資料5）。

時	1	2	3	4	
ねらい	学習の流れを知ろう。 友達と協力して、準備や後片付けをしよう。	ゲームのルールを知ろう。	コツをつかんでボールを投げ入れよう。	コツをつかんでボールを捕ろう。	
○ゲームをやってみる・知る。ルールを知る。			○ゲームに必要な技能を知り、習得する。		
5	6	7	⑧	9	10
決まりを守り、友達と仲よくゲームをしよう。	ボールがとんでくるコースに素早く移動して捕ろう。	動き方の工夫をしよう。	チームが勝つために、攻め方を選ぼう。	チームが勝つために、攻め方を選び得点しよう。	今までの学習を生かしゲームを楽しもう。
○ゲームに必要な技能を知り、習得する。		○よりよく攻める、守るための動き方を考える。 ○これまで学習したよい攻め方を参考にして作戦(攻め方)を選択して実践する。 ○振り返り、修正・選択、再び実践。			

資料5 学ぶ必要感を感じ、主体的に学習に取り組む学習過程

(イ) 課題解決に向けての試行錯誤

単元中盤からは、これまでに習得した知識及び技能を活用して「勝つため」「得点するため」に試行錯誤できる機会を設定した。具体的には単元の前半により攻め方を学ぶ。そして単元の中盤からは「作戦（攻め方）の選択ーゲーム①ー振り返りーゲーム②」の流れで行う。本時のねらいの確認時にこれまでに学習してきたよい攻め方を提示し、作戦カード（資料6）として児童が選択しやすいようにした。さらに、その作戦（攻め方）のよさを視点に話し合わせることで、児童はチームとして得点するのに有効な作戦を選択することができた。



資料6 提示した作戦（攻め方）例



作戦の選択



ゲーム①



振り返り



ゲーム②

イ 第5学年「跳び箱運動」の実践から

(ア) 学ぶ必要感を感じる学習過程の工夫

器械運動系においては、「課題を見付け、それを解決するための練習や場の段階を選ぶ」といった学習が繰り返されながら進んでいく。その上で大切なのが、発達の段階に応じて学習内容を重点化することであると考え。そこで本校では、高学年では一単元の中で「課題を解決するための練習の場や段階を選ぶ」ことを重点とし、課題に応じた練習を行う機会を十分に確保することで課題の解決につなげられるようにした（資料7）。中学年では一単元の中で「課題を見付ける」ことを重点とし、2時間続けて設定することで、課題の見付け方を知り、自分の能力に応じた課題を見付ける力を養い、高学年の学習へとつなげられるようにした。以上のように発達の段階に応じて学習内容を重点化することで児童が課題を見付ける力を身に付け、解決すべき課題を明確に意識することで必要感をもちながら学習に取り組むことができるようにした。

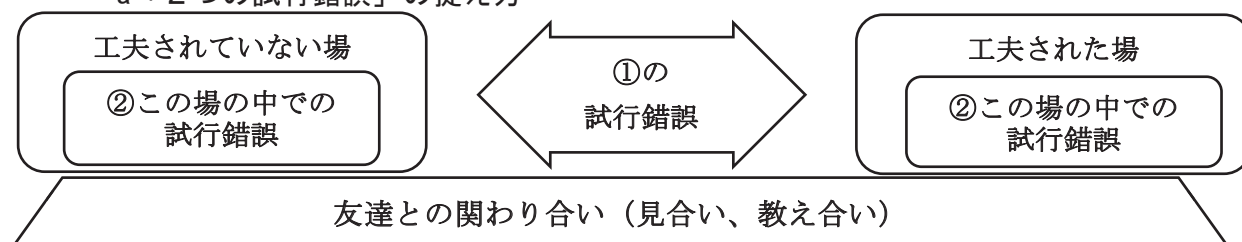
時	1	2	3
ねらい	学習の見通しをもち、安全に気を付け協力して運動しよう。	踏み切り-着手-着地を意識して、開脚跳びをしよう。	かかえ込み跳びのやり方を知ろう。
	○易しい運動から取り組み、意欲的に運動できるようにする。		○本単元で学習する技やポイントを知り、願いや課題意識をもつ。(運動との出会い)
	4	5	6
	手より遠くに足を着地するために、自分の課題を見つけよう。	課題を解決するための場や段階を選んで練習しよう。	課題を解決するための場や段階を選んで練習しよう。
	○課題を見付ける。	○課題を解決するための練習の場や段階を選ぶ。	○課題の達成度の確認。 ○新たな課題の発見

資料7 練習の場や段階の選択を重点化した学習過程（高学年）

(イ) 課題解決に向けての2つの試行錯誤

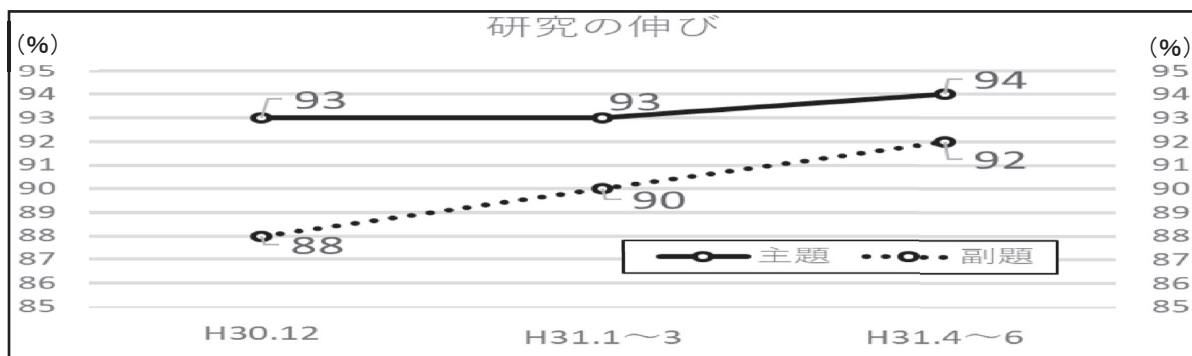
①	工夫された場⇄工夫されていない場の試行錯誤【(1)～(4)のサイクル化】
	(1) 課題を見付ける。(どうやったらできるのかを知る) (2) 場を知り、課題に合った場で練習する。 (3) 工夫されていない場で練習する。 (4) 何ができて何ができていないのか把握し、課題を見付ける。
②	工夫された場や工夫されていない場の中での試行錯誤【(1)～(3)のサイクル化】
	(1) 技に取り組み、成功基準と比較する。(友達と互いに見合いながら) (2) 既習の知識や技能ポイントを確認し、なぜその成功基準に満たないのかどうやったらできるのかを考える。 (3) 確認した事項(技を見る視点)を踏まえて再挑戦する。

a 「2つの試行錯誤」の捉え方



4 研究のまとめ

主題の運動好きな児童の育成に関わる「体育が好きか」「今回学習した運動が楽しかったか」について、副題の思考力、判断力、表現力の高まりに関わる「運動の行い方やポイント、課題等を知ったり見付けたりすることかできたか」「攻め方や練習方法等を選ぶことができたか」「自分の考えを伝えることができたか」について全学年、毎単元後に児童へアンケート調査を行った。以下に示すグラフ（資料8）を基に研究の成果と課題を述べる。



資料8 研究主題に関わる児童の意識の変容

(1) 成果

ア 運動の特性を十分に味わえる教材・教具の工夫

- どの運動領域においても、運動の持つ特性や魅力を十分に味わわせるための教材・教具の工夫をすることで、多くの児童が単元のオリエンテーション時から意欲的に運動に取り組み、「運動が好き」と答える児童が増えた。
- 児童の実態（能力）に合った課題が表出しやすい教材を設定することで、児童が毎時間課題意識を持って学習に臨み、課題を解決しようとする楽しさに十分触れることができた。

イ 学ぶ必要感を感じる学習過程の工夫

- 単元序盤に児童が単元のゴールイメージを知ることで、運動の楽しさと共に運動を行うための知識及び技能の習得に必要感を感じさせることができた。
- 児童が必要感をもちながら知識及び技能を習得し、それを活用して友達と試行錯誤を重ねながら課題の解決に向けて主体的・対話的に運動や学習に取り組めるようにしたことで、思考力、判断力、表現力が高まり、運動好きな児童の育成につなげることができた。

(2) 課題

- 自分の課題が具体的に何なのか分からなかったり、課題を解決するための練習や場を選ばなかったりした児童もいた。今後は自分の課題をより明確に理解するための方策を探りたい。
- 習得した知識及び技能を活用して課題を解決する場面で、自分の考えを伝えられない児童やグループがあった。より効果的に課題の解決をさせるために、全員が主体的に学び合えるようにするための発問や指導法を検討していく必要がある。

第5分科会

研究主題

『わかる』と『できる』をつなぐ思考力、判断力、表現力等を高め、
運動への自信をもてる指導の工夫

埼玉大学教育学部附属小学校

日 程

受付	公開授業 ①②	休憩	公開授業 ③	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
9:00	9:45	10:30	10:50	11:35	13:00		15:00

公開授業案内

区分	内容	場所
公開授業①	第2学年 「鬼遊び」(ゲーム)	運動場
公開授業②	第5学年 「走り幅跳び」(陸上運動)	体育館
公開授業③	第4学年 「ハンドボール」(ゲーム)	運動場

学校所在地

〒330-0061
埼玉県さいたま市浦和区常盤6-9-44

交通機関

J R 京浜東北線
・北浦和駅西口から徒歩15分
J R 高崎線・宇都宮線
・浦和駅西口から徒歩20分
※バスを利用する場合
大久保浄水場行き(浦桜13等)乗車
→市役所北口下車 徒歩1分
J R 埼京線
・中浦和駅から徒歩25分

埼玉大学教育学部附属小学校



所在地：〒330-0061

埼玉県さいたま市浦和区常盤 6-9-44

連絡先：Tel 048-833-6291 Fax 048-833-0968

E-mail：fushomaster@gr.saitama-u.ac.jp

H P：http://www.fusho.saitama-u.ac.jp/

校長：川 端 博 子

児童数：629 名

◎教育目標

勤労をいとわない自主的精神の旺盛な、人間性豊かなよき社会人を育成する

◎重点目標 かしこく あかるく なかよく たくましく

◎学校紹介

今年度で 145 周年を迎える本校は、一般の公立小学校と同様、初等普通教育を行う小学校であるとともに、大学教育学部の附属学校として、次のような特色ある性格をもつ教育施設である。

1. 教育実習学校としての性格
2. 研究、実験学校としての性格
3. 地域の学校教育へ協力する性格

1 研究の構想

(1) 研究主題

「わかる」と「できる」をつなぐ思考力、判断力、表現力等を高め、
運動への自信をもてる指導の工夫

(2) 研究主題設定の理由

大会研究主題を受け、「運動への自信」に焦点を当てた。本研究主題でいう「運動への自信」とは、単にその運動の技能が高いから得意というだけではなく、今後も継続的に運動に取り組もうとする意欲も含まれており、小学校学習指導要領（平成 29 年 3 月）における育成すべき資質・能力の「学びに向かう力、人間性等」につながるものである。また、本研究の目指す『わかる（知識）』と『できる（技能）』をつなぐ思考力、判断力、表現力等の高まった児童とは、「習得した知識と現在の技能を活用して、効果的な振り返りをし、具体的な活動の決定をしている児童（図 1）」のことであり、「課題解決サイクルを意識して行っている姿（図 2）」としている。以下、主題設定の理由について示していく。

なお、本研究の「わかる」と「できる」とは、小学校学習指導要領解説体育編（平成 29 年 7 月）における教科の目標(1)に通ずるものである。ここでは、「その特性に応じた各種の運動の行い方を理解すること」を「わかる（知識）」、「基本的な動きや技能を身に付けること」を「できる（技能）」と定義している。

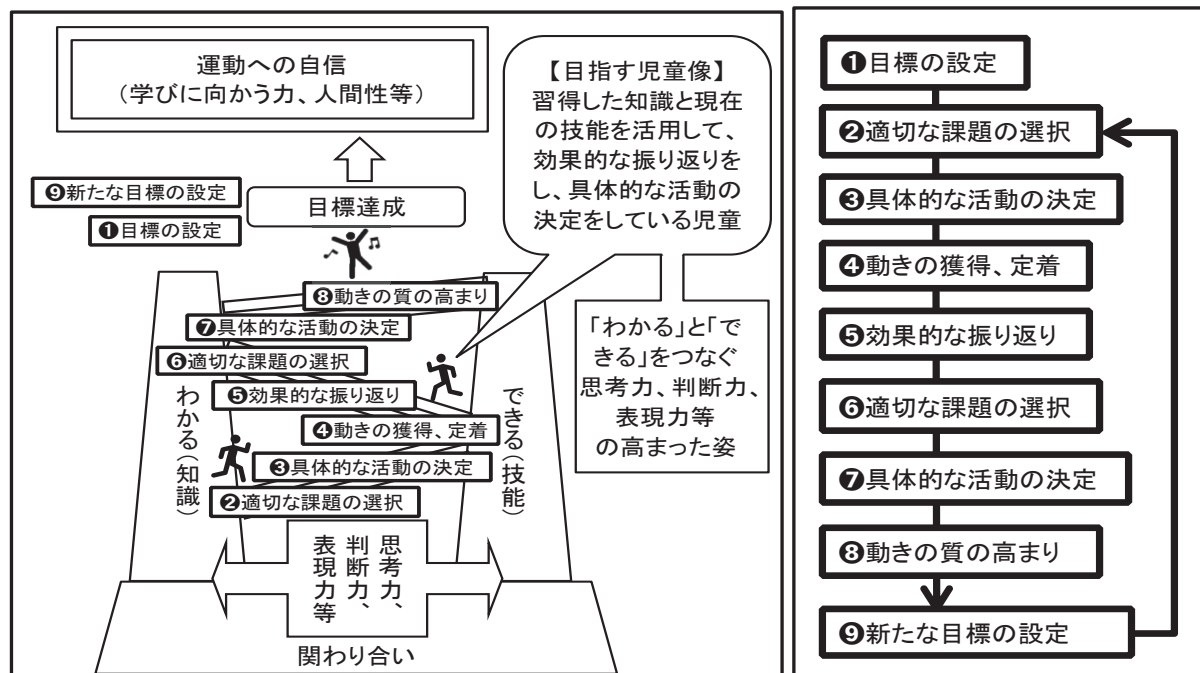


図 1 研究イメージ

図 2 課題解決サイクル

これまでの研究の成果として、児童は適切な課題を選択し、効果的な振り返りができるようになったり、動きを獲得、定着し、質を高めていくことができるようになったりした。しかし、課題として「わかる（知識）」と「できる（技能）」がうまくつながらない児童がいることが分かり、以下のように、児童の様子を分類した（図 3）。

本研究で目指す「わかる（知識）」と「できる（技能）」のつながっている児童は図 3 ①に属する児童である。①に属する児童に目を向けて見ると、よい動きのポイントを知識として習得しているために、根拠をもって自分の動きを振り返ることができ、適切な課題を選択することができていた。また、選択した課題を解決するために、身体をどのように動かせばよいのか具体的な活動の決定をしているという傾向が見られた。このような児童は、課題解決サイクルを繰り返し意識して行い、目標達成という成功体験を積み重ねることで「運動への自信」をもてるようになっていった。

図3②に属する児童には、よい動きのポイントを知識として習得し、どう動いたらよいのか「わかる」ことができて、「具体的な活動の決定」ができず「できる」につながらない様子が見られた。図3③に属する児童には、ある程度の技能を習得し「できる」の状態にあっても、よい動きのポイントを知識として習得していないため「効果的な振り返り」「適切な課題の選択」ができず「わかる」につながらない様子が見られた。図3④に属する児童には、よい動きのポイントを知識として習得していないため、「効果的な振り返り」ができず、「適切な課題の選択」ができな

い様子が見られた。また、ある程度の技能を習得していないため、振り返る材料が乏しい様子も見られた。このような児童は、ただやみくもに運動をしているため、なかなか課題解決することができなかった。

これらの児童の様子から、課題解決サイクルにおける「効果的な振り返り」「具体的な活動の決定」という思考・判断をすることが、「わかる」と「できる」をつなぐための中核になると考えた。以上のことから、本校では「わかる」と「できる」をつなぐ思考力、判断力、表現力等を高めることに重点を置き、本研究主題を設定した。

(3) 研究の仮説

児童同士の関わり合いが充実すれば、「わかる（知識）」と「できる（技能）」をつなぐ思考力、判断力、表現力等が高まるだろう。

そして、思考力、判断力、表現力等の高まった児童は、運動への自信をもち、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現することができるだろう。

目標達成のために、どうすれば課題解決できるかを考えることが思考力、判断力、表現力等を高めることにつながる。しかし、運動は一過性で消えてしまうため、課題を把握しづらい難点がある。そのため、動きを振り返って課題を選択し、具体的な活動の決定をすることを一人で行うことは難しく、児童同士の関わり合いが必要となる。そこで、関わり合いが充実するための手立てを講じ、実践を通して検証をする。なお、本研究における関わり合いとは、「友達と見合ったり、できばえを伝え合ったりすること」と定義している。

(4) 本校において重点としている研究の視点

本校では、本大会における研究の視点1「指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成」の②評価の工夫、視点2「主体的・対話的で深い学びを目指した指導の工夫」の①教材・教具の工夫を重点としている。

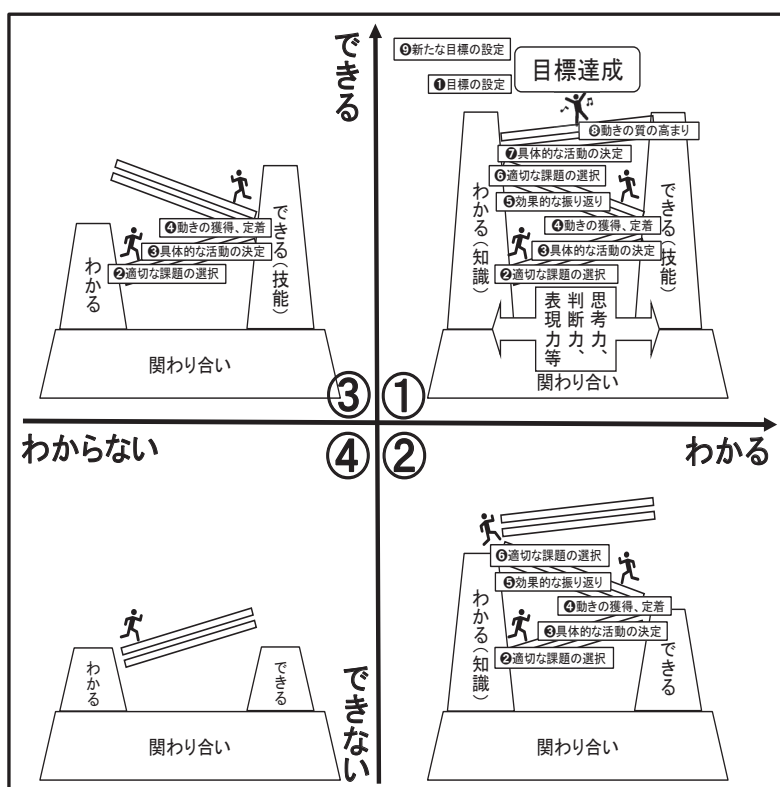


図3 「わかる」と「できる」の関係

2 研究の内容

(1) 思考を可視化し、現状を把握する学習カードの工夫

視点1 ②評価の工夫

本校が「視点1 ②評価の工夫」を重点としている理由としては、研究主題にも示しているように、思考力、判断力、表現力等を重要な資質・能力と考えているためである。思考力、判断力、表現力等の特性として、児童が思考したことなどは、目に見えず、評価することが困難である。そこで、評価を工夫し、的確に児童の様子を見取ることが重要になってくる。児童の様子を的確に見取ること、次時の指導を効果的に行い、結果として児童の思考力、判断力、表現力等を高めることができるようになると考えている。

「視点1 ②評価の工夫」における具体的手立てとして、「学習カードの工夫」を行う。

手立て「思考を可視化し、現状を把握する学習カードの工夫」

学習カードを使用する目的として、「教師が児童の考えを的確に見取ることができること」と、「児童が思考を整理すること」があげられる。

これらの目的の達成のために、学習カードに記入することを学習のねらいや授業の内容と関わることとし、児童は毎時間、授業の振り返りとして個人の考えを記入する。指導と評価を一体化させることで、教師は児童の考えを的確に見取ることができるようにする。一方、児童は学習カードに自分の考えを記述することで、何を学んだのかを整理することができるようにする。

また、毎時間の児童への記述に対し、A評価（十分に満足できる内容）、B評価（おおむね満足できる内容）を教師が考えておき、児童の思考の見取りを的確に行うことができるようにする。

本校体育科では、思考力、判断力、表現力等を「習得した知識と現在の技能を活用して、効果的な振り返りをし、具体的な活動の決定をしていること」と捉えている。具体的に、学習カードに現れる記述として、「効果的な振り返り」では、児童が自分の現状を把握し、「なぜそうなっているのか」を記述することができていることである。また、「具体的な活動の決定」では、児童が選んだ課題解決方法（チームにおける練習など）において、「なぜその方法を選んだのか」を記述することができている様子である。これら2つの項目について、記述できるようにしていく。

さらに、学習カードを活用し、児童に対する的確な評価をすることで、評価を指導に生かす工夫を行う。具体的には、教師は授業の中で、学習カードに記述された言葉などを使い、課題の提示などを行う。そうすることで、児童の思考を整理したり、友達のよい考えを取り入れたりすることができるようにする。さらに、記述欄（メモや感想などの項目）を用意しておくことで、児童の実態に沿って、友達のよい考えを記述するなどの、個にあった学習カードとなるように工夫を行う。

以上のように、学習カードを工夫することで、本来見えずに消えてしまう、児童が何を学んだのかという内容を的確に見取り、評価を行えるようにする。さらに、児童は、学習カードに記述を行うことで、思考を整理し、単元が進むにつれ何を学んだのかを振り返る手段とできるようにする。

授業の内容と関わることに
ついての発問
と、それに対
する児童の考
えを記述する
欄としてい
る。

図4 学習カードの記述内容

(2) 関わり合う必要感が生まれる教材の工夫

視点2 ①教材・教具の工夫

本校が「視点2 ①教材・教具の工夫」を重点としている理由は、教材・教具を工夫することによって、関わり合いに必要感をもって意欲的に取り組み、より効果的な「課題解決サイクル」を繰り返し意識してできるようになると考えているためである。その結果、目標達成という成功体験を積み重ねることができ、研究主題にも示している「運動への自信」にもつながることになる。本校は、関わり合いに必要感をもって課題解決サイクルをしていくために、「ボール運動系」と「陸上運動系」に焦点を当てて実践を重ねていった。

手立て「関わり合う必要感が生まれる教材の工夫（ボール運動系）」

ボール運動系の教材は、相手と味方がいて、勝ち負けを競い合い、勝敗が発生してくるという特性がある。子供にとっては、勝つか負けるかということはとても重要であり、勝つために何をすればよいかという必要感が生まれてくる。そこで、勝敗や得点に関係するような教材の工夫をする。また、集団で考え行動することによって、勝利に近付いたり、得点を取ったりすることができるようなものにする。そうすることで子供たちは、はじめの試合で上手くいかなかったことを友達と話し合い、自分たちの課題を共有する。その課題を解決するために練習し、その成果を次の試合に発揮する。このように、試合に勝つためにチームやグループ内で自然と関わり合いが生まれてくるようになる。また、運動の特性や楽しさに十分触れるような教材の工夫をすることも大切である。関わり合う必要感が生まれ、なおかつその運動の特性や楽しさに触れられるような教材の工夫を目指すことによって子供たちに、関わり合いに必要感をもった課題解決サイクルが生まれるようにする。

手立て「関わり合う必要感が生まれる教材の工夫（陸上運動系）」

陸上運動系の教材は、自己の運動の記録を伸ばしたり、競争したり、自己の動きを高めたりしていくという特性がある。ボール運動系の教材はチームやグループで練習や試合を行うが、陸上運動系は自己の動きをどう変容させるかということに焦点が当たる。そこで、関わり合う必要感をもたせるために、グループやペア、トリオで自分たちの動きについての課題を共有させる。そして、その課題を解決する時間を十分にとる。その上で、運動時間や運動回数が多くなるような教材の工夫を行う。児童が何度も繰り返し挑戦したくなるような場の工夫を行うことで、関わり合いの回数も増え、より効果的な課題解決サイクルを生み出せるようにする。そうすることで、自然と課題を解決するために友達と動きを見合ったり、できばえを伝え合ったりするようになる。しかし、十分な知識がない状態で自分たちの課題を見付けようとしても、正しい課題を見付けられなかったり、どう関わっていけばよいかわからなかったりすることが多い。そのため、よい動きのポイントや、運動の行い方についての知識を共有した上で課題を見付け、課題の解決をしていくことで、関わり合いに必要感をもった課題解決サイクルが生まれるようにする。

以上の2つのように、教材の工夫をすることで、関わり合いに必要感が生まれ、より効果的な「課題解決サイクル」を繰り返し意識してできるようにする。さらに、運動の特性や楽しさに触れられるような教材の工夫も取り入れることで、関わり合いながら、「効果的な振り返り」や「具体的な活動決定」ができ、目標達成という成功体験を積み重ねることができるようにする。

3 研究の実際

(1) 第2学年「ボール運び鬼」(低学年)の実践から

視点1 ②評価の工夫

ボールはこびおに学習カード 2年		自分のことを振り返って	
	【分かったこと】	【できたこと】	つぎにがんばりたいこと かんそう
ぜんたいをふりかえって 今日のめあてとふりかえり ○…達成できた △…課題がある ×…できなかった 1時間目 安全に鬼をついて ゲームのしかたを しよう。(○・△・×)	レーシイ分かった。 「ゲームのしかた」 7はういさう!	あいさつは あいさつをひきき こころをきく (ゲームに集中する)	つぎにがんばりたいこと かんそう
2時間目 ゲームで ゲームのしかたを しよう。(○・△・×)	わたしと鬼をあけて鬼を つかまえる (ゲームのしかた)	こころをきく (ゲームのしかた)	つぎにがんばりたいこと かんそう
3時間目 ゲームで鬼をついて ゲームのしかたを しよう。(○・△・×)	あいさつをひきき (ゲームのしかた)	つぎにがんばりたいこと かんそう	つぎにがんばりたいこと かんそう
4時間目 ゲームで鬼をついて ゲームのしかたを しよう。(○・△・×)	あいさつをひきき (ゲームのしかた)	つぎにがんばりたいこと かんそう	つぎにがんばりたいこと かんそう

図5 低学年の学習カードの例

低学年の児童は、学習カードの記入に慣れていないため、質問項目を固定することで、毎時間何を記入すればよいのかが明確になるようにした。そうすることで、「教師が児童の考えを的確に見取ることができること」と、「児童が思考を整理すること」の目的を達成できるようにした。また、学習カードに記入する段階で、本時の学習のめあてや授業の内容を確認し、記述をしやすいようにすることで、児童は毎時間、授業のまとめとして個人の考えを記入することができ、今日の授業で何を学んだのかを記述することができた。

教師は、毎時間の児童への発問に対し、A評価(十分に満足できる内容)、B評価(おおむね満足できる内容)、C評価(適切ではない内容)を教師が考えておき、児童の思考の見取りを的確に行うことができるようにした。

さらに、学習カードを活用し、児童に対する適切な評価をすることで、評価を指導に生かす工夫を行った。具体的には、教師は授業の中で、学習カードに記述された言葉などを使い、課題の提示などを行う。そうすることで、児童の思考を整理したり、友達のよい考えを取り入れたりすることができるようにした。さらに、記述欄(メモや感想などの項目)を用意しておくことで、児童の実態に沿って、友達のよい考えを記述するなどの、個にあった学習カードとなるように工夫を行った。低学年の児童でも、つぎに頑張りたいこと(次の課題は何か)や感想を短い時間で記述することができていた。

(2) 第4学年「フラッグフットボール」(中学年)の実践から

視点1 ②評価の工夫

フラッグフットボール学習カード 4年		自分自身を振り返って	
	【今日学んだこと】	【感そう】	メモ
全体を振り返って 今日のめあてと振り返り ○…達成できた △…課題がある ×…できなかった 1時間目 学習の進め方を しよう。(○・△・×)	フラッグフットボールで 勝つためのポイントは 何か。	なまめにパスを する (ゲームのしかた)	メモ
2時間目 ゲームで勝つために、 攻め方を しよう。(○・△・×)	自分の役わりででき ないことは何か。	まけてやめた (ゲームのしかた)	メモ
3時間目 ゲームで勝つために、 チームの動きを考えよう (○・△・×)	① 自分のチームはどのよ うに攻めるのか ② 具体的な作戦は何か	13-15でかてうれ しかった (ゲームのしかた)	メモ
4時間目 ゲームで勝つために、 よい動きを見つけてよう (○・△・×)	自分が見つけたよい動き を3つ以上書こう	(ゲームのしかた)	メモ

図6 中学年で学習カードの例

中学年の児童は、低学年とは異なり、自己の運動などの解決に向けた方法や活動を工夫していくことが必要である。授業で学んだことは何かを明確にできるようにすることが重要である。そこで、記述項目を本時のめあてに沿った発問形式でそれに答える形とした。発問に対し、今日の授業で学んだことを考え記述することが、本時の振り返りとなるようにした。

また、「チームの様子」や「メモ」では、チームの課題だけではなく、自分が感じている課題や、それに対し自分なりの解決方法を整理できるようにした。

評価は、質問ごとに教師の評価を用意しておき、質問に正対した記述ができれば、十分に思考・判断をしていることとし、A評価とした。

(3) 第6学年「タグラグビー」(高学年)の実践から

視点1 ②評価の工夫

タグラグビー学習カード		6年	
全体を振り返って		自分自身を振り返って	
今日のめあてと振り返り ○…達成できた △…課題がある ×…できなかった	授業で 分かったこと	チームの考え 自分自身にできること	今日の振り返り (次の課題、感想など)
1時間目 学習の進め方 を知り、安全に学習 しよう。 (○・△・×)	とてもつかれる遊び だったけど、とても楽 しいものだった。		はじめてや。7人で、 1人はあやふやな タグラグビー。 とても楽しかった。
2時間目 自分のチームの良 きを見つけた。チーム の力をしよう。 (○・△・×)	タグラグビーと いうのが、とても 大事。	たづねかあとりにな て、わざととられて、 すぐうしろにパスする (とてた)	1人か、よくか どうしたらよく たのかを考えた。 →タグラグ
3時間目 チームは合 働きをしよう。 (○・△・×)	こうけきチームか どう、守るチームに マークをつかか (タグラグビー)	タグラグビーと いうのが、とても 大事。	持ってる人の、ま よこにいる。 (タグラグビー) いい仕事とわ すぐうしろにいて、必 に死んで、はやく、 ごこ。
4時間目 パスを生かして、 自分の役割を考え よう。 (○・△・×)	タイミングよくパスして、 むらがないように パスをしよう。 パスをくり返す	タグラグビーと いうのが、とても 大事。	タグラグビーは、すぐ思 いたけど、実行する のはむずかしい。 なので、タグラグ

図7 高学年での学習カードの例

高学年の児童は、自己の課題を捉え、解決方法を考え、解決していく段階である。学習カードに記入することを「授業で分かったこと」、「チームの考え」、「自分自身にできること」とした。学習カードの「チームの考え」や「自分自身にできること」では、次時に解決したいチームの課題や、それに対する自分の考えを整理し、学習カードに記述できるようにした。

思考力、判断力、表現力等を「習得した知識と現在の技能を活用して、効果的な振り返りをし、具体的な活動の決定をしていること」と捉えている。そこで、「授業で分かったこと」は、「効果的な振り返り」と捉え、授業で学んだことを整理するようにした。また、「チームの考え」や「自分自身にできること」は、児童が自分の現状を把握し、自分で考えた課題解決方法を学習カードに記述することができるようにした。

評価は、2つの項目を記述できていればA評価とし、「効果的な振り返り」が記述できていればB評価と捉えた。

教師のコメントでは、思考を促す発問や意欲を高めるための称賛のコメントを使い分け、学習カードが次の学習につながるようにした。さらに、今日の振り返りとして、次時の課題や、今日の感想などを記述する欄を設け、児童の考えていることを適切に評価し、指導に生かす工夫を行った。

以上のように、低・中・高学年の発達の段階を踏まえ、学習カードを工夫することで、児童の思考を整理し、教師が実態を把握するといった目的を達成できるようにした。学習カードでは、本来見えずに消えてしまう、児童が何を学んだのかという内容を適切に見取り、評価を行えることと、児童が何を学んだのか自分で振り返ることができる手段として活用できるようにした。

(4) 第2学年「鬼遊び（ボール運動系）」の実践から

視点2 ①教材・教具の工夫

第2学年の鬼遊びでは、まずは全員が得点を取ることができるようなルールを工夫をした。

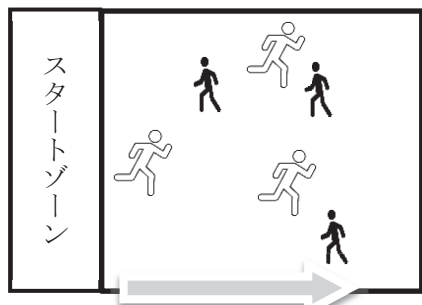


図8 鬼遊びのコート図

- 【メインゲームのルール】
- ・攻守交代制で、より多くのお手玉を運べたチームを勝ちとする。
 - ・攻め、守りともに3人ずつとする。
 - ・試合時間は攻め守りともに、3分ずつとする。
 - ・タグを取られた場合やサイドラインを出てしまった場合は、スタート位置に戻る。
 - ・タグを取ったら、速やかに相手に返す。
 - ・1度に二つのお手玉をもち、突破した時に残っていた分のタグの数を得点とする。

図9 鬼遊びのルール

その上で、作戦ボードを使い、得点をたくさん取るためにどんな作戦が有効か話し合い、チーム内で共有できるようにした。その後、実際に考えた作戦をゲームの中で試す時間をとった。そうすることで、人と人との連携によって得点を取りやすくなることを理解することができ、新たな作戦を生み出したり、試してみたりとチームの中で関わり合う様子が見られた。また、自分たちで考えた作戦ボードを基に、「おとり作戦」、「せーの作戦」、「すれちがい作戦」といった連携の作戦名も児童から出てきた。それらの作戦名を全体で共有することで、また新たな作戦が他のチームから生み出された。

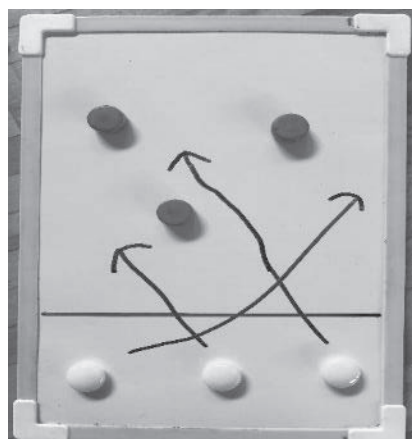


図10 児童が使用した作戦ボード

(5) 第4学年「ハンドボール（ボール運動系）」の実践から

視点2 ①教材・教具の工夫

第4学年のハンドボールでは、ゴール正面からではなく、サイドから得点が入りやすくなるような『I型ゴール』というものを取り入れた。



図11 I型ハンドボールのコート図

- 【メインゲームのルール】
- ・試合時間は5分
 - ・攻守は入り乱れない（センターラインをグリッド線とする）
 - ・攻めは3人、守りは2人（1人はGK）⇒（ローテーション）
 - ・ラインをわたったとき、ゴールを決めたとき、パスカットをされたとき、ファールをしたときにセンターラインから始める
 - ・ラインを割ったボールは、コート外の味方が取りに行き、センターラインにいる人に返す
 - ・ゴールエリアには、GK以外は進入することができない（通り過ぎることもできない）
 - ・ドリブルはできない

図12 I型ハンドボールのルール

その上で、作戦ボードを使い、得点をたくさん取るためにどんな作戦が有効か話し合い、チーム内で共有できるようにした。その後、実際に考えた作戦をゲームのゴールの形をI型とすることで、空間を見付け、活用することで勝てるルール作りを行った。その結果、習得した知識（作戦につながるよい動きのポイント）を基に、空間を見付けたり、空間を生み出したりする作戦をチーム内で考え、試し、振り返ることができた。



図13 I型ゴール

(6) 第4学年「幅跳び（陸上運動系）」の実践から

第4学年では、運動場の砂場で行っていた幅跳びを体育館で行った。体育館にマットを2枚連続して置き、踏み切り板で踏み切り、マットに着地をした。マットにラインテープを貼り、一目でどれくらい跳べたかわかるようにした。それにより、場を多く作ることができ、何度も繰り返し挑戦する様子が見られた。また、グループを組んで練習し、授業の後半にグループごとに跳んだ距離を合計し、勝負する活動も行った。グループとしての距離を伸ばすために、友達同士で跳んでいる姿を横で見てもらい、アドバイスし合う様子を多く見ることができた。

視点2 ①教材・教具の工夫



図14 幅跳びの場の設定

(7) 第5学年「走り高跳び（陸上運動系）」の実践から

第5学年の走り高跳びでは、できばえチェック表をグループに配付し、よい動きと友達の動きを見比べて、自分や友達の課題を発見する活動を取り入れた。その後、課題解決の時間を取り入れ、自分たちの動きがよくなっているかどうか確かめた。跳び越えるバーをポールとポールの間を通したゴムひもにし、ポールをグループの友達に押さえてもらった。ポールを押さえている児童は友達の跳ぶ様子を間近で見ることができ、今までは気付かなかった視点で、アドバイスを送ることができるようになった。また、硬いバーに当たってしまうかもしれないという恐怖心もなくなり、何度も繰り返し挑戦する様子も見られた。

視点2 ①教材・教具の工夫



図15 走り高跳びの場の設定

跳んでいる児童の動きを見やすくなり、関わり合いやすくなる。

ゴムひもにすることにより、恐怖心が無くなり、何度も繰り返し挑戦する。

「助走」や「踏み切り」など、児童が運動をどの視点で見ればよいか示した。また、できばえも示すことにより、できているかできていないかを明確にした。



図16 走り高跳びできばえチェック表

ボール運動系では、「試合に勝つため」という部分が根底にあり、チームやグループ内で効果的に関わり合う様子が見られた。陸上運動系では、「技のできばえ」や「記録を伸ばすため」という部分が根底にあり、もっと関わりたいという様子が見られた。

以上のように、教材の工夫をすることで、関わり合う必要感をもって取り組み、より効果的な「課題解決サイクル」を繰り返し意識してできるようになった。単元後の児童のアンケートからも、関わり合うことで、「効果的な振り返り」や「具体的な活動決定」も多くなったという記述が見られた。

4 研究のまとめ

(1) 成果

○「わかる」と「できる」のつながり

表1は、3年生以上に対して実施した質問紙調査（5件法）の「体育の授業で『わかる』ことで『できる』ようになったことはありますか。」「体育の授業で『できる』ことで『わかる』ようになったことはありますか。」という設問への回答の平均と標準偏差、その有意差を表している。どちらの設問に対しても平均が4.5を超えており、「わかる」と「できる」のつながりを感じている児童が多くいることが分かる。しかし、「わかる」から「できる」へのつながりに比べ、「できる」から「わかる」へつながったという意識が低いことが示された。

表1 「わかる」と「できる」のつながり

「わかる」から「できる」	「できる」から「わかる」	P値(両側)	t値
4.55±0.78	4.50±0.86	0.042 *	2.04

対応のあるt検定 *:p<.05

○思考力、判断力、表現力等の高まり

視点1②評価の工夫「思考を可視化し、現状を把握する学習カードの工夫」により、児童は思考を整理することができるようになり、教師は児童の思考を的確に見取ることができるようになった。また、思考を促す発問や意欲を高めるための称賛のコメントを教師が学習カードに記入することで、児童の思考の高まりが見られるようになった。これらのことは、次時の授業改善に生かされ、児童の思考力、判断力、表現力等の高まりにつながった。

○運動への自信（運動有能感）の高まり

岡澤ら（1996）によって作成された運動有能感測定尺度を用いて、本研究における運動への自信を測定した。全校児童の運動有能感合計得点の推移を見てみると、測定を開始した4年前と比べて徐々に上昇傾向にあることが分かった（図17）。特に、受容感得点の上昇傾向が見られた（図18）。これらの結果から、本研究における視点と手立てが有効に働き、関わり合いが充実したことで、運動への自信が高まっていったと考察した。

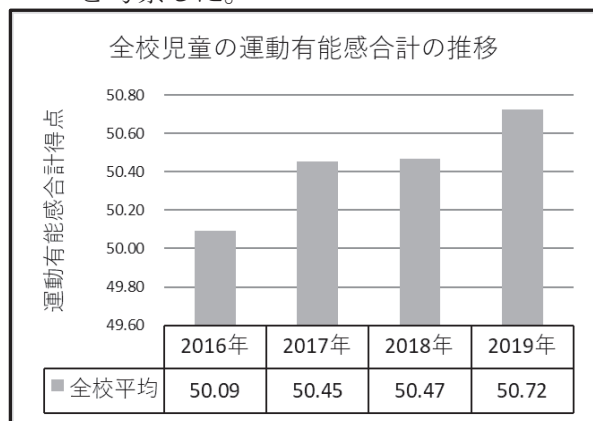


図17 運動有能感の推移

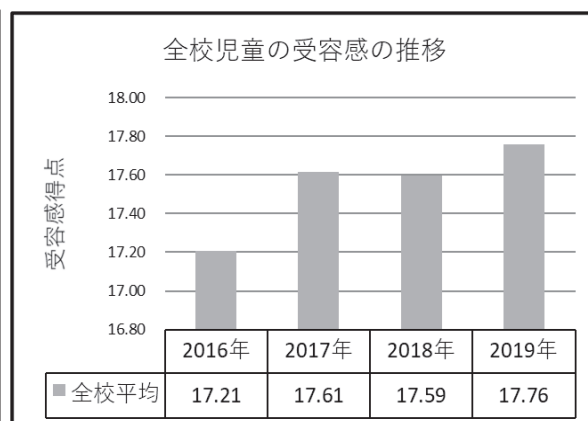


図18 受容感の推移

(2) 課題

▲運動への自信をもてずにいる児童への手立て

運動有能感測定尺度の項目「運動への自信をもっているほうです。」に対して、「あまり思わない」「ぜんぜん思わない」と回答した児童が、全校で20.3%いることが分かった。これらの児童に聞き取り調査をしてみると、自分と他者の技能を比較して劣っているからという理由が多かった。今後は、技能の優劣だけでなく、「する、みる、支える、知る」といった運動への多様な関わり方の価値を実感できるような実践をし、運動へ自信をもてるようにしていきたい。

中学校部会

第6分科会

研究主題

主体的・対話的な学習を図る指導の工夫

～『見つける』『考える』『実践する』学びをつなげる～

さいたま市立原山中学校

日 程

受付	公開授業①	休憩	公開授業②	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
9:00	9:40	10:30	10:50	11:40	13:00		15:00

公開授業案内

区分	内容	場所
公開授業①	第2学年 「応急手当」(保健)	体育館
公開授業②	第3学年 「バスケットボール」(球技)	体育館

学校所在地

〒336-0936
埼玉県さいたま市緑区太田窪1-10-22

交通機関

J R 京浜東北線
・浦和駅から徒歩15分
浦和駅東口よりバス
・本太坂下から徒歩3分

さいたま市立原山中学校



所在地：〒336-0936 埼玉県さいたま市緑区太田窪 1-10-22

連絡先：Tel 048-882-3192 Fax 048-811-1338

E-mail：harayama-j@saitama-city.ed.jp

H P：http://harayama-j.saitama-city.ed.jp/

校 長：森角 由希子

生徒数：710 名



◎教育目標

抱け 輝け 拓け

◎目指す生徒像

- 夢や希望を持つ生徒・思いやりの気持ちを持つ生徒 Grit(やり抜く力)
- 自分のよさを伸ばす生徒・心身ともに健康な生徒 Growth(成長)
- 可能性を信じ挑戦する生徒・広い視野を持ち行動する生徒 Global(国際)

◎学校紹介

昭和 22 年浦和市立調宮中学校として創立され、昭和 24 年校名を浦和市立原山中学校に改称。平成 13 年 3 市合併により校名をさいたま市立原山中学校に改称。浦和駅東口の閑静な住宅地に位置し、地域の自治会長や PTA の方々からなる「原山中学校教育活動後援会」をはじめ、同窓会、育成会など多くの支援と協力のもとに教育活動を行っている。

部活動では、平成 30 年度さいたま市駅伝競走大会において女子チームが優勝、令和元年度全国中学校体育大会においてもサッカー部がベスト 8 入りした。

1 研究の構想

(1) 研究主題

主体的・対話的な学習を図る指導の工夫

～「見つける」「考える」「実践する」学びをつなげる～

(2) 研究主題設定の理由

知識基盤社会において、個に応じた心身の健康の保持増進の大切さや運動の楽しさを知り、生涯にわたって運動を継続して行う資質能力を育むことはきわめて重要なことである。特に、共生社会を迎えつつある現代社会において、多様な人々とその違いを超えてスポーツを楽しみ、明るく豊かで活力ある生活を営む資質能力を育むことは、今後の保健体育科の学習指導において一層求められると予想される。そのためには、育成すべき資質・能力を明確にして系統的な指導を行いつつ、互いを尊重しながら誰とでも主体的・対話的に運動の特性に触れる楽しさや喜びを味わわせる授業づくりが必要であると考えた。

特に、生徒たちが自ら運動特有の特性や魅力に応じた課題を発見し、運動に関わる一般原則や運動に伴う事故防止等の知識を活用して、自らの活動を振り返りつつ、仲間とともに課題を解決することで、次の学びにつなげるための授業づくりが求められると考え、上述の研究主題を設定した。

(3) 研究の仮説

体育分野では、生徒の将来的な実生活（スポーツ的活動）を見通したパフォーマンス課題を取り入れ主体的・対話的な学習活動を展開するとともに、性差や技能差を軽減し誰もが輝ける混成ルール（技能レベル等によるハンディキャップが入り混じったゲーム）を導入・工夫したゲーム学習を中心とする活動を行えば、諸々に起こる問題に対処する課題解決能力やコミュニケーション能力が向上すると思った。また、そのことは誰とでもスポーツを楽しむ能力を高めることにつながり、ひいては生涯スポーツを豊かに実践する可能性の拡大につながると考えた。

保健分野では、主体的・対話的な学習活動を取り入れることで、「見つける」「考える」「実践する」資質・能力を育み、それらを実生活の学びへつなげることができる。また、実際に遭遇するであろう身近な事例を設定し、既習の内容を生かして対応することで、課題解決能力が向上する。さらに、日頃から互いの能力や性格をよく理解している生活班で実習を行うことで、コミュニケーション能力を向上させ、社会の中で生涯にわたって健康の保持増進を図るための学びにつなげることができる。と考えた。

(4) 本校において重点としている研究の視点

本大会では、来るべき共生社会に向けて、とりわけ中学校学習指導要領解説保健体育編（平成 29 年 7 月）でも明示されている「男女共習を原則とする」という課題に向けて、体育分野では、視点 2 「主体的で対話的で深い学びを目指した指導の工夫」における①教材・教具の工夫を重点課題とし、性差や技能差を軽減しながら誰もが主体的に学べるゲーム教材の開発に研究の重点を置いた。また、それらに伴い、技能の高

い生徒が低い生徒に配慮したり、異性間において配慮ある態度が学習されたりするなど、②学習過程や③学習形態を工夫することにした。

保健分野においては、本大会における研究の視点1「指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成」の②評価の工夫、視点2「主体的で対話的で深い学びを目指した指導の工夫」の①教材・教具の工夫に重点を置いて研究を進めることとした。

2 研究の内容

(1) 評価の工夫

体育分野では、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の項目において、単元のはじめに評価規準や判定水準を示したり、単元の中において生徒個々の自己評価や相互評価を通して評価基準を生徒と共有したりする「学習者のための評価」を行うよう努めた。学習者である生徒が評価基準をもつことは、そのまま生徒自身が学習目標をもつことにつながると考えた。また、教師と生徒のみならず、生徒同士が評価基準を共有すれば、対話的な学習も活性化すると考えた。

保健分野では、新たに「応急手当」等において「技能」の内容が示された。これを踏まえた学習カード、ワークシートを作成し、自己評価と相互評価を併用することで、学習内容の一層の定着を図るようにした。その際、対話する場面を計画的に設定することで「知識・技能」をより確かなものにするとともに、教師が積極的にフィードバックを行い、生徒が成果を実感できるようにする。

(2) 教材・教具の工夫

体育分野では、ゲームを行う全てのプレイヤーが統一的なルールを用いてゲームを行うのではなく、性差、技能差などに配慮し、誰もが居場所や活躍する場所を持ちながら楽しめるよう配慮した混成ルールによるゲーム教材の作成に工夫を凝らした。とりわけ使用できるエリア、得点方法、使用する道具やプレイ制限の視点から、性差や技能差レベルに応じたルールを取り入れ、ゲームの活性化を図った。

保健分野では、授業の流れや活動の行い方を大きなスクリーンで提示し、授業の流れと活動の内容の理解を図った。また、特に心肺蘇生法の実習では、小学校で経験した「心肺蘇生トレーニングキット」や動画教材を活用して円滑な導入を行うとともに、訓練用AED・人形とさいたま市が作成したDVDを使って理解を深めるようにした。

さらに、応急手当の実習では、状況に応じて動けるようにするために、日々の生活の中で起きている事例を取り上げた。その際、事例はわかりやすく、判断のしやすいものを設定し、実際の包帯や固定器具、家庭や学校生活にあるものを使うことで興味・関心を高め、実践的な技能を高めるようにした。

(3) 主体的・対話的な学習過程を実現するための工夫

体育分野では、学習指導要領体育分野第3学年球技の目標及び内容で示されている「一人一人の違いに応じたプレイなどを大切にしようとする」を本単元のコアな学習内容と位置づけ、その内容を生徒たちが主体的・対話的に学習できるよう、パフォーマンス課題を設定した。特に技能が低かったり、ゲーム参加の積極性に欠けたりする生徒たちが、元気にゲームへ参加できるルールづくりに力を注いだ。また、単元のま

とめでは、生徒と共に創り上げたゲームルールを使用し、誰とでも楽しめるゲームへの関わり方についてより深い学びができるように努めた。

(4) 共生社会を見据えた学習形態の工夫

生涯にわたってスポーツに親しむためには、体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無等にかかわらず、誰とでも運動を楽しみ喜びを分かち合える必要がある。そこで、今回は性差や技能差を考慮した等質グループを編成した。また、学習場面に応じてペアやトリオ学習を進め、性や競技経験等の違いを互いに尊重しながら誰もが楽しめる態度の涵養を意識した指導を心掛けた。特に技能の低い生徒に対して配慮あるプレイをする生徒を褒めたり、苦手な生徒が積極的にゲームへ参加する行動を褒めたたえたりするよう留意した。

3 研究の実際

(1) 「球技 バスケットボール」の実践から

ア 評価の工夫

生徒が学習する中心的な態度の内容を「誰もが楽しむためにとるべき態度」に絞り、5段階評価法によるルーブリックを単元はじめに生徒へ提示した。単元なかでは、これらの項目の内容（評価規準）や評価基準を生徒たちに修正させるようにした。到達目標を生徒自身が理解し、クラス全体で共有することにより、一人一人が違いに応じたプレイを互いに認めようとする場面が練習やゲームだけではなく、ゲーム前後の挨拶時の握手、終了後に互いのチーム全員で行うフレンドリーハイタッチ、チームミーティングを通して多く見られた。

また、「知識・技能」に関しては、技能のルーブリックを作成、活用した。ゲーム中に、サポートチームの観察者がルーブリックを活用し、客観的に評価し、その評価を学習者にフィードバックすることで、「なぜうまくできないのか」「どうしたらできるのか」という具体的な課題に気づき、運動の中で試行させることにより、「わかる」ことにつながると考えた。現段階での個人のレベルを確認することができるため、仲間同士で学習課題を解決するために助言を行ったり、仲間の学習を援助したりする生徒が増え、生徒が自ら主体的・対話的に学習を進められるようになった。

評価	得意としている生徒	得意としていない生徒
5 素晴らしい	何事においても全力で取り組み、自己のことだけではなく、チーム一人一人の特性を考慮した指示やアドバイスをし、作戦を考え、チームで共有することができる。また、常に周りに目を配り、練習やゲームの際には必要な声掛けを全体に行い、良いプレイを積極的に認め、励まし、チームの雰囲気明るくすることができる。	何事においても全力で取り組み、仲間にアドバイスをし、作戦を考え、チームに提案することができる。また、練習やゲームの際には必要な声掛けをチームの仲間にし、良いプレイを積極的に認め、励まし、チームの雰囲気明るくすることができる。
4 良い	何事においても意欲的に取り組み、自己のことだけではなく、チーム一人一人に指示やアドバイスをし、作戦を考え、チームで共有しようとする。また、周りに目を配り、練習中やゲームの際には肯定的な声掛けを全体に行い、良いプレイを認め、励まし、チームの雰囲気明るくすることができる。	何事においても意欲的に取り組み、仲間にアドバイスをし、作戦を提案しようとする。また、練習やゲームの際には肯定的な声掛けをチームの仲間にし、良いプレイを認め、励まし、チームの雰囲気明るくすることができる。
3 合格	意欲的に取り組み、自己に与えられた役割を果たしたり、困っている仲間に対して、アドバイスをしたりすることができる。また、練習やゲームの際には、肯定的な声掛けを全体に行うことができる。	意欲的に取り組み、自己に与えられた役割を果たしたり、困っている仲間に対して、アドバイスをしたりすることができる。また、練習やゲームの際には、肯定的な声掛けを仲間に行うことができる。
2 もう一歩	活動や話し合いの際に、仲間やチームに対して否定的な発言をしたり、練習やゲームの際に自分勝手なプレイをしたりすることもあるが、チームの活動に参加することはできる。	活動や話し合いの際に、積極的に行動したり、発言したりすることは少ないが、チームの活動に参加することはできる。
1 かなりの改善が必要	仲間と関わりをもたず、参加しようとしていない。	仲間と関わりをもたず、参加しようとしていない。

図1 「誰もが楽しむためにとるべき態度」についてのルーブリック

イ 教材・教具の工夫

授業前アンケートを実施したところ、バスケットボールを「好き」な生徒が全体の79%と好意的な印象に対して、「苦手」と感じていると生徒が71%と「好き」だけで「苦手」という意識のねじれが見られた。理由として、「練習してもシュートが入らない」、「どこに動けばいいかわからない」等の技能面や「ルールがわかりにくい」等の知識面の不安が多く挙げられた。その一人一人がもつ不安を取り除くために、技能差や性差を考慮した混成ルールを生徒の意見を取り入れながら作成し、ゲーム中心の授業を展開した。具体的には、技能差に応じて使用できるエリアや得点方法の制限、得点配分、フリーマンの導入などのルールを工夫することにより、バスケットボールを得意とする生徒がバスケットボールを不得意とする生徒に取りやすいパスをして、ボールに触れさせる機会やシュートを決めさせる場面が多くみられ、ゲームが活性化した。また、バスケットボールを得意とする生徒がパスなどのサポートだけに回ることがないよう、3ポイントエリアからのシュートを認めた。バスケットボールを得意とする生徒も活躍できる場面を設定したことで、誰もが活躍できる場所をもちながら、楽しめるゲーム教材を作成することができたと考ええる。

本日のルール

◎時間⇒1分×8Q
*必ず1人3回は出場すること

◎人数⇒4人+2人(フリーマン)
*男子2人、女子2人...各チームの作戦！

フリーマンについて

- ・2人⇒男子1人、女子1人 *回数は制限なし
- ・サイドライン上に配置する。
*バックコート、フロントコートに1人ずつ
- ・サイドライン上を動くことができる。
- ・ボールを持ったら、その場所からコート内の仲間にパスする。
*フリーマン同士のパスはなしとする。

Specialルール

ディフェンス

★男子は女子のボールを奪うことはできない。(1M)

★女子バスケット部は男子のボールを奪うことはできない。

オフェンス

★得点&シュートエリア

- ・バスケット部:3ポイントエリアのみ⇒3点
- ・男子:すべてのエリア⇒すべて2点
- ・女子:すべてのエリア⇒すべて4点

★ドリブル回数⇒バウンド1回まで

図2 完成した混成ルールの全体確認用スライド

ウ 主体的・対話的な学習過程を実現するための工夫

単に生徒たちが主体的に学習に取り組むのではなく、実生活や実社会で起こり得る課題の設定に工夫を凝らした。「みんなで楽しむゲームはどうあるべきか」を生徒に問い、性差や技能差に配慮したプレイを行ったり、互いを認め合いながら積極的にゲーム参加したりするよう単元はじめに方向付けた。また、単元序盤の2時間目から4時間目では、生徒たちが「知識及び技能」や「学びに向かう力、人間性等」の学習内容(知識)を習得できるよう、学習内容を明確にした上でミニゲーム、ゲームを通して動きの確認、修正等を教師主導で行った。次いで、単元中盤の5時間目からは7時間目までには単元序盤で習得させた学習内容のできばえを相互評価させたり、その理由や向上に向けてのアドバイスをチームメイト内で考えさせたりして、学習した知識を多様なゲーム場面にあてはめることができるよう対話的な学習の活性化を図った。そして、単元終盤の8時間目から10時間目では、ここまでに学習した内容を実際のゲーム場面でより円滑にプレイしたり、行動できたりするよう、より望ましいゲームプレイやゲームへの参加態度をチーム内だけではなく、クラス全体で追求させるようにした。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
ねらい	学習の内容を知り、見聞きをもとに。	ゲームの行い方、チームミーティングの行い方について知ろう。	バスを出した後に次のバスを受ける動きを工夫しよう。	味方が操作しやすいバスを出そう。	シュートコントロールを安定させる工夫をしよう。	仲間とゲームを楽しむための取り組み方を考えよう。	味方が操作しやすいバスを出せるよう工夫しよう。	仲間の動きに対して、アドバイスをしよう。	次のプレイにつながるバスをつなげて攻撃しよう。	全員でバスケットボールを楽しもう。
指導内容	・学習の仕方、約束事 ・準備、片付けや安全に配慮した活動の仕方 ・E-UPの行い方 ・シュートコントロール ・守備の行い方	・リーグ戦の進め方 ・ゲーム中の役割分担 ・一人一人の違いに応じたプレイやかわり方を大切にす ・仲間との学習の進め方	・バスを出した後に次のバスを受ける動き方 ・空間に走りこむ動き方	・味方が操作しやすいバスの出し方、受け方の自己の課題の発見	・入替替え戦の進め方 ・シュートコントロールの課題の発見、取り組み方の工夫	・ゲームの振り返りと達成状況の確認の仕方 ・仲間とともに楽しむためにとるべき態度の課題の発見、取り組み方の工夫	・味方が操作しやすいバスの出し方、受け方の取り組み方の工夫 ・応援の仕方	・原山フレンズシップリーグの進め方 ・仲間や自チームの課題や出来映えの伝え方	・仲間の違いに応じたプレイの認め方	・学習のまとめ方 ・授業のまとめ
学習過程	～ブリーフィング～ 1 集合、健康観察、挨拶 2 本時のねらいと内容の確認 3 オリエンテーション ・単元の目標 ・学習の進め方 ・約束事について知る ・準備、片付け 4 チーム分け、役割分担 5 準備体操、E-UP 6 前年度までの復習 7 速攻ゲーム 8 整理運動 9 集合・健康観察 10 学習の振り返り・まとめ 11 挨拶、片付け ～ブリーフィング～	6 ゲームの行い方 ・ルール ・役割分担 ・リーグ戦の進め方 7 仲間との学習の進め方 8 ゲーム① ・一人一人の違いに応じた評価標準及び判定水準の理解 9 ゲーム② ・オールコートの4対4 10 整理運動 11 集合・健康観察 12 学習の振り返り・まとめ 13 次時の予告 14 挨拶、片付け ～ブリーフィング～	6 バスをした後に次のバスを受ける動き方、空間に走りこむ動き方 7 ハーフコートの4対4 8 ゲーム① ・オールコートの4対4 9 ゲーム② ・オールコートの4対4 10 整理運動 11 集合・健康観察 12 学習の振り返り・まとめ 13 次時の予告 14 挨拶、片付け ～ブリーフィング～	6 味方が操作しやすいバスの出し方 ・ハーフコートの4対4 7 ゲーム① ・オールコートの4対4 8 動きの確認と修正 9 ゲーム② ・オールコートの4対4 10 整理運動 11 集合・健康観察 12 学習の振り返り・まとめ 13 次時の予告 14 挨拶、片付け ～ブリーフィング～	6 ゲーム① ・オールコートの4対4 7 シュートコントロールの振り返りと達成状況の確認 ・課題や修正の仕方 ・成果や確認の仕方 8 ゲーム② ・オールコートの4対4 9 整理運動 10 集合・健康観察 11 学習の振り返り・まとめ 12 次時の予告 13 挨拶、片付け ～ブリーフィング～	6 ゲーム① ・オールコートの4対4 7 チームでの振り返りと達成状況の確認 ・課題や行動の仕方 ・成果の確認の仕方 8 ゲーム② ・オールコートの4対4 9 整理運動 10 集合・健康観察 11 学習の振り返り・まとめ 12 次時の予告 13 挨拶、片付け ～ブリーフィング～	6 ゲーム① ・オールコートの4対4 7 味方が操作しやすいバスの振り返りと達成状況の確認 ・課題や修正の仕方 ・成果や確認の仕方 8 ゲーム② ・オールコートの4対4 9 整理運動 10 集合・健康観察 11 学習の振り返り・まとめ 12 次時の予告 13 挨拶、片付け ～ブリーフィング～	6 原山フレンズシップリーグの進め方 7 チームでの課題解決練習 8 ゲーム ・オールコートの4対4 9 整理運動 10 集合・健康観察 11 学習の振り返り・まとめ 12 次時の予告 13 挨拶、片付け ～ブリーフィング～	6 チームでの課題解決練習 7 ゲーム ・オールコートの4対4 8 チームミーティング 9 整理運動 10 集合・健康観察 11 単元のまとめ 12 次時の予告 13 挨拶、片付け ～ブリーフィング～	～ブリーフィング～ 1 集合、健康観察、挨拶 2 本時の流れの確認 3 準備体操 4 W-UP 5 本時のねらいと内容の確認 6 チームでの課題解決練習 7 ゲーム ・オールコートの4対4 8 チームミーティング 9 整理運動 10 集合・健康観察 11 単元のまとめ 12 次時の予告 13 挨拶、片付け ～ブリーフィング～
	～ブリーフィング～ 3 W-UP 4 シュート練習 5 本時のねらいと内容の確認									
	9 チームミーティング・学習カードへの記入 10 整理運動 11 集合・健康観察 12 学習の振り返り・まとめ 13 次時の予告、片付け ～ブリーフィング～									

図3 単元計画表

エ 共生社会を見据えた学習形態の工夫

スポーツのルールは、全ての人が統一ルールの下で平等に行うことができるよう作られている。しかし、生涯スポーツの観点から考えるとルールが統一的であるが故に、楽しめるゲーム参加メンバーの範囲は狭い現状にある。誰とでもスポーツを楽しむためには、技能差や性差にかかわらず、運動を楽しむ、喜びを分かち合えるルールを提供することが必要となる。そこで、まずは性差や技能差を考慮したグループ編成を行った。特にチーム内で技能の低い生徒に対して配慮あるプレイをする生徒を褒めたり、苦手な生徒が積極的にゲーム参加する行動を褒めたたたえたりする声掛けを行わせるようにした。



図4 混成ルールを適用したゲームの様子

(2)第2学年「保健 応急手当」の実践から

ア さいたま市立学校の応急手当等の取り扱い

さいたま市では、小学校5・6年生の保健の学習において、応急手当に関する学習を取り扱い、その中で胸骨圧迫の行い方を中心とする心肺蘇生法の学習に重点を置いて授業を進めている。

また、中学校第1学年においても、心肺蘇生法等の内容を取り扱い、全生徒が普通救命講習Ⅰの資格を取得している。ASUKA モデルを元に事故発生時の動きを学習している。その際、フローチャートを活用して学習を進めている。

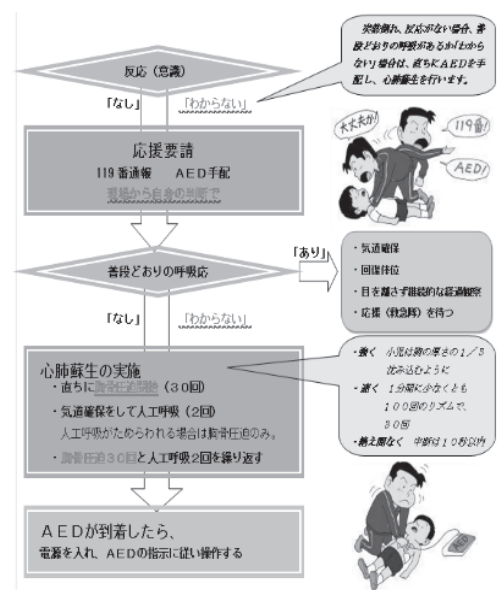


図5 傷病者発生時における判断・行動チャート

さらに、これまでの学習を生かして、中学校第2学年において、他の応急手当の内容も合わせて、体系的、総合的な学習を展開している。

なお、第3学年においても、学習の継続性を生かして、学習内容を確認している。

学年	単元・実施時間等	学習内容（実習）等
小5	けがの防止（イ）けがの手当て 救命入門コース 45分取得	・緊急時の対応の仕方 ・胸骨圧迫の行い方 ・AEDの機能や設置場所等の理解
小6	病気の予防（オ）地域の様々な保健活動の取組 救命入門コース 90分取得	・すり傷、鼻出血、やけどや打撲 洗う、圧迫止血法、患部を冷やす 胸骨圧迫法等（心肺蘇生トレーニングキット、DVD使用）
中1	心身の機能の発達と心の健康 （ア）身体の機能の発達 120分 普通救命講習Ⅰ取得	・緊急時の対応の仕方 ・AEDの使用を含む心肺蘇生法、異物除去、搬送法等 （訓練用的人形・AED、DVD使用）
中2	傷害の防止（エ）応急手当	・前学年と同様 ・包帯法、止血法、固定法、熱中症手当等
中3	健康な生活と疾病の予防 個人の健康を守る社会の取組	・前学年と同様

図6 心肺蘇生法実習の年間指導計画への位置づけと学習内容について（さいたま市）

イ 第2学年応急手当の学習過程

第2学年の学習では、3・4時間目において、小学校、中学校第1学年の学習を想起する時間を設定し、円滑な導入を図った。この学習を生かして、まず、応急手当の基本的な内容を全体で習得した後、実習を行って、技能の定着を図った。

第5時間目の学習では、これまで学習した内容のまとめとして、各応急手当の内容を復習した後、実際に発生した事故等を想定して、グループで応急手当を実施して実践力を高め、学習のまとめとした。

時	ねらい・学習活動	知	思	主	評価方法等
3	応急手当のの基本を確認しよう ○救急車要請、止血法、包帯法		②		実習の様子 ワークシート
4	適切な応急手当を活用し、傷害悪化を防止する方法を知ろう ○固定法、RICE法 (実習班とアドバイス班で活動)	②		②	実習の様子 ワークシート
5	適切な応急手当を活用し、傷害悪化を防止する方法を知ろう ○心肺蘇生法 (実習班とアドバイス班で活動)	②		②	実習の様子 ワークシート
⑥	事例に応じて応急手当をしよう。 ○事例に応じた応急手当の実際 (実習班とアドバイス班で相互評価)		①		実習の様子 ワークシート

図7 単元計画

ウ 評価の工夫

中学校学習指導要領解説保健体育編（平成29年7月）では、新たに「技能」についての指導と評価が示された。

応急手当の単元では、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」について、各授業において、観点を重点化して評価することとした。

特に、本単元では「技能」に関して、適切に評価することが求められる。中学校学習指導要領では、胸骨圧迫、AED（自動体外式除細動器）の使用を

応急手当の実践 実習（ロールプレイング）の流れ

- 1 各班が担当する事例について打合せ
 - ・必要な行動を行動チャートに丸を付ける。2分
 - ・必要な物を書き出す。役割分担をする。3分

事例①長距離の授業中（意識不明）
事例②プールの授業中（意識不明・心肺停止）
事例③交通事故が起きた時（骨折）
事例④自宅で起きた時（心肺停止中）
事例⑤部活動中（擦り傷、骨折）
事例⑥部活動中（意識不明、熱中症）
※ペアで評価する。

- 2 実習（各8分） 職員室・保健室を設定
 - <実習班>
 - ・実習班とアドバイス班の1グループで実施
 - ・設置する物品、医薬品、用具等から選択して使用
 - <評価班>
 - ・状況に応じて、対処や処置が適切か
 - ・実習班のよいところ、改善点を書き出す。
- 3 実践の振り返り
 - ・アドバイス欄へ記入
 - ・評価した内容を相互で確認
 - ・班のまとめ、自己評価
- 4 まとめ
 - ・各事例についての意見、発表
 - ・教師の指導・評価

図8 応急手当の実践 ロールプレイングの流れ

含む心肺蘇生法、包帯法や止血法としての直接圧迫法の実習を通して応急手当ができるようにすることが明記されている。

この中で胸骨圧迫を例にすると

(ア) 1 分間に 100～120 回のリズム

(イ) 手は手掌基部

(ウ) 5 センチ程度沈めて戻す

(カチッという音になる)

というように、評価の観点を確認し、全てできたら「○」、できないものがあつたら「×」とし、不十分なものについては「アドバイス」欄に記入した。また、

- a 注意事項を理解している
- b 応急手当を正しく行うことができる
- c 発生した事故に即して活用し、適切に行うことができる

というように、各授業で習熟の程度に応じて評価を実施した。

また、実際の評価については、ワークシ

ートを活用し、グループ学習において、「評価班」が評価を行うこととした。この結果を実習後に伝え合い、助言することによって、各自が技能の状況と課題を確認した。教員については、養護教諭をゲストティーチャーに加えた T T による指導体制をとり、全員で分担しながら、積極的にフィードバックを行う即時評価を行った。

これらの評価活動を生かして、最終的に一人ひとりが自己評価を行い、学習の成果のまとめを行った。

さらに、「主体的に学習に取り組む態度」については、教師による授業観察に加えて、ワークシートにコメントを加えるとともに、これをポートフォリオとしてファイリングさせ、各自の意見や感想の内容から、学習に対する取組の姿勢を評価した。

なお、ここでの学習は、学級の生活班を生かしたグループ学習の学習形態で進めることとした。このことにより、主体的・対話的な学習をより効果的に実現するよう配慮した。

エ 教材・教具の工夫

学習内容や学習の要点については、プロジェクターで投影した大画面で示し、実習中も常に意識して活動が進められるように配慮を行った。また、フローチャートを使い、「わからない」ときは次の手順に進むことを明確にした。プラスチックボ

2 学年 保健ワークシート					
前略					
☆流れについて					
チェック項目		○or×	アドバイス		
①素早く役割分担がされていたか。					
②必要なものを用意できていたか。					
③適切な応急手当を行っていたか。					
④記録者は漏れなく記録できていたか。					
☆心肺蘇生法について					
①周囲の安全を確認		○or×	アドバイス		
②反応の確認					
③助けを呼ぶ					
④119番通報					
⑤AEDを頼む、持ってくる					
⑥呼吸の確認					
⑦胸骨圧迫					
⑧AED使用					
⑨胸骨圧迫の交代					
中略					
☆自己評価					
協力	認識	意欲	自己	総合	生活
☆アドバイス欄			☆本時のまとめ		

図 9 保健ワークシート



図 10 心肺蘇生法を評価する



図 11 大画面で学習内容を提示

ードを各班に用意し、目に見える形で役割や手順を明確化させた。

5 時間目に実施した事例に応じた応急手当の学習では、実際に学校や家庭における生活中に起きた事故を参考に、事例 1 ～事例 6 までを作成し、2 班で心肺蘇生法の実習とさらにもう 1 つの事例の実習を行った。身近な事例を示すことで生徒の興味・関心を高め、応急手当に必要な知識と技能を深めさせた。

事例② フールの授業中		事例⑥ 部活動中(熱中症)	
① いつ	20 秒泳を終えた時	① いつ	外周を 10 周走り終えた時
② どこで	プール	② どこで	正門
③ 誰が	中学1年生 女子生徒Q	③ 誰が	中学1年生 男子生徒P
④ どうした	泳ぎ終わって集合をした時、フ ラフラし始めて、倒れこんだ	④ どうした	ふらふらしていて、頭を押さ えて、座り込んだ
⑤ 意識	なし	⑤ 意識	わからない
⑥ その他	体全部濡れている 周りに生徒がたくさんいる	⑥ その他	汗をすごくかいている 体全体が熱い 自分で歩くことができない

図 12 5 時間目 応急手当の事故事例

教具に関しては、学校や家庭にあるもの、実際に保健室等で使用されるものを用意した。また、訓練用人形・AED は各班に一つずつ設置し、全班が必ず実習又は評価できる環境を整えたこれらの物品を実際の学校生活を想定し、保健室、職員室、事務室、体育倉庫の場所を設置して用意し、生徒はそれぞれの場所に行って用意することで、自ら考えこれまでの学習を生かして応急手当を行う思考力・判断力の向上を図った。

準備した医薬材料、応急手当に関連する物品

訓練用 AED (9 台)、訓練人形 (9 体)、毛布、ブルーシート、タオル、担架、三角巾、添え木、体温計、包帯、救急セット、バケツ、ペットボトル、段ボール、筆記用具、紙、電話、氷・保冷剤、うちわ、新聞



図 13 準備した医薬材料、応急手当に関連する物品一覧

図 14 事例に応じた応急手当

4 研究のまとめ

(1) 成果

- ルーブリックを活用したことで、現段階での個人のレベルを確認することができるため、具体的な課題に気づき、運動の中で試行させることにより、「わかる」ことにつながった。また、仲間同士で学習課題を解決するために助言を行ったり、仲間の学習を援助したりする生徒が増え、生徒が自ら主体的・対話的に学習を進められるようになった。
- 性差や体力差を考慮した混成ルールを生徒の意見を取り入れながら作成、実践したことで、バスケットを得意とする生徒、不得意とする生徒が一人一人の違いを認め、態度面や技能面において互いを尊重し、積極的に楽しみながらゲームに参加する態度の育成につながった。
- ワークシートを活用し、生徒間の相互評価を行うことで、生徒は、評価者として「知識」を確認し、被評価者として「技能」の状況を客観的に知ることができた。また、教師の積極的なフィードバックは、生徒の学習意欲の向上につながった。
- 生活班を生かしたグループ活動を展開することで、課題を共有し、事例をもとに必要な応急手当の方法や物品・資材等を「見つけ」、実施の手順や実施上の注意事項について協力して「考え」、アドバイスをし合い、応急手当を「実践する」ことで、応急手当の学習への意欲が向上した。
- 学習成果を生かして身近な事例を解決する学習を展開することで、思考力・判断力が向上し、学校生活や家庭生活において課題を解決する意欲が高まった。

(2) 課題

- 生徒が対話的で深い学びを実現できるよう、他教科等と連携を図りながら全ての教育活動において取り組んでいく必要がある。
- 技能差や体力差に不安を感じている生徒の気持ちを理解するなど、全員が一人一人の違いを大切に、個々の挑戦を認め、運動の楽しさを感じることができる場づくりや教材、教具の工夫例を一層明らかにしていく必要がある。
- 授業において身近に起こる多様な事例への対処を全て行うには時間的な制約がある。各グループが学んだ内容を全体に広めるため、ジグソー法を活用するなど、学習方法の工夫改善を進めるとともに、学習過程、学習形態についても研究を進めたい。
- 今回の学びを生活に生かすため、生徒会専門委員会等と連携を図り、生徒や家庭への啓発活動、学校生活における傷害、疾病の応急手当についての主体的な取組等を行っていききたい。

5 参考文献

- (1) 文部科学省：中学校学習指導要領解説保健体育編（平成 29 年 7 月）2017
- (2) さいたま市教育委員会：体育活動時等における事故対応テキスト～ASUKA モデル～平成 24 年 9 月 2012
- (3) 日本保健科教育学会：保健科教育法入門 大修館書店 2017
- (4) 益川弘如：知識構成型ジグソー法による学びと保健教育 体育科教育 大修館書店 2019
- (5) 西岡 加名恵：資質・能力を育てるパフォーマンス評価 アクティブ・ラーニングをどう充実させるか 明治図書 2016

第7分科会

研究主題

豊かな『思考力、判断力、表現力等』を育むことで
技能向上を目指す授業づくり

さいたま市立与野西中学校

日 程

受付	公開授業 ①	休憩	公開授業 ②	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
9:15	10:00	10:50	11:00	11:50	13:00		15:00

公開授業案内

区分	内容	場所
公開授業①	第3学年 「バドミントン」(球技)	体育館2Fアリーナ
公開授業②	第2学年 「混成競技」(陸上競技)	グラウンド

学校所在地

〒338-0013
埼玉県さいたま市中央区鈴谷8-10-33

交通機関

JR埼京線
・与野本町駅から徒歩7分

さいたま市立与野西中学校



所在地：〒338-0013 埼玉県さいたま市中央区鈴谷 8 丁目 10 番 33 号

連絡先：TEL 048-852-6235 FAX 048-852-6253

E-mail：yononishi-j@saitama-city.ed.jp

H P：http://yononishi-j.saitama-city.ed.jp/

校 長：松井秀史

生徒数：541 名

◎教育目標

心豊かな生徒（ゆたかに）

自ら学ぶ生徒（かしこく）

自己実現を目指す生徒（たくましく）

◎重点目標

希望の登校 笑顔の活動 満足の下校

◎学校紹介

昭和 29 年に設置された与野町立与野中学校分校を前身に、昭和 30 年に開校した与野町立与野西中学校は、平成 13 年 5 月、浦和市・大宮市・与野市の 3 市の合併によるさいたま市の新設（平成 17 年岩槻市を編入）に伴い、さいたま市立与野西中学校と改称。地元との強い絆で結ばれた地域の学校として、その特色を生かした教育活動を推進している。

部活動が大変活発で、陸上、水泳、バレーボールでは、県大会をはじめ、関東大会、全国大会でも成果をあげている。また、学習面の伸びも近年めざましく、文武両道を実現している。

1 研究の構想

(1) 研究主題

豊かな『思考力、判断力、表現力等』を育むことで技能向上を目指す授業づくり

(2) 研究主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）において、保健体育科の目標は「豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指す」と示され、各種の運動の特性や魅力に応じてその楽しさや喜びを味わいながら基本的な知識や技能を身に付け、運動や健康についての自他の課題を発見し、合理的な解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養いつつ、生涯にわたって運動に親しみながら健康の保持増進や体力向上を目指すことが求められている。

本校の現状としては、運動や体育が得意な生徒が多い一方、苦手な生徒が徐々に増加している現状がある。また、好きな運動には積極的に活動し、苦手な運動に対しては極端に積極性が下がってしまう傾向が見られる。それを受けて、運動が苦手な生徒に焦点を当て、「思考力、判断力、表現力等」を養う活動に視点を当て、適切に評価することで「楽しい」「おもしろい」を実感させ、少しでも運動が好きと思う生徒を増やしたいと考え、本主題を設定した。

(3) 研究の仮説

生徒一人一人の思考力、判断力、表現力等を向上させることで技能についても向上が図られ、「豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力」を育成することができるであろう。

(4) 本校において重点としている研究の視点

- | | |
|------|---------------------------------------|
| 視点 1 | 生徒にとって必要性を感じる活動が増える単元の計画と診断的・形成的評価の実践 |
| 視点 2 | 具体的な動作につなげるための思考を促す学習カードの工夫 |
| 視点 3 | 対話型・コミュニケーション型の学習活動を多く取り入れる指導法の工夫 |

2 研究の内容

(1) 生徒にとって必要性を感じる活動が増える単元の計画と診断的・形成的評価の実践 視点 1

- ア 1 種目あたりの時数を確保した年間指導計画の作成
- イ 単元開始当初のゲームや記録を中心に計画した単元構成
- ウ 単元途中のゲームや記録をもとに課題解決の学習につなげる学習活動の工夫
- エ 指導と評価を意識した単元構造図の作成

(2) 具体的な動作につなげるための思考を促す学習カードの工夫 視点 2

- ア 学習カードの項目の工夫
- イ 調べ学習の実践

ウ 相互評価カードの活用

(3)対話型・コミュニケーション型の学習活動を多く取り入れる指導法の工夫 視点3

ア ペアでの教え合い学習

イ グループでの教え合い活動

ウ 相互評価カードの活用

3 研究の実際

(1) 生徒にとって必要性を感じる活動が増える単元の計画と診断的・形成的評価の実践

ア 1 種目あたりの時数を確保した年間指導計画の作成

見直し前 年間指導計画

		体育的 行事行事	全校新 体力テス ト	新体力 テスト	体育祭	学校総 合	修学旅 行							新人 戦			市販 伝大会	県 販伝大会	市授 業研				全 国販 伝大会	全校新 体力テス ト																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																															
--	--	-------------	------------------	------------	-----	----------	----------	--	--	--	--	--	--	---------	--	--	-----------	-----------	----------	--	--	--	----------------	------------------	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--



見直し後 年間指導計画

学年	時間	学期 月	1学期													2学期												3学期								
			4			5			6			7				8		9		10				11				12		1		2				3
			週	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
第1学年 及び 第2学年	120	1	体づくり運動8				陸上競技Ⅰ 12				水泳10				器械運動12				陸上競技Ⅱ 8				武道(剣道) 12				球技Ⅰ(ネット型) 13				球技Ⅱ(ゴール型) 13					
		2																																		
		3	理論3		保健6																															
	120	1	体づくり運動8				ダンス12				水泳10				球技(ネット型) 12				陸上競技Ⅲ 8				武道(柔道) 12				球技Ⅲ(ベースボール型) 13				球技Ⅱ(ゴール型) 13					
		2																																		
		3	理論3		保健6																															
第3学年	120	1	体づくり運動8				陸上競技Ⅰ ダンス 領域選択 12				水泳10				球技(ネット型) 武道(柔道・剣道) 領域選択 16				陸上競技Ⅱ 器械運動 領域選択 10				球技Ⅲ・Ⅱ(ベースボール型・ゴール型) (ソフト・バスケ選択) 13				球技Ⅱ(ゴール型) (サッカー・ハンド種目選 択) 13									
		2																																		
		3	理論3		保健6																															

見直しの理由・視点としては、さいたま市独自の教育施策を活用し、本校では保健体育の年間授業時数を15時間増やし、各学年120時間としている。単元終了時に身に付けさせたい力は、少ない時数の細切れでは定着しないという教師の実感があったため、1 単元あたりの時数を工夫し、時間をかけて生徒に力を身に付けさせることができるようにした。

イ 指導と評価を意識した単元構造図の作成（「水泳」の実践）

第3学年		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
水泳		オリエンテーション	授業の流れを理解しよう	自己の泳力を確認しよう	ペアで協力して教え合い学習をしよう①	ペアで協力して教え合い学習をしよう②	試しの泳力測定	ペアで協力して教え合い学習をしよう③	ペアで協力して教え合い学習をしよう④	与野西中泳力検定に挑戦しよう①	与野西中泳力検定に挑戦しよう②
指導	知識及び技能	①水泳の特性		②泳法	④観察の仕方						⑤体力の高め方
	思考力、判断力、表現力等					①良い動きの指摘		②運動の取り組み方の工夫	③自己の課題に応じたペア学習		
	学びに向かう力、人間性等	①健康・安全	②協力				③公正			④主体的	
評価	知識・技能 ノート・観察	①水泳の特性			④観察の仕方		②泳法				⑤体力の高め方
	思考・判断・表現 ノート					①良い動きの指摘		②運動の取り組み方の工夫	③自己の課題に応じたペア学習		
	主体的に学習に取り組む態度 観察		①健康・安全	②協力						③公正	④主体的

指導と評価を意識した単元構造図

「知識」と「思考・判断・表現」に関連するものはその時間のうちに評価ができるようにし、「技能」と「主体的に学習に取り組む態度」に関連するものは指導した後の時間で評価できるようにし、指導と評価の一体化を図った。

ウ 単元途中のゲームや記録をもとに課題解決の学習につなげる学習活動の工夫

（「球技（ゴール型）ハンドボール」の実践）

Step up シート（課題発見編）

2月13日（水） | 班 チーム名

○今日のチーム目標、スローガン

○ゲームの記録（オフェンス時のボールの軌跡）

ボールを持った地点…○ ボールを失った地点…× シュートを打った地点…☆（決まったら●）

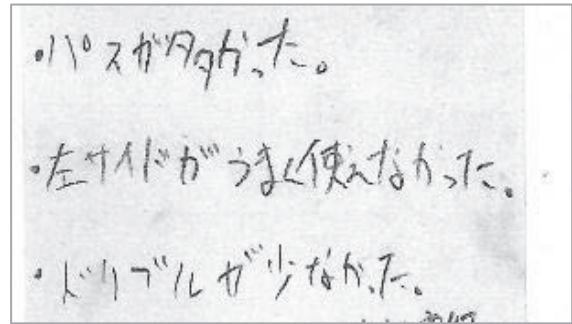
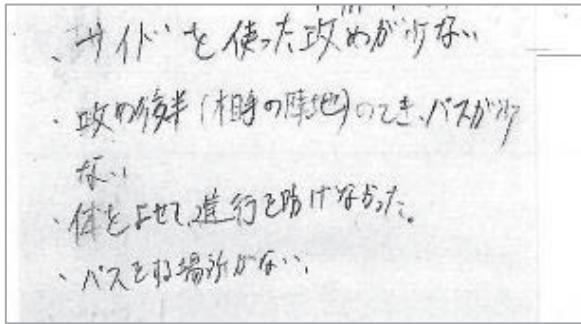
○数値的分析

つながったパスの本数	正正正正	11 本
シュートの本数	正下	8 本
決まったシュートの本数	正	2 本

単元のはじめ・なか・まとめでゲームの記録を取り、視覚的に示すことで、課題の発見や課題解決の学習の改善、または生徒たちが技能の上達を実感できるようにした。

特に、はじめ・なかの記録をもとに、自己にあった課題とその解決方法を選んだり、考えたりすることに役立てた。





↑ 生徒が書いた「考えられる課題」 ↑

(2) 具体的な動作につなげるための思考を促す学習カードの工夫

ア 学習カードの項目の工夫(「球技(ネット型)バドミントン」の実践)

【Before】

【After】

ラリー数	前	右	左	後ろ	動いた	得点
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
16						
17						
18						
19						
20						
21						
22						
23						
24						
25						
26						
27						
28						
29						
30						
合計	4	2	2	4	0	4

○記録方法○

- 「前・右・左・後ろ」のどこに打ったかを見て、○をつける。
- 相手のペアのうち、打ち返してきた人がエリアを動いていたかどうかを見て、動いていたら「動いた」に○をつける。
- 得点につながったときは、「得点」に○をつける。

ペアの課題

氏名()

相手が動かなかったので、次は空いているところへ目を向けて、打ちたいペアと打つところを決める。

氏名()

前後だけでなく、左右に相手を動かせるようになる。

バドミントンで空いたスペースにどれだけ打てたかを記録する用紙

左の表は単元のはじめの段階、右の表は課題解決の学習後のゲームの記録である。このペアは「相手を動かすことができなかった」「左右に打ち分けられなかった」という初期の課題があったが、課題解決の学習を行い、「相手のいないところに打った回数」「右に打った回数」を増やすことができた。自己や自分たちのペアにとって必要な技能を、自分たちで考え気付くことで、生徒が技能の必要性を強く感じ、課題解決の学習に対する目的が明確になった。

イ 調べ学習の実践（「水泳」の実践）

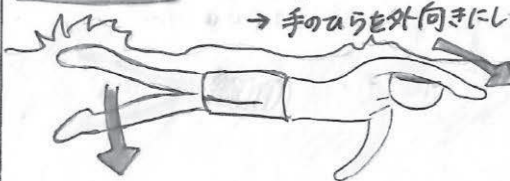
調べ学習を行い、動作のポイントをまとめさせる。

泳法

クロール

○水泳でのポイントとなること教科書からまとめよう。（絵と説明（色をつけて）の両方でまとめる）

STEP 1 ・エントリー
→ 手のひらを外向きにして、入水する。



グライド ~ キャッチ
→ 腕を前方へ伸ばす。



POINT 2

親指を下に
ひきこく

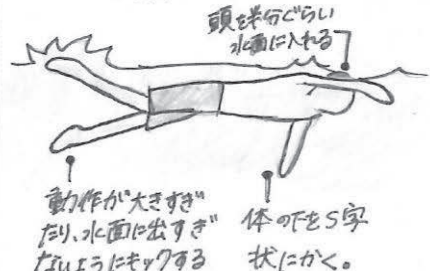


中心線と肩の間に入水



STEP 2 - 安定したペースで長く泳いだり、速く泳いだりする。 -

POINT 1
力強いフットキック
頭半分ぐらい水面に入れる



動作が大きすぎたり、水面に出すぎないようにキックする

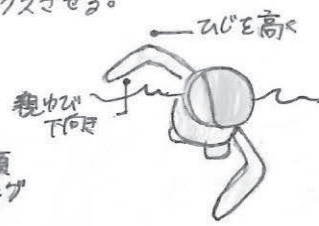
体の形をS字状にかく。

POINT 2
ローリングと連続した口呼吸
→ 体のローリングを用いて、水中の手のかきを有効に使い、その動きに合わせて呼吸をする。



呼吸の時、頭を体のローリングと連動させる

POINT 3
リラックスしたリカバリー
→ リカバリーのとち、ひじを高くして、腕をやや曲げ、手をリラックスさせる。



ひじを高く
親指を下に

POINT 1
ダウキック
▶ 太ももからむちうつようにけり下ろす。
▶ ① → ② → ③ と力が伝わるようにけり下ろす。



足
ひざから下
太もも

アップキック
▶ 脚の裏全体でけり上げる。



ひざと足首は伸ばしたまま
太ももから持ち上げる

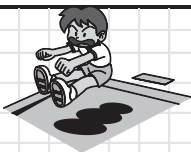
分かりやすいものは活動場所へ掲示し、授業中の学習補助教材となるようにする。



ウ 相互評価カードの活用（「陸上競技（走り幅跳び）」の実践）

見るポイントをわかりやすくするために、各動作のポイントを絞り項目立てを工夫した相互評価カードを活用した。

走り幅跳び		※目標記録設定の方法							
		立ち幅跳び			50m走				
		目標記録 = 1.5 × () cm			- 25 × () 秒 + 280				
※できた課題は、ペアの人が「○→●」のように黒く塗りつぶしてあげよう！									
項目	課題	～ペアの人に評価してもらおう！～							
技能Ⅰ	助走	①スピードに乗って助走をしているか？	○	○	○	○	○	○	○
		②踏み切り位置に足があったか？	○	○	○	○	○	○	○
技能Ⅱ	踏み切り	③踏み切る直前の視線は、斜め上であったか？	○	○	○	○	○	○	○
		④強く地面を蹴っていたか？	○	○	○	○	○	○	○
技能Ⅲ	空中動作から着地	⑤上方に伸びあがるようにしていたか？	○	○	○	○	○	○	○
		⑥胸を張り、そろようにしていたか？	○	○	○	○	○	○	○
		⑦着地の時、体が「ん」の字になっていたか？	○	○	○	○	○	○	○

	立ち幅跳びの記録	目標の記録	評価者						
			助走距離						
	cm	cm	m	m	m	m	m	m	m
			本日のベスト記録						
			cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm

「立ち幅跳び」と「50m走」の記録から計算式に当てはめることで、簡単に目標記録の設定を行うことができるようにした。また、走り幅跳びの技能を動作別に段階分けし、それぞれの技能段階のポイントがわかりやすいように簡潔に項目立てをした。さらに、学びの過程が一目瞭然の、過去と比較しやすい形式にすることで、技能の向上を視覚的に実感できるようにした。

（3）対話型・コミュニケーション型の学習活動を多く取り入れる指導法の工夫

ア ペアでの教え合い学習（「陸上競技（長距離走）」の実践）

〈ラップタイム〉										
距離	200m	400m	600m	800m	1000m	1200m	1400m	1600m	1800m	2000m
タイム										
1周タイム										
差										

記録測定をしたのは、 です。

2000mの記録は 分 秒 でした。

◎ペアからのアドバイス

アドバイス1	
アドバイス2	
アドバイス3	

〈アドバイスをみての感想〉	〈次時への課題〉

ペアでの記録の計測、アドバイス・応援する活動を取り入れ、コミュニケーションを活発にした。それに活かせるように具体的な声かけの例を、腕振りや呼吸法、ピッチやストライドに関わる技術的アドバイスと、走っている人が頑張れるような声かけなどの意欲の高まるアドバイスに分類し、事前に知識の習得を行った。また、活動を通して、ペアからもらってうれしかったアドバイスや記録向上につながったアドバイスなどを考え、応援・アドバイスする側になった時の参考にさせた。

長距離走（タイムトライアル）学習カード 抜粋

ゲーム分析シートを利用した課題発見と課題解決方法を考える活動を単元計画に含み、グループでの課題解決の学習や協同的活動時間を確保した。

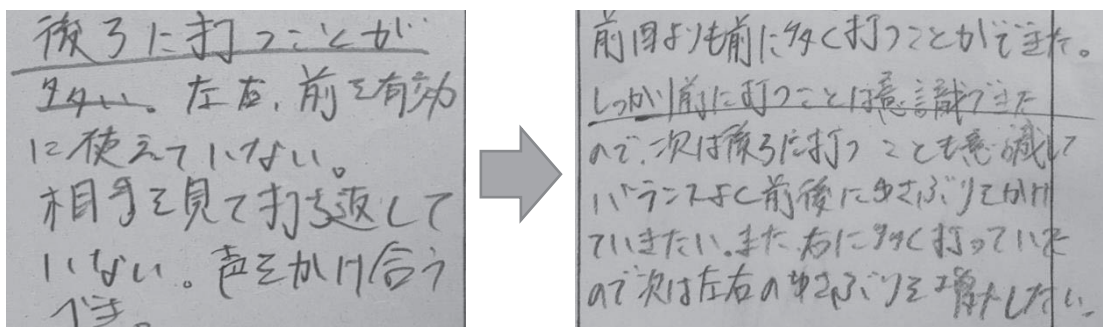
過去の第3学年バドミントンの単元計画

— 150 —

4 研究のまとめ

(1) 成果

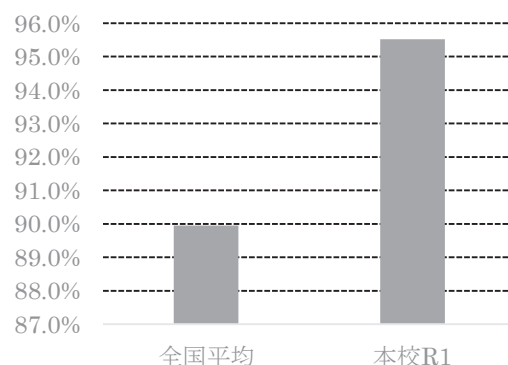
- ①「思考力、判断力、表現力等」を高めるために、特に単元の中でペア学習やグループ学習など、仲間と協力して活動する時間を計画的に増やすことができた。また、指導方法や指導形態、学習カードやグループカードを工夫して「思考力、判断力、表現力等」の向上を促した。その結果、生徒の記述に下のような記述の変化が見られた。バ



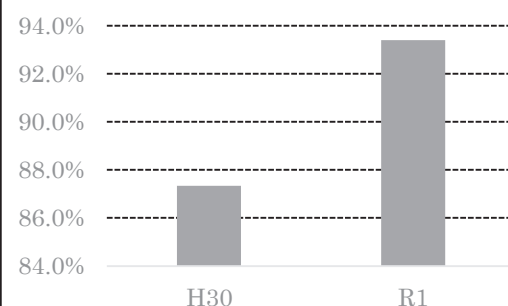
ドミニトンのゲーム分析カードの例であるが、単元当初の記述（左）では、主にゲームの振り返りのみにとどまっているが、単元途中の記述（右）では、ゲームの振り返りに加えて、前回との比較、次回に向けての課題となる具体的なポイントなども詳しく書けるようになった。また、例えばバドミントンでは『ダブルスでの空いた場所をめぐる攻防について、合理的な動きと自己や仲間の動きを比較して、成果や改善すべきポイントを仲間に伝えている』や『自己や仲間の課題や課題解決に有効な練習方法の選択について、自己の考えを伝えている』などの評価規準を十分達成していると教師が評価した生徒が、全体の 81.8% という高い値になった。これらのことから、生徒たちの「思考力、判断力、表現力等」が高まったと思われる。さらに、生徒アンケートでは、『体育の授業で、仲間と話し合ったり協力したりして活動する場面がある』という質問に「とてもそう思う」＋「そう思う」の割合が 95.6% と全国平均と比べ 5.6 ポイント上回った（グラフ①）。

- ②それに伴って、『体育の授業で、技能の向上を実感することがある』という質問に「とてもそう思う」＋「そう思う」の割合が、昨年度（平成 30 年度）と比較して、今年度（令和元年度）は 6.1 ポイント高い、93.4%であった（グラフ②）。昨年度よりも技能の向上を実感させることができたといえる。

グラフ① 体育の授業で、仲間と話し合ったり協力したりして活動する場面がある

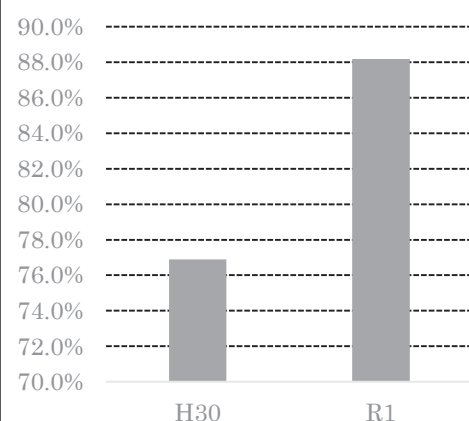


グラフ② 体育の授業で、技能の向上を実感することがある



③また、技能の高まりを実感できたことで、『保健体育の授業が楽しい』という質問に「とてもそう思う」＋「そう思う」の割合が昨年度（平成 30 年度）の 76.9%から今年度（令和元年度）は 88.2%と、11.3 ポイントも向上した（グラフ③）。

グラフ③ 保健体育の授業が楽しい

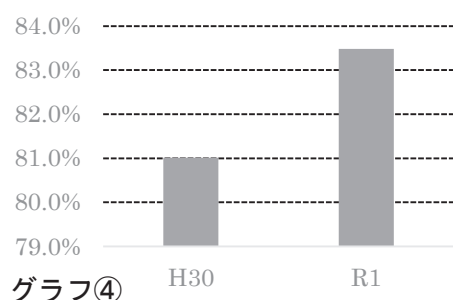


④さらに、『運動（体を動かすこと）が好きだ』という質問に「とてもそう思う」＋「そう思う」の割合が、昨年度（平成 30 年度）と比較して、今年度（令和元年度）は 2.5 ポイント高い、83.5%であった（グラフ④）。

これらのことから、「豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力」を育成することにつながったと考えられる。

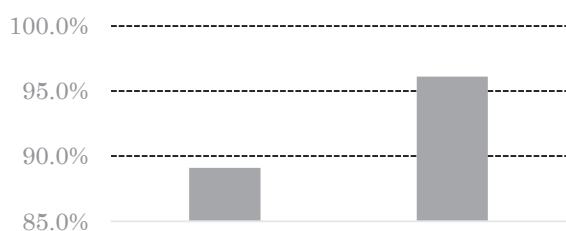
⑤生徒たちに「思考力、判断力、表現力等」の向上を求めたときに、話し合いの目的を明確にさせたり、見通しを持って活動させたりすることが必要不可欠となる中で、指導する教師の授業マネジメント力が向上した。例えば、『授業のはじめに本時の目標が示されている』『授業の最後に、振り返りの活動をする時間がある』の質問に対する回答は、いずれも全国平均を大きく上回った（グラフ⑤⑥）。

運動（体を動かすこと）が好きだ



グラフ④

授業のはじめに
本時の目標が示されている



グラフ⑤

授業の最後に
振り返りの活動をする時間がある



グラフ⑥

（２）課題

①技能の向上に関しては、多くの生徒が技能の高まりを実感することができているが、実際に教師が求めた評価規準を十分に満たしていた生徒の割合はまだ多くはない。技能のさらなる向上を図るには、「思考力、判断力、表現力等」の働かせ方の工夫が今後必要だと思われる。

②「思考力、判断力、表現力等」を働かせていくために前提となる、「知識」をさらに深めていくための指導方法や教材・教具の工夫を行うことで、より効果的な指導ができると考えられる。今後、「知識」を深めさせるための工夫についても考えていきたい。

第8分科会

研究主題

主体的・対話的で深い学びを実現する保健体育学習
～単元の特性に応じた効果的な学習指導の工夫～

川口市立南中学校

日 程

受付	公開授業 ①②	休憩	公開授業 ③	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
8:50	9:40	10:30	10:45	11:35	13:00		15:00

公開授業案内

区分	内容	場所
公開授業①	第3学年 「器械運動」(マット運動)	アリーナ
公開授業②	第2学年 「保健」(がん教育)	武道場
公開授業③	第3学年 「ダンス」(創作ダンス)	アリーナ

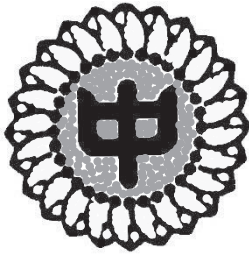
学校所在地

〒332-0013
埼玉県川口市舟戸町2-3

交通機関

J R 京浜東北線
・川口駅から徒歩20分

川口市立南中学校



所在地 〒332-0013
埼玉県川口市舟戸町2番3号

連絡先 TEL 048-222-3540 FAX 048-222-1831

E-mail 320.03000@city.kawaguchi.saitama.jp

H P <http://www.sch.kawaguchi.saitama.jp/minami-j/>

校長 戸谷 弘幸

生徒数 693名

◎教育目標

優しく ……豊かな心をもつ生徒
強く ……たくましい生徒
賢く ……自ら学ぶ生徒

◎校訓

心を磨く 身体を磨く 智性を磨く

◎学校紹介

本校は、昭和22年、新学制により川口市商工業地域を学区として創立された。平成13年、新校舎に建て替えられ現在に至っている。同じ敷地内には、幼稚園、小学校があり、幼小中の連携教育を推進し、知徳体のバランスの取れた教育活動を展開している。

部活動がとて盛んで、県大会をはじめ、関東大会、全国大会に出場し、活躍している部が多数ある。

1 研究の構想

(1) 研究主題

「主体的・対話的で深い学びを実現する保健体育学習
～単元の特性に応じた効果的な学習指導の工夫～」

(2) 研究主題設定の理由

新学習指導要領では、目標及び内容を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の三つの柱で再整理している。また、これらの指導内容を確実に身に付けるため、新学習指導要領解説において「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の視点も示された。こうした中で、埼玉県では本研究大会の主題である「新学習指導要領を踏まえた体育・保健体育学習の具現化に向けて」について研究を進めている。令和3年度の新学習指導要領の全面実施に向け、体育・保健体育学習の様々な提案が学校現場からも求められている。

本校の保健体育科では、主題を設定するに当たり、改めて昨年度行った中学2年生対象の「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」(スポーツ庁)の結果から生徒の実態を確認した。

①運動やスポーツをすることが好きですか。

	好き
全国	55.5%
本校	51.7%

②体育の授業は楽しいですか。

	楽しい
全国	46.3%
本校	37.7%

③保健体育の授業で、自分に合った練習や場を自分なりに選んで活動することを行っていますか。

	行っている
全国	29.6%
本校	22.7%

④保健体育の授業で学習している内容は、あなたの将来に役立つと思いますか。

	思う
全国	35.1%
本校	27.6%

⑤中学校を卒業した後、自主的に運動やスポーツをする時間を持ちたいと思いますか。

	思う
全国	65.1%
本校	68.4%

⑥話し合う活動を行っていますか。

	行っている
全国	48.0%
本校	71.0%

以上のことから「体育の授業が楽しい」と感じている生徒が全国と比較すると下回っている事実に注目し、授業改善の必要性を再確認するものとなった。生徒が「授業が楽しい」と感じるには、学習内容を自分事と受け止めたり、必要感をもったりすることが

大切であると考えた。そのため、指導内容や教育課程を工夫し、生徒が自ら練習方法や練習の場を選択していくような主体的な活動や、対話を通して仲間とともに課題を解決していく活動を行う体育の学習指導への改善が必要であると考えた。そのため、「主体的・対話的で深い学びを実現する保健体育学習～単元の特性に応じた効果的な学習指導の工夫～」を本校の研究主題に設定した。

(3) 研究の仮説

主体的・対話的で深い学びを実現する保健体育学習を実践するにあたり、次の仮説を立てた。

指導内容を明確化した学習資料を作成・提示することで、学習への関心や意欲が高まり、主体的な活動が生まれるであろう。

協働的な学習の位置づけを工夫した学習過程を作成することで、対話の質が高まるだろう。

(4) 本校において重点としている研究の視点

本校では、本大会における研究の視点1「指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成」の①指導内容の明確化、視点2「主体的・対話的で深い学び」の実現の②学習過程の工夫を重点としている。

2 研究の内容

(1) 指導内容を明確化した学習資料の工夫【視点1 ①指導内容の明確化】

生徒の「主体的」な学習を実現するために、「ねらい」「学習内容」等を分かりやすく示した「学習資料」を作成し、生徒に提示する。これにより、生徒は授業の全体像を理解し、学習への関心や意欲の向上につなげる。

(2) 対話的な学びを生む学習過程の工夫【視点2 ②学習過程の工夫】

課題を解決し、技能を習得したり、向上したりするためには、仲間同士の学び合いが有効であると考えます。そのため、話し合う内容のポイントを提示したり、相談し合う観点を明確にした協働的な学習を単元計画の中に意図的・計画的に位置づけ、対話の質が高まる学習過程を作成する。

3 研究の実際

(1) 第3学年「ダンス」の実践から

ア 指導内容を明確化した学習資料の工夫【視点1 ①指導内容の明確化】

単元及び1時間の「ねらい」と「学習内容」を明確にし、生徒に提示することで学習の見通しを持たせるとともに学習への関心や意欲が向上することを目指して、以下のことを実践した。

表1 3年間の単元計画

学年	時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1年生	ねらい	オリエンテーション	フォークダンス		現代的なリズムのダンス						
	内容		踊り方の特徴を捉えてみんなで踊ろう	たたら踊り(川口市)	ロックのリズム①	ロックのリズム②	ヒップホップのリズム①	ヒップホップのリズム②	好きなリズムを選び、変化のある動きを組み合わせて続けて踊ろう	グループでオリジナルダンスづくり	交流会
2年生	ねらい	ダンスの学習の通しを持つ。ダンスの復習の特性、約束事、準備、片付け	創作ダンス								
	内容		多様なテーマから表わしたいイメージを捉え、変化を付けたひと流れの動きで表現しよう	表わしたいイメージを選び、変化のあるひとままとりの表現にして踊ろう							
3年生	ねらい	ダンスの学習の通しを持つ。ダンスの復習の特性、約束事、準備、片付け	新聞紙	走る－止まる	走る一跳ぶ一転がる	スポーツいろいろ	伸びる一縮む	集まる一とび散る	グループで動きづくり	発表会	
	内容		・新聞紙になりきり、新聞紙の多様な質感を大きめに表現する ・新聞紙を何かに見立て、ひと流れの動きで表現する ・見せ合いをする	・「走る-止まる」動きから表わしたいイメージを捉え、静と動のメリハリのあるひと流れの動きで表現する ・見せ合いをする	・「走る一跳ぶ一転がる」動きから表わしたいイメージを捉え、高さや落差を強調したダイナミックな動きで表現する ・見せ合いをする	・スポーツの特徴を大ききな動きで誇張して表現し、1番表わしたいところを強調したひと流れの動きを工夫する ・見せ合いをする	・「伸びる一縮む」動きから表わしたいイメージを捉え、体を極限まで使い緩急のあるひと流れの動きで表現する ・見せ合いをする	・「集まる一とび散る」という群の動きから表わしたいイメージを捉え、密集や分散を繰り返し、ダイナミックに空間を変化させた動きで表現する ・見せ合いをする	・表わしたいイメージを選び、グループで変化と起伏のあるひとままとりの動きを工夫する ・踊りこみをする	・発表会を行う	
3年生	技能ワード	2、3年生：交流ダンス	大げさ(誇張)ひと流れの動き	静と動のメリハリ	高低の変化ダイナミック	デッサン強調	極限	群の変化	ひとままとりの動きははじめ一なカーおわり		
	時間		2・3	4	5	6	7	8	9・10・11	12	
3年生	ねらい	2、3年生：交流ダンス	フォークダンス	現代的なリズムのダンス		創作ダンス		3つのダンスから選択			
	内容		踊りの背景や情景を思い浮かべて、みんなで踊ろう	ロックやヒップホップのリズムの特徴を捉え、変化とまとまりを付けて踊ろう	ロックのリズム	ヒップホップのリズム	多様な感じ	ねじる一回る一見る	見る×群の効果	ダンスごとにグループづくり・各グループでの活動	合同発表・交流会
3年生	ねらい	2、3年生：交流ダンス	ハモニカ(イスラエル)、秩父音頭(埼玉県)	ロックのリズム	ヒップホップのリズム	多様な感じ	ねじる一回る一見る	見る×群の効果	ダンスごとにグループづくり・各グループでの活動	合同発表・交流会	
	内容		・踊り方の特徴を捉えて踊る ・踊りの文化的背景や情景を思い浮かべて、音楽に合わせてみんなで踊って交流して楽しむ。	・ロックのリズムの特徴を捉え、変化とまとまりを付けて自由に踊る ・仲間とかかわって踊る	・ヒップホップのリズムの特徴を捉え、変化とまとまりを付けて自由に踊る ・仲間とかかわって踊る	・異なる感じをとりあげ、質の違いを踊り分けて表現して踊る ・見せ合いをする	・「ねじる一回る一見る」動きから表わしたいイメージを捉え、ゆっくり捻って素早く回って見つけたひと流れの動きで表現する ・見せ合いをする	・「見る」動きを使って、密集や分散、列などの群の動きを手がかりに空間の使い方に変化を付けて、ひと流れの動きで表現する ・見せ合いをする	・ダンスごとにグループづくり・各グループでの活動	・発表や交流の仕方、鑑賞の仕方を理解する ・自分たちで合同発表 ・交流会を運営し、行う。	

(ア)生徒の実態を勘案し、3つのダンスを学習する単元計画(表1)を作成した。

1年生ではまず仲間と楽しく踊り交流するフォークダンスを取り上げて、仲間とのコミュニケーションを図った。その後に、生徒にとって一番身近であり、仲間と関わりながらリズムに乗って踊る現代的なリズムのダンスを取り上げた。

2年生では、1年時の現代的なリズムのダンスでの自由に踊る学習を継続し、自己表現の楽しさを味わえる創作ダンスを取り上げた。

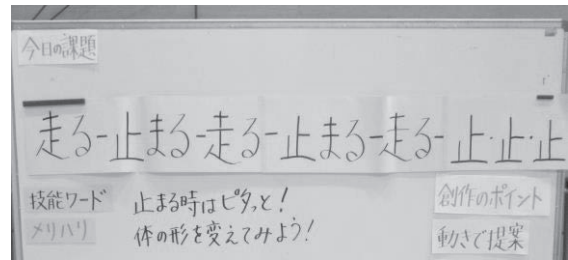
選択制となる3年生では、単元前半に全員で3つのダンスを学習して各々の特性

や魅力を味わい、後半では3つのダンスから選択させ、生徒が自分の選んだダンスの学習を主体的に進められるようにした。

(イ)毎時間の授業で身に付けたい技能を

「技能ワード」(図1)として生徒に提示し、ホワイトボードにカードで掲示した。

また、単元を通して学ぶ「技能ワード」も継続的に掲示しておき、目指すべき「よい動き」を明確にした。



【図1】技能ワード掲示「メリハリ」

【実践の成果と課題】

- 生徒の実態に応じて3つのダンスをバランスよく組み込んだことで、意欲的に学ぶ姿が多く見られ、各々のダンスの特性や楽しさを味わうことができた。
- 「技能ワード」を用いて当該時間に学ぶ技能を生徒に明示したことで、グループでの創作活動やコメント交換、学習カードへの記載の際に、技能ワードを用いて具体的に動きや表現を評価し言葉で表現できるようになった。
- 「知識及び技能」だけでなく、三つの資質・能力をバランスよく育成する単元計画をさらに検討していく必要がある。

イ 対話的な学びを生む学習過程の工夫【視点2②学習過程の工夫】

研究対象とした創作ダンスの授業では、仲間とともに動きを工夫したりコメントを伝え合ったりするなど他者と関わる活動が多いが、学習過程の中で対話的な学びをより充実させるために、以下のことを実践した。

- (ア)単元の前半では、毎時間「踊る」「創る」「見る」活動を行い、特に「創る」「見る」活動においてグループで対話する場面を設けた。
- (イ)展開の前半の「踊る」活動では、教師主導で、本時で学ばせたい知識と技能を関連させて学習し、技能の習得を図った。それにより、後半のグループ活動で提案がしやすくなるなど対話的な学びが充実するようにした。
- (ウ)展開の後半の「創る」活動では、①「動きで提案」「身体で相談」を合い言葉として動きながら創作を行わせた。②自分たちで課題を発見して解決できるように、教師が問いかけや助言を行い対話を活発にさせた。③他グループと助言し合ったり、グループ内で見合ったりする活動を取り入れ、表現や動きを見る力や考えたことを言葉や動きで伝える力を高めた。
- (エ)見せ合いや発表会などの「見る」活動では、表現や動きを観察する視点を伝えた。
- (オ)仲間と活動する時は、お互いの意見を認め合うことを指導した。

【実践の成果と課題】

- 毎時間グループを変えたことで多くの生徒と関わり、他者と関わることの楽しさや認めてもらえる喜びを体感し、学習に主体的に取り組むことができた。

○見せ合いや発表会では観察する視点を学習してから鑑賞したことで、話し合いの中で自他のグループの良い点、課題や改善点を具体的に指摘しあったり、文章で表現したりすることができるようになった。

●展開の前半の教師主導の活動で、教師からのイメージと動きの例示で似たようなものを取り上げてしまったり、身に付けさせたい技能を十分に学習させることができなかったりしてしまうと、その後の創作活動が上手く進まないグループがあったので、教材理解をさらに深めていく必要がある。

●主体的・対話的な活動を実現させるためには、まず生徒の心身を解放させて授業に入ることが効果的であるため、生徒をダンスの魅力に引き込む導入の仕方や言葉かけをさらに工夫していく必要がある。

(2) 第3学年「器械運動（マット運動）」の実践から

ア 指導内容を明確化した学習資料の工夫【視点1 ①指導内容の明確化】

単元を通して、または1時間の授業の中で「生徒に何を身に付けさせるのか」ねらいや指導内容を明確にし、生徒の「わかる」「できる」を保障した授業改善を目指すため、以下のことを実践した。

(ア)学習資料として配布する単元計画のねらいや学習内容の一部を教師の説明をもとに生徒自身が記入できるよう工夫した。教師が指導内容を整理し、生徒は学習内容に見通しを立て、主体的な学習活動へとつながるようにした。

(イ)学習の進度や技能の高まりについて記入できる「自己チェックシート」「他者チェックシート」を作成し、自己変容を可視化できる学習カードを工夫した。

(ウ)技能では、目指すべき技の出来栄を明確にでき、そのために必要な課題発見や解決方法等を示した視聴覚資料「マットくん」を単元を通して活用させた。

【実践の成果と課題】

○学習資料を活用しながら学習の見通しをもち、仲間と協力して課題を発見し、解決しようとする主体的に学ぶ姿が多く見られるようになった。

○生徒同士が見せ合い、教え合う学習形態が定着し、仲間に伝える表現力の伸長や技能面での向上につながった。

●学習資料を合理的・効率的に活用できるよう、生徒同士の意見交換の仕方を再度構築し、指導を徹底することが必要である。

●課題を解決するための手立てのみならず、生徒自らが新たな課題を発見する力を伸長できるような、学習資料の更なる工夫・改善が必要である。

イ 対話的な学びを生む学習過程の工夫【視点2 ②学習過程の工夫】

前述の「平成30年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果より、本校では「話し合う活動をしていますか」については、全国平均を大きく上回る高い水準にあることがわかった。しかし、研究を進めていく中で、その対話の質や内容に課題が

あると感じ、対話の質を高めることができるよう、単元計画や学習過程の工夫を行った。

(ア)主体的な学び、対話的な学び、深い学びが絡み合いながら、単元を通して学習活動ができるよう、学習過程の中に3つの学びを意図的・計画的に組み入れ、明記した単元計画を作成した。

(イ)単元の前半では、「対話的な学び」の指導として、①対話的な学びの目的を明確にする、②具体的な学び合いの姿を示し丁寧に指導する、③気付いたことや考えたことを言葉や動作、絵図、ICT機器等を活用して仲間に伝える方法等を指導し、運動課題の解決状況等を仲間にフィードバックさせるなどの対話的な活動を重視した。

単元の後半には、「演技の発表」→「課題の発見」→「対話的な学び」→「出来栄を高めるための練習」→「演技発表(成果の確認)」の学習過程を構築し、対話的な学びによる適切な課題設定や解決状況の確認ができるようにした。

【実践の成果と課題】

○対話的な学びの指導を意図的に学習過程に組み込んだことで、生徒同士の意見交換や教え合いが活発になされるようになった。

●意見交換に時間がかかり、練習量が確保されない場面が出現したので、動きながらの対話的な学びになるよう、改善が必要である。

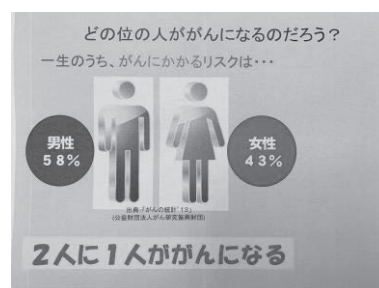
●的確・端的な仲間への伝え方や表現の仕方についての丁寧な指導が必要である。

(3) 第2学年「保健 生活習慣病の予防(がんの予防)」の実践から

ア 指導内容を明確化した学習資料の工夫【視点1 ①指導内容の明確化】

(ア)ICTを活用した写真やグラフなどの視聴覚教材の工夫

生徒が本時の課題や学ぶべき内容をより理解しやすくするために、ICTを活用し、がんに関連した写真やグラフ等を分かりやすくスライドにまとめて生徒に提示しながら授業を進めた。(図1)

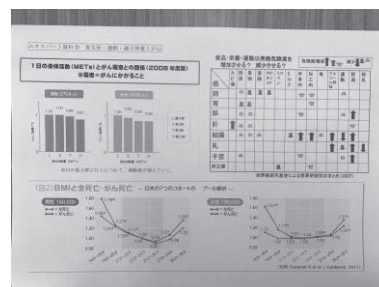


【図1】スライド教材

(イ)対話的な学習の質を高めるための学習資料の工夫

生徒同士の対話から、課題に対する考えや答えが自然に出てくるような資料を工夫し準備した。

指導内容に係る厳選した資料を用いることによって対話の質の向上を図った。(図2)



【図2】グループ活動での分析資料

【実践の成果と課題】

- 写真やグラフ等の視聴覚教材を使うことで、本時の学ぶべき内容が生徒に分かりやすく伝わった。資料分析や課題の答えを考える際には、提示した資料を使うことで、対話が活発になり質が高まった。
- 資料分析の際には、教師の準備する資料によって、対話の質に差が出てしまった。どのようなことを読み取って欲しいのかを教師が明確に持ち、生徒が導き出せるような資料を精選して提示することが必要である。

イ 対話的な学びを生む学習過程の工夫【視点2②学習過程の工夫】

今回の研究では、教師が答えを教えるのではなく、生徒同士の対話からそれぞれの答えが導き出せるように促した。これまでの授業から得た知識や提示された資料を使い、協働的な学習を学習過程の中に組み込むことによって、対話の質を高め、深い学びに繋げるために以下のことを実践した。(ア)～(エ)は手順を示したものである。

(ア) グループごとによるテーマ別の資料分析

同じテーマの資料を読み合うグループを作り、その資料に書かれた内容や意味を話し合い、グループで他の人に説明ができるように理解を深める。それによりテーマのエキスパートとして、他の生徒に伝える知識を身に付ける。

(イ) それぞれのテーマで得た知識を教え合い、課題に対する答えを考える。

違う資料を読んだ人が1人ずついる新しいグループに組み替え、それぞれが学んできた内容を説明し合う。そして、それぞれが担当した資料との関連を考え、課題に対するグループの答えを導き出していく。違ったテーマを学んできた生徒が集まって、協働的な学習を行うことで、新たな知識を得たり、発見したりでき、対話が活発化し質が高まった。

(ウ) グループごとに導き出した課題の答えを発表し全体で共有する。

各グループの答えを発表し交流させることで、それぞれの共通点や差異を考える。それにより、自分のグループの中では見つからなかった新たな気づきが発見でき、さらなる知識を獲得することができる。

(エ) 手紙形式で自分の考えを表現する。

習得した知識をどのように活用するかを考え、本時のまとめを行うことで個人に返すための深い学びにつなげた。手紙形式で書かせることによって、学んだ知識を人に伝えるための表現力を身に付けさせた。以下がその一例である。

「大切なあなた（お母さんへ）」

お母さんはいつも元気ですが、途端に元気じゃなくなる時があるかもしれません。そんなお母さんは見たくないので、食生活に注意を払ってバランスのいい食事をとって下さい。飲酒はほどほどにして、週一回は運動をして長生きしてください。大勢の人がいるときにはマスクなどをして行ってください。そして、定期的にがんの検査に行ってください。

【実践の成果と課題】

- 「テーマごとによる資料分析」→「違う資料を読んだ人が集まった新しいグループでの対話」→「グループごとの発表による知識の共有」といった段階を踏まえて協働的な学習を行うことで、新たな発見や知識の習得があり、対話が活発になり、質が高まったと考える。
- 手紙形式でまとめを書かせることによって、教師側は学びの中で、思考し判断した自分の考えを表現する力を見取ることができたと考える。
- 資料の読み取りや自分の考えを伝えることが苦手な生徒が活動するグループに集まると対話の質が下がってしまう。そのため、同じテーマでの話し合い活動が入っている。苦手な生徒は、粘り強く話し合いに参加し、友達の意見を参考に調整して、何をどう話すのか学ぶことになる。資質・能力が異質グループになるようグルーピングが必要である。また、全体で話し合い活動のまとめを共有する必要がある。
- 話し合いが行き詰まってしまい、うまく進まないグループも中には出てくる。その際には教師が巡回しながら、助言をすることで話し合いのヒントを与えていく必要がある。

4 研究のまとめ

(1) 成果

今回の研究実践による成果は、以下の3点である。

- ア 表1と表2－③⑥より、授業における対話の質が高まり、知識・技能の向上につながった。
- イ 表2－①②より、生徒の運動やスポーツへの関心や意欲が高まり、主体的な学習活動へとつながった。
- ウ 表2－④⑤より、生涯にわたって運動やスポーツに親しもうとする意識に大きな変容がみられた。

【南中保健体育に関するアンケートより抜粋】表1

話し合いを通じて、自己の知識・技能が高まった実感がありますか		
はい	94.6%	 9割以上の生徒が対話の効果を実感
いいえ	5.4%	

＜生徒の感想＞（抜粋）

- ・話し合いをすることで自分の知らなかったことを、知ることができたり、できるようになった。うまく表現できないところが話し合うことで動きながら解決できた。
- ・同じグループの人と、アイディアを出していく中で自分が思っていなかったことを友達が言ったときにそういう考え方があるんだと思って次につなげることができた。

- ・細かなところまでチェックしてくれたり、見本を見せてくれたりしたことで、自分の技の課題や、改善点が発見できた。

【平成30年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査との比較】表2

①運動やスポーツをすることが好きですか。	②体育の授業は楽しいですか。												
<table border="1"> <tr><td></td><td>好き</td></tr> <tr><td>H30</td><td>51.7%</td></tr> <tr><td>R1</td><td>54.7% ↑</td></tr> </table>		好き	H30	51.7%	R1	54.7% ↑	<table border="1"> <tr><td></td><td>楽しい</td></tr> <tr><td>H30</td><td>37.7%</td></tr> <tr><td>R1</td><td>40.2% ↑</td></tr> </table>		楽しい	H30	37.7%	R1	40.2% ↑
	好き												
H30	51.7%												
R1	54.7% ↑												
	楽しい												
H30	37.7%												
R1	40.2% ↑												
③保健体育の授業で、自分に合った練習や場を自分なりに選んで活動することを行っていますか。	④保健体育の授業で学習している内容は、あなたの将来に役立つと思いますか。												
<table border="1"> <tr><td></td><td>行っている</td></tr> <tr><td>H30</td><td>22.7%</td></tr> <tr><td>R1</td><td>64.2% ↑</td></tr> </table>		行っている	H30	22.7%	R1	64.2% ↑	<table border="1"> <tr><td></td><td>思う</td></tr> <tr><td>H30</td><td>27.6%</td></tr> <tr><td>R1</td><td>34.8% ↑</td></tr> </table>		思う	H30	27.6%	R1	34.8% ↑
	行っている												
H30	22.7%												
R1	64.2% ↑												
	思う												
H30	27.6%												
R1	34.8% ↑												
⑤中学校を卒業した後、自主的に運動やスポーツをする時間を持ちたいと思いますか。	⑥話し合う活動を行っていますか。												
<table border="1"> <tr><td></td><td>思う</td></tr> <tr><td>H30</td><td>68.4%</td></tr> <tr><td>R1</td><td>73.8% ↑</td></tr> </table>		思う	H30	68.4%	R1	73.8% ↑	<table border="1"> <tr><td></td><td>行っている</td></tr> <tr><td>H30</td><td>71.0%</td></tr> <tr><td>R1</td><td>76.9% ↑</td></tr> </table>		行っている	H30	71.0%	R1	76.9% ↑
	思う												
H30	68.4%												
R1	73.8% ↑												
	行っている												
H30	71.0%												
R1	76.9% ↑												

(2) 課題

- ア 更なる対話の質の向上を図るために、「動きを通して伝える」「動きながら考える」という、保健体育科ならではの「対話的な学び」を重視し、充実させていくことが必要である。
- イ 学習資料を合理的・効率的に活用できるように、資料の精選、提示の仕方、提示のタイミング等を更に工夫・改善していくことが必要である。
- ウ 平成30年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の項目に関して、本校としての伸長は図れたが、表2－①②④の項目は全国平均を下回る結果となっているため、更なる授業改善と指導の工夫が必要である。

5 引用参考文献

- ・中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 保健体育編 文部科学省
- ・2019年度（第60号）学校体育必携 埼玉県教育委員会

第9分科会

研究主題

『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善
～自己の思考を深め、課題をより良く解決することができる
生徒の育成～

埼玉大学教育学部附属中学校

日 程

受付	公開授業 ①	休憩	公開授業 ②	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
9:00	9:40	10:30	10:50	11:40	13:00		15:00

公開授業案内

区分	内容	場所
公開授業①	第1学年 「柔道」(武道)	体育館
公開授業②	第2学年 「バレーボール」(球技)	体育館

学校所在地

〒336-0021
埼玉県さいたま市南区別所4-2-5

交通機関

東京、宇都宮、高崎からお越しの方
JR宇都宮線・高崎線・京浜東北線
・浦和駅西口より徒歩20分

新宿、大宮、川越からお越しの方
JR埼京線
・中浦和駅より徒歩10分

埼玉大学教育学部附属中学校



所在地：〒336-0021

埼玉県さいたま市南区別所 4-2-5

連絡先：Tel 048-862-2214 Fax 048-865-6484

E-mail：fuchu@gr.saitama-u.ac.jp

H P：http://www.jhs.saitama-u.ac.jp

校長：道工 勇

児童数：494 名

◎教育目標

正しい判断力とたくましい実践力をもった自主的人間の形成

◎学校紹介

昭和 22 年、埼玉師範学校附属中学校として開校。同 26 年に埼玉大学教育学部附属中学校と改称、同 30 年に現在地に移転し今日に至る。今年度で 72 周年を迎える本校は、一般の公立中学校と同様、義務教育を行う中学校であるとともに、大学教育学部の附属学校として、次のような特色ある性格をもつ教育施設である。

1. 教育学部の計画に基づき、教育学部学生の実習の実施にあたる。
2. 教育に関する理論及び実践についての研究・実証を行う。
3. 埼玉県内の中等普通教育関係の諸活動に協力する。

1 研究の構想

(1) 研究主題

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善
～自己の思考を深め、課題をより良く解決することができる生徒の育成～

(2) 研修主題設定の理由

以下、これまでの研究の経緯、本校生徒の実態、新学習指導要領の3点から研究主題設定の理由について述べる。

ア これまでの研究の経緯

本校のこれまでの研究を以下に示す。

期間	研究主題	研究の内容(※保健体育科での取組を一部抜粋)
平成 21 年度～ 平成 22 年度	「新学習指導要領に基づく学習指導法の改善」	○保健体育科における言語活動の整理と授業実践。 ○生徒の言葉を引き出す発問の工夫。 ○思考・判断を促す教材の工夫。
平成 23 年度～ 平成 25 年度	「言語活動を通じた、思考力・判断力・表現力の育成」	○思考・判断させるために必要な知識や基本的な技能の整理。 ○思考・判断させる場面の設定と工夫。 ○思考・判断の学習状況を評価する学習カードの工夫。
平成 26 年度	「学習指導法の改善」	○何を学習させるのか、指導内容の明確化。 ○他者との「関わり」を通じた学習活動の設定。
平成 27 年度～ 平成 29 年度	「社会を主体的に生き抜くことができる生徒の育成」	○学びの自覚を促す学習カードの工夫。 ○思考を促したり深めたりするための生徒への言葉かけの工夫。

これまでの取組の中で生徒の言語活動を充実させるための発問の工夫や、生徒の思考・判断を促す活動及び評価方法の工夫等に取り組んできた。それにより、仲間と関わりながら積極的に活動に取り組む姿や、運動や健康等の知識を身に付け、それらを基に意思決定や行動選択しようとする姿が見られた。本校においては各教科等での取組もあり、基礎的・基本的な知識を定着させることや充実した言語活動を行わせる実践を積み重ねている。

イ 本校生徒の実態

これまでの研究の取組と授業等での生徒の現状から、本校生徒の実態を次のように捉えている。

- 基礎的・基本的な知識を身に付けている生徒が多い。
- 課題について話し合ったり指摘し合ったりする等、仲間と協力して活動することができる。
- 思考・判断したことを言葉や文章等で言ったり記述したりすることができる。
- 基礎的・基本的な知識を身に付けているが、実際の動きの技能として表現することが苦手な生徒がみられる。
- 思考を繰り返し自己の課題を的確に捉えたり、より良い解を見付けたりすることに課題がある。

ウ 新学習指導要領から

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編では、今回の中学校学習指導要領改訂の基本方針の一つとして、「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善の推進」を挙げており、以下のように述べている。

（前略）これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められる。

また、中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説保健体育編「第 3 指導計画の作成と内容の取扱い」では、「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善について以下のように示されている。

- ・運動の楽しさや健康の意義等を発見し、運動や健康についての興味や関心を高め、課題の解決に向けて粘り強く自ら取り組み、学習を振り返るとともにそれを考察し、課題を修正したり新たな課題を設定したりするなどの主体的な学びを促すこと。
- ・運動や健康についての課題の解決に向けて、生徒が他者（書物等を含む）との対話を通して、自己の思考を広げ深め、課題の解決を目指して学習に取り組むなどの対話的な学びを促すこと。
- ・習得・活用・探究という学びの過程を通して、自他の運動や健康についての課題を発見し、解決に向けて試行錯誤を重ねながら、思考を深め、よりよく解決するなどの深い学びを促すこと。※下線は筆者追記

本研究においては、上記の下線で示されている部分に焦点を当てて、研究・実践を行う。

以上のことから、これまでの研究の取組を継続して基礎的・基本的な知識及び技能の定着を図り、言語活動を充実させる授業実践を行う。その上で、生徒がさらに思考を深め試行錯誤を繰り返しながら、課題解決に向けて学習に取り組むことができるように授業改善を進めていきたい。そのため本研究では、「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善を通じて、自己の思考を深め、課題をより良く解決することができる生徒の育成を目指すこととした。

(3) 研究の仮説

- I 単元のまとまりを見通して「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で工夫した活動等を組み立てることで、生徒の学びの深まりをつくることができるであろう。
- II 対話をする場面を設定し工夫することにより、自己の思考を深めることができるであろう。

(4) 本校において重点としている研究の視点

本校では、本大会における研究の視点1「指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成」の①指導内容の明確化、視点2「主体的・対話的で深い学びを目指した指導の工夫」の①教材・教具の工夫を重点としている。

2 研究の内容

(1) 研究の手立て

研究の仮説を実証するための手立ては次の二点とする。

- i 「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で工夫した活動等を指導と評価の計画に示し、授業実践を行う。 視点1 ①指導内容の明確化
- ii 対話をする学習場面において教師がテーマを明確にし、生徒が自分の意見をもって対話を行えるようにする。 視点2 ①教材・教具の工夫

(2) 研究の検証方法

研究仮説を検証する方法を以下に示す。

- i 学習カードの記述内容と質問紙調査から、試行錯誤をしながら課題解決を行うまでの過程を読み取り、検証する。
- ii 対話の様子の観察と質問紙調査から、対話によって考えを深めることができたかを検証する。

3 研究の実際

(1) 第1学年「武道」(柔道)の実践から

ア 「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で工夫した指導と評価の計画の作成

視点1 ①指導内容の明確化

以下の表は、習得・活用・探究という学びの過程を踏まえ、生徒が自分の意見を持ち、他者との対話を通して、自己の思考を深め試行錯誤を繰り返しながら、課題をより良く解決するなどの「深い学び」へ向けた学習場면을計画的に組み込んだ指導と評価の計画の一場面である。

武道における「学びに向かう力、人間性等」の「相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を守ろうとすること」を身に付けさせる学習活動において、本単元の第4時の、初めて固め技の簡易試合（武道の特性である攻防）を行う場面で、戦うこととは相反する「相手を尊重する態度」について自分なりの解を考えさせる場面を設定した。その後の第5・6時の攻防を行う学習で自分の考えを深めていき、第7時に仲間の伝統的な所作等のよい取組を見つける学習で、他者の考えや取組を通して、もう一度「相手を尊重する態度」について考えさせるよう計画した。

指導と評価の計画（9時間扱い、3～7校時の計画）

段階	3	4	5	6	7
ねらい	○固め技の仕方を身に付けよう	○周囲の安全に気をつけて活動しよう	○固め技の逃れ方を考えよう	○審判の行い方を覚えよう	○仲間の伝統的な所作等のよい取り組みを見付けよう
指導内容	・抑え込みの条件について ・固め技の抑え方（袈裟固め）	・相手を尊重する態度について ・固め技の抑え方（横四方固め）	・固め技の逃れ方	・簡易試合の行い方 ・審判の行い方	・簡易試合の行い方
学習過程	1 あいさつ 健康観察 2 本時の確認 3 準備運動・補強運動・慣れの運動(体づくり運動・体力を高める運動) 4 受け身の基本練習(個人・対人) 5 抑え込みの条件 6 オリジナルの固め技を考えよう 7 固め技の抑え方・袈裟固め 8 固め技の逃れ方 9 整理運動 10 まとめと評価 11 次時の予告 12 あいさつ				
	5 抑え込みの条件 6 オリジナルの固め技を考えよう 7 固め技の抑え方・袈裟固め 8 固め技の逃れ方 9 整理運動 10 まとめと評価 11 次時の予告 12 あいさつ				
	5 抑え込みの条件 6 オリジナルの固め技を考えよう 7 固め技の抑え方・袈裟固め 8 固め技の逃れ方 9 整理運動 10 まとめと評価 11 次時の予告 12 あいさつ				
	5 抑え込みの条件 6 オリジナルの固め技を考えよう 7 固め技の抑え方・袈裟固め 8 固め技の逃れ方 9 整理運動 10 まとめと評価 11 次時の予告 12 あいさつ				
評価の計画	5 抑え込みの条件 6 オリジナルの固め技を考えよう 7 固め技の抑え方・袈裟固め 8 固め技の逃れ方 9 整理運動 10 まとめと評価 11 次時の予告 12 あいさつ				
	5 抑え込みの条件 6 オリジナルの固め技を考えよう 7 固め技の抑え方・袈裟固め 8 固め技の逃れ方 9 整理運動 10 まとめと評価 11 次時の予告 12 あいさつ				
	5 抑え込みの条件 6 オリジナルの固め技を考えよう 7 固め技の抑え方・袈裟固め 8 固め技の逃れ方 9 整理運動 10 まとめと評価 11 次時の予告 12 あいさつ				
	5 抑え込みの条件 6 オリジナルの固め技を考えよう 7 固め技の抑え方・袈裟固め 8 固め技の逃れ方 9 整理運動 10 まとめと評価 11 次時の予告 12 あいさつ				
評価の計画	5 抑え込みの条件 6 オリジナルの固め技を考えよう 7 固め技の抑え方・袈裟固め 8 固め技の逃れ方 9 整理運動 10 まとめと評価 11 次時の予告 12 あいさつ				
	5 抑え込みの条件 6 オリジナルの固め技を考えよう 7 固め技の抑え方・袈裟固め 8 固め技の逃れ方 9 整理運動 10 まとめと評価 11 次時の予告 12 あいさつ				
	5 抑え込みの条件 6 オリジナルの固め技を考えよう 7 固め技の抑え方・袈裟固め 8 固め技の逃れ方 9 整理運動 10 まとめと評価 11 次時の予告 12 あいさつ				
	5 抑え込みの条件 6 オリジナルの固め技を考えよう 7 固め技の抑え方・袈裟固め 8 固め技の逃れ方 9 整理運動 10 まとめと評価 11 次時の予告 12 あいさつ				
評価の計画	5 抑え込みの条件 6 オリジナルの固め技を考えよう 7 固め技の抑え方・袈裟固め 8 固め技の逃れ方 9 整理運動 10 まとめと評価 11 次時の予告 12 あいさつ				
	5 抑え込みの条件 6 オリジナルの固め技を考えよう 7 固め技の抑え方・袈裟固め 8 固め技の逃れ方 9 整理運動 10 まとめと評価 11 次時の予告 12 あいさつ				
	5 抑え込みの条件 6 オリジナルの固め技を考えよう 7 固め技の抑え方・袈裟固め 8 固め技の逃れ方 9 整理運動 10 まとめと評価 11 次時の予告 12 あいさつ				
	5 抑え込みの条件 6 オリジナルの固め技を考えよう 7 固め技の抑え方・袈裟固め 8 固め技の逃れ方 9 整理運動 10 まとめと評価 11 次時の予告 12 あいさつ				

イ 仮説の検証と考察

第4時では相手を尊重する態度について「礼をしっかり行う」や「服装を正す」といった外見の行動のみに着目する生徒が多かったが（下図1）、第7時では「相手を大切にする」「感謝を行動で示す」といった内面的な意識が尊重する態度につながると考え、より伝統的な行動の仕方を守ろうとする態度が多くの子に見られた。また「相手を尊重する態度を日常生活でも生かせるか」についても考えさせることにより、より深い学びにつながったと考える（下図2）。

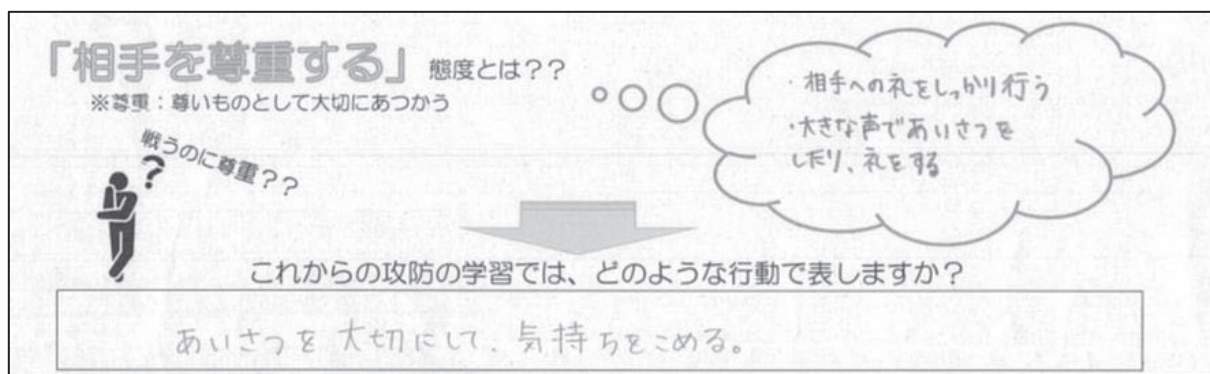


図1 生徒Aの第4校時での学習カードの記述

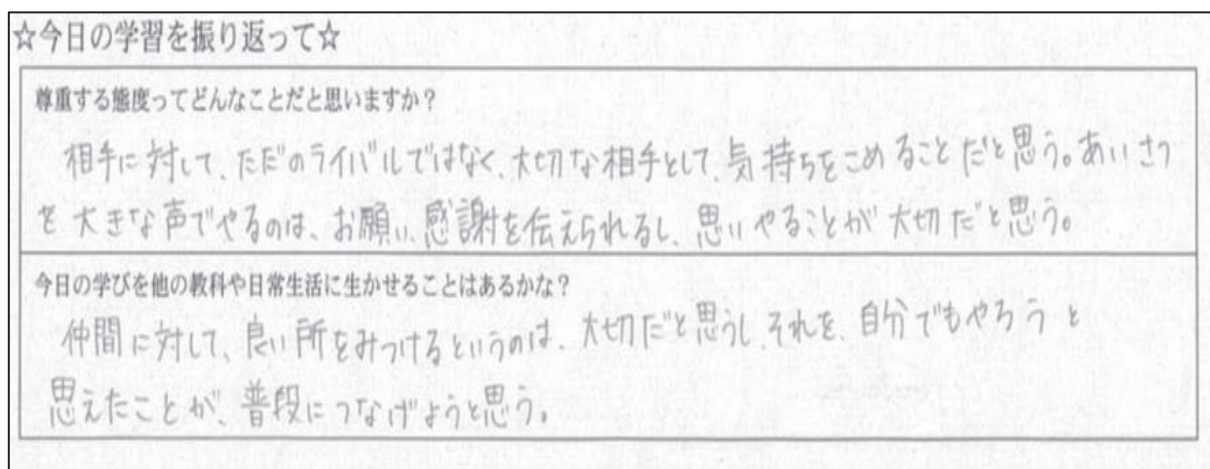


図2 生徒Aの第7校時での学習カードの記述

(2) 第1学年「球技」（ネット型・バレーボール）の実践から

ア 対話場面の設定と工夫

視点2 ①教材・教具の工夫

本単元では、第4時に「思考力、判断力、表現力等」の指導と評価の場面を設定し、チームの課題を見付けるためにチームで対話をする場面を設定した。以下に、対話を行わせる際の工夫を示す。

(ア) 簡易ゲームのルール

単元前の事前調査において、技能面に不安があり、ゲーム等でチームに迷惑をかけてしまうことを心配する生徒が多いことがわかった。そこで、技能差に関係なくゲームに参加することができるようにルール設定をした。

- ・ 2対3で行う。
- ・ 攻めるチームはトス（ボールの投げ上げ）からのパスアタックで相手コートにボールを打つ。
- ・ 守るチームは1球目をレシーブ（はじく）、2球目をキャッチする。
- ・ 時間で攻撃と守備を入れ替え、時間内により多く点を取ることができたチームが勝ち。

（イ） ゲーム記録

チームの課題を見付けるための視点を明確にして記録を取らせた。コートにはラインを引き、相手チームの立ち位置やボールが落ちた場所を把握できるようにした。前時にゲーム記録の仕方を学習する場面を設定し、記録の仕方を理解させるとともに、相手コートにボールを落とすためのポイントとして意識させている。

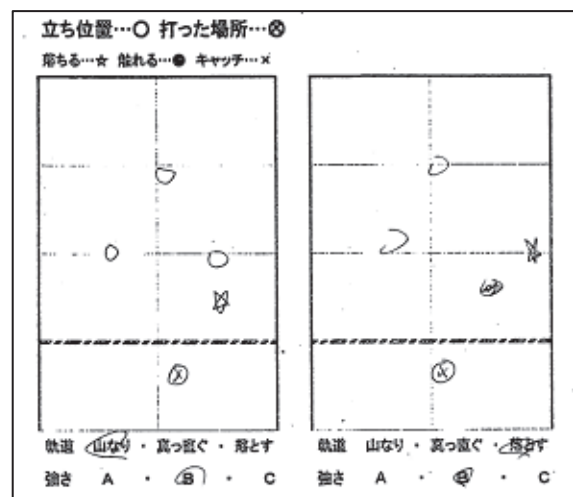


図3 ゲーム記録カードの記述



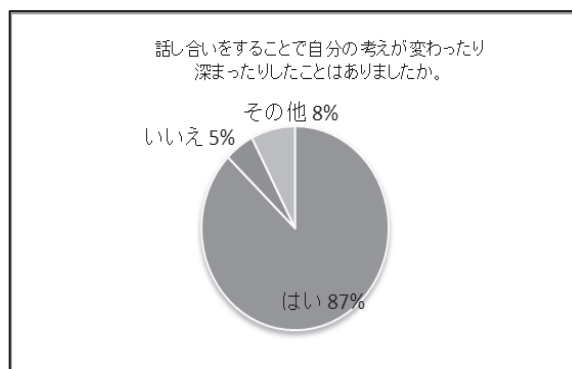
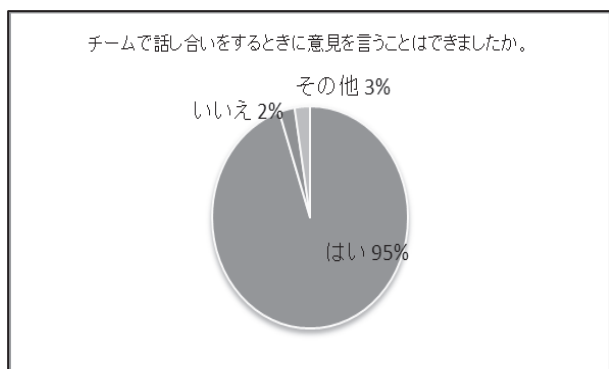
図4 グループでの話し合いの様子



図5 思考ツールを活用しての話し合い

イ 仮説の検証と考察

他者と対話をする場面での活動の様子から、チームの課題について意見を出し合い、実際に体を動かしながら考えを伝え合う姿を見取ることができた。学習カードの記述内容からも、対話を通してチームの課題について考えることができたと言える。また、質問紙調査の結果を以下に示す。



【学習カードの記述より】

- ・自分は〇〇と思っていたが、チームの他の人は□□と言っていて、□□の方を試したら点数が入ったということがあった。
- ・一人一人が違う考えをもっていたら6～8個以上の考えが出てきて、その考えを組み合わせたりしてよりよい課題解決方法を見付けることが何度かあった。

これらの結果から、多くの生徒が自分の考えをもって対話を行うことができたと言える。また、対話をするすることで自分の考えが変わったり深まったりしたと答えた生徒も多く、記述内容からも対話をするものの効果について実感できた生徒がいる。そのため、対話の場面の設定と工夫を行ったことで、多くの生徒が自己の思考を広げ深めることができたと考ええる。

(3) 第1学年「球技」（ゴール型・サッカー）の実践から

ア 対話場面の設定と工夫

視点2 ①教材・教具の工夫

本単元では、第5時に「思考力、判断力、表現力等」の指導と評価の場面を設定し、「パスをもらうための工夫」についてチームの仲間と対話する場面を設定した。以下に、対話を行わせる際の工夫を示す。

(ア) 生徒が自分の意見を持って対話するための工夫

「生徒自身が自分の意見を持って対話を行える」ように以下の工夫をした。

- ・前時のゲームにおける「つまずき」を視覚教材で捉えさせ、問いに対して自分だったらどう行動するかをまず個人で考えさせた（図6）。
- ・次にタスクゲームによって「自分の考え」を動きながら確かめ、予想の整理や修正を行わせた（図7）。
- ・最後にペア（単元を通して固定）と「自分の考え」について意見交換を行わせた（図8）。

上記のように、各個人が自分の意見を持った上で、ペア活動による意見交流の場を設けることで、運動が苦手な生徒にも自分の考えを他者に伝えやすい環境を作る工夫をした。



図6 個人での思考場面



図7 タスクゲームで確かめる場面



図8 ペアで対話をする場面



(イ) ゲームの分析と話し合いツールによる思考を深める工夫

単元を通して固定したペアと動きに関する意見交換を行わせた。そこで一人がゲームを行っているときに、もう一人が観察を行い、「パスをもらう工夫」に関してよい動きと感じるプレーを図9のように記録させた。その記録に基づいて、二人組で意見交換を行わせた。また、コート図と動かせるマグネットで作成した話し合いツール（図10）を用意し、図8のようにペアでマグネットを動かしながら意見交換をできるようにした。

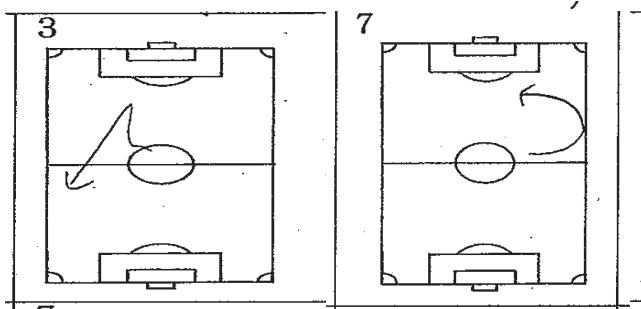


図9 よい動きの記録

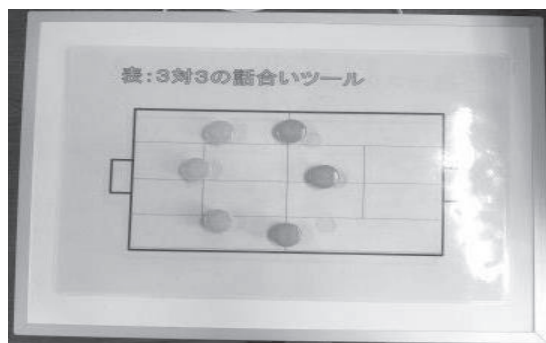


図10 話し合いツール

イ 仮説の検証と考察

タスクゲームを行う場面では、自分の考えた動きを試してみたり、よい動きをしている人の真似をしてみるなどのように、最初に予想した自分の考えを確かめながら取り組む姿を見取ることができた。また、他者と対話をする場面では、ペアに対

して理由や根拠を添えながら自信を持って自分の考えを伝え合う姿を見取ることができた。さらに下に示した学習カードの記入例のように、最初に予想した自分の考えを、本時の授業におけるタスクゲームでの確認や修正、ペアとの対話を通して、多面的に変化させる生徒が9割以上いた。学習カードの内容を以下に示す。

【生徒Aの学習カードの記述より】パスをもらうための工夫とはという問いに対して
最初の考え : 敵がいらないところに行ってもらおう
タスクゲームを終えて : ボールを持っている人より前に行ってパスをもらう
右に行ったフリをして、左に一気に走る
コートを大きく使う
ペアとの意見交換の後 : 自分が敵のおとりになって、もう一人の味方がボールをとれるようにする。
みんなボールばかりに行くから、一人くらい遠くにいる。

これらの結果から、多くの生徒が自分の考えをもって対話を行うことができた。また、記述内容の変化から対話をするものの効果について実感できた生徒がいる。

よって、対話場面の設定と工夫を行ったことで、多くの生徒が自分の思考を広げ深めることができたと考える。

4 研究のまとめ

(1) 成果

- 単元のまとまりを見通して、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で工夫した活動を組み立てることにより、生徒はねらいを明確にすることができ、ねらいに向けて試行錯誤しながら学習する姿が見られた。また、教師側も見通しをもつことができ、計画的に指導することができた。
- 対話をする場面において、対話をする前に学習カードを用いて、ねらいや課題に対する自分の考えや予想を整理させることにより、よりよい解の発見につながる話し合いができていた。また、活動を通して自分の考えを確認・検証し、まとめの対話をする活動を通して新たな解やよりよい解の発見、自分の考えの再整理をすることができた。
- 対話のテーマや材料（資料や視点）を明確にし、学習形態を工夫することで課題解決に向けての生徒同士の対話が充実したものになった。
- 対話をすることで自分の考えが変わったり深まったりし、よりよい解を発見することができた生徒が多く、他者と対話することが課題を解決することに有効であると実感することができた。

(2) 課題

- 生徒同士の対話の内容を、教師が確認できるようにするための方法についてさらなる検討が必要である。
- 今後は、さらに指導と評価の一体化を図るため、生徒の実態を十分に把握し、実態に応じた単元計画を検討していく必要がある。
- 基礎的・基本的な知識を身に付けている（わかる）が、実際の動きの技能として表現すること（できる）が苦手な生徒への具体的な手立てを考えていく必要がある。

高等学校部会

第10分科会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの実現を目指した体育授業の実践
～実技と理論の相互作用とICTの活用～

埼玉県立大宮東高等学校

日 程

受付	公開授業 ①	休憩	公開授業 ②	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
9:00	9:50	10:40	10:50	11:40	13:00		15:00

公開授業案内

区分	内容	場所
公開授業①	第2学年 「バスケットボール」(球技)	重層体育館
公開授業②	第2学年 「スポーツの文化的特性や現代のスポーツの発展」 (体育理論)	第2体育館

学校所在地

〒337-0021
埼玉県さいたま市見沼区膝子567

交通機関

東武アーバンパークライン
・七里駅から徒歩30分

※無料送迎バスあり

埼玉県立大宮東高等学校



所在地：〒337-0021 埼玉県さいたま市見沼区膝子 567

連絡先：Tel 048-683-0995 Fax 048-680-1900

E-mail：m830995d@pref.saitama.lg.jp

H P：http://www.oh-h.spec.ed.jp

学校長：加賀谷 貴彦

生徒数：992 名

◎教育目標

人間尊重の精神を基盤とし、学問を重んじ、正義と真理を愛し、豊かな心情と心身ともに健康な人間を育成し、あわせて世界の平和と人類の福祉に貢献できる人物を育成する。

◎校訓

文武両道

◎学校紹介

昭和 55 年に開校し、今年で創立 40 周年を迎える。現在では、埼玉県内唯一の体育科設置校であり、規律ある生活・学習習慣を基本とした、体育・スポーツ・部活動の大変盛んな学校である。また、朝の 10 分間学習に取り組むなど、学力向上にも力を入れ、文化部や生徒会活動も充実している。

1 研究主題

「主体的・対話的で深い学びの実現を目指した体育授業の実践」
～実技と理論の相互作用とICTの活用～

2 研究主題設定の理由

(1) 本校の教育方針と生徒の特長から

本校の教育方針は以下のとおりである。

- ・教科教育を充実し、学習に積極的に取り組む態度を高め、学力向上に努める。
- ・人権を尊重し、思いやりの心と豊かな感受性を養い、調和のとれた人物を育成する。
- ・体育・スポーツを奨励し、健康の増進に努めるとともに困難に打ち勝つ体力気力を養う。
- ・勤労の喜びを持たせるとともに、地域社会に育ち支えられ、その発展に貢献し得る人物の育成を図る。

また、生徒の特長は、約半数はさいたま市から通学しており、残りの半数は県内の広範囲から通学している。また、本校は部活動が大変盛んであり、部活動加入率は運動部が88.3%、文化部が7.3%、合計で約96%となっている。創立以来、多くの部活動が全国大会・関東大会出場を果たしてきた。特に陸上競技部は全国高校総体出場の常連校である。生徒達は規律正しい生活を送っており、身だしなみを整え、大きな声で挨拶をする生徒の姿により、地域から厚い信頼を集めている学校である。この教育方針のもとで培われた、笑顔のあいさつや時間を守る習慣などの規律正しさは、来校される方のみならず、地域の方をはじめ各方面から高く評価されている。

(2) 生徒の実態と教師の授業の取組から

本校生徒の保健体育授業の実態については以下のとおりである。

- ・時間厳守、挨拶励行、身だしなみ等、基本的生活習慣はしっかりできている。
- ・学びに対して、生徒たちは仲間と協力して一生懸命取り組んでいる。（態度）
- ・体力・運動能力テストの結果をみると、A段階の生徒は、70.4%、DE段階の生徒は0.9%であり、運動能力に秀でた生徒がいるものの、運動能力に乏しく、スポーツに対して苦手意識があり、主体性に欠ける生徒もいる。（技能）
- ・チームでの練習方法を工夫したり、練習した技能をゲーム等で活かしたりする姿は見られるが、習得した知識や技能を活用して、問題を解決することや、学習したことを相手にわかりやすく伝えたりすることは一部の生徒に偏っている現状がある。

これらの現状を踏まえ、心と体を一体として捉え、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力の育成に向け、課題を発見し、その解決を図る主体的で対話的な学習活動ができるようにしていくこととした。そのためには、生徒が運動の楽しさや喜びを深く味わえるように、知識や技能を生徒の状況に応じて伸張させるとともに、それらを活用して、自らの運動課題を解決するなどの学習をバランス良く行うことが重要であると考えた。このバランスのとれた学力を育成するためには、指導と評価の一体化を図った単元計画を作成し、教師は指導と評価する内容を明確にし、学習指導の改善

を進めると同時に、生徒は学習内容が明確になることで授業の見通しを持ち、主体的に運動・スポーツに取り組むことができるようになる考えた。

また、主体的に授業に取り組めるようにスポーツのイメージを具体化させ、考えを整理しやすいように視聴覚教材を活用し、自分たちで課題解決しながら学習が進むようにグループノートなどを活用した授業展開を考えた。

3 研究仮説

本校の教育方針を踏まえ、体育授業における規律を重んじた「不易」と、新学習指導要領に則り「指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成」「主体的・対話的で深い学びを目指した教材・教具、学習過程・学習形態の工夫」の2つの視点を踏まえた体育授業の「流行」を組み合わせた保健・体育の授業を実践することで、生徒が生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを継続することが可能になると考えられる。

4 研究内容

(1) 指導と評価の一体化を図った単元計画の作成

学習内容を明確にした上で、単元の前半では、「知識及び技能」に重点を置いた内容を配置し、単元後半で生徒が主体的に考えるための準備を行っている。単元の後半では、グループ学習による課題発見、課題克服のための課題設定など、単元前半に学習した内容を基に「思考力、判断力、表現力等」の育成を目指す。また体育理論では、主体的・対話的で深い学びの実現に向け、「知識構成型ジグソー法（後述）」の手法を用いた協調学習も取り入れて授業づくりを実践している。なお、体育では「思考力、判断力、表現力等」を重視した指導を行うことで運動量の確保に関する懸念が生じるが、前後半に指導内容の重点項目を分けた単元計画を作成することで、単元をトータルしての運動量は確保されている。指導内容を明確にした単元計画を作成し授業を行うことで、教師が教える場面や話し合う時間を明確に計画することにより、指導内容が明確になり、無駄な時間が省けるとともに、生徒が主体的に取り組み、意欲的になることで結果として活動も活性化し、運動量や運動の質が向上することが考えられる。

(2) 主体的・対話的で深い学びを目指した教材・教具、学習過程・学習形態の工夫

本校では、以下の2点を教材・教具に取り込み、学習過程・学習形態の工夫を行うことで主体的・対話的で深い学びの実現を目指している。

ア ICT機器を活用した学習形態の工夫

体育授業では映像遅延装置を活用し、グループ学習内で以下の活用をしている。

(ア) 個人技能分析

動画撮影・視聴による個人技能分析→自分の課題の発見→課題解決学習（個人練習）

(イ) ゲーム分析・チーム分析及び動画視聴によるゲーム分析・チーム分析

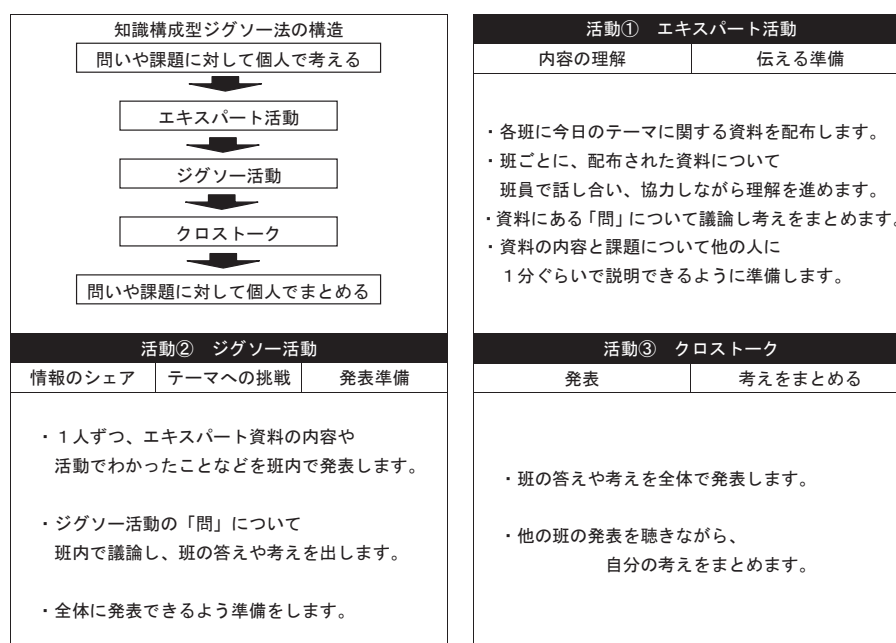
→戦術の学習・見直し・検討 または 分析・チーム分析からの課題の発見・振り返り
→課題解決学習（チーム練習）

また、体育理論では、グループ学習の中で以下の活用をしている。

- a インターネットを活用して情報収集・情報活用
- b グループ学習のまとめをプレゼンテーションする資料の作成
- c 提示装置による授業マネジメントや各グループの考えの表示

イ 「知識構成型ジグソー法 ※」の手法を用いた協調学習の授業づくり

埼玉県教育委員会では、生徒が他の生徒と協力しながら主体的に課題を解決する「協調学習」の授業づくりと実践を「東京大学 CoREF（コレフ）」と連携して推進している。平成 22 年度からは「未来を拓く『学び』プロジェクト」として、生徒同士の主体的・協働的な学びを引き起こす「知識構成型ジグソー法 ※」の手法を用いた協調学習の授業づくりに取り組んでいる。協調学習（collaborative learning）は、学習者一人ひとりが主体となって学びながら、他者との関わりを通じて自分の考えを良くしていくような学びを目的としている。「主体的・対話的で深い学び」との親和性も高い。知識構成型ジグソー法は、協調学習を引き起こすためのひとつの型（仕掛け）である。生徒に課題を提示し、課題解決の手がかりとなる知識を与えて、その部品を組み合わせることによって答えを作りあげるといふ活動を中心にした授業デザインの手法である。一連の活動は下図に示す 5 ステップからなる。



例えば、体育「サッカー」の授業で、「効果的な突破をせよ」という本時の課題（問）に対し、以下のような知識構成型ジグソー法の手法を用いた授業が考えられる。

既有知識で本時の課題（問）に向き合った後、エキスパート活動で「A：観る B：数的優位 C：サポートの距離、角度、タイミング」について専門的に学習する。ジグソー活動では、エキスパート活動で得た学びをシェアし、本時の課題（問）について探究し課題解決を図る。その結果を、全体に発表し、最後は一人ひとりが考えをまとめる。

協調学習のひとつの手法である知識構成型ジグソー法を活用することで、生徒の汎用的スキル（コミュニケーションスキル、クリティカルシンキング、ロジカルシンキング、ラテラルシンキング等）などの資質・能力の向上が期待できる。保健体育では、体育的学力を身に付けさせることが重要視されている。本手法を用いることで汎用的スキルの獲得ならびに形式知だけでなく暗黙知も含んだ体育的学力が向上すると期待される。

5 研究実践

実践事例① 体育

（１）指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成

ゴール型のスポーツはオフェンスとディフェンスが直接的に対峙し、個人やチームの能力に応じた作戦を立て、集団対集団、個人対個人で勝敗を競うことに楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。指導と評価の一体化を図った授業にするため、各授業の最後にゲームを行い、次回に向けての課題をチームで考えられるようにする。課題に対しての解決練習を次回の授業のはじめに行い、人数や条件を変えてゲームを段階的に行っていく。前述の通り、単元前半で「知識及び技能」に重点を置いた内容を配置、単元後半で生徒が主体的に考えるための準備として、グループ学習による課題発見、課題克服のための課題設定など、単元前半に学習した内容を基に「思考力、判断力、表現力等」の育成を図っている。

バスケットボール（２年次選択・１３時間）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
15	自校体操・補強運動・柔軟運動												
20	オリエンテーション グループ編成	・ ゴール下シュート		・ ゴール下シュート ・ 3 対 2 パスゲーム ・ パス＆ランドリル		グループ練習 (オールコート・ハーフコート)		まとめのゲーム					
30		・ 2 メンパッシング ・ 1 対 1 ボールキープ				4 対 4 ゲーム ・ チーム対抗で行う ・ タブレットや遅延装置を使い動画を撮影する。 ・ 試合間は自分たちの試合を映像で見て、次の試合に向けての話し合いをする							
		・ ハンドリング	・ 3 対 2 パスゲーム										
40	・ ゴール下シュート ・ 2 メンパッシング	2 対 1 から 2 対 2 (グループ)		3 対 2 ゲーム (グループ) ドリブルなし									
	2 対 1 ゲーム												
50	ム (グループ対抗)	3 対 2 ゲーム (グループ) ドリブルなし		3 対 3 ゲーム (グループ対抗)		単元のまとめ							
	整理運動 本時の学習内容の振り返り 次回の授業の内容確認												
	評価計画												
知・技	①	⑤	②			③				④			
思・判・表				①			②		③		①		
態					①			②	③				

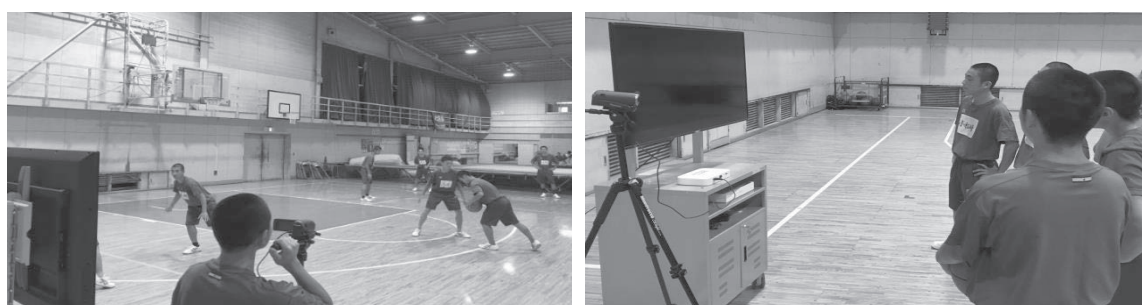
〈学習活動に即した評価規準〉

知識・技能	①技術の名称や行い方について理解している。 ②味方が操作しやすいパスを出すことができる。 ③パスを出した後に次のパスを受けることができる。 ④試合の行い方について、学習した内容を挙げている。 ⑤守備者とボールの間に自分の体を入れてボールをキープすることができる。
思考・判断・表現	①自己のチームの課題を見つけている。 ②自己やチームに適した課題解決練習の選択について自己の考えを伝えている。 ③作戦などの話し合いの場面で、合意形成するために自己の考えを伝えている。
主体的に学習に取り組む態度	①グループで役割を理解し、自己の責任を果たそうとしている。 ②作戦や戦術などの話し合いに積極的に参加しようとしている。 ③お互い助け合い教え合おうとしている。

(2) 主体的・対話的で深い学びを目指した教材・教具、学習過程・学習形態の工夫

ア ICT機器の活用

体育科でタブレットや遅延装置などの機器を使い動画を撮影し、客観的に個人の技術や集団の動きの確認を行えるようにした。確認だけではなく、課題を見付けるという主体的な学びが生まれ、仲間との対話を通して学習を深めていけるようにする。このような学習活動から「何を理解していて、何ができるのか」を明確にし、できていないことへのチャレンジにつなげていくようにする。



イ チームノートの活用

自己やチームの課題に気付くこと、学びの成果の確認などを明確にするために授業の最後に記入していく。記入時にチームの中で対話生まれ、自分の考えなどを広げたり深めたりする場を設定する。内容としては、授業の中で仲間に伝えたこと、チームのために行ったことなど、それぞれの役割（する・みる・支える）でチームに貢献できたかを確認するものである。チームノートの作成により、自分たちがどう変化し成長したのかがわかるようになった。自分たちの課題を見付け、仲間と考え解決していくことで、達成感を味わわせることができた。

実践事例② 体育理論

(1) 指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画

指導内容を明確化するとともに、それらに関連した評価について一体化を図った。さらに、生徒の学びを広げ、深めさせるために、カリキュラムマネジメントの考え方に基づき意図的に単元案や単元計画をデザインした。その際、「主体的・対話的で深い学

び」は「主体的に対話することを手段として深い学びに到達させることを目的とする」と仮説立てをした。つまり、生徒が既有知識・経験と新たに出会った知識を行き来する過程のなかで、仲間と対話し新たな見方・考え方の基準づくりをすることで本質的な学びに到達することができる考えた。以下に、単元案及び単元計画のデザインをした際に留意した点を中心に記述する。

ア コンピテンシーベースの授業づくりへの転換

新学習指導要領では、コンテンツベースからコンピテンシーベースの学びへの転換が図られた。本研究においても、ウィギンズらが提唱した「逆向き設計論」を応用し、授業後に育てたい生徒の資質・能力を明確にして授業をデザインした。生徒の学びのゴールを設定し、指導と評価が一体となるよう、パフォーマンス評価を意識しつつ、ルーブリックを作成し評価の手立てとした。

* 逆向き設計論

ウィギンズらによって提唱されたもので、何を身に付けさせたいかという教育の成果から逆向きに授業を設計し、指導が行われた後で考えられがちな評価方法を先に構想するもの。

	S	A	B	C
知識	学習内容をよく整理し、社会情勢や人間としての在り方と結びつけながら総合的に理解している。	学習内容をよく整理し、社会情勢と結びつけながら総合的に理解している。	学習内容をよく整理している。	学習内容をよく整理できない。
思考・判断・表現	多様な視点・視野・視座から考察して根拠と説得力のある形で言ったり、記述したりしている。	根拠と説得力のある形で言ったり、記述したりしている。	学習した内容を言ったり、記述したりしている。	学習した内容を言ったり、記述したりできない。
主体的に学習に取り組む態度	学習内容や仲間と積極的に関わるとともに、相手の立場を尊重して学習を進めている。	学習内容や仲間と積極的に関わろうとしている。	学習内容や仲間と関わろうとしている。	学習内容や仲間と関わることができない。

イ 単元を貫く問いと1単位時間の問い

単元を貫く問いとは、学習指導要領の保健体育や保健の目標などを念頭に、各学習内容がもつ共通性から導き出される本質的な問いをさす。そこから学習内容ごとに1単位時間における問いを設定し生徒に課題発見学習や課題解決学習を行わせた。

ウ 単元計画

【学びのゴール（身に付けさせたい資質・能力）】

スポーツから得られる恩恵とスポーツについての課題の双方から、多角的に思考し判断し表現する学習を通して、個人がスポーツ文化を創造する主体となっていることに気付いている状態。

【単元の目標】

- (1) スポーツの文化的特性や現代のスポーツの発展について理解することができるようにする。【知識】
- (2) スポーツの文化的特性や現代のスポーツの発展について、課題を発見し、よりよい解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝えることができるようにする。
【思考力、判断力、表現力等】
- (3) スポーツの文化的特性や現代のスポーツの発展についての学習に自主的に取り組むことができるようにする。
【主体的に学習に取り組む態度等】

【単元を貫く問い】

現代のスポーツは持続可能な大切な文化として発展・継承されていくか？

【学習内容】

単元計画表内に、以下の学習内容を扱う時間を明記（※１）

(ア) スポーツの歴史的発展と多様な変化	
①	スポーツは、人類の歴史とともに世界各地で日常の遊びや生活などから生まれてきたこと
②	近代になって、スポーツは娯楽から競技に変化し、一般の人びとに広がっていったこと
③	現代では、競技だけでなく、広く身体表現や身体活動を含む概念としてスポーツが用いられるようになってきており、その理念が時代に応じて多様に変容してきていること
④	近年では、我が国から世界に普及し、発展しているスポーツがあり、日本の文化の発信に貢献していること
(イ) 現代のスポーツの意義や価値	
①	現代のスポーツは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしており、その代表的なものにオリンピックやパラリンピック等の国際大会があること
②	オリンピックムーブメントは、オリンピック競技大会を通じて、人々の友好を深め世界の平和に貢献しようとするものであること
③	パラリンピック等の国際大会が、障害の有無等を超えてスポーツを楽しむことができる共生社会の実現に寄与していること
④	競技会での勝利が個人や国家等に多大な利益をもたらすようになるとドーピング（禁止薬物使用等）が社会問題として取り上げられるようになったこと
⑤	ドーピングは不当に勝利を得ようとするフェアプレイの精神に反する不正な行為であり、能力の限界に挑戦するスポーツの文化的価値を失わせる行為であること
(ウ) スポーツの経済的効果と高潔さ	
①	現代のスポーツの経済的効果には、スポーツの実施による直接的な効果のみならず、例えば、スポーツ用品、スポーツに関する情報やサービス、スポーツ施設などの広範な業種から構成されるスポーツ産業による効果、スポーツイベント等による波及的な経済的効果があり、経済活動に大きな影響を及ぼしていること
②	スポーツの経済的波及効果が高まることに伴って、スポーツの価値をおとしめる可能性が生じることから、スポーツに関わる全ての人々に、スポーツの価値を一層高める関わり方が求められていること
(エ) スポーツが環境や社会にもたらす影響	
①	スポーツに関わる人々の増加は、例えば、地域の人々の生活や社会環境にも様々な影響をもたらすようになっていること
②	スポーツを行う際には、提供者、利用者の双方が持続可能な社会の実現や共生社会の実現を視野に入れた取組が求められること

【単元及び学習活動に即した評価規準】

	知識	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	・スポーツの文化的特性や現代のスポーツの発展について理解したことを言ったり書き出したりしている。	・スポーツの文化的特性や現代のスポーツの発展について、課題を発見し、よりよい解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝えたりしている。	・スポーツの文化的特性や現代のスポーツの発展についての学習に自主的に取り組もうとしている。
学習活動に即した評価規準	①スポーツの歴史的発展と多様な変化について理解したことを言ったり書き出したりしている。 ②現代のスポーツの意義や価値について理解したことを言ったり書き出したりしている。 ③スポーツの経済的効果と高潔さについて理解したことを言ったり書き出したりしている。 ④スポーツが環境や社会にもたらす影響について理解したことを言ったり書き出したりしている。	①事実や理念を整理したり、自己のスポーツへの関わりを見いだしたりして、自己や社会にスポーツがもたらす影響について課題を発見している。 ②習得した知識を基に、持続可能なスポーツの発展のための課題の解決に向けて、自己の提案を言葉や文章などを通して他者に伝えている。	①スポーツの文化的特性や現代スポーツの発展についての学習に、自主的に取り組もうとしている。 ②グループ学習における自己の役割や責任を果たそうとしている。

【単元計画表】 1 スポーツの文化的特性や現代のスポーツの発展

	(7) スポーツの歴史的発展と 多様な変化	(4) 現代のスポーツの意義や価値		(9) スポーツの経済的効 果と高潔さ	(5) スポーツが環境や 社会にもたらす影 響
(※1) 学習内容	①②③④	①②③	④⑤	①②	①②
問い 本時の 問い	スポーツって何？	オリンピックは100年後 も開催されているか？	ドーピングのメリ ットは？	スポーツでお金儲 けをしていいの？	スポーツの「持 続」と「発展」っ て？
学習過程	1 あいさつ 2 単元を貫く問いへの 解答 3 本時の問いへの解 答と発表 4 スポーツの起源と 発展【講義】 5 本時の問いへの解 答と発表 6 スポーツ理念の変 容【講義】 7 本時の問いへの解 答と発表 8 日本文化とスポー ツ【講義】 9 本時の問いへの解 答と発表 10 あいさつ	1 あいさつ 2 本時の問いへの解答 3 エキスパート活動【ジ グソー】 A: オリンピック開催のメ リット B: オリンピック開催のデ メリット C: オリンピックの価値と 魅力 4 ジグソー活動 【ジグソー】 5 クロストーク 【ジグソー】 6 本時の問いへの解答 7 あいさつ	1 あいさつ 2 本時の問いへの 解答と発表 3 本時の問いへの アイデア 【ブレインストー ミング】 4 本時の問いへの アイデア集約 【KJ法】 5 発表 6 スポーツインテ グリティについて【講義】 7 本時の問いへの 解答と発表 8 あいさつ	1 あいさつ 2 本時の問いへの 解答と発表 3 スポーツと経済 活動についての 事例【ICT】 4 スポーツとメデ ィア【講義】 5 本時の問いへの ディスカッショ ンと発表 6 本時の問いへの 解答と発表 7 あいさつ	1 あいさつ 2 本時の問いへの 解答と発表 3 SDGs とは【講 義】 4 本時の問いへの ディスカッ ションと発表 5 発表 6 単元を貫く問 いへの解答と 発表 7 あいさつ
評価計画	知・技	①		②	③
	思・判・表		①		④
	態	①	②		②
	方法	観察 ワークシート	観察 ワークシート	観察 ワークシート	観察 ワークシート
	場面	3, 7	4, 6	7	6

(2) 主体的・対話的で深い学びを目指した教材・教具・学習過程・学習形態の工夫

教材・教具・学習過程・学習形態の工夫は生徒の学びを引き起こすための手段である。本研究では、生徒の学びを引き起こすことや資質・能力を育てることを目的とし、様々な工夫を行った。

ア 知識構成型ジグソー法を用いた協調学習の適用

主体的・対話的で深い学びを実現するための手段として、知識構成型ジグソー法を教授スタイルとして選択した。前段に知識構成型ジグソー法についての説明は記述されているので、概要については割愛する。あくまで、単に知識構成型ジグソー法による授業展開をしたことで主体的・対話的で深い学びが実現されるのではなく、そのような学びを教室内で引き起こすための一手法として知識構成型ジグソー法による授業展開をした。その結果、生徒が主体的かつ対話的に学びを進め、それを教師がファシリテーター役として生徒の学び引き出し、広げ、深める側にまわることができた。

イ 効率的な授業マネジメント

(ア) 資料の色分け

エキスパート活動の際に使用する資料をエキスパートごとに色分け（３色）し、活動がスムーズに進むよう工夫した。資料の色ごとに集合したり分散したりすることができ、指示も通りやすくなることを期待した。生徒の学びを見取る際にも、資料が色分けされていることで、どのエキスパート活動を経てきたのかが一目で分かるようになり、生徒の学びを広げ深めることや評価をすることが容易となった。色のついた紙を使用することで、普段とは違った学習環境を提供することの一助となり、生徒の学習意欲の向上もみられた。

(イ) ICT機器の活用

本研究では、指導者がプレゼンテーションソフトを使用して授業を実施。生徒に一度に多くの情報を提供できることや視覚的に学習内容を理解させることに有効であった。また、学習活動の仕方等を学習活動中に提示し続けることができ、生徒の学びにおける障壁を取り除くことができた。今後は、生徒の意見共有の手段としてインターネットやデバイスを活用したいと考えている。環境の整備が課題である。

6 成果と課題

(1) 成果

- ア 単元毎の目標や評価計画を明確にすることで、生徒達の学びに向かう力が高まった。
- イ ICT機器の活用を通して、視覚的イメージの理解が促進され、主体的・対話的で深い学びを行う一助となった。
- ウ 「知識構成型ジグソー法」の手法を用いた協調学習という、主体的・対話的で深い学びを引き出す１つのモデルを授業にあてはめ実践することで、新学習指導要領で求められている指導内容のイメージを教師側ももつことができた。

(2) 課題

- ア 新学習指導要領に基づいた学習が年次進行していくことから、「不易」と「流行」のマッチングについて今後も継続して検討していく必要がある。
- イ ICT機器を活用した学習形態については、教師側、生徒側双方のICTスキルの向上等、教科の指導内容とは別の能力の育成が必要である。今後、近隣小中学校との連携を図り、本校入学後に「どのスキルを、どの程度指導する必要があるか」を精査する必要がある。
- ウ 「知識構成型ジグソー法」の手法を用いた協調学習の授業づくりについては、全県を挙げて取り組んでいるが、保健体育分野の事例はまだ少ない状況である。優れた他校の授業実践を本校の授業に取り込み、その効果を検証していく必要がある。

第11分科会

研究主題

主体的・対話的で深い学びを目指した体育・保健授業
～運動に積極的に取り組む生徒育成に向けて～

埼玉県立上尾南高等学校

日 程

受付	公開授業 ①	休憩	公開授業 ②	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式
9:00	10:00	10:50	11:05	11:55	13:00		15:00

公開授業案内

区分	内容	場所
公開授業①	第2学年 「健康を支える環境づくり」(保健)	体育館
公開授業②	第2学年 「ハンドボール」(球技)	体育館

学校所在地

〒362-0052
埼玉県上尾市中新井585

交通機関

J R 高崎線
・上尾駅西口より
市内循環バス「ぐるっとくん」(大谷循環)
→ 上尾南高前バス停下車 徒歩3分
※無料送迎バスあり

埼玉県立上尾南高等学校



所在地：〒362-0052 埼玉県上尾市中新井 585
連絡先：Tel 048-781-3355 Fax 048-780-1009
E-mail：n813355@pref.saitama.lg.jp
H P：http://www.ageominami-h.spec.ed.jp
校 長：橋本 淳
生徒数：765 名

◎教育目標

憲法・教育基本法の精神に基づいて教育を行い、人間性豊かな心身ともに健康な生徒の育成を期し、国家・社会の健全で有為な形成者を育成する。

- ・ 真理と正義を愛する人
- ・ 個人の価値を尊び基本的人権を尊重する人
- ・ 勤労と責任を重んじる人
- ・ 自主的精神に充ちた人
- ・ 平和を愛する人

◎校訓

誠 実

目指す学校像

地域の期待に応え、誠実な自己を誇りとして、心身ともに健康で社会に貢献できる人間性豊かな生徒を育てる安心・安全な学校

重点目標

- 1 分かる授業、伸びる授業の工夫・改善で、学力向上を図る
- 2 系統的・組織的な進路指導を充実させ、より高い自己実現を図る
- 3 部活動・体験活動を充実させ、「自ら誇れる自分づくり」を推進する
- 4 熱意ある積極的な生徒指導で、基本的生活習慣を確立する
- 5 地域・関係機関に積極的に情報を発信し、学校理解度を高める

3年後の目標

社会性を確実に身に付け、学力を向上させることにより「なりたい」自分の未来像を実現させる

学校紹介

本校は、今年で創立 43 年目を迎える普通科の男女共学校である。上尾市立中学からの入学者が多く、市内小中学校への訪問授業や近隣施設との交流事業など地域と連携した教育活動を展開して、地域から愛されている。

また、本校は部活動が大変盛んで、運動部 15、文化部 9、同好会 6 の団体が活発に活動している。部活動加入率は約 85%（運動部 61%）で、3 年間の加入率も高く約 80%（運動部 76%）を示している。運動部の中でもクライミング部は平成 22 年度から 8 年間、全国高等学校クライミング選手権大会に出場している。また、男子バレーボール、男子バスケットボール、陸上競技部は埼玉県大会の常連校である。文化部は、音楽、箏曲、演劇、書道、美術部等は、県大会、コンクールの入選などを果たしている。

本校の一日は「朝読書」「朝学習」から始まり、生徒達は落ち着いた環境の下、日々、学習活動に、部活動に、学校行事に全力で臨んでいる。

1 研究主題

「主体的・対話的で深い学びを目指した体育・保健授業」

～運動に積極的に取り組む生徒育成に向けて～

2 研究主題設定の理由

（１）本校の教育方針と生徒の特徴から

本校では校訓である「誠実」のもと、生徒一人一人の個性や特性を伸ばす教育活動を展開している。そのため「分かる授業、伸びる授業の工夫・改善」を重点目標の 1 番に掲げ、教職員が一丸となって「面倒見のよさ」を信条とした徹底した指導と、確かな「伸び」を実感できるきめ細やかな授業を提供できるよう日々研鑽している。

また、本校の卒業後の進路には就職者が 2 割程度いる。そのため、社会に出て即戦力として活動するための基本的生活習慣を確立させることが求められている。そこで「時を守り、場を清め、礼を正す」ことを学校生活の様々な場面を通して身に付けさせることで、生徒の自己肯定感を高め、自信を付けて社会に送り出している。

この教育方針のもとで培われた、笑顔の挨拶や時間を守る習慣などの規律正しさは、来校される方のみならず、地域の方をはじめ各方面から高く評価されている。

（２）授業の取組から

本校生徒の体育・保健授業の実態については以下のとおりである。

- ・時間厳守、挨拶励行、身だしなみ等、基本的生活習慣はしっかりできている。
- ・学びに対して、生徒たちは全員協力して全力で臨んでいる。
- ・運動能力に乏しく、スポーツに対して苦手意識があり、主体性に欠ける生徒もいる。

これらの傾向を踏まえ、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを継続できる資質・能力を育成するため、本校の特色を生かしたカリキュラムマネジメントが求められている。

（３）「体育」と「保健」の関連から

保健体育科においては、新学習指導要領に、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを継続する資質・能力の育成を重視する観点から、健康な生活と運動やスポーツとの関わりを深く理解したり、心と体が密接につながっていることを実感したりできるようにすることの重要性が示されている。本校でも特に「体育」と「保健」の一層の関連を図った指導に力を入れている。

（４）生徒の実態と学校の実情から

自ら考え、生徒同士が互いに教え合い、課題設定、課題解決できる能力の向上を必要としている本校生徒の実態と様々な教育活動の場面において学び直しを積極的に行い、自己肯定感を高める指導を実践している学校の実情を考慮して、サブタイトルに～積極的～という言葉を利用した。また、新学習指導要領にも主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が求められていると記載されていることから、この研究が本校全体の伸展、保健体育科の発展につながると考えている。

以上（１）（２）（３）（４）から、上記主題を設定した。

３ 研究仮説

本校の教育方針を踏まえた体育授業において、創立 43 年目を迎え、今日まで学校として積み重ねてきた人間力の育成に努めている。また、令和 4 年度から年次進行する新学習指導要領の趣旨を踏まえた「指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成」「主体的・対話的で深い学びを目指した教材・教具、学習過程・学習形態の工夫」の 2 つの視点を踏まえた体育・保健授業を実践した。この視点を組み合わせた体育・保健授業を実践することで、生徒が自己肯定感を育み、成功体験することで、自分自身に自信をもつことができる考えた。このようなことから主体的な行動を育み、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを継続することが可能になると捉えている。

４ 研究内容

（１）指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成

単元の前半では、「知識及び技能」に重点を置いた内容を配置し、単元の後半で生徒が主体的に考えるための準備を行っている。特に体育では、生徒の実態を考慮し、生徒の基礎体力向上及び自己肯定感を高め主体的な学びを引き出すための方策として、授業の最初に自校体操・補強運動・集団走を位置付けている。

単元の後半では、グループ学習による課題発見、課題克服のための課題設定など、単元の前半に学習した内容を基に「思考力・判断力・表現力等」の育成を図っている。特に保健では、「知識構成型ジグソー法（後述）」の手法を用いた協調学習の授業づくりを実践している。

（２）主体的・対話的で深い学びを目指した教材・教具、学習過程・学習形態の工夫

本校では、以下の 2 点を教材・教具に取り込み、学習過程・学習形態の工夫を行うことで主体的・対話的で深い学びを目指している。

ア 教具・ルールを工夫した学習形態（男女共習）の工夫

体力や技能の程度及び性別の違い等にかかわらず、仲間とともに学ぶ体験は、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けた重要な学習の機会であることから、原則として男女共習で学習を行うことが求められている。本時の学習である球技「ゴール型」のハンドボール授業においては、攻守入り乱れ型で身体接触等も考えられる。そこで、グループ編成時にはリーダーとして中心を担う生徒からグループ分けをし、練習やチームミーティングがスムーズに進行できるように配慮している。また、男子進入禁止ゾーンを設定したり、女子が活躍できるような得点配点の工夫をしたりしている。さらに、ボールの大きさや硬さ、コート・ゴールの規格や試合人数など、教具や場づくりの設定も工夫をしている。男女共習を実施するにあたっては、体力差や技能差により互いに遠慮しがちなことが予想されたため、ルールを理解し、技能がある程度身につけているバスケットボールやバレーボールの授業から取り組めるように指導計画を変更した。

イ ICT機器を活用した学習形態の工夫

本校では、確かな「伸び」を実感できるきめ細やかな授業を提供できるよう日々研鑽している。ICT機器を活用した学習形態の工夫についても、外部講師を招いて全教職員に研修会を開催し、体育・保健学習だけでなく、他教科においてもICT機器を活用した授業を実践し、その効果を検証しているところである。

今年度から本校に各クラスにプロジェクターが設置され、タブレット 44 台が導入された。そこで保健体育科では、以下のように考え、効果的な活用の在り方について試行錯誤している。

例えば体育授業ではタブレットによる動画撮影・視聴を通し、グループ学習の中で以下のような活用方法を考えている。

①個人技能分析

動画撮影・視聴による個人技能分析→自分の課題の発見→課題解決学習（個人練習）

②ゲーム分析・チーム分析

動画視聴によるゲーム分析・チーム分析

→戦術の学習・見直し・検討 または 分析・チーム分析からの課題の発見・振り返り
→課題解決学習（チーム練習）

また保健学習では、グループ学習の中で以下のような活用方法を考えている。

①インターネットを活用して情報収集・情報活用

②グループ学習のまとめをプレゼンテーションする資料の作成

③提示装置による各グループの考えの表示

ICT機器については研究仮説を達成させるための 1 つの工夫として考え、日々、効果的・有効的な活用方法を研鑽している。

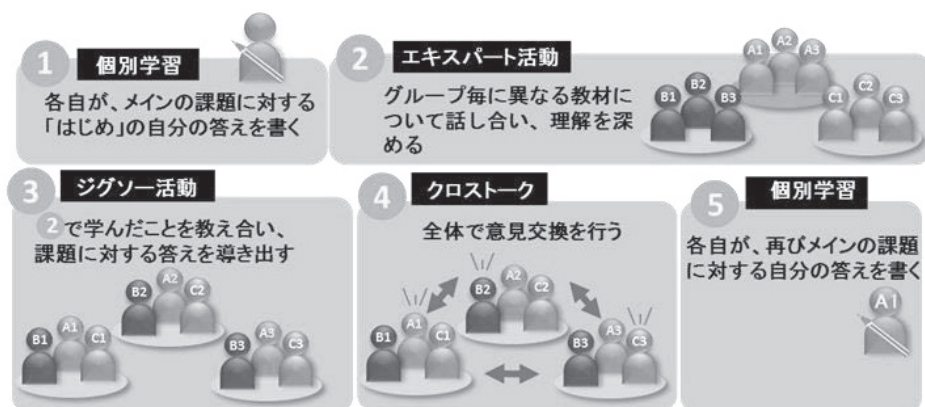
ウ 「※1 知識構成型ジグソー法」の手法を用いた協調学習の授業づくり

埼玉県教育委員会では、生徒が他の生徒と協力しながら主体的に課題を解決する「※2 協調学習」の授業づくりと実践を「東京大学 CoREF（コレフ）」と連携して推進している。平成 22 年度からは「未来を拓く『学び』プロジェクト」として、生徒同士の主体的・協働

的な学びを引き起こす「※1 知識構成型ジグソー法」の手法を用いた協調学習の授業づくりに取り組んでいる。

※1「知識構成型ジグソー法」とは、一つのテーマについていくつかの部品になる資料を、グループに分かれて担当して理解を深め、それぞれ理解したことを交換し合い、統合して答えを導く方法である。

※2「協調学習」とは、学習者である生徒一人一人の理解の仕方を尊重し、生徒同士の話し合いを導くことによって、思考力、判断力、表現力に加え、コミュニケーション能力や問題解決能力等を育成する学習である。



例えば、保健「喫煙と健康」の授業で、「喫煙と健康について、その害だけでなく、色々な角度から考え合わせた上で高校生として適切な対応がとれるようにする。」という本時の目標に対し、以下のような知識構成型ジグソー法の手法を用いた授業が考えられる。

- ① 喫煙と健康について、グループ毎に資料を読み取り、考察させる。
- ② タバコと経済(A)、タバコと広告(B)、タバコと心理(C)の3種の資料のいずれか1つを配付し、ポイントを他の生徒に教えられるように準備する。
- ③ エキスパートグループで分担して(A)(B)(C)の資料から情報を抽出する。エキスパートグループで、必要な情報を抜き出すための話し合いをする。
- ④ ジグソーグループに戻って報告する。各自が抜き出してきた情報をもとに班でテーマについて考える。クロストークする。班でまとめたことを、代表班に発表させる。
- ⑤ 今日の授業の振り返りと意思決定を行う。授業を振り返り、「喫煙と健康」について、わかったことを個人でまとめさせる。

5 研究実践

体育（ハンドボール）

（１）指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成 ハンドボール（２年次選択・１２時間） 単元の計画

時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ねらい	①ハンドボールの特性を理解し、学習の共通しをもと	②安定したボール操作を身につけるよう	③状況に応じたボール操作を身につけるよう	④互いに助け合い、高め合おう	⑤空間を埋める動きを身につけよう	⑥全員が楽しむための調整の仕方を理解しよう	⑦一人一人の違いにあったプレイを大切にしよう	⑧自己やチームの課題を発見しよう	⑨課題の解決に向けて取り組みを工夫しよう	⑩フェアプレイを大切にし、健康・安全を確保しよう	⑪自己やチームで考えたことを他者に伝えよう	⑫主体的に学習に取り組もう。
指導の内容	・特性や約束事 ・役割分担や準備片付けの仕方 ・単元のねらいや計画	・学習の仕方 ・ボールの扱い方 ・パスやドリブルの仕方	・様々なパスの工夫 ・動きながらのボール操作	・攻撃や守備の仕方 ・攻撃や守備の練習方法	・ボールを持たない時の動き ・相手の動きに応じた攻撃の仕方	・ゲームの正しい方 ・審判方法 ・ルールの確認	・自分やチームの特徴を生かした練習方法の工夫	・自己やチームの課題克服のための練習方法の実施	・自己やチームの課題克服のための練習方法の選択工夫	・素早い攻守の切り替え	・相手チームの特徴に応じた練習方法の工夫	・球技を楽しむためのかわり方について
学習過程	○集合、挨拶、健康観察 ○準備運動、補強運動、ボイスランニング（単元前半） ○主運動につながる運動（単元後半） ○本時のねらいと内容の確認 ○用具準備 ○オリエンテーション ・ハンドボールの特性、単元の理解 ・授業の進め方や安全に関する約束事の確認 ・主体的に取り組むための方法の確認 ○基本のボール操作 ・各種のパスとキャッチ、ドリブルの技術 ・各種のシュートとその工夫 ・守備の位置取り、ゴールキーピング ○簡易ゲーム① ・基本のボール操作の習得度を測るためのミニゲーム ○ボールを持たないときの動き ・パスをした後の動き ○アウトナンバの攻防 ・空間づくり：守備を引き付けてゴール前に空間をつくる 2対1 3対2 ポストプレーヤーを交えた4対4 4対3 4対4＋フリーマン ○チーム決め 8～9人×4チーム ○簡易ゲーム② ・アウトナンバの攻防を中心とした簡易ゲーム ○チームの目標と課題の設定 ・作戦や戦術の選択 ・チームの課題に合った練習方法の選択 ・チーム練習の実践 ○チームの目標と課題の見直し ○簡易ゲーム（リーグ戦） ・基本的なルールの理解 ・審判と試合運営の方法 ・相手チームの特徴を踏まえた作戦や戦術											
	○整理運動 ○振り返り ○本時のまとめ、次時の内容確認 ○挨拶											
評価計画	知・技	○	○		○		○			○		
	思・判・表					○		○	○		○	
	態	○			○							○

単元の前半に「知識及び技能」を中心とした内容を配置し、単元の後半では、前半で学んだ「知識及び技能」を生かして、グループ学習による課題発見、課題練習の選択等をさせ、「思考力、判断力、表現力等」の内容を重視した単元計画を作成している。単元の前半にはグループ学習をより効果的に行うため、準備運動の際に、自校体操（南高体操）、ボイスランニングを実施している。特に本校では発声と動きの連動に力を入れていて、この意識付けがチームワークを高めるとともに互いに認め合い、グループ活動に良い影響を与えている。この学習過程の工夫についても主体的・対話的で深い学びを実践に重要な計画となっている。評価に関しては、1時間に1項目を設定し、本時のねらいを説明するとともに、何をどのように評価するかについても説明している。「知識及び技能」であれば、技術や戦術の名称や行い方について言ったり、書き出したりしていることや味方が操作しやすいパスを送ることができることなどを学習カードや観察により評価している。

自校体操（南高体操）



ボイスランニング



準備運動（主運動につながる運動）



グループ会議



学習ボードの活用



（２）主体的・対話的で深い学びを目指した教材・教具、学習過程・学習形態の工夫

単元の初めには、必ずオリエンテーションを行い学習の見通しを説明し、生徒自ら計画的かつ主体的に取り組めるよう指導している。具体的には単元計画をホワイトボードに貼り出し、各時間においてどのような内容を行うのか、何を学んでほしいかを伝えている。授業のねらいや評価についても生徒と教師が共通認識で行えるよう努めている。これが、学びのイメージをもたせることになり、主体的な深い学びにつながっていくと考えている。また、男女共習については、体力差や技能差を気にして男女が遠慮し、力が出せない場面が予想されたため、生徒が取り組みやすい単元（経験のある種目）バスケットボールやバレーボールから実践している。初めは抵抗感があったが、男子侵入禁止ゾーンの設定や女子が活躍できるルール of 工夫などにより、スポーツの多様な楽しみ方を学ぶ良い機会となっている。さらに、チーム毎にタブレットや学習ボードを使用させ、自己やチームの課題解決のために活用している。生徒同士の意見交換の材料としても効果的であり、対話的な学びを生み出すことに役立てている。

実践事例② 「保健」

(4) 健康を支える環境づくり

(ウ) 保健・医療制度及び地域の保健・医療機関 ㊦ 我が国の保健・医療制度

(1) 指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成

指導と評価の計画（全4時間） 本時は○印 2／4時

時	学習のねらい・活動	知・技	思・判・表	態度	評価方法
1	㊦我が国の保健・医療制度 (学習活動) ねらい:我が国の保健・医療制度について理解できるようにする。 1 最近の保健・医療制度に関わる時事問題について取り上げ、自分の考えを答えさせる。 2 我が国ではだれもが必要な医療を受けられるしくみがあることを理解する。 3 医療費や医療保険などの保健・医療サービスなどが提供されていることを理解する。 4 教師のまとめを聞く。 5 本時の内容を保健学習ノートにまとめる。	①			保健学習ノート
2	㊦我が国の保健・医療制度 (学習活動) ねらい:資料の内容を理解し、整理したことを他者に伝えることができるようにする。 1 前時の振り返り 2 本時の課題について資料をもとに個人で考える、まとめる。 3 エキスパート活動(考えた事を整理し、理解を深める) (学習活動) ねらい:積極的に話し合いに参加しようとしている。 1 ジグソー活動(課題に対する答えを導き出す) 2 クロストーク(意見交換を行い、理解を深めたり、修正したりする) 3 本時の課題について、新しく分かった事や理解した事を個人でまとめる。 4 教師のまとめを聞き、知識を確認するとともに、次時の学習内容を確認する。		①	①	観察・ワークシート 観察
3	㊦地域の保健・医療機関の活用 (学習活動) ねらい:保健行政の役割について例をあげて説明できるようにする。 1 知っている医療機関や活用したことのある医療機関について自身の経験を発表する。 2 医療機関や保健行政の役割について、教科書を用いて確認する。 (学習活動) ねらい:保健サービスの活用の例をあげることができるようにする。 1 保健・医療サービスの活用の例を、保健所や保健センターを取り上げ理解させる。 2 さまざまな保健活動や対策があることを理解させ、身近な保健サービスを取り上げる。 3 医療サービスを受ける際にどのようなことに気を付けているか考え、自分の意見をまとめ、それらを説明する。 4 医療サービスを受けるための準備や自己の健康上の課題に応じて適切な医療サービスの選択があることを理解する。 5 本時の内容を保健学習ノートにまとめる。	②	②		観察 保健学習ノート
4	㊦医薬品の制度とその活用 (学習活動) ねらい:医薬品の正しい使用法について説明できるようにする。 1 医療品には、医療用医薬品、要指導医薬品、一般医薬品の3つに大別されていることを知る。 2 医薬品の正しい使用法について教科書を用いて確認する。 3 副作用についても触れ、予期できるものと、予期することが困難なものがあることについてグループ活動を通して、資料等から調べ確認する。 (学習活動) ねらい:医薬品の安全性を守る取組について言ったり、書き出したりすることができるようにする。 1 医薬品の安全性を守る取組について教科書を用いて確認し、承認制度や販売の規制があることを知り、薬害などにも触れる。 2 本時の内容を保健学習ノートにまとめる。	③	③		観察 保健学習ノート

1時間目は一斉学習の授業形態をとりながら、学習指導要領を基に教科書の記載内容を利用し、生徒に対して保健・医療に関する知識及び技能の内容について説明をすることとした。

2時間目は、グループ学習や知識構成型ジグソー法を用いて、「思考力、判断力、表現力等」といった内容や、「学びに向かう力、人間性等」の部分についての授業を展開している。

3・4時間目は、個人やグループ活動を通して、正しい知識を基に自他の健康の保持・

増進について考えさせることを中心に行う。

評価に関しては、生徒の学習の様子や発言を大切にし、言葉のキャッチボールから生徒の考えを深めさせたり、他の生徒の活動を導きながら、すべての生徒の行動観察を行うことで評価をしていく。さらに、保健学習ノートを毎時間提出させ、記載内容を確認し、教師のコメントを入れることで、目に見える形での評価もしていく。

（２）主体的・対話的で深い学びを目指した教材・教具、学習過程・学習形態の工夫

ア 知識構成型ジグソー法の授業実践について

始めに、ジグソー法の授業を行う上で肝心なのが、導入における興味を惹かせるテーマづくりである。学びの意欲を沸かせるテーマこそが、生徒の自らの主体性を生み出す要素だと考える。

次に、エキスパート資料の作成である。エキスパート資料の作成は、ジグソー法の授業を行う上で、最も時間をかける部分である。内容としては、①新しい発見があること、②資料から疑問が生まれること、③さらなる学習意欲に駆られること、である。これを同じエキスパート同士で共有し、その後のジグソー活動に繋げていくのだが、この時の教師の声掛けは、きわめて重要である。他者に伝えるための準備や伝え方、伝えるポイントやキーワード等を整理させるよう、積極的な机間指導などで働きかけることを心がける。



導入：テーマの発表やねらいの確認

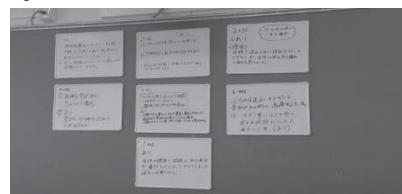


展開：エキスパート活動の様子

ジグソー活動・クロストークでは、いかに話し合いが活発に深い内容でできるかが大切であり、テーマの工夫や、本時のねらいの中に話し合いの要素を盛り込み、それを授業の初めに生徒に意識付けさせ、学習の動機付けを図る。さらに、授業時間の使い方、グループの構成の仕方や題材、発表の仕方、保健学習ノート等の工夫も重要だと思われる。今後は、ＩＣＴの効果的な利用により、さらに話し合いや学びが深まると推測するが、本校ではまだそこまでの環境が整っていないのが現状である。



展開：ジグソー活動の様子



まとめ：クロストークでの各班の成果物

以上のことを踏まえ、知識構成型ジグソー法の授業では、一斉学習では得られない生徒の主体性や興味・関心、何より対話的な学習が実施できると実感している。一斉学習では教師と生徒の対話が基本であるが、ジグソー法の学習では、生徒同士で意見を交わし、他の意見を聞いて理解を深めたり、修正することができ、主体的・対話的で深い学びに結びつく活動であり、生徒にとって魅力的でもある。さらに、日常の会話からでは得られない、他の考えを理解することでより良い人間関係づくりに効果的であると考ええる。

イ ＩＣＴ機器の活用について

本校では現在のところ、保健学習では、パワーポイントによるプレゼンテーションを利

用したり、資料作成のためにインターネットを活用し情報収集・情報活用したりしている。今後は、実際のジグソー活動の中でタブレット等を利用し、インターネットで情報収集をし、話し合いや課題解決へと学びを深めたり、グループ学習のまとめをプレゼンテーションする資料を生徒自身で作成したりすることにより、各個人やグループの考えを効果的に表示したり、課題を求めたりすることに役立てるように準備を進めている。

6 成果と課題

(1) 成果

- 単元や単位時間の目標や評価計画を明確にすることで、生徒たちの学びに向かう力が高まった。また、授業の導入で「前時の振り返りと評価」、授業のまとめで「次時の予告」をすることで、本時の知識の定着と、次時への意欲、本時の意欲向上に役立った。これらにより、授業に積極的に取り組む姿が多く見られるようになり、主体的な深い学びへと繋がった。
- ICT機器の活用を通して、視覚的イメージの理解が促進され、生徒同士の意見交換が活発になったことで、主体的・対話的で深い学びを行う一助となった。さらにグループ内、チーム内で意見しなければならない場面設定や学習形態の工夫は、生徒が自信をもつきっかけとなった。
- 「知識構成型ジグソー法」の手法を用いた協調学習という、主体的・対話的で深い学びを引き出す1つのモデルを授業にあてはめ、実践することで、新学習指導要領で求められている内容（知識及び技能、思考力、判断力、表現力等）のイメージを教師側も持つことができた。

(2) 課題

- 新学習指導要領に基づいた学習が移行期間にあることで、4の研究内容（1）でも記した、体育の授業における生徒の実態を考慮し、生徒の基礎体力向上及び自己肯定感を高め、主体的な学びを引き出すための方策として授業の最初に行なっている、自校体操・補強運動・集団走などの本校の不易と考える指導部分が、本当に「不易」であるのか、改善していくところはないのかを今後検証していくことが必要である。
- ICT機器を活用した学習については、教師と生徒双方向のICTスキルの向上等、教科の指導内容とは別の能力の育成が必要である。今後近隣小中学校との連携を図り、本校入学後に「どのようなスキルを、どの程度指導する必要があるか」を精査する必要がある。
- 「知識構成型ジグソー法」の手法を用いた協調学習の授業づくりについては、全県を挙げて取り組んでいるが、科目保健、科目体育での事例はまだ少ない状況である。優れた他校の授業実践を本校の授業に取り入れ、その効果を検証していく必要がある。
- 生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを継続することが可能になったかについては、早急に成果を確認することは難しく、大きな課題である。今後も健康の大切さを考えさせ、運動・スポーツの多様な楽しみ方、関わり方を身に付けさせる必要があり、その指導の工夫を継続することが重要である。今回の研究で、技能や体力の向上はもちろんだが、体力や技能の程度、性別等に関わらず、運動やスポーツの特性に触れ魅力を感じ、運動やスポーツが多くの人々を結びつけることの大切さを学ぶ良いきっかけになったと考える。

特別支援学校部会

第12分科会

研究主題

自らの健康を考え、卒業後も運動に親しむ態度を育成する
体育・保健体育学習

埼玉大学教育学部附属特別支援学校

日 程

受付	公開 授業①	休憩	公開 授業②	休憩	公開 授業③	昼食	開 会 式	研究発表 研究協議 指導講評	閉 会 式
9:00	9:40	10:20	10:30	11:10	11:20	12:00	13:00		15:00

公開授業案内

区分	内容	場所
公開授業①	小学部 「リズムうんどう」(体づくり運動、表現運動)	体育館
公開授業②	高等部 「運動の大切さを考えよう」(保健)	高1・2教室、軽作業室
公開授業③	中学部 「タグラグビー」(球技)	西グラウンド

学校所在地

〒331-0823
埼玉県さいたま市北区日進町2-480

交通機関

J R川越線
・日進駅から徒歩15分
ニューシャトル
・鉄道博物館（大成）駅より
徒歩20分

埼玉大学教育学部附属特別支援学校



所在地：〒331-0823

埼玉県さいたま市北区日進町 2-480

連絡先：Tel 048-663-6803 Fax 048-666-3670

E-mail：fuyou@gr.saitama-u.ac.jp

H P：http://www.saitama-u.ac.jp/fuyou/

校長：戸部 秀之

児童生徒数：59 名

◎教育目標

自己実現を目指して物事に積極的に取り組み、生き生きと社会生活のできる子どもを育成する。

◎学校紹介

本校は、学校教育法に基づき、知的障害のある児童生徒に対して、心身の発達に応じて、普通教育を施すことを目的とする特別支援学校であり、小学部・中学部・高等部からなる。

また、埼玉大学教育学部の附属学校であることから、次のような性格をもつ。

1. 教育学部の計画に基づき、学生の教育実習及び大学院実地研究にあたる。
2. 教育に関する理論、及び実践についての研究・実証を行う。
3. 県内の特別支援教育関係の諸活動に協力する。

1 研究の構想

(1) 研究主題

自らの健康を考え、卒業後も運動に親しむ態度を育成する体育・保健体育学習

(2) 研究主題設定の理由

障害のある生徒が特別支援学校を卒業して社会人としての生活が始まると、在学中に比べて運動に取り組む機会が減少する傾向にある。本校の卒業生を対象に行った卒業後の運動への取組についてのアンケート調査からは、卒業後も運動を続ける姿が見られる一方で、卒業後は運動に全く取り組まなくなったり（図1）、取組をやめてしまった運動があったりするなど（図2）、卒業後は運動に取り組む機会を確保することが難しくなることが示されている。このような傾向の要因をアンケート調査の結果等から探ると、最も大きな要因となっているのが本人の意思であった（図3）。また、社会人になると平日の仕事終わりに運動に取り組むことが時間的に難しく、週末も学生時代以上に体を休めることが大切になってくるため、運動や余暇活動に使える時間を確保することが難しいということも要因の一つとなっていることがわかる。さらに、自分一人で運動に取り組むことが難しい場合が多いということも、運動への取組を遠ざける要因となっている。余暇としてスポーツを楽しむには、スペシャルオリンピックスのような外部機関による指導の下に取り組むことを必要とする場合が多く、そこへの移動（送迎）にも家族や福祉サービスの力を借りる必要があることが多い。さらに、保護者が一緒に手軽な運動をするにしても、生徒が学校を卒業して社会人になるような年齢になると、当然ながら保護者の年齢も高くなり、運動にしろ送迎にしろ行動を共にすることの負担がより大きくなり、困難さが生じてくる。在学中は体育の授業がほぼ毎日あるため運動の機会が確保されているが、学校を卒業すると、上記のような要因によって運動の機会が減少し、運動不足から肥満傾向になったり健康状態を損なうリスクが高まったりすることが、特別支援学校の生徒の抱える大きな課題として挙げられる。

そして、特別支援学校のこの課題は、まさに本大会の研究主題にある「生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを継続できる資質・能力を育成するために」に通じるものである。そこで、この大会主題を受け、本分科会の研究主題を「自らの健康を考え、卒業後も運動に親しむ態度を育成する体育・保健体育学習」とした。

【本校卒業生に実施した卒業後の運動への取組についてのアンケート調査結果】

対 象：卒業後5年以内の卒業生を中心とした64名（本校卒業生の会会員）

回答者：37名（回収率 57.8%）

※アンケート調査の一部を抜粋して提示

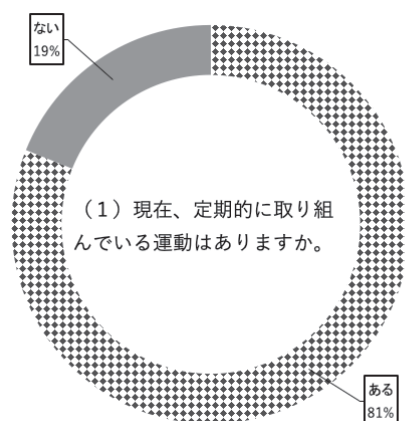


図1. 卒業後の運動への取組①

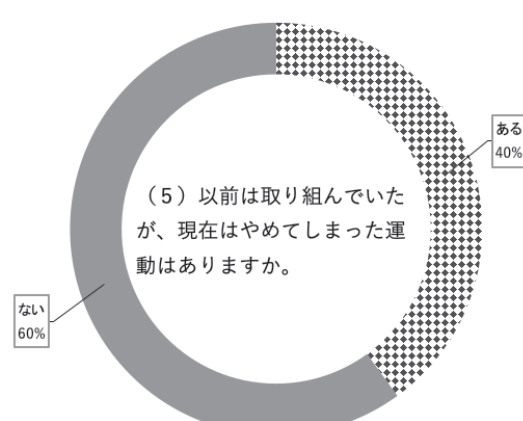


図2. 卒業後の運動への取組②

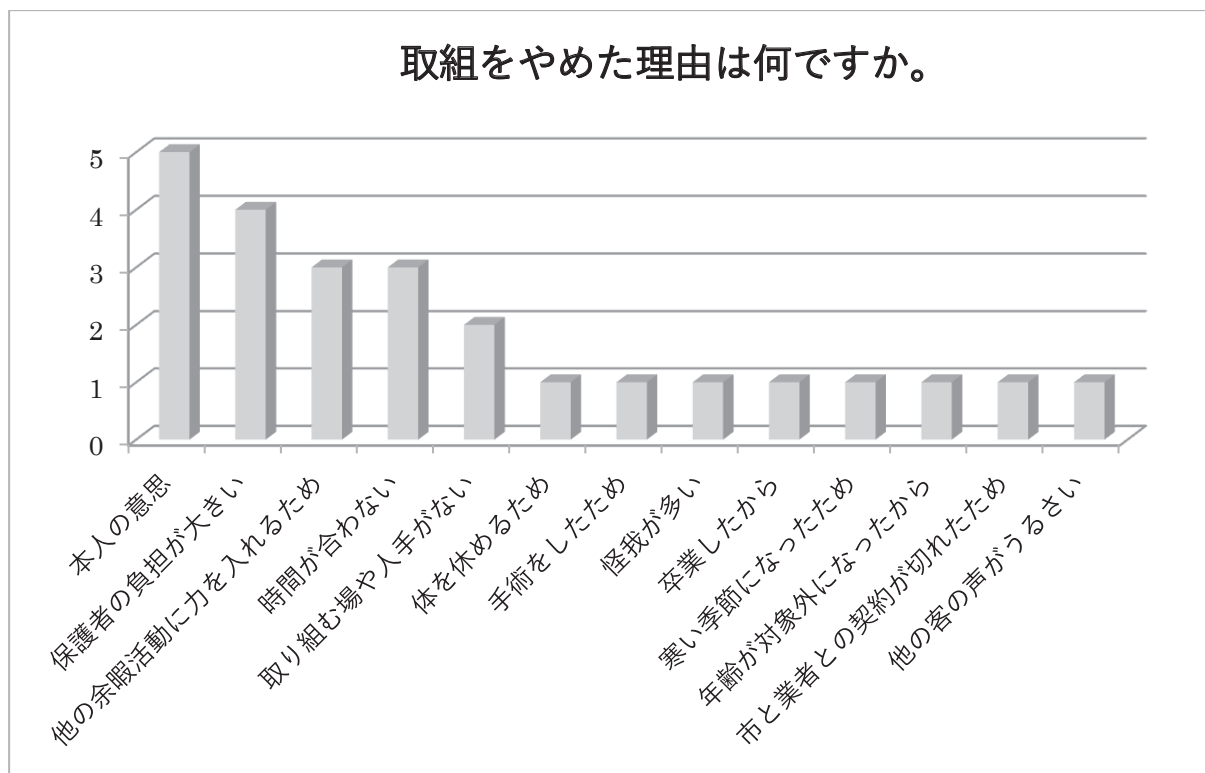


図 3. 運動をやめた理由

(3) 研究の仮説

自らの健康に対して関心をもち、運動に対する意欲を高めることができれば、卒業後も運動に親しむ態度を育成することができるだろう。

卒業生へのアンケート結果（詳細は分科会資料に提示）を見るとわかるが、卒業後も取り組み続けている運動とは、①一人または家族や仲間などと集まって、特別な用具や施設などを必要とせずに手軽にできる運動、②自らの健康の保持増進を目的とした運動、である。逆に、卒業後に運動の取組をやめてしまった要因として最も多かったのが「本人の意思」であり、次いで「保護者の負担が大きい」「他の余暇活動に力を入れるため」「時間が合わない」「取り組む場や人手がない」と続いた。

このことから、卒業後も運動に継続して取り組むためには、在学中から運動することの楽しさを十分に感じられるようにし、自ら運動に取り組もうとするように（少なくとも誘われたら素直に応じて取り組めるように）運動への意欲を十分に高めておくことが必要であると考えられる。また、それだけではなく、自らの健康に対する関心を高め、健康のために運動に取り組もうとする意識も継続して取り組むには必要である。そのためにも、日頃から運動や健康に目的意識（めあて）をもって取り組むことが大切である。それを小中高と系統的・発展的に取り組み、高等部卒業段階で到達できるようにすれば、卒業後も運動に親しむ態度を育成することができると思われる。

(4) 本校において重点としている研究の視点

本校では、運動領域に取り組む際には、本大会における研究の視点 2『主体的・対話的で深い学びを目指した指導の工夫』の「①教材・教具の工夫」と「③指導形態の工夫」を重点とし、保健領域に取り組む際には、視点 1『指導と評価の一体化を図った単元案・単元計画の作成』の「①指導内容の明確化」と視点 2『主体的・対話的で深い学びを目指した指導の工夫』の「①教材・教具の工夫」を重点としている。

2 研究の内容

(1) 生徒の実態に応じた指導内容の焦点化

視点1 ①指導内容の明確化

知的障害のある生徒の学びの特性として、学習の理解を促すためには、1時間の授業において学習内容を精選し、生徒の実態に応じて焦点化を図ることが必要である。特に、保健の学習のように、活動場面ばかりではなく座学の場面が生じる学習においては尚更である。

(2) 個々の障害特性に応じた教材・教具の工夫

視点2 ①教材・教具の工夫

学習集団の規模の大小にかかわらず、集団内における実態差の大きさが、本校の学習上の大きな課題となっている。ゆえに個々の障害特性や障害の程度に応じた支援は必要不可欠であり、そのための教材・教具の工夫に重点を置いて取り組むこととした。

(3) 児童生徒の実態や学習内容に応じたグルーピング

視点2 ③指導形態の工夫

学習の効率化を図り、学習内容の確実な理解と技能の定着を促すためには、児童生徒の実態や学習内容に応じてグルーピングをするなど、指導形態を工夫することが考えられる。個々の障害特性に対する支援とは異なる、学習集団に対する支援の一つと考える。

3 研究の実際

(1) 小学部の実践から

ア 題材名

「リズムうんどう」(体づくり運動・表現運動)

※1段階は体づくり運動遊び・表現遊び

イ 題材に関わる児童の実態

本学部は、男子13名、女子4名の計17名で構成されている。主たる障害は知的障害であり、自閉症スペクトラムやダウン症等を併せ有している児童が在籍している。身体面では大きな運動制限のある児童はいないが、てんかん発作等個別に配慮が必要である。認知、運動、コミュニケーション等それぞれの領域で実態差の大きい集団である。運動面においては、総じて身体を動かすことの好きな児童が多いが、基礎的な身体の動きや持久力、運動経験の幅や質等、どの面においてもスタート地点の1年生から、経験を積み重ねた6年生まで実態は幅広い。しかし、全体として、様々な姿勢の保持や身体の移動、ボディイメージのもちにくさ、筋緊張からくる柔軟性や巧緻性の低さ等々に示される体力としての「調整力」の向上が、発達段階からみても中心的課題と言える。

ウ 目標

【知識及び技能】

- ・様々な動きに取り組み、運動経験を広げていきながら、基本的な動きや身体感覚を身に付けることができるようにする。

【思考力、判断力、表現力等】

- ・テーマや音楽に合わせて動いたり、自分で動きを工夫したりできるようにする。

【学びに向かう力、人間性等】

- ・友達や教員を意識したり、関わりをもったりしながら活動に取り組むことができるようにする。

<評価規準(1～3段階)>

知識・技能(理解・動き)	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①姿勢の保持や調整、身体の移動や操作に関わる様々な動きについて、教員の動きを模倣したり、部分的に	①曲の変化に気づき、教員の支援を受けたり、周りの様子を見たりしている。	①支援を受けながら、教員や友達と一緒に運動をしようとしている。

身体を動かしたりできる。 ②姿勢の保持や調整、身体の移動や操作に関わる様々な動きついて、曲毎の課題に沿って身体を動かすことができる。 ③姿勢の保持や調整、身体の移動や操作に関わる様々な動きの内容が分かり、正しい動かし方で続けたり、力加減を調整したりができる。	②曲を聞いておおまかな特徴をとらえ動きを変化させている。 ③曲調に合わせて強弱や速さを変化させている。	②教員や友達の動きを見たり、誘いかけを受けたりしながら、一緒に運動しようとしている。 ③友達に誘いかけたり、友達の動きに合わせてたりしながら運動をしようとしている。
--	---	--

エ 研究の重点

(ア) 教材・教具の工夫

a 音楽とリンクした各運動課題の設定

(題材の基本的なとらえ)

本題材である「りずむうんどう」は、小学部の合同体育として1時間目に設定されている。特性としては体づくり運動(遊び)として、体をほぐし、多様な動きを作り、習熟度に応じて体力を高めることのできる特徴と、表現運動(遊び)として、音楽を支えに動きをとらえ表現できる特徴を持つ題材である。活動としては大きく2つの活動を設定している。「みんなではしろう」は体力の中の「持久力」を主なねらいとし、5分間自分のペースで走り続ける。「りずむうんどう」は「調整力」を主たるねらいとし、児童にとってなじみのある動物やものに例えた、姿勢の保持変換や身体の移動操作に関わる多様な動きを、ピアノ伴奏に合わせて取り組んでいる。題材の大きな特徴として、音楽とともに活動に取り組むことで、動きの獲得のみならず意欲の向上や、思考力・判断力を高めていくことが期待できる。

また、合同で取り組むことで、様々な関わりを設定することができること、学級毎や個別の活動では得られにくい大きな集団の渦が生まれ、児童の活動を引き出すことができると考えている。

(各運動課題の例)

(楽譜の例)

運動名「あひる」

○バランス感覚を育てる。(調整力:平衡系、巧緻系)

- ・親指の付け根で体を支える力をつける。



運動名「かかし」

○姿勢維持の向上(調整力:平衡系)

- ・脚部で全身を支える力をつける。



10. 糸ぐるま

中沢 陽介 作詞
長沢 健隆 作曲
大上 志輝 編曲

(イ) 指導形態の工夫

a ペアやグループ等集団で取り組む活動の設定

(ペアやグループで取り組む課題の例)

運動名「いとぐるま」

○友達と一緒に運動することができる。(調整力)

- ・歩く、前、後ろ、歩く、サイドステップ、反対周りの手順で行う。
- ・児童の実態に応じて、友達を誘う、あるいは誘い掛けを受けて運動する姿が期待できる。



オ 成果と課題

(ア) 成果

- ・年間を通して取り組むことで、音楽を聞いて自分から運動に取り組もうとする児童が増えた。
- ・ペアの活動や集団の活動で、自分から誘う、あるいは誘い掛けに応じて一緒に取り組む姿が多く見られるようになった。

(イ) 今後の課題

- ・1～6年の合同で取り組んでいくに当たっての、指導内容や支援の方法の検討を行う必要がある。

(2) 中学部の実践から

ア 題材名

「みんなでスローイングゴルフをしよう」

イ 題材に関わる生徒の実態

本学部は、男子12名、女子6名の計18名で構成されている。障害種は、自閉症、ダウン症など多岐にわたり、いずれも知的障害を伴っている。コミュニケーションにおいては、日常会話が成立する生徒から言葉の表出が少なくジェスチャーを交えて伝える生徒まで実態差がある。また、運動面においては、体を動かすことが好きで一定時間走り続けられる生徒から、運動に苦手意識があったり、少しの段差でもつまずいたり、走り続けることが難しかったりする生徒まで様々である。集団としては、ボール等用具の操作に関して経験が不十分であったり、動きにぎこちなさがあったりする生徒が多く、思い通りに体を動かして運動を楽しむ姿勢に課題がある。また、生徒同士がお互いに気持ちよく過ごしていけるようなかかわりに課題がある。

ウ 目標

【知識及び技能】

- ・ルールと、ボールの様々な投げ方を知り、角度、距離、方向等を意識してボールを投げることができるようにする。

【思考力、判断力、表現力等】

- ・目標を達成するための工夫を考え、動きや言葉で表現することができるようにする。

【学びに向かう力、人間性等】

- ・友達と協力しながら、進んで取り組み、簡単なルールを守って安全に運動できるようにする。

エ 研究の重点

(ア) 教材・教具の工夫

a 練習でのコースの工夫

- ・「角度」「距離」「方向」など様々な要素に気づき、自分で工夫した投球ができるよう、3つのコースを設定し、技能の習得、思考や判断を要する場面を設定した。



的を抜くよう、強く投げることをねらった練習



高く投げることをねらった練習

b 目標ボードの設置

- ・練習コースそれぞれでの自分の目標を明確にするために、「目標ボード」を設けた。

自分の目標を確認する



c 試合でのコース等の工夫

- ・ブルーシートを池に見立てて設置し「角度」「距離」を意識したり、林を抜けたりするコースを用意し「方向」を意識したりして投げ方を工夫するよう促した。
- ・一度カップインしたボールが出ないように、カップに紙チップを敷いた。
- ・ボールは、ほどよく飛び、ほどよく弾むカラーボールを使用した。
- ・ケンステップをマーカーのように使うことで、次の人が投げる位置を明確にした。



池を避けるために工夫して投げる



敷地の林を生かした林を抜けるコース

(イ) 指導形態の工夫

- ・3人組で、練習も試合もチーム対抗にすることで、投順やどこに投げるかの相談、カップインした際に喜び合うなど、コミュニケーションの必然性や機会が生まれるようにした。
- ・相談したり、他者を参考にしたりして、自ら工夫しながら運動することの楽しさを味わうことができるようにした。

相談した結果、カップに近いところからは確実に入れられるようにと、下投げで投げた。



オ 成果と課題

(ア) 成果

- ・「高く」「強く」などのポイントを生徒が意識しやすいような練習コースと、得た技能を活かしやすい試合コースを設定したことで、投球姿勢が良くなったり、より遠くに投げられたりする技能が上がった。
- ・3人組を作ったことで、コミュニケーションが生まれやすく、投げる順番の相談をしたり、投げ方のアドバイスをしたり、友達の動きを参考にしたりする姿が見られた。

(イ) 今後の課題

- ・生徒自身が意図的に、確実な技能の向上を図るための指導の工夫が必要である。
- ・季節に合わせて運動量を調整する工夫が必要である。
- ・生徒同士で動ける機会、自分たちで考えて動ける機会がさらに作れると良い。

(3) 高等部の実践から

ア 題材名

保健「熱中症に気をつけて運動しよう」

関連する運動：体づくりの運動「持久力を高めよう（ペース・ランニング）」

イ 題材に関わる生徒の実態

昨年の夏、埼玉県では、7月に最高気温が30度以上の真夏日が27日、うち35度以上の猛暑日が18日もあり、観測史上国内最高の41.1℃を熊谷市で記録するなど、異常な酷暑であった。また、全国の熱中症による救急搬送者の数で見ても、昨年の7月だけで54220人と、その前年の5月から9月までの合計数(52984人)を上回っていることから、いかに危険な暑さだったかが分かる。しかし、生徒たちは、厳しい暑さで運動しづらいことを体感しながらも、熱中症やその予防に関する知識はなく、自らの健康や安全に運動することに対する意識も低いといえる。そこで、実態に応じて『熱中症予防情報サイト』に提示される「暑さ指数」を活用するなどして熱中症予防に対する意識を高め、自らの健康や運動に関する安全性への関心を高めていくようにすることが必要である。

ウ 目標

【知識及び技能】

- ・「暑さ指数（WBGT）」や熱中症予防に必要な対処法について知ることができるようにする。

【思考力、判断力、表現力等】

- ・「暑さ指数（WBGT）」を見て、その数値等に応じて自らの体力に合った負荷の運動を選択することができるようにする。

【学びに向かう力、人間性等】

- ・自分から「暑さ指数（WBGT）」を確認し、熱中症に気をつけて運動することができるようにする。

※「暑さ指数（WBGT）」

熱中症を予防することを目的として1954年にアメリカで提案された指標。単位は気温と同じ摂氏度（℃）で示されるが、その値は気温とは異なる。暑さ指数（WBGT）は、人体と外気との熱のやりとり（熱収支）に着目した指標で、人体の熱収支に与える影響の大きい①湿度、②日射・輻射（熱線などが物体から四方に放出される現象）などの周辺の熱環境、③気温、の3つを取り入れた指標である。

『環境省 熱中症予防情報サイト』より抜粋

エ 研究の重点

(ア) 指導内容の明確化

生徒の実態と本題材にかけられる授業時間数を考慮し、指導内容を「暑さ指数」

と熱中症予防策に絞って学習することにした。

また、「暑さ指数」を生徒が毎日必ず目にし、その日の運動条件がどのようなものであるかを意識し知ることができるように、校舎2階にある高等部の教室に向かう階段を上った正面に、「暑さ指数」を表示した。

※「暑さ指数」を示す顔のイラスト表示の右横にある解説表は、上段が「運動に関する指針」、下段が「日常生活に関する指針」となっている。



(イ) 教材・教具の工夫

a 「暑さ指数」のイラスト化

「暑さ指数」については、数値による理解の難しい生徒が多くいるので、顔のイラストを用いて、表情や顔色、汗の量で熱中症の危険度が理解できるようにした。



ほぼ安全



注意



警戒



厳重警戒



危険

(運動は原則中止)

b 危険度の解説

顔のイラストの各段階が、「暑さ指数」がいくつであることを示しているか、また、その際の運動条件（熱中症の危険度）の解説がわかるように、説明文には全てルビを振り、言葉も本校の生徒に分かりやすい表現に変えて作成した。

運動に関する指針		熱中症予防運動指針
気温(参考)	暑さ指数	
35℃以上	31℃以上	特別の注意が必要。運動は原則中止。とくに子どもの場合は中止すべき。
31～35℃	28～31℃	熱中症の危険性が高いので、はげしい運動や持久走など体温が上がりやすい運動はさける。運動する場合には、こまめに休むことをとり、水分・塩分の補給を行う。体力の低い人、暑さに慣れていない人は運動中止。
28～31℃	25～28℃	熱中症の危険性があるため、積極的に休むことをとり、そのたびに水分・塩分の補給をしっかりと行う。はげしい運動では、30分おきくらいに休むことをとる。
24～28℃	21～25℃	熱中症による死亡事故がある可能性がある。熱中症のきざしに注意するとともに、運動の台間に積極的に水分・塩分を補給する。
24℃未満	21℃未満	熱中症の危険性は小さいが、必要に応じて水分・塩分の補給は必要。市民マラソンなどではこの条件でも熱中症がおきるので注意。

c 熱中症予防の対応

運動の前後に適度な水分補給を行う、帽子をかぶる、汗拭きタオルを用意する、運動後に着替えを行うなど基本的なことは、手本やイラストで示して学習した。また、体質的に熱が体にこもりやすい生徒については、冷却材を首に巻くなどの対応を個別に行いながら運動に取り組むようにした。



オ 成果と課題

(ア) 成果

- ・登校時や運動前に、その日の「暑さ指数」を確認する習慣のついた生徒が増えた。

- ・持久走の取組において、自分の健康状態やその日の気候等を考慮して、無理のないコース選択をできるようになった生徒が増えた。そして、その結果として夏場であっても最後までペースを保った走りができるようになった。
- ・帽子・汗拭きタオルの用意、水分補給、運動後の着替えなど、保健・衛生に関する取組の姿勢がより主体的になった。

(イ) 今後の課題

- ・軽度障害の生徒には取組の効果が大きかったが、重度障害の生徒への学習効果を高める工夫をさらに検討する必要がある。

4 研究のまとめ

(1) 成果

ア 教材の工夫による学習事項の習慣化

小・中学部は、教材の工夫と授業における繰り返しの取組により、高等部は、授業における学習の機会は1時間であったが、教材の工夫と授業後の運動場面における繰り返しの取組によって、学習に対する主体性が高まった。具体的には、小学部では、音楽がかかると、教員の指示を待たずに児童が自分から運動を始めるようになった。中学部では、練習やゲームの中で自分たちで相談をしたり、助言をし合ったりするようになった。高等部では、熱中症予防の目的意識をもって、毎朝熱中症指数の確認をする生徒が増えてきた。このように、学習したことが授業や生活場面で習慣化するようになった。

イ 自らの健康に対する意識の高まり

熱中症予防の学習については、昨年度は取り上げ方も浅く、学習後に熱中症指数に注目したり、熱中症予防の具体策を進んで講じたりした生徒は少数であったが、今年度は熱中症指数への注目が習慣化したり、水筒をグラウンドに持ち込み、こまめに水分補給をしたりするなど、自主性においても、取組の定着した生徒数についても、向上が見られた。また、持久走の取組においても、その日の体調だけでなく、気候や熱中症指数を考慮した上でコース選択を図る生徒が増え、その点からも自らの健康に対する関心が向上したと考えられる。そして、他学部でも保健の学習の取組が始まり、個々の児童生徒の発達に応じた健康への意識付けが保健の学習で図られるようになった。

(2) 課題

ア 実態差に応じたより効果的な学習の検討

どの学部も基本的には体育の授業に関しては学部全員で取り組むようになっている。従って、集団内における実態差は非常に大きく、必要に応じて学習内容や児童生徒の実態に応じたグルーピング等を行って学習を進めているが、今後は、個々の障害特性に応じた支援をさらに工夫することによって、一人ひとりの児童生徒の実態に応じたより効果的な学習を行うことが求められる。特に、運動領域においては個々の児童生徒に確かな技能の伸びを、保健領域においては確かな知識の習得を図ることが求められる。

イ 系統的・計画的な保健の学習の充実

本研究の取組を通して、運動領域については児童生徒の主体性の高まりという形で、研究仮説にある「運動に対する意欲の向上」に一定の成果が見られた。しかし、「自らの健康への関心」については、まだ十分とは言えない。保健の学習については、各学部の取組に開きがあり、小学部から高等部までの12年間を見据えた系統的・計画的な取組はまだ調整中の段階である。また、自らの健康に関心をもつことに関しては、保健の学習だけでなく、学校全体を通じた健康教育の視点からの取組が求められる。以上の点を踏まえた上で、系統的・計画的な保健の学習の充実を図ることが今後の課題と考えられる。

分科会指導助言者紹介

第1分科会 【埼玉大学教育学部附属幼稚園】

氏名	山本 三環	(所属・役職) 埼玉県立総合教育センター指導主事兼所員
略歴	平成2年 江南短期大学児童教育学科 卒業 平成9年 埼玉県立鴻巣女子高等学校附属幼稚園教諭 平成14年 埼玉県立浦和第一女子高等学校附属幼稚園主任教諭 平成17年 埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課指導主事 平成19年 埼玉大学教育学部附属幼稚園副園長 平成25年 埼玉県教育局市町村支援部家庭地域連携課指導主事 平成29年 埼玉県立総合教育センター指導主事兼所員 現在に至る	
論文 著書 等	○平成10年 戸外で活動するための園具・遊具等の具体的活用について ○保育内容の再考～領域「言葉」のねらいを視点として～ ○保育内容の再考～領域「健康」のねらいを視点として～ ○保育内容の再考～領域「表現」のねらいを視点として～ ○保育実践資料集＜幼稚園の保健安全編＞ ○保育実践資料集＜幼稚園教育実習の指導編＞ ○保育実践資料集＜幼稚園の運営編＞ ○協同して遊ぶことに関する指導の在り方 ○埼玉県幼稚園教育課程編成要領 ○埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料 ◇平成19年～平成24年 さいたま市幼児教育振興協議会委員 ◇平成25年～平成28年 埼玉大学教育学部非常勤講師	

第2分科会 【さいたま市立芝川小学校】

氏名	細越 淳二	(所属・役職) 国士舘大学 教授
略歴	平成8年 岩手大学教育学部小学校教員養成課程 卒業 平成10年 筑波大学大学院体育研究科体育方法学 修了 平成13年 (株)大修館書店 平成15年 国士舘大学文学部教育学科 講師 平成18年 国士舘大学文学部教育学科 助教授(現 准教授) 平成25年 国士舘大学文学部教育学科 教授	
論文 著書 等	○池田延行・細越淳二他：体育科教育別冊 新しい走・跳・投の運動の授業づくり。大修館書店。2015年。 ○岡出美則・細越淳二他：平成29年版 小学校新学習指導要領ポイント総整理 体育。東洋館出版社。2018年。 ○岡出美則・細越淳二他：初等体育科教育。ミネルヴァ書房。2018年。 ○細越淳二・高橋健夫他：開脚跳びの習得に有効な運動のアナログンになりうる練習課題についての検討。スポーツ教育学研究21(2)：81-92, 2001年。 ○細越淳二・松井直樹：体育授業と学級経営の関係についてのアクション・リサーチの試み—M学級の1学期の取り組みから—。体育授業研究12：45-55, 2009年。 ○細越淳二他：体育授業を中核とした肯定的な学級集団の育成についてのアクション・リサーチ。平成21～23年度 文部科学省科学研究費補助金(若手研究B) 研究成果報告書。2012年。 ○細越淳二他：小学校体育授業におけるコンサルテーション・モデルの開発とその有効性の検証。平成27～29年度科研費(基盤研究B)。2018年。 ○学習指導要領等の改善に係る検討に必要な専門的作業等協力者。 ○平成30年度体育・保健体育指導力向上研修(東部ブロック)小学校陸上運動領域講師。 ○平成30年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査に関する検討会委員。	

第3分科会 【さいたま市立常盤小学校】

氏名	鈴木 聡	(所属・役職) 東京学芸大学 教授
略歴	1991年 東京学芸大学教育学部卒業 1991年 世田谷区立玉堤小学校 教諭 1997年 東京学芸大学附属世田谷小学校 教諭 2008年 東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了 2011年 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程修了 2012年 東京学芸大学教育学部准教授 2019年 東京学芸大学教育学部教授	
論文 著書 等	○子どもが喜ぶ！体育授業レシピ 運動の面白さにドキドキ・ワクワクする授業づくり 2019年 教育出版（編著） ○体育科教育 2016年 一藝社（分担） ○21世紀の学習者と教育の4つの次元 知識、スキル、人間性、そしてメタ学習 2016年 北大路書房（分担訳） ○よい体育授業を求めて 大修館書店 2015年 大修館書店（分担） ○小学校教師が体育授業研究に求める機能 一教職歴に伴う変容－ 体育科教育学研究32 2 35-40, 2016 ○体育科を研究する小学校校内研究会における外部講師の存在意義に関する研究 体育・スポーツ政策研究25 1 1-18, 2016 ○教師の成長における授業研究の機能と体育科授業研究の特徴 学校教育学研究論集第23号 23 83 -95, 2011 ○小学校教師の成長における体育科授業研究の機能に関する研究 ○体育科教育学研究 第26巻第2号 26 2 1 -16, 2010	

第4分科会 【川口市立並木小学校】

氏名	三田部 勇	(所属・役職) 筑波大学 准教授
略歴	平成元年3月 茨城大学教育学部 卒業 平成元年4月 土浦市立宍塚小学校 教諭 平成5年4月 つくば市立竹園東中学校 教諭 平成11年4月 つくば市立東小学校 教諭 平成16年3月 茨城大学教育学部大学院教育学研究科教科教育専攻 修了 平成16年4月 土浦市立土浦中学校 教諭 平成23年4月 茨城県教育庁 保健体育課 指導主事 平成25年4月 筑波大学体育系 准教授	
論文 著書 等	○初等体育科教育（共編書） 2018 ミネルヴァ書房 ○悩みを一気に解決 授業づくりアドバイス 2019 楽しい体育 明治図書 ○平成24年 子供の体力向上指導者養成研修 講師（教員研修センター） ○平成29年、平成30年、令和元年体育・保健体育指導力向上研修 講師（スポーツ庁） ○多様な動きをつくる運動（遊び）パンフレット作成委員（文部科学省） ○学校体育実技資料第7集「体づくり運動」改訂協力者（文部科学省） ○評価規準、評価方法等の工夫改善に関する調査研究協力者（国立教育施策研究所）	

第5分科会 【埼玉大学教育学部附属小学校】

氏名	岩田 靖	(所属・役職) 信州大学 教授
略歴	昭和59年 信州大学教育学部 卒業 昭和61年 筑波大学大学院体育研究科 修了 昭和61年 筑波大学文部技官 平成元年 宮崎大学教育学部 助手 平成2年 宮崎大学教育学部 講師 平成5年 宮崎大学教育学部 助教授 平成11年 信州大学教育学部 助教授 平成19年 信州大学教育学部 教授	
論文 著書 等	○新版・体育科教育学入門（共編著） 2010大修館書店 ○学校体育実技指導資料・第8集・ゲーム及びボール運動（作成協力）2010東洋館出版社 ○体育の教材を創る（単著） 2012大修館書店 ○新版・体育科教育学の現在（共著） 2015創文企画 ○よい体育授業を求めて（共著） 2015大修館書店 ○ボール運動の教材を創る（単著） 2016大修館書店 ○体育科教育における教材論（単著） 2017明和出版 ○初等体育授業づくり入門（共編著） 2018大修館書店 ○「資質・能力」を育むボール運動の授業づくり（監修）2018大修館書店	

第6分科会 【さいたま市立原山中学校】（体育）

氏名	吉野 聡	(所属・役職) 茨城大学 教授
略歴	平成3年3月 大阪教育大学 小学校課程 卒業 平成5年3月 筑波大学大学院修士課程 体育研究科 修了 平成7年3月 筑波大学大学院体育研究科研究生 修了 平成7年4月 工学院大学 非常勤講師 平成8年4月 江戸川学園取手中・高等学校 教諭 平成11年4月 筑波大学体育科学系 文部技官 平成13年4月 茨城大学教育学部 助教授 平成31年4月 国立大学法人茨城大学 教育学部 教授	
論文 著書 等	○体育・保健体育デジタル教材作成委員会 委員 2011年文部科学省 ○学習指導要領実施状況調査 問題作成委員会 委員 ○学習指導要領実施状況調査 結果分析委員会（中学校） 委員 ○学習指導要領実施状況調査 結果分析委員会（高等学校） 委員 ○高等学校学習指導要領解説 保健体育編 体育編 作成協力委員 ○新版 体育科教育学入門 大修館書店 ○観点別学習状況の評価規準と判定基準 図書文化 ○初等体育授業づくり入門 大修館書店	

第6分科会 【さいたま市立原山中学校】（保健）

氏名	坂田 真澄	(所属・役職) さいたま市立大宮南中学校 校長
略歴	昭和59年 埼玉大学教育学部 卒業 大宮市立北中学校 大谷中学校 教諭 平成11年 大宮市教育委員会 さいたま市教育委員会 青少年課等主任・主査 平成16年 さいたま市教育委員会指導1課 主任指導主事 平成19年 さいたま市立大久保東小学校教頭 平成22年 さいたま市教育委員会指導1課 課長補佐 平成25年 さいたま市立河合小学校・八王子中学校・春野中学校 校長 平成31年 さいたま市立大宮南中学校 校長	
論文 著書 等	○埼玉県長期研修教員研修報告書 自ら学ぶ意欲を高める体育指導の研究（卓球・バドミントンの学習指導） 埼玉大学・県立スポーツ研修センター 1994年 ○小学校編 体力づくり手引書 さいたま市教育委員会 さいたま市教育委員会 2005年 ○体育活動時等における事故対応テキスト（ASUKAモデル） さいたま市教育委員会 2012年 ○運動部活動地域連携再構築事業報告 さいたま市教育委員会 2013年	

第7分科会 【さいたま市立与野西中学校】

氏名	千田 幸喜	(所属・役職) 二戸市立金田一中学校 校長
略歴	平成元年3月 岩手大学教育学部 卒業 平成元年4月 盛岡市立黒石野中学校 教諭 平成8年4月 宮古市立第二中学校 教諭 平成13年4月 盛岡市立松園中学校 教諭 平成17年4月 岩手県教育委員会二戸教育事務所 指導主事兼保健体育主事 平成19年4月 岩手県教育委員会盛岡教育事務所 指導主事兼保健体育主事 平成22年4月 岩手県教育委員会スポーツ健康課 指導主事兼保健体育主事 平成26年4月 岩手県教育委員会スポーツ健康課 主任指導主事兼主任保健体育主事 平成27年4月 奥州市立水沢中学校 副校長 平成29年4月 岩手県立一関第一高等学校附属中学校 副校長 平成31年4月 二戸市立金田一中学校 校長	
論文 著書 等	「中学校新学習指導要領の展開保健体育編」（共編書）明治図書 2012 子供の体力向上指導者養成研修（独立行政法人教員研修センター） 中学校・高等学校 球技 ゴール型 講師 2013 子供の体力向上指導者養成研修（独立行政法人教員研修センター） 中学校・高等学校 球技 ネット型 講師 2014 子供の体力向上指導者養成研修（独立行政法人教員研修センター） 中学校・高等学校 球技 ベースボール型 講師 2013 学習指導要領実施状況調査問題作成委員会 委員（国立教育施策研究所） 2014 学習指導要領実施状況調査結果分析委員会 委員（国立教育施策研究所） 2015 運動部活動サミット パネルディスカッション パネラー（文部科学省） 2015年度（～2017年度）学習指導要領等の改善にかかる検討に必要な専門的作業等の協力者（スポーツ庁）	

第8分科会 【川口市立南中学校】(体育)

氏名	細川 江利子	(所属・役職) 埼玉大学 教授
略歴	昭和59年 お茶の水女子大学文教育学部教育学科表現体育学専攻 卒業 昭和63年 お茶の水女子大学修士課程人文科学研究科舞踊教育学専攻 修了 平成3年 お茶の水女子大学博士課程人間文化研究科比較文化学専攻単位取得満期退学 平成3年 埼玉大学教育学部講師 平成8年 埼玉大学教育学部助教授 平成17年 埼玉大学教育学部教授	
論文 著書 等	○『舞踊学の現在～芸術・民族・教育からのアプローチ』(共編著) 文理閣2011 ○『動きの「感じ」と「気づき」を大切にしたい表現運動の授業づくり』(共編著) 教育出版2014 ○『日本の現代舞踊のパイオニア』(分担執筆) 新国立劇場情報センター 2015 ○『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校 保健体育】』 (調査研究協力者) 文部科学省国立教育政策研究所2011 ○『学校体育実技指導資料第9集 表現運動系及びダンス指導の手引き』 (作成協力者) 文部科学省2013 ○『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 保健体育編体育編』 (専門的作業等協力者) 文部科学省2019	

第8分科会 【川口市立南中学校】(保健)

氏名	鈴木 美江	(所属・役職) 埼玉県春日部市立川辺小学校 校長
略歴	昭和63年 埼玉大学教育学部中学校教員養成課程保健体育専攻卒業 昭和63年 岩槻市立川通中学校 教諭 平成3年 岩槻市立慈恩寺中学校 教諭 平成13年 春日部市立谷原中学校 教諭 平成20年 春日部市教育委員会 指導主事 平成22年 埼玉県教育委員会保健体育課 指導主事 平成25年 杉戸町立西小学校 教頭 平成27年 幸手市立八代小学校 校長 平成31年 春日部市立川辺小学校 校長	
論文 著書 等	○平成23年度性に関する指導に対する普及啓発講習会講師(文部科学省) ○「生きる力」を育む小学校保健教育の手引き作成協力者(文部科学省)2012 ○「生きる力」を育む中学校保健教育の手引き作成協力者(文部科学省)2013 ○平成25年度保健学習協議会 講師(文部科学省) ○全国学校保健研究大会課題別研究協議会 指導助言者 2011 2014 2015 2016 ○全国学校保健・安全研究大会課題別研究協議会 研究発表者 2017 ○全国学校保健・安全研究大会課題別研究協議会 指導助言者 2018 2019 ○中学校学習指導要領実施状況調査結果分析委員会委員(国立教育政策研究所)2015 ○中央教育審議会専門委員 初等中等教育分科会 教育課程部会 体育・保健体育、健康、安全ワーキンググループ委員 2015 ○学習指導要領解説(小学校・体育)作成協力委員 2016 ○平成28年度体育・保健体育学習協議会 事例発表者(文部科学省) ○「評価規準、評価方法等の工夫改善に関する調査研究」協力者(国立教育政策研究所)2019 ○文部科学時報 11月号 2010 ○初等教育資料9月号 2017	

第9分科会 【埼玉大学教育学部附属中学校】

氏名	與儀 幸朝	(所属・役職) 鹿児島大学 講師
略歴	平成10年 沖縄県公立中学校教諭（～平成27年9月） 平成24年 琉球大学大学院修士課程教育学研究科修了 平成24年 琉球大学非常勤講師（～平成26年度） 平成27年 鹿児島大学教育学部 講師 平成30年 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士後期課程単位取得満期退学	
論文 著書 等	○安全で楽しい柔道授業ガイド（共著） 2019（公財）全日本柔道連盟 ○柔道指導のサイエンス（共著） 2018（公財）全日本柔道連盟 ○中学校武道必修化指導書（柔道編）（共著） 2017日本武道協議会 ○教師のための海を生かした教育アイデア集（分担執筆）2016協同出版 ○教育実習から教員採用・初任期までに知っておくべきこと（分担執筆）2016教育出版 ○ダンスとジェンダー（多様性のある身体性）（分担執筆）2015一二三書房 ○中学生の保護者を対象とした柔道授業に関する調査 2019鹿児島大学教育学部研究紀要 ○柔道授業を初めて履修する中学生を対象とした単元計画の検討 2016武道学研究 ○小学生の体力・運動能力における時代コントラストの検討 2015発育発達研究 ○柔道授業づくり教本を用いた体育授業が学習意欲に及ぼす影響 2012武道学研究 ○中学校保健学習におけるパフォーマンス課題・評価を用いた授業の有用性 2012九州体育・スポーツ学研究	

第10分科会 【埼玉県立大宮東高等学校】

氏名	萩尾 英司	(所属・役職) 宮崎県教育庁スポーツ振興課 課長
略歴	昭和60年 筑波大学体育専門学群 卒業 昭和60年 高鍋東中学校 教諭 昭和64年 延岡東高等学校 教諭 平成11年 五ヶ瀬中等教育学校 教諭 平成15年 宮崎南高等学校 教諭 平成20年 宮崎県教育庁スポーツ指導センター 指導主事 平成23年 宮崎県教育庁スポーツ振興課 指導主事 平成25年 宮崎県教育庁スポーツ指導センター 副主幹 平成26年 えびの市立真幸小学校 校長 平成27年 宮崎県教育庁スポーツ振興課 課長補佐 平成29年 宮崎県教育庁国体・高校総体準備室 室長 平成30年 宮崎県教育庁スポーツ振興課 課長	
論文 著書 等	○子供の体力向上指導者養成研修 講師 ○高等学校学習指導要領解説 保健体育編 体育編 改訂協力者 ○評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 作成協力者 ○学校体育実技資料集第4集 水泳指導の手引 改訂協力者 ○新学習指導要領の展開（中学保健体育） 球技執筆（明治図書）	

第11分科会 【埼玉県立上尾南高等学校】（体育）

氏名	星野 和貴	(所属・役職) 秋田市立広面小学校 校長
略歴	昭和63年 秋田大学教育学部小学校課程保健体育副専攻 卒業 平成元年 大内町立大内中学校 教諭 平成8年 秋田市立秋田西中学校 教諭 平成11年 秋田市立秋田南中学校 教諭 平成13年 秋田市立御野場中学校 教諭 平成17年 秋田県教育庁保健体育課 指導主事 平成24年 秋田県教育庁保健体育課 主任指導主事 平成26年 秋田市立大正寺小学校 教頭 平成28年 秋田県教育庁保健体育課 副主幹（兼）班長 平成30年 秋田市立広面小学校 校長	
論文 著書 等	○国立教育政策研究所指定校（中学校保健体育）企画委員 2009 ○国立教育政策研究所「評価規準、評価方法等の工夫改善に関する調査研究（中学校保健体育）」協力者 2010 ○子供の体力向上指導者養成研修 第2講師 2010 2012 2014 2015 ○文部科学省全国保健学習協議会 発表者 2011 ○文部科学省学校体育実技指導資料集第9集 作成協力者 2012 ○文部科学省「生きる力」を育む中学校保健教育の手引き 作成協力者 2013 ○中学校学習指導要領実施状況調査結果分析委員会 委員 2014 ○学習指導要領等の改善に係る検討に必要な専門的作業等 協力者 2015 ○全国学校体育研究大会和歌山県大会 シンポジウムパネリスト 2017	

第11分科会 【埼玉県立上尾南高等学校】（保健）

氏名	高橋 宏至	(所属・役職) 埼玉県立大学 教授
略歴	昭和56年 千葉大学教育学部 卒業 三郷市立彦成中学校 彦糸中学校 栄中学校 教諭 平成13年 松伏町教育委員会 主任指導主事 平成15年 埼玉県立スポーツ研修センター 指導主事 平成17年 埼玉県教育局健康教育課 指導主事 平成18年 埼玉県教育局保健体育課 指導主事 平成20年 八潮市立潮止中学校教頭 平成21年 三郷市立桜小学校 校長 平成23年 三郷市立前川中学校 校長 平成26年 埼玉県教育局保健体育課 主席指導主事 平成28年 三郷市立南中学校 校長 平成30年 埼玉県立大学保健医療福祉学部 教授	
論文 著書 等	○「なるほど保健学習」埼玉県教育委員会 2006 ○「性に関する教育実践事例集」埼玉県教育委員会 2006 ○「IT機器の使用が子どもの心に及ぼす影響について」埼玉県学校保健会 2007 ○「知識を活用した保健学習」埼玉県教育委員会 2011 ○「学校保健の課題とその対応」埼玉県教育委員会 2011 ○「心と体の健康」健学社 2013 ○「新・なるほど保健学習」埼玉県教育委員会 2016 ○「学校保健の動向」日本学校保健会 2016 ○「子供のインターネット利用と健康に関する調査報告書」埼玉県学校保健会 2017 ○「子供のインターネット利用と健康に関する調査報告書 活用事例集」埼玉県学校保健会 埼玉県教育委員会 2018	

第12分科会 【埼玉大学教育学部附属特別支援学校】

氏名	内田 匡輔	(所属・役職) 東海大学 教授
略歴	平成6年3月 筑波大学体育専門学群 卒業 平成8年3月 筑波大学大学院体育学研究科 修士課程 修了 平成8年4月 筑波大学附属聾学校（現 聴覚特別支援学校）中学部 教諭 平成12年4月 筑波大学附属中学校 教諭 平成17年4月 東海大学体育学部体育学科 講師 平成29年4月 東海大学体育学部体育学科 教授	
論文 著書 等	○発達障害のある児童・生徒の身体活動に関する一考察（日本体育学会2009） ○発達障害児の身体活動に関する実践研究（日本体育学会2010） ○体育科教育学入門（2010大修館書店） ○体育科の指導における教材の工夫（2012 聴覚障害6月号 聾教育研究会） ○特別支援教育時代の体育・スポーツ 80（2016 大修館書店） ○これからのインクルーシブ体育・スポーツ（2017 ぎょうせい） ○新学習指導要領の展開（2017 明治図書） ○教養としてのアダプテッド体育・スポーツ（2018 大修館書店） ○幼少年のための運動遊び・体育指導（2018 杏林書院） ○学生の社会貢献—スポーツとボランティアでつながる—（2018 成文堂） ○「毎日できる運動で体を動かす楽しさを」（2018 手をつなぐ 全国手をつなぐ育成連合会） ○学校保健ハンドブック第7次改訂（2019 ぎょうせい） ○学習指導要領改訂のポイント（2019 明治図書）	

第58回全国学校体育研究大会

埼玉大会研究紀要

発 行 令和元年10月31日

編 集 第58回全国学校体育研究大会埼玉大会実行委員会編集部

発行者 第58回全国学校体育研究大会埼玉大会実行委員会

会 長 品川 秀人

連絡先 第58回全国学校体育研究大会埼玉大会実行委員会事務局

〒330-9301 埼玉県さいたま市浦和区高砂3-15-1

埼玉県教育局県立学校部保健体育課内

TEL 048-830-6929

FAX 048-830-4971

印 刷 関東図書株式会社

〒336-0021 埼玉県さいたま市南区别所3-1-10

TEL 048-862-2901

FAX 048-862-2908